

VII 出土した遺物

1 土 器

全体で約400箱出土した。本報告書で図示する土器の抽出にあたっては、完形品・文様の構成・特徴的な文様が描出される資料であることなどを重視した。

出土した土器の提示は、3種の項目にまとめて記述した。一つは出土土器として「住居域」をひとつ単位として図示した(第78図～第128図)。次に、接合などにより複数の造構にまたがる記載を持つ土器などは、「造構に関連する土器」として分けた(第129図～第135図)。これら造構に関連する土器についての記述の場合、本文中の記述は全て造構に戻し、複数の造構にまたがる記載を持つ土器などは、原則として造構番号の若い造構のところで記述を行っている。また、住居域からはずれる土器については「造構外」でまとめている(第136図～第142図)。最後に漆付着土器、彩文土器などの特徴的な土器についてもまとめて編集している(第143図～第147図)。

次に、これらの土器について施文方法から分類し、さらに器形、諸要素を説明する。

(I) 土器の分類

I群土器 粘土紐貼付によって波状文・幾何学文等を描出するもの。

口唇部・口縁部・頸部・体部上半に波状文、幾何学文、円文などが施文される。頸部には波状文が横走しながら、区画内あるいは垂下する文様と連接して文様を描出しているものが多い。貼付文による文様構成をなす土器群と考えられ、大木4式と併行するものであろう。

器形は底部から口縁部へ直線的に立ち上がる。底部から口縁部へ朝顔状に開くもの。体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くもの。体部中央から下半部が膨らみ、体部上半～頸部付近から口縁部へ緩やかに開くもの。口縁部に比し小さい径の底部から体部下半へやや開き気味に立ち上がり、体部中央で大きく膨らむもの。頸部で狭まり口縁部は大きく外反するものなどがある。もっとも大量に出土している。本遺跡の主体をなす土器群である。

II群土器 棒状工具で波状文・幾何学文様等を描出するもの。

口唇部直下、頸部、体部に棒状工具を使用した沈線で、幾何学文様を描くものである。貼付文と共に用されている場合と、独立して沈線のみが施文される場合がある。棒状工具で短沈線の連続文様等を描出するものや刺突により文様を描出するものもある。

器形はI群土器と共に、ほぼ底部から口縁部へ直線的に立ち上がる。底部から口縁部へ朝顔状に開くもの。体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くもの。体部中央から下半部が膨らみ、体部上半～頸部付近から口縁部へ緩やかに開くもの。口縁部に比し小さい径の底部から体部下半へやや開き気味に立ち上がり、体部中央で大きく膨らむもの。頸部で狭まり口縁部は大きく外反するものなどがある。

III群土器 半截竹管で波状文・幾何学文等を描出するもの。

半截竹管によって各種の文様を描出しているもの。鋸歯状あるいは波状文になるもの、連続的なS字状の文様、コンパス文などを表わしているものである。いずれも地文を斜縞文としている。口縁部が無文帯を形成するものや、山形状の間を磨り消し研磨しているものもある。この他には列点状に施文するものや直線あるいは斜方向に施しているものなどもある。

器形はI群土器と共に、底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものの。底部から口縁部へ朝顔状に開くもの。体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くもの。体部中央から下半部が膨らみ、体部上半へ頸部付近から口縁部へ緩やかに開くもの。口縁部に比し小さい径の底部から体部下半へやや開き気味に立ち上がり、体部中央で大きく膨らむもの。頸部で狭まり口縁部は大きく外反するものなどがある。

IV群土器 浮線とキザミにより文様を描出するもの。

他の群よりも低平な浮線を持ち、浮線上にはキザミを施している。獸面把手がついているものがある。諸磯式に併行する一群であろう。

器形は深鉢・浅鉢・つぶれた球胴形の鉢などがある。底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものの。口縁部に比し小さい径の底部から体部下半へやや開き気味に立ち上がり、体部中央で大きく膨らむものの。キャリバー形を呈する、頸部で狭まり口縁部は大きく外反する深鉢などがある。特に第142図の4の土器は、口縁部に円孔は持たないものの、関東地方の諸磯B式と共に施文される文様構成を呈することは重要である。

V群土器 連続爪形を施し直線や円形あるいは斜状の文様を描出するもの。

地文は斜縞文あるいは羽状縞文である。半截竹管による連続爪形文が施文され、この連続爪形文を用いて、円形あるいは斜状の文様が描かれている。口縁部は平坦なものと波状をなすものがある。文様の施文範囲は口縁部から頸部にかけての間になる。その他、この部分から下には斜縞文あるいは羽状縞文が施されるものが多い。

器形はほぼバケツ形をなし、底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものの。体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くものなどがある。

VI群土器 沈線および貝殻腹縁により文様を描出するもの。

二枚貝などによる連続的押圧により爪形文を施しているものであり、東関東を中心とする浮島式併行土器であろう。施文は口唇部と胴上半部には微細に施し、胴部はやや間隔が広く施文している。頸部付近は半截竹管による菱形状の幾何学文様がみられ、大波状口縁になる場合がある。関東地方の浮島式に併行する一群であろう。

器形はほぼバケツ形をなし、底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものの。体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くものなどがある。

VII群土器 繩文を地文とするもの。

器面に縄文のみが施文されているものをこの群とした。羽状縄文、斜状縄文、撚糸縄文、結束を持つ縄文などがある。施文されている縄文原体の種類はわりと多いが、ここでは細かな検討は行っていない。また、この群は土器に縄文以外の施文がなされているもの一部である可能性もある。

VIII群土器 格子状の沈線が描出されるもの

器面に沈線のみが施文されているものをこの群とした。格子状の沈線を持つものがある。施文されている土器群は少ない。この群は土器に沈線以外の施文がなされているもの一部である可能性もある。小形のものが多い。

器形はほぼバケツ形をなし、底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものがある。

IX群土器 無文のもの

表面に文様が施文されていないものをこの群にした。この群に含まれる土器は非常に少ない。ただし、彩文土器などの漆による文様が描かれる土器の表面は、無文であり滑らかに磨かれている。このため、彩文土器などの漆が剥落したものである可能性がある。

X群土器 漆付着土器

漆の容器に使用された土器である。完形のものもあるが、破損した土器を転用したものもある。

XI群土器 彩文土器

無文の土器に赤漆を土器全体に塗り、この赤漆を下地としながら、その上に黒漆を用いて数条の集合する細線を幾何学的に描いているものである。器形はつぶれた球形をなし、口縁部直下には連続した穿孔が見られる。膨らんだ胴部に、渦巻きと三角を使用した幾何学的な文様を描いている。口唇部及び、底部の高台付近には、黒漆を列点状に配置している。

XII群土器 その他の土器

底部の土器片を一括する。無文、網代痕、木葉痕、沈線文がある。底部形態は大きく3分類され、丸底を呈するもの、上げ底状でほぼ垂直に立上るもの、底辺が張り出し胴下半部にやや膨らみを持ち上げ底状になるものなどがある。

(2) 遺構出土の土器

次に、報告書の図版の記載に従って遺構出土の土器群について述べてゆく。

S T 1 (第78・240・8・223図、図版8・75・123)

検出グリッド 検出グリッドはP-7・8、Q-7・8グリッドであり、土器は小形土器・土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(第78図1・5) II群土器(第78図2) III群土器(-) IV群土器(-) V群土器(第78図3・4) VI群土器(-) VII群土器(-) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、V群土器である。I群土器では小形の完形土器がある。口縁部が開き、頸部でくびれ、体部が胴張りとなり底部にかけてしばむ器形となる。縄文を地文としながら、口唇に波状の貼付を施し、体部のくびれ部にかけて連続する波状の貼付を施す(第78図5)。V群土器は半截竹管による連続爪形が施文されているものである(第78図3・4)。

S T 2 (第78・240・9図、図版9・10・75)

検出グリッド 検出グリッドはG-12・13、H-12・13、I-12・13グリッドであり、土器は深鉢・土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(第78図6・18) II群土器(第78図8・11・15) III群土器(第78図10・13) IV群土器(-) V群土器(第78図9) VI群土器(-) VII群土器(第78図7) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VI群土器である。I群土器、II群土器、III群土器を主体とし、V群土器は少ない。I群土器は縄文を地文としながら、体部のくびれ部上方に直線状の貼付を施し、この下に貼付による幾何学文を施している(第78図18)。興味深いことに直線状の貼付は斜めのキザミによって加飾されている。V群土器の半截竹管による連続爪形が粘土紐状に施文されているものも含まれている(第78図9)。

S T 3 (第78・143・144・10図、図版11・75)

検出グリッド 検出グリッドはD-14~16グリッドであり、土器は彩文土器、漆付着土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(-) II群土器(第78図12) III群土器(-) IV群土器(-) V群土器(-) VI群土器(-) VII群土器(-) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(第143図5) XI群土器(第144図4・5) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、II群土器、X群土器、XI群土器である。出土は少ない

が、彩文土器、漆付着土器が出土している。XI群土器の彩文土器はいずれも鉢の脇部破片である。黒漆の上に渦巻き文とこれを区画する斜線とが赤漆で描かれている(第144図4・5)。X群土器の漆付着土器はおそらく漆容器として使用されたものであり、破損した深鉢形土器の体部下半を転用している。内部には漆の付着が激しい。

S T 4 (第78・240・10・224図、図版12・75)

- 検出グリッド 検出グリッドはJ-12・13、K-12・13、L-12グリッドであり、土器は土器片が出土した。
- 出土土器群 I群土器(-) II群土器(第78図14・17) III群土器(第78図16) IV群土器(-) V群土器(-) VI群土器(-) VII群土器(-) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)
- 特記事項 出土している主な土器は、II群土器、III群土器である。出土は少ない。

S T 5 (第79・240・11・239図、図版13・75・114)

- 検出グリッド 検出グリッドはK-13~16、L-13~16、M-13~16グリッドであり、土器は土器片が出土した。
- 出土土器群 I群土器(-) II群土器(第79図1~4・6) III群土器(-) IV群土器(-) V群土器(第79図5) VI群土器(-) VII群土器(-) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)
- 特記事項 出土している主な土器は、II群土器、V群土器である。出土は少ない。

S T 6 (第79・12・13・224・226図、図版14・123)

- 検出グリッド 検出グリッドはF-14・15、G-14~17、H-14~17であり、土器は小形土器、土器片が出土した、また大木4式の土器がまとめて出土した。
- 出土土器群 I群土器(第79図7・9・12) II群土器(第79図11) III群土器(-) IV群土器(-) V群土器(-) VI群土器(-) VII群土器(-) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)
- 特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器である。I群土器は頸部に円形の貼付を持つ深鉢型の小形土器が出土している(第79図12)。

S T 7 (第79・132・133・12・13図、図版14・76・124)

- 検出グリッド 検出グリッドはH-17~19、I-17~19、J-17~19である。土器は一括土器や完形土器が横位や正位の状態で出土するほか、深鉢、小形土器、土器片が出土した。
- 出土土器群 I群土器(第79図8、第133図1) II群土器(第79図10、第132図2) III群土

器(第79図13) IV群土器(-) V群土器(-) VI群土器(-) VII群土器(-)
VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器である。III群土器は半截竹管で格子状の沈線を描く深鉢型の小形土器が出土している(第79図13)。

S T 8 (第79・132・240・14図、図版15・76)

検出グリッド 検出グリッドはS-11・12、T-11~13、U-11~13グリッドであり、土器は深鉢、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(第79図14) II群土器(第79図15~18) III群土器(第79図19~25、第132図1) IV群土器(-) V群土器(第79図26・27) VI群土器(-) VII群土器(第132図4・7) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(-) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VII群土器である。I群土器、II群土器、III群土器が多く、V群土器も含まれている。III群土器、VII群土器は地文に縄文を持ち、体部で膨らみながら頸部でしばみ、口縁部で開く器形の深鉢型土器が出土している(第132図1・4・7)。V群土器は半截竹管による連続爪形文を用いて、円形あるいは斜状の文様を描く土器が出土している(第79図26・27)。口唇には連続したキザミと文様と、この文様に統いて小さい突起が付くものがある(第79図27)。

S T 9 (第80・129~131・145・241・15図、図版15・76・77)

検出グリッド 検出グリッドはQ-17、R-16~18、S-16~18、T17・18グリッドであり、土器は彩文土器、台付鉢、深鉢、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(-) II群土器(第80図1・13、第129図11) III群土器(第80図2~12・18・19) IV群土器(第80図14~16、第130図13) V群土器(第80図17) VI群土器(-) VII群土器(第80図20、第131図4) VIII群土器(-) IX群土器(-) X群土器(-) XI群土器(第145図1) XII群土器(-)

特記事項 出土している主な土器は、II群土器、III群土器、IV群土器、V群土器、VII群土器、XI群土器である。大多数はII群土器、III群土器であるが、一部にIV群土器が含まれる。III群土器は丸みを帯びたボール状の鉢に台がつく器形がある(第80図18)。

S T 10 (第81~84・133・241・16・17・226図、図版16~19・77・78・124)

検出グリッド 検出グリッドはI-19~21、J-19~21、K-19~21、L-19~21、M-19~20、N-20~21グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、獸面把手付土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器(第81図2~6、第84図1、第133図1) II群土器(第82図1~6・

9・11・12、第83図8) III群土器(第82図7・8・10) IV群土器(第83図1～4・7) V群土器(−) VI群土器(−) VII群土器(第81図1、第83図5・6・9・10) VIII群土器(−) IX群土器(−) X群土器(−) XI群土器(−) XII群土器(−)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、VII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。一部にIV群土器が含まれる。I群土器はほぼ完形の土器が出土している(第84図1)。IV群土器はキャリバー状の器形をなし、連続したキザミを持つ細い貼付を地文とし、内湾する口縁に獸面を装飾した土器があり注目される(第83図1～4)。

S T 11 (第85～94・132・145・242・18・19・215・223・225・226図、図版20～24・78・123～125)

検出グリッド 検出グリッドはP-19～21、Q-19～22、R-19～22、S-19～22、T-19～22、U-19～22、V-19～22グリッドであり、土器は彩文土器、深鉢、小形土器、土器片が出土した。この中には粘土紐貼付の大木式土器や浮島式併行の土器片がある。

出土土器群 I群土器(第85図1～11、第86図1～3・19、第88図18、第89図6、第90図9、第92図10) II群土器(第86図4～18・20、第87図1～16、第88図19・20、第90図10、第92図1・4～6、第132図2) III群土器(第86図21、第87図17、第88図1～17・21～23、第90図11・12、第91図1) IV群土器(第89図3・5・14～23) V群土器(第88図24～31、第89図1・2・4・7～12) VI群土器(第89図13、第94図1) VII群土器(第89図24～27、第90図1～8、第92図9、第93図1～4) VIII群土器(第92図3・7・8) IX群土器(−) X群土器(−) XI群土器(第92図11、第145図1) XII群土器(第93図5～7)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、V群土器、VI群土器、VII群土器、VIII群土器、XI群土器、XII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器であり、IV群土器、V群土器、VI群土器は少ない。この他にVII群土器、VIII群土器、XI群土器、XII群土器も出土している。I群土器は底部から直線的に開き口縁部直下で強く外反する深鉢(第90図9)、頸部でくびれ口縁部に向けて外反し口縁部に貼付による装飾を持つ深鉢(第92図10)がある。II群土器は底部から直線的に開き口縁部直下で外反する深鉢(第90図10)、底部から直線的に開く深鉢(第92図4・6)、頸部でくびれ口縁部に向けて外反する小形の深鉢(第92図1)、頸部でくびれ口縁部に向けて外反するキャリバー状をなす深鉢(第92図5)がある。III群土器は底部から直線的に開く深鉢(第90図12)、頸部でくびれ口縁部に向けて外反する深鉢(第90図11、第91図1)がある。VI群土器は底部からゆるやかに外反しながら直線的に開き、口縁部は4

の大きな波状を呈する深鉢（第94図1）がある。この土器は浮島式に併行する一群であろう。集合沈線により菱形の文様を構成し、区画には貝殻腹縁による波状の爪形文が施され、体部下半にも同じく貝殻腹縁による波状の爪形文が施される。VI群土器は小形の深鉢（第93図3）がある。XI群土器は彩文土器である。胴部の中央付近に最大径を持ち、最大径は20cm前後のものが多い。出土した彩文土器はいずれも正面から見た形が橢円形、あるいはつぶれた球形でやや稜の張る形を呈する無頬壺となり、口端付近に連続した貫通孔を持つ。底部は平底あるいはやや尖るものがある。文様は赤漆の地の上に黒漆を用いて直線と曲線を描き、幾何学的文様を描いている（第145図1）。同種のものは福井県鳥浜貝塚（322頁写真）で出土し、また、中国大陸の彩陶の文様構成に似ている。文様の展開については巻頭カラー図版に掲載したので参照されたい。文様あるいは地の赤漆が剥落したもの（第92図11）もある。XII群土器は底部に文様を持つものを一括した。円形底部の中心から放射状に集合沈線を展開するもの（第93図5）、木葉の葉脈を残す木葉痕を持つもの（第93図6）、敷物などの圧痕と考えられる網代痕を持つもの（第93図7）などがある。

S T 12 (第95・130・132・243・19図、図版25・79)

検出グリッド 検出グリッドはT-14~16、U-13~17、V-13~17グリッドであり、土器は深鉢、破片が出土した。大木式土器、諸磯式併行土器がある。

出土土器群 I群土器（第95図1~4） II群土器（第95図5~8） III群土器（第95図9~13・19、第132図1） IV群土器（第95図14~18、第130図9~12） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（第132図4・7） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、VII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。一部にIV群土器が含まれる。土器はキャリバー状の器形をなすもの（第95図17）と、口縁部がおそらく4つの大きな波状を呈する深鉢（第95図18）があるが、この土器はVI群土器の可能性もある。連続したキザミを持つ細い貼付を持つ土器があり注目される（第95図14~17）。

S T 13 (第96~98・131・143・243・21・22・239図、図版26・79・136)

検出グリッド 検出グリッドはH-31~33、I-30~33、J-29~33、K-29~33、L-30~32グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、漆付着土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（第96図1~8、第97図14~15、第98図1） II群土器（第96図9~10、第97図1~4） III群土器（第97図2・3・5~7・9・16） IV群土器（-） V群土器（第97図8~10） VI群土器（第97図12~13、第131図1、3） VII群土

器（第97図17） VII群土器（第96図11） IX群土器（-） X群土器（第143図3）
XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VI群土器、VII群土器、VIII群土器、X群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器であり、V群土器、VI群土器は少ない。I群土器はほぼ完形の土器が出土しており、文様を展開図として示した（第98図1）。

S T 14 (第99・131・244・23・24・225図、図版80・125)

検出グリッド 検出グリッドはL-32、M-31~33、N-31~33、O-31~33、P-31・32グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（第99図1～5・14） II群土器（第99図6～8・12） III群土器（第99図9～11・13） IV群土器（-） V群土器（第99図15・16） VI群土器（第131図1・3） VII群土器（第99図17） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（第99図18）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VI群土器、VII群土器、XII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器であり、V群土器は少ない。底部に圧痕のあるXII群土器も出土している。VI群土器は口縁部には集合沈線により菱形の文様を構成し、体部には貝殻腹縁による波状の爪形文が施され、体部下半にも同じく貝殻腹縁による波状の爪形文が施される。浮島式に併行する一群であろう。

S T 15 (第100・101・103・130・131・143・144・245・25～28・227～231図、図版27～29・80・126～130)

検出グリッド 検出グリッドはL-41・42、M-40～42、N-40～43、O-40～43、P-41・42グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、漆付着土器、彩文土器片、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（第100図1～8、第131図6） II群土器（第100図9～13、第101図7・8、第103図19） III群土器（第100図14～16、第101図1～4） IV群土器（-） V群土器（第101図9～12、第130図8） VI群土器（-） VII群土器（第101図5・6） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（第143図1・4・7） XI群土器（第144図2） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VII群土器、X群土器、XI群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。少数V群土器、XI群土器が含まれる。特徴的な土器として、漆容器として使用したと考えられる土器がある。完形の小形土器を使用し内外面に漆が付着しているもの（第143図1）、深鉢の底部付近の破損部分を利用し、内外面に漆が付着して

いるもの（第143図4）、中形の深鉢型土器を使用し、内外面に漆が付着しているもの（第143図7）がある。内面には漆が一面に付着しているが、外面には一部に付着しているものが多い。彩文土器の破片も出土している（第144図2）。

S T 16 (第101~104・143・147・245・29・30図、図版30・31・81)

検出グリッド 検出グリッドはC-39~42、D-39~42、E-40・41グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、漆付土器、赤漆塗彩文土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（第101図13~17、第102図1~12、第103図17~20） II群土器（第103図2~7・11・15~16、第104図1~5） III群土器（第103図8~10・12~14） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（第103図1・18） VIII群土器（-） IX群土器（第104図4） X群土器（第143図8） XI群土器（第147図5） XII群土器（第104図5）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、VII群土器、IX群土器、X群土器、XI群土器、XII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。少数その他の土器が含まれる。特徴的な土器として、底部に網代を残す土器（第104図5）、彩文土器（第147図5）、漆容器（第143図8）がある。彩文土器は口径約15cm、底部は欠失し、最大幅は18cmであり、胴部が膨らむつぶれた壺である。口縁部はゆるやかに外反し、口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施されている。

S T 17 (第104・144・247・31・32・223・224図、図版32・81・131・132)

検出グリッド 検出グリッドはF-35~37、G-35~37グリッドであり、土器は彩文土器片、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（-） II群土器（第104図6~8） III群土器（第104図9） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（第144図3） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、II群土器、III群土器、XII群土器である。大多数はII群土器、III群土器である。特徴的な土器として、彩文土器（第144図3）がある。

S T 18 (第105・106・247・33・34図、図版32~34・81)

検出グリッド 検出グリッドはD-48~51、E-48~53、F-48~52、G-48~52、H-48~51グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、土器片が出土した。

出土土器群 I群土器（第105図1・第106図1・2） II群土器（第106図3・6） III群土器（第106図4） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（第106図5） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IX群土器である。特徴的な土器として完形の深鉢がある（第105図1）。口径約39cm、底径約16cm、高さ約43cmを計る大形の土器である。地文に粗い縄文を施文したあとで、頸部に粘土紐を用いた貼付を施している。

S T19 (第106・107・130・244・35・36図、図版32・35・36・82)

検出グリッド 検出グリッドはE-53~55、F-52~55、G-52~55、H-53~55、I-53~54グリッドであり、土器は深鉢、土器片が出土した。
出土土器群 I群土器（第106図7～9、第107図5～7） II群土器（第107図8） III群土器（第106図10、第107図1～4、第130図3） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（第107図9）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、XII群土器である。

S T20 (第108～110・147・248・37・38図、図版32・37・38・82)

検出グリッド 検出グリッドはK-52・53、L-50～53、M-50～53、N-50～53、O-50～52グリッドであり、一括土器を中心として土器群が出土した。
出土土器群 I群土器（第108図1～12、第109図1～6） II群土器（第109図7～9・14、第110図1～5） III群土器（第109図10～13、第110図6） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（第110図8・9） VIII群土器（第110図7） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（第147図4） XII群土器（第110図10・11）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、VII群土器、VIII群土器、XI群土器、XII群土器である。I群土器、II群土器、III群土器が主体となる。特徴的な土器として、彩文土器がある（第147図4）。口径約14cm、底径約11cm、最大幅約23cmであり、胴部が膨らむつぶれた無頸壺である。底部は高台をもつ。口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施されている。

S T21 (第111・33～36図)

検出グリッド 検出グリッドはC-50～55、D-50～55、E-52～54グリッドであり、土器片が出土している。
出土土器群 I群土器（第111図1） II群土器（-） III群土器（-） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器である。出土量は少ない。

S T22 (第111・39図)

- 検出グリッド 検出グリッドはC-33・34、D-33・34グリッドであり、土器が出土している。
- 出土土器群 I群土器（第111図2） II群土器（-） III群土器（-） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）
- 特記事項 出土している主な土器は、直立しながら口縁部で外反し、口唇部と頸部に粘土紐の貼付で幾何学的文様を描くI群土器である（第111図2）。

S T23 (第111・132・248・40図)

- 検出グリッド 検出グリッドはJ-36～38、M-35～38、N-35～38、O-35～37グリッドであり、土器は小形土器、土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器（-） II群土器（第111図3・4） III群土器（-） IV群土器（-） V群土器（第132図5） VI群土器（-） VII群土器（第111図5） VIII群土器（第111図6） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）
- 特記事項 出土している主な土器は、II群土器、V群土器、VII群土器、VIII群土器である。大多数はII群土器である。特徴的な土器として、V群土器では完形品の小形土器が出土している（第132図5）。口縁部にかけてくの字に外反するものである。

S T24 (第111・129・130・132・248・40図)

- 検出グリッド 検出グリッドはM-35、N-34～36、O-34～36、P-34～36グリッドであり、土器は小形土器、土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器（第111図7） II群土器（第129図10） III群土器（第111図8・9、第129図16、第130図2） IV群土器（-） V群土器（第132図5） VI群土器（-） VII群土器（第132図6） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）
- 特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。破片が多い。

S T25 (第112・113・135・41図、図版83)

- 検出グリッド 検出グリッドはN-49・50、O-48～51、P-48～51、Q-49グリッドであり、土器は深鉢、土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器（第112図1～5、第135図1） II群土器（第112図6・7、第113図1～4） III群土器（第112図8・10・11） IV群土器（-） V群土器（第112図9） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）
- 特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器である。大

多数はI群土器、II群土器、III群土器である。特徴的な土器として、I群土器では完形品に近い深鉢（第135図1）が出土している。底部を欠失するものの、口縁部直径約47cmで最大幅を口縁部にもつ。胴部が膨らみ頸部でしまりながら、口縁部にかけて外反する深鉢である。体部上半に粘土紐の貼付で幾何学的文様を描く。実測図には文様の展開図を併せて掲載している。

S T 26 (第110・131・142・249・42・43図、図版39・40・83)

検出グリッド	検出グリッドはU-27・28、V-27~29グリッドであり、土器は浅鉢形土器、深鉢、土器片が出土している。
出土土器群	I群土器（第110図12・13、第131図7） II群土器（第110図14・15・17） III群土器（第110図16） IV群土器（第142図4） V群土器（第110図18） VI群土器（-） VII群土器（第110図19） VIII群土器（-） IX群土器（第110図20） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項	出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、V群土器、VII群土器、IX群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。少數その他の土器が出土している。特徴的な土器として、完形土器が3点出土している。I群土器には口縁部直径約36cm、底径約15cmの深鉢がある。底部から直立て立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反し、体部上半に粘土紐の貼付で幾何学的文様を描く（第131図7）。IV群土器には諸機式に特徴的な器形を示し、口縁部直径約15cm、最大幅約19cm、底部は欠落が多いが約8cm、胴部屈曲部約14cmの、胴部が強くしぶまる無頸壺がある。磨消繩文を伴って入組木葉文が施された浅鉢形の土器で、貫通孔はない（第142図4）。IX群土器には小形の無文の深鉢か鉢がある（第110図20）。
------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

S T 27 (第113・147・44図、図版41・42)

検出グリッド	検出グリッドはV-53~55、W-53~55グリッドであり、土器は赤漆塗彩文土器、土器片が出土している。
出土土器群	I群土器（第113図5） II群土器（第113図6~8・10） III群土器（-） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（第113図9） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（第147図1） XII群土器（-）

特記事項	出土している主な土器は、I群土器、II群土器、VII群土器、XI群土器である。大多数はI群土器、II群土器である。特徴的な土器として彩文土器が出土している（第147図1）。口縁部直径約9cm、底径約8cm、胴部最大幅約15cm、高さ約6cmであり小形である。胴部が膨らむつぶれた無頸壺である。底部は高台を持たない。口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施されている。
------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

S T28 (第113・129・249・45図、図版51)

検出グリッド 検出グリッドはU-49・50、V-48~50、W-48~50グリッドであり、土器は土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第113図13） II群土器（-） III群土器（第129図14・15） IV群土器（-） V群土器（第113図11） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、III群土器、V群土器である。

S T29 (第113・145・147・44図、図版41・42)

検出グリッド 検出グリッドはR-55・56、S-55・56、T-55・56グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、彩文土器、赤漆塗彩文土器、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（-） II群土器（-） III群土器（第113図12・15・16） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（第113図14） VIII群土器（-） IX群土器（第113図17） X群土器（-） XI群土器（第145図2、第147図2・3） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、III群土器、VII群土器、IX群土器、XI群土器である。特徴的な土器として、完形土器が5点出土している。III群土器では口縁部直径約12cm、底径約6cm、高さ約13cm小形の深鉢がある。底部から直立して立ち上がり、体部上半に平行する沈線で文様を描く（第113図16）。IX群土器では口縁部直径約11cm、底径約8cm、高さ約12cmの小形の無文の深鉢がある。底部から直立して立ち上がり、ゆるやかに開く（第113図17）。彩文土器であるXI群土器は3点出土している。第145図2は、口縁部直径12cm、底径10cm、胴部最大幅約20cm、高さ約8cmである。胴部が膨らむつぶれた無頬壺である。底部は高台を持たない。口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施され、その上に黒漆で文様を描いている。口唇に連続して縦の列点、体部は最大幅部分に数条の直線を区画帶として描き、上半には同じく数条の直線を用いて、逆の字状の満巻きに対向する連続する幾何学的文様を描く。下半の構成はやや異なるが、基本的には上半と同様の文様が展開する。第147図2は、口縁部直径約12cm、底径約9cm、胴部最大幅約20cm、高さ約8cmである。胴部が膨らむつぶれた無頬壺である。底部は高台を持たない。口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施されている。第147図3は、口縁部直径約12cm、底径約10cm、胴部最大幅約20cm、高さ約9cmである。胴部が膨らむつぶれた無頬壺である。底部は高台を持たない。口縁部直下には連続した貫通孔が水平に並ぶ。体部外面全体に赤漆が施されている。

S T 30 (第114~117・134・143・250・46図、図版43・44・83・137・138)

検出グリッド 検出グリッドはS-39・40、T-39~41、U-39~41グリッドであり、土器は深鉢、漆付着土器、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第114図1、第115図1、第134図1） II群土器（第114図3～6・9～12、第116図1・4～6） III群土器（第114図7・8・13～20） IV群土器（第114図2） V群土器（第114図21～23、第116図2、第117図1） VI群土器（-） VII群土器（第116図3） VIII群土器（第114図24） IX群土器（-） X群土器（第143図2） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、V群土器、VII群土器、VIII群土器、X群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。全形を知ることのできる完形に近い土器が10点ほど出土している。特徴的な土器として、I群土器は第115図1、第134図1、II群土器は第116図2・4～6、V群土器は第116図2、第117図1、VII群土器は第116図3、X群土器は第143図2がある。I群土器では完形品に近い大形の深鉢が出土している（第115図1）。底部を欠失するものの、口縁部直径約44cm、胴部最大幅約29cm、現存高約42cmである。胴部が膨らみ頸部でしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢である。地文に縄文を施し、体部上半に粘土紐の貼付で幾何学的文様を描く。実測図には文様の展開図を併せて掲載している。第134図1もほぼ同様の法量、文様構成である。正面と側面の2面の実測図を提示した。II群土器は完形品に近い大形の深鉢（第116図5・6）、同じく完形品に近い中形の深鉢（第116図4）、完形品の小形の深鉢（第116図1）がある。地文に縄文を施し、体部上半に沈線で幾何的文様を描く。器形は胴部がふくらみ頸部でしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢と、底部から直立して立ち上がる深鉢の2つがある。V群土器は完形品に近い大形の深鉢（第117図1）と、同じく完形品に近い中形の深鉢（第116図2）がある。第117図1は、底部を欠失するものの、口縁部直径約40cm、胴部最大幅約33cm、現存高約56cmで、本遺跡では最大級の個体である。胴部が膨らみ頸部でややしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する。地文に羽状縄文を施し、口縁部直下に半截竹管により幾何学的文様を描く。数条の直線を上下の区画帯として描き、この間に同じく数条の直線を用いて、渦巻きとこれに対向して幾何的文様を描く。これは彩文土器の文様構成と共通している。VII群土器は小形の深鉢である（第116図3）。底部を欠失するものの、胴部が膨らみ頸部でややしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する。地文に羽状縄文を施し、口唇部に連続した刻みをもつ。X群土器は小形の深鉢である（第143図2）。口縁部直径約9cm、底径5cm、高さ約9cmである。底部から直立して立ち上がり、頸部に一条の沈線で文様を描く。内面には漆が付着している。

S T31 (第118~122・129・130・134・143・251・47・48・234図、図版45~47・84・132)

検出グリッド 検出グリッドはS-35~38、T-35~38、U-35~38、V-35~38グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、漆付着土器、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第118図2~12、第121図12、第122図1、第134図1） II群土器（第119図1・2・4~14、第120図1・12~16、第121図6・7・9~11、第129図8） III群土器（第119図3・15~17、第120図2~11・17） IV群土器（第118図1） V群土器（第120図18~26、第121図1~5、第130図6） VI群土器（-） VII群土器（第121図8） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（第143図6） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、IV群土器、V群土器、VII群土器、X群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。特徴的な土器として、I群土器は、大形の深鉢がある。底部を欠失するものの、口縁部直径約36cm、胴部最大幅約32cm、現存高約34cmである。胴部が膨らみ頭部でしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢である。地文に縄文を施し、頭部に粘土紐の貼付で幾何学的文様を描く。貼付は太く、陰影は深く、一見すると縄文時代中期の大木8式に似る（第122図1）。II群土器は、中形の深鉢と小形の深鉢がある。中形のものは、底部を欠失するものの、口縁部直径約20cm、胴部最大幅約17cm、現存高約17cmである。胴部が膨らみ頭部でしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢である。地文に羽状縄文を施す。口縁部に平行する沈線間を鋸齒状沈線で充填する。同様な文様を2段に施し、平行して列点を加える（第121図11）。小形の深鉢は完形であり、同様な文様構成を持ち、口縁部に平行する沈線間を鋸齒状沈線で充填する（第121図9）。X群土器は、底部から直立する深鉢の破片を利用している漆容器である。内面と外面に漆が付着している（第143図6）。

S T32 (第123・124・129~132・134・252・49・50・232~235図、図版48~50・84・132・135)

検出グリッド 検出グリッドはP-37~39、Q-36~39、R36~39グリッドであり、土器は深鉢、小形土器、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第123図1~3、第129図1・2・4、第131図5、第134図1） II群土器（第123図4・6~9・12、第124図1、第129図5~7・9、第132図3） III群土器（第123図5・10・11・13~16、第129図12・13、第130図1・4） IV群土器（-） V群土器（第124図4、第130図5） VI群土器（第131図2） VII群土器（第124図3、第132図6） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（第124図2）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VI群土器、

VII群土器、XII群土器である。大多数はI群土器、II群土器、III群土器である。特徴的な土器として、I群土器は大形の深鉢がある。底部を欠失するものの、口縁部直径約28cm、胴部最大幅約23cm、現存高約33cmである。胴部が膨らみ頸部でしまりながら、口縁部にかけてゆるやかに外反する深鉢である。地文に縄文を施し、頸部に沈線で幾何学的文様を描く。おそらく4単位の大ぶりな波状口縁をなすものと考えられる(第132図3)。小形の深鉢もある(第131図5)。V群土器は小形の深鉢の破片がある(第124図4)。VI群土器は浮島式に併行する土器であり、強く屈曲する器形を持つ深鉢がある(第131図2)。XII群土器は底部破片であるが、全体的な形状は不明である(第124図2)。

S T 33 (第124・131・253・51図、図版49・85)

- 検出グリッド 検出グリッドはP-40・41、Q-39~42、R39~41グリッドであり、土器は小形土器、土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器(第124図5~7、第131図5) II群土器(第124図8) III群土器(第124図9) IV群土器(--) V群土器(--) VI群土器(第131図2) VII群土器(--) VIII群土器(--) IX群土器(--) X群土器(--) XI群土器(--) XII群土器(--)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、VI群土器である。

S T 34 (第125・129・52図、図版51~53・85)

- 検出グリッド 検出グリッドはP-50、Q-49~51、R-48・51、S-49~52、T-50・51グリッドであり、土器は小形土器、土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器(第125図1・2、第129図3) II群土器(第125図3~5) III群土器(第125図6・7) IV群土器(--) V群土器(第125図8~10) VI群土器(--) VII群土器(第125図12) VIII群土器(第125図11) IX群土器(--) X群土器(--) XI群土器(--) XII群土器(--)
- 特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VII群土器、VIII群土器である。特徴的な土器として、VII群土器は地文を縄文としだぶりな波状の口縁を持つ小形の深鉢がある(第125図12)。

S T 35 (第125・52図、図版51・85)

- 検出グリッド 検出グリッドはP-48・49、Q-48~50、R48~50グリッドであり、土器は土器片が出土している。
- 出土土器群 I群土器(--) II群土器(第125図13・14) III群土器(--) IV群土器(--) V群土器(--) VI群土器(--) VII群土器(--) VIII群土器(--) IX群土器(--) X群土器(--) XI群土器(--) XII群土器(--)

特記事項 出土している主な土器は、II群土器である。

S T 36 (第130・52図、図版51)

検出グリッド 検出グリッドはS-49・50、T-49・50、U-49・50グリッドであり、土器は土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（-） II群土器（-） III群土器（-） IV群土器（-） V群土器（第130図7） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、V群土器である。

S T 37 (第126・131・132・53図、図版54・85)

検出グリッド 検出グリッドはP-36、Q-34~36、R34~36グリッドであり、土器は深鉢、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第126図1・2・8） II群土器（第126図3・5~7、第132図3） III群土器（第126図4） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（第131図2） VII群土器（第126図9~11） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、VI群土器、VII群土器である。

S T 38 (第124・253・51図、図版85)

検出グリッド 検出グリッドはP-40~42、Q-40~42、R-40~42、S-40~42グリッドであり、土器は土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第124図5~7） II群土器（第124図8） III群土器（第124図9） IV群土器（-） V群土器（-） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（-） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器である。

S T 39 (第127・132・53図、図版54・86)

検出グリッド 検出グリッドはS-32~35、T-33~35、U-33~35、V-33・34グリッドであり、土器は深鉢、土器片が出土している。

出土土器群 I群土器（第127図1） II群土器（第127図2~7・9・20、第132図3） III群土器（第127図8・10~13） IV群土器（-） V群土器（第127図14~18） VI群土器（-） VII群土器（-） VIII群土器（第127図19） IX群土器（-） X群土器（-） XI群土器（-） XII群土器（-）

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VIII群土器

である。

S M 1 (第128・130・253・54・55・239図、図版55・86)

検出グリッド 検出グリッドはC-29~31、D-28~31、E-28~31、F-28~31グリッドであり、土器は土器片が出土している。

出土土器群 I群土器(第128図1・2) II群土器(第128図3~7) III群土器(第128図8~10) IV群土器(--) V群土器(第128図11~13) VI群土器(第128図14、第130図14) VII群土器(--) VIII群土器(--) IX群土器(--) X群土器(--) XI群土器(--) XII群土器(--)

特記事項 出土している主な土器は、I群土器、II群土器、III群土器、V群土器、VI群土器である。

(3) 遺構外の土器 (第136~142・144~146図)

I群土器は大形深鉢と小形深鉢の完形土器と破片がある(第136図1~15、第137図1~5、第140図21~24、第141図1~3・6・7、第142図7)。特徴的な土器としては、足高の高台がつく小形の鉢がある(第140図23・24)。

II群土器は大形深鉢と小形深鉢の完形土器と破片がある(第137図6~14・16、第138図1~9・11・12・14・18、第139図18・21、第141図4・5、第142図3)。

III群土器は破片がある(第137図15、第138図10・13・15~17・19~26、第139図1~15・17・19、第140図13)。

IV群土器は諸磯B式に併行する土器であり、破片が多い(第140図14~17・19)。

V群土器は小形深鉢の完形品と大形深鉢のほぼ完形品があるが、破片が多い(第139図16、第140図1~12、第142図1・2)。

VI群土器は浮島式に併行する土器であり、破片が多い(第140図18・20)。

VII群土器は小形の深鉢や破片がある(第139図20、第142図5・6)。

VIII群土器は小形の深鉢の一部がある(第139図22)。

IX群土器は小形の鉢の完形品がある(第142図8)。

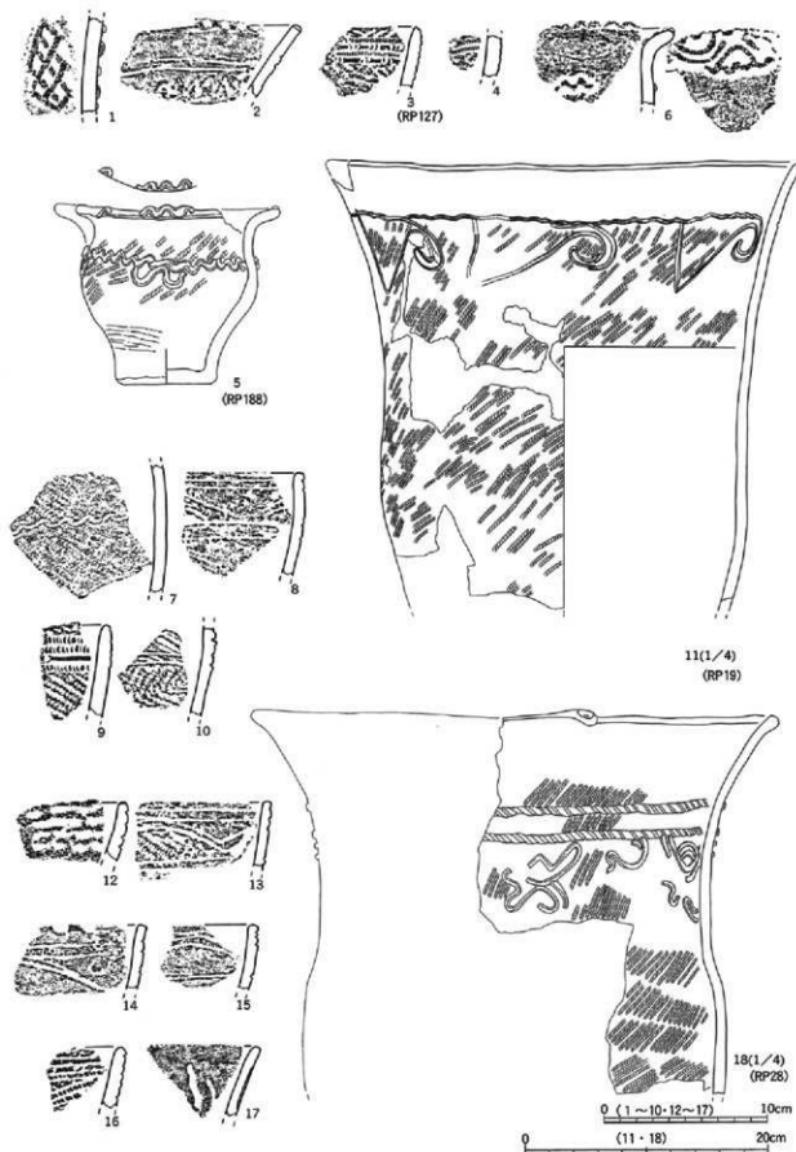
XI群土器は彩文土器であり、胴部が膨らむつぶれた無頸壺の口縁部破片(第144図1)、胴部破片(第146図1・2)、高台を持つ底部破片(第144図6)がある。第146図2は、破片の形状から胴部最大幅が約42cmになると考えられ、他の彩文土器に比べかなり大形である。特徴的な土器として、現存口縁部付近直徑約13cm、底径約8cm、胴部最大幅約16cm、高さ約11cmの胴部が膨らむ球胴形の高台を持つ壺がある(第145図3)。口縁部を欠失するものの、口縁部は頸部から強く外反するものと思われる。口縁部直下には平行して数条の直線が黒漆によって描かれ、この下の胴部全体には、数条の直線を用いて渦巻きとこれに対向して幾何学的文様を描く。

土製品

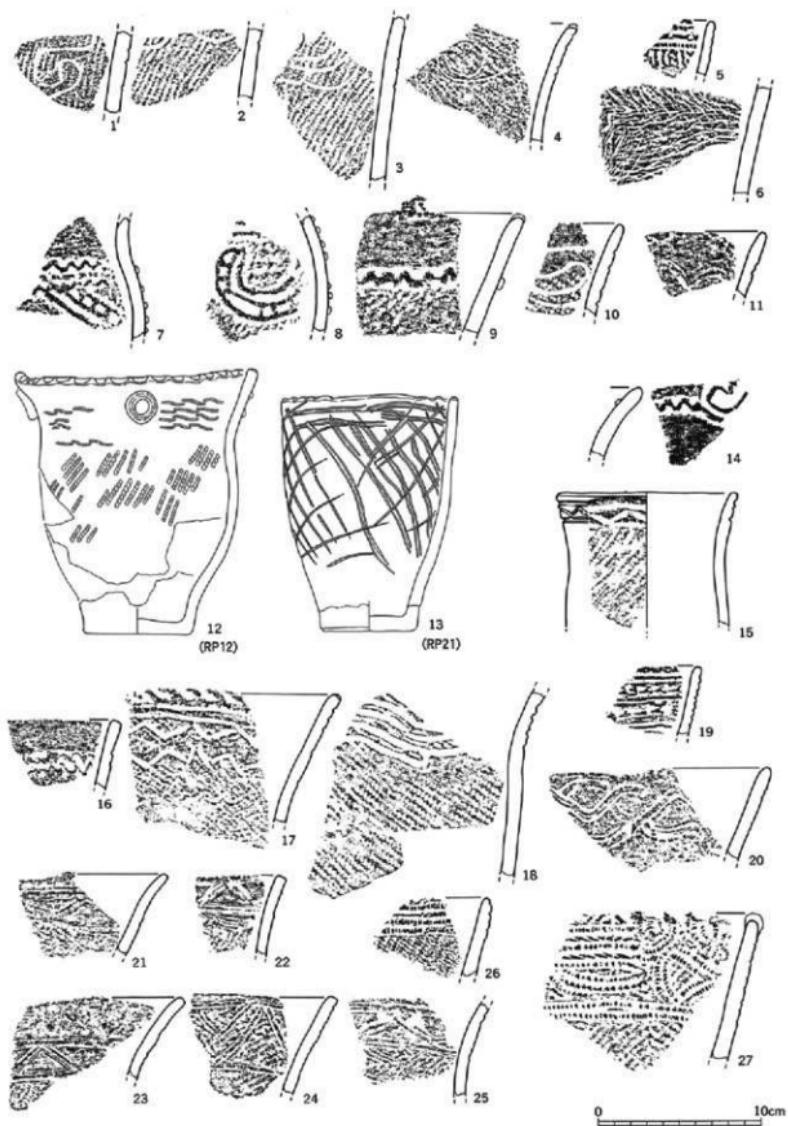
押出遺跡では、数点であるが土製品も出土している。

図版138-12~14は、高さ、幅とも2cm前後の円錐状をした土製品で、底部にえぐりがあり、側面には2ヶ所に孔があけられている。この同様の形状を持つ3点は、いずれもST30からの出土である。

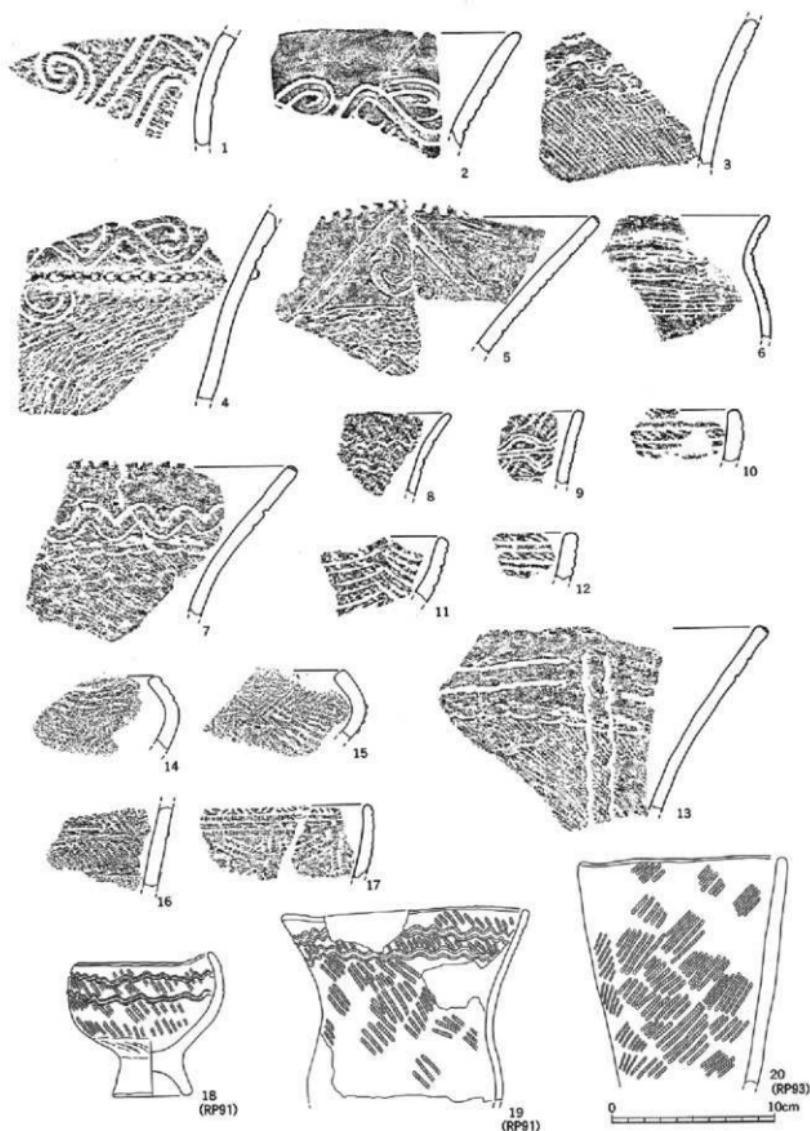
図版138-15は、現存高7cm、現存幅約5cmで、球形状の一部と考えられ、突起が認められる。出土地点はO-39~40グリッドである。



第78図 出土土器(1) ST1(1~5)・ST2(6~11・13・15・18)・ST3(12)・ST4(14・16・17)



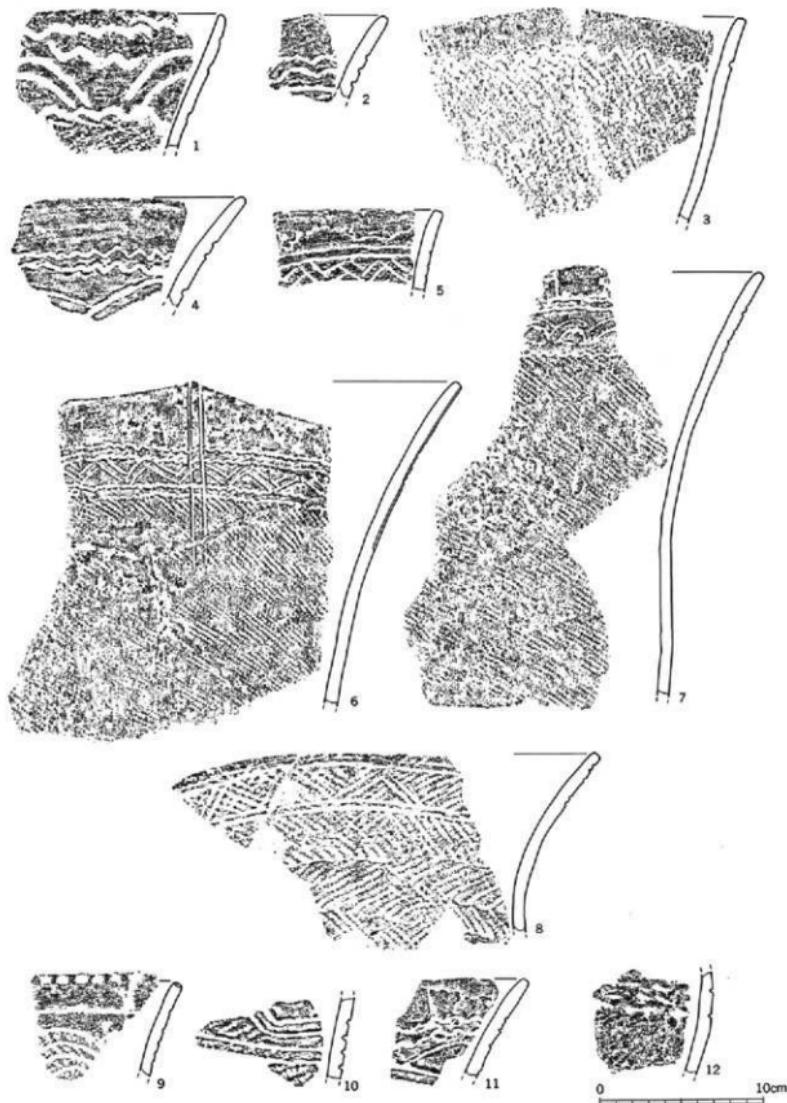
第79図 出土土器(2) ST 5(1~6)・ST 6(7・9・11・12)・ST 7(8・10・13)・ST 8(14~27)



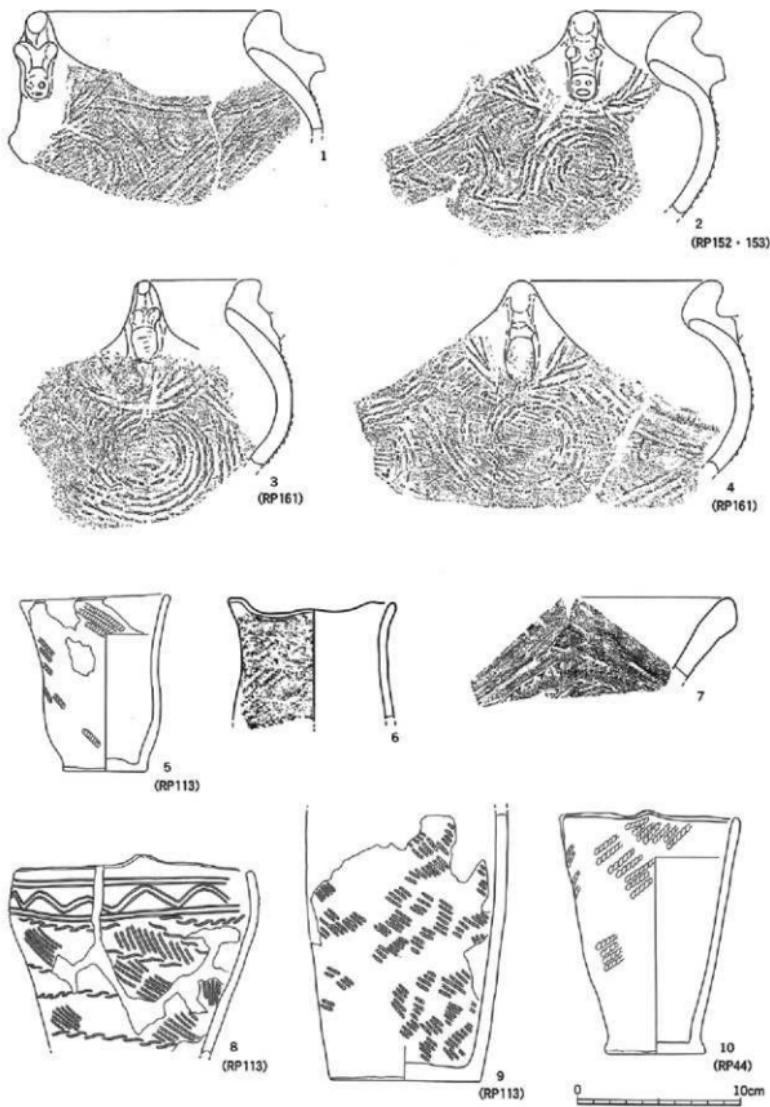
第80図 出土土器(3) ST 9



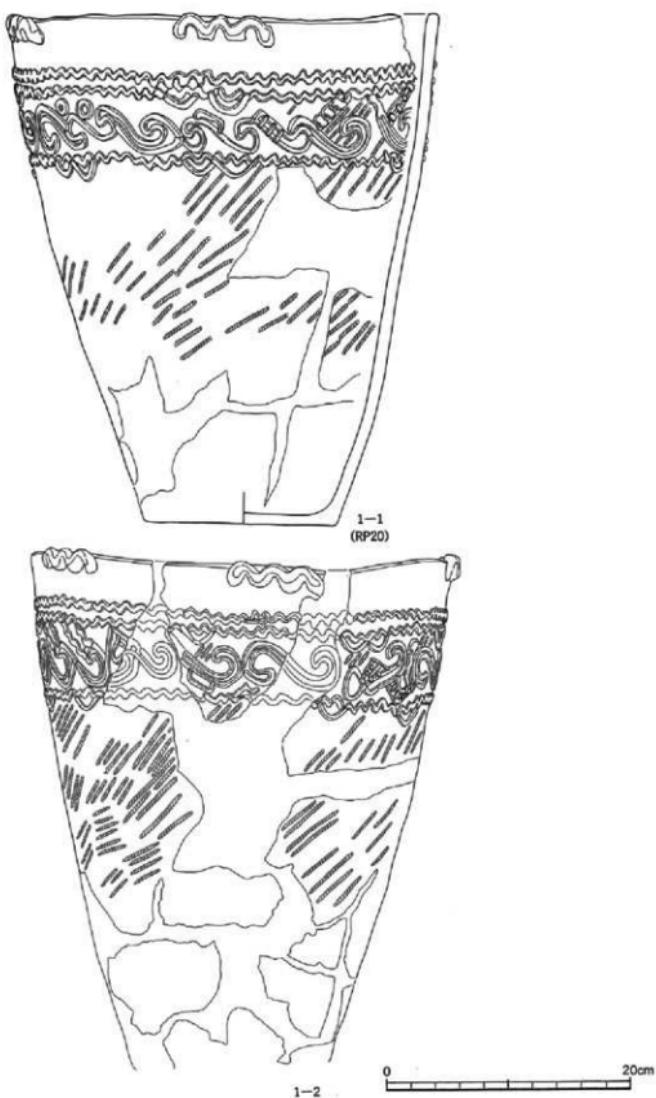
第81図 出土土器(4) ST10(1)



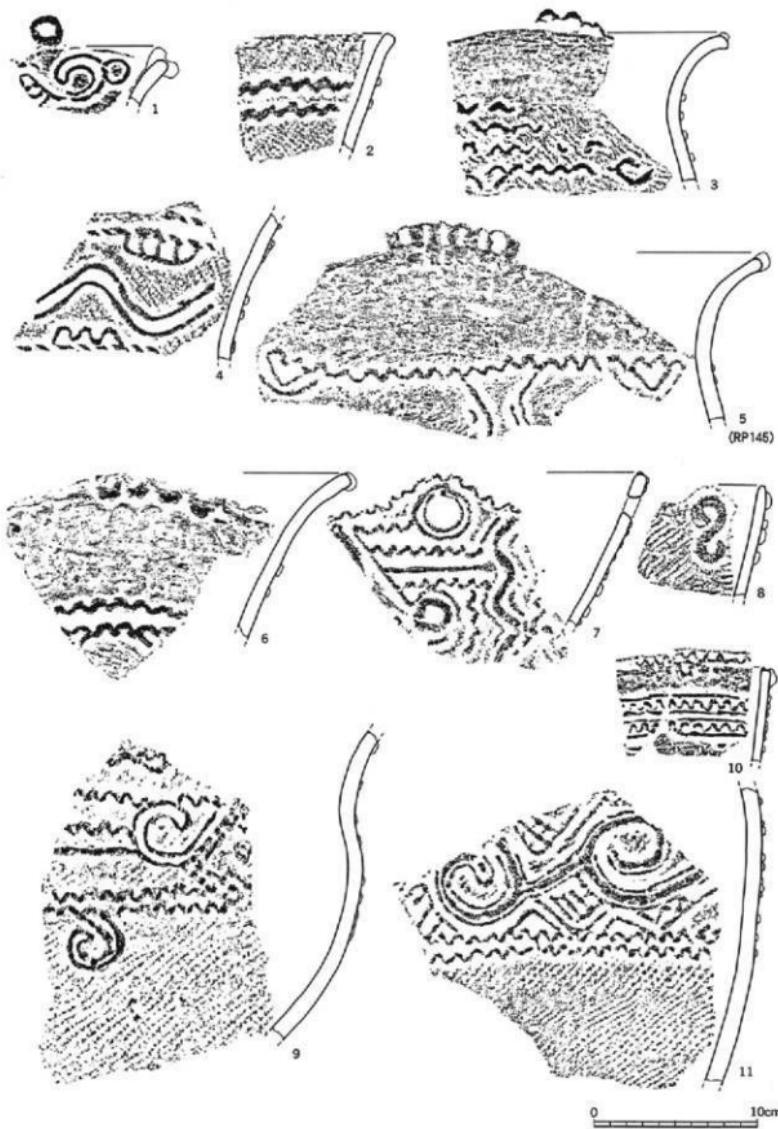
第82図 出土土器(5) ST10(2)



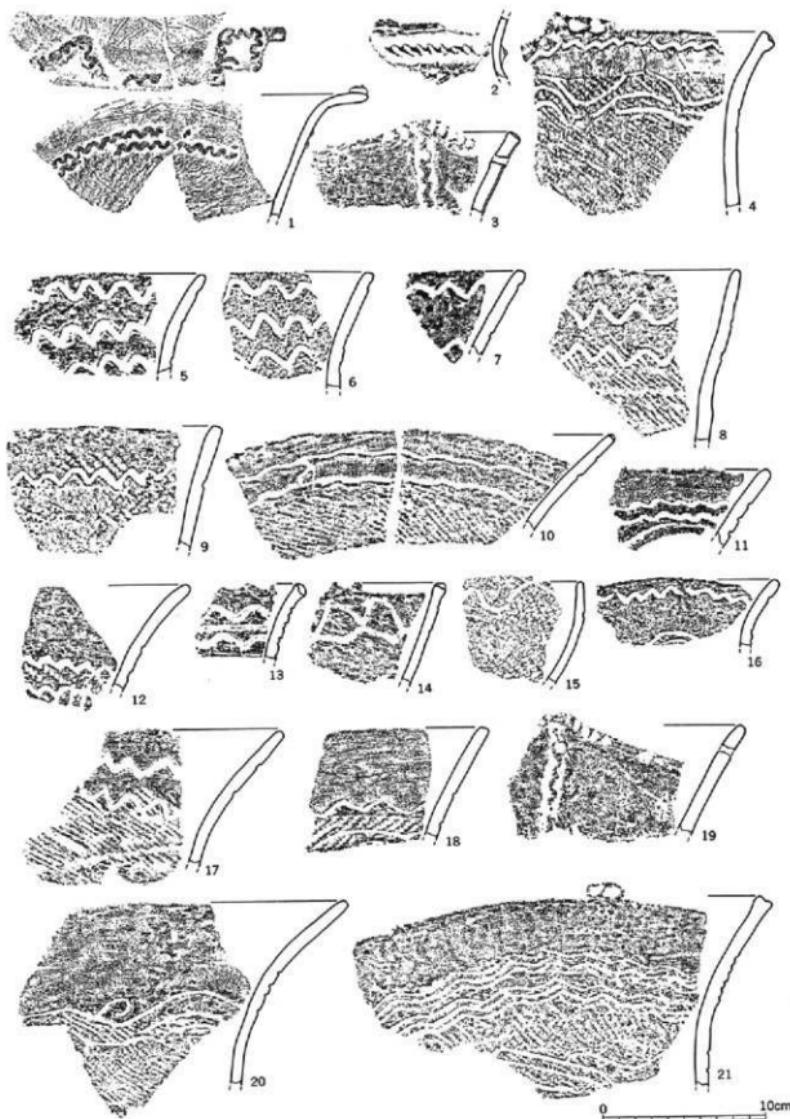
第83図 出土土器(6) ST10(3)



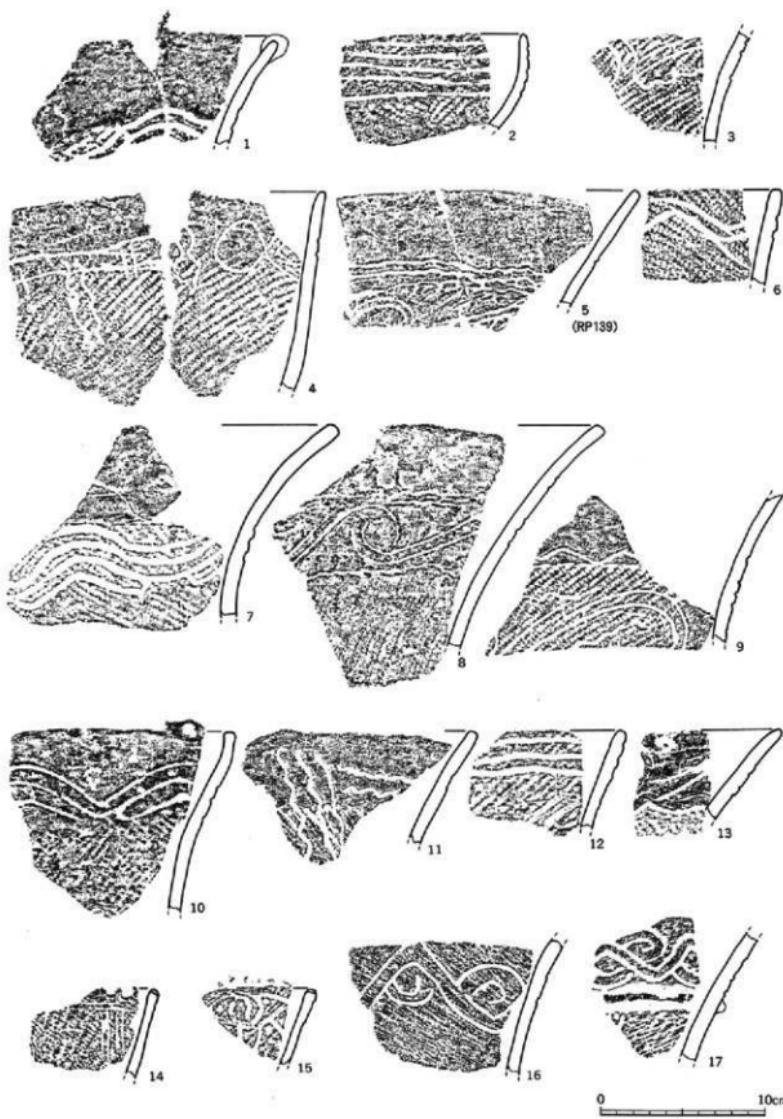
第84図 出土土器(7) ST10(4)



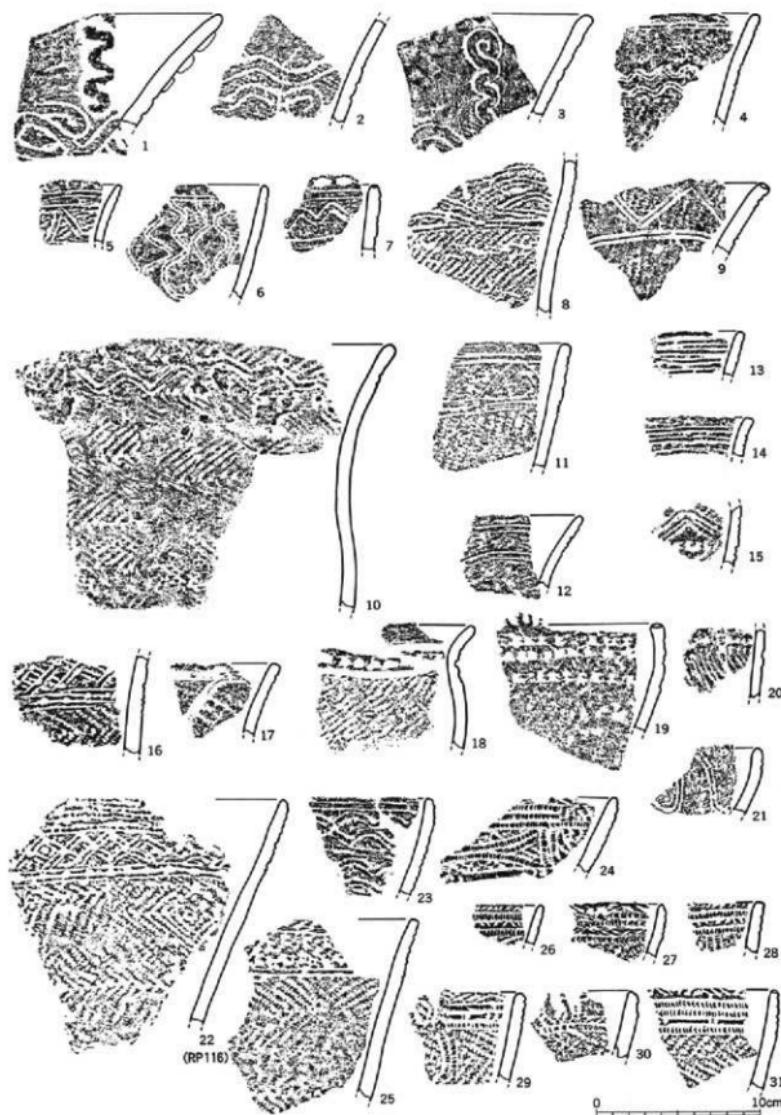
第85図 出土土器(8) ST11(1)



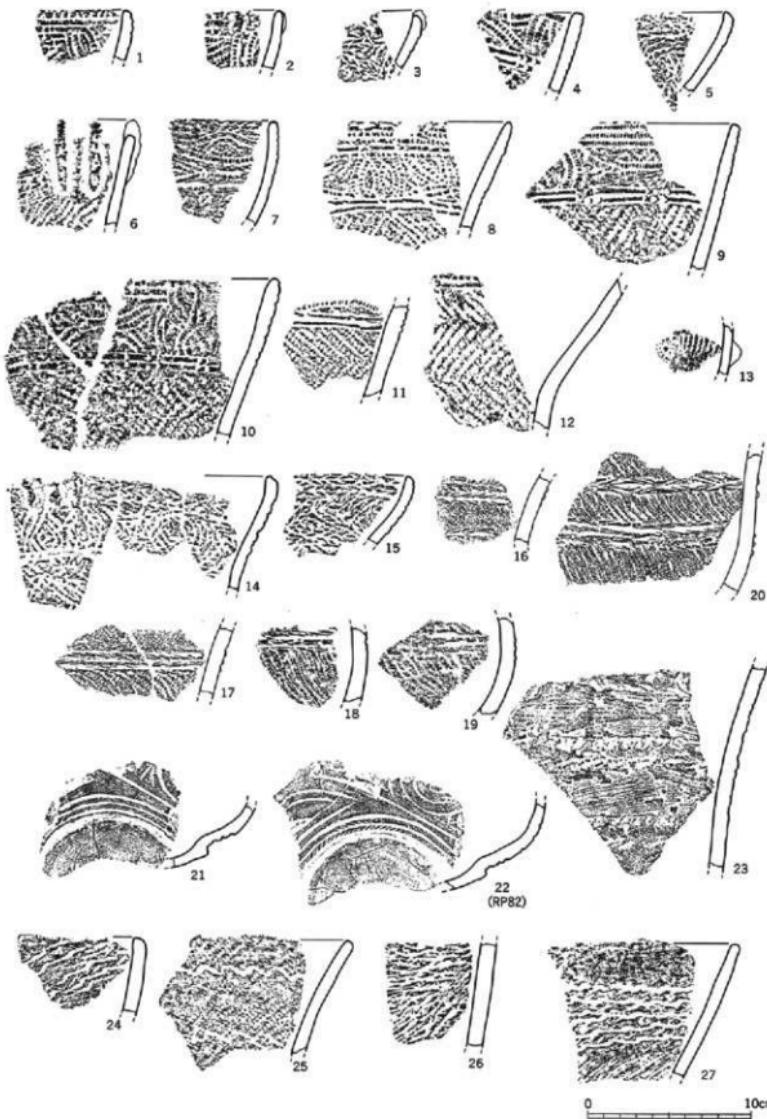
第86図 出土土器(9) ST11(2)



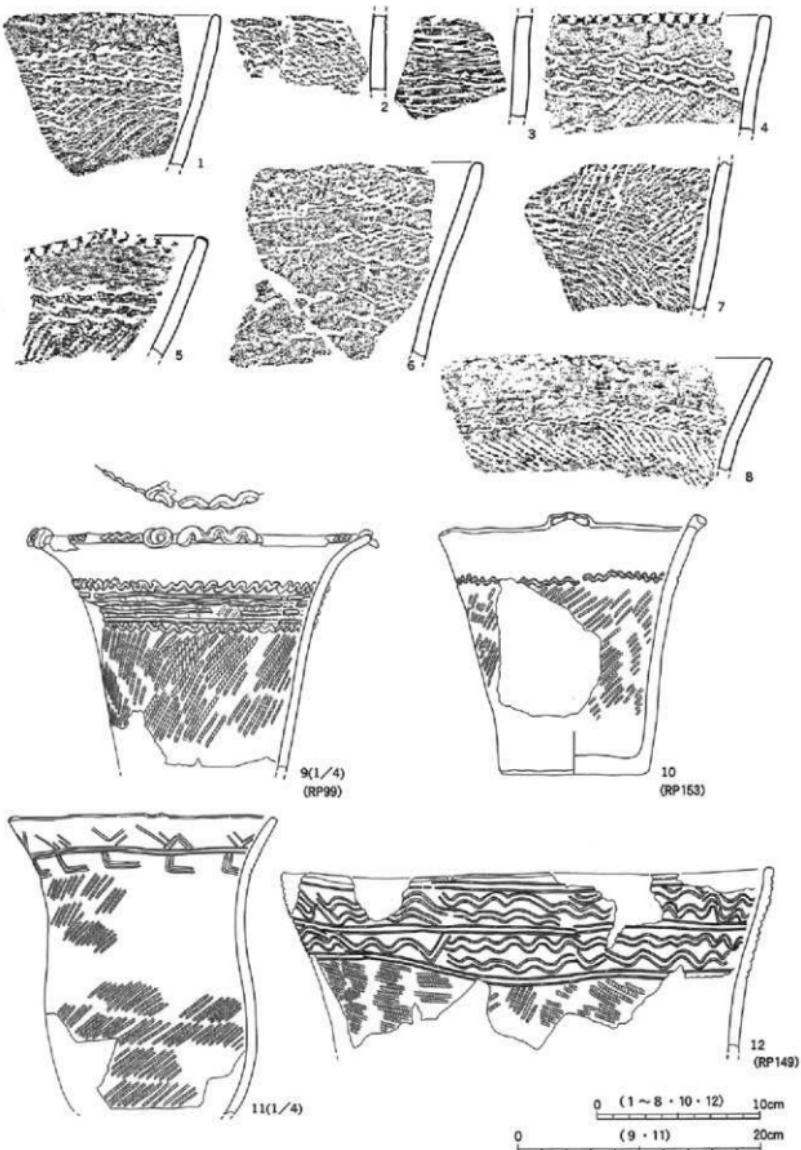
第87図 出土土器(10) ST11(3)



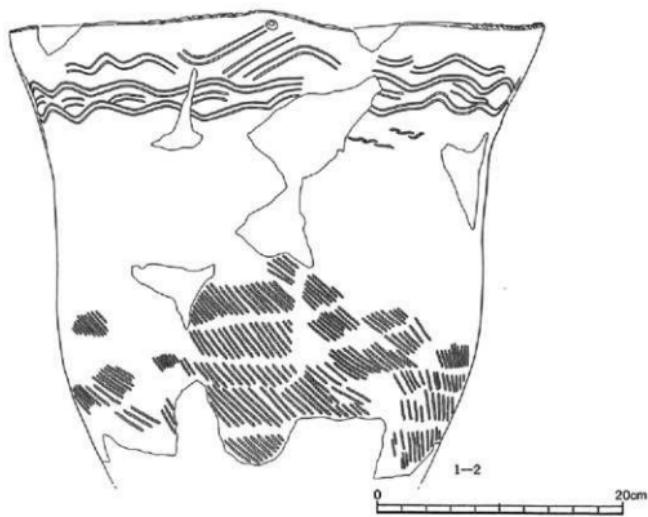
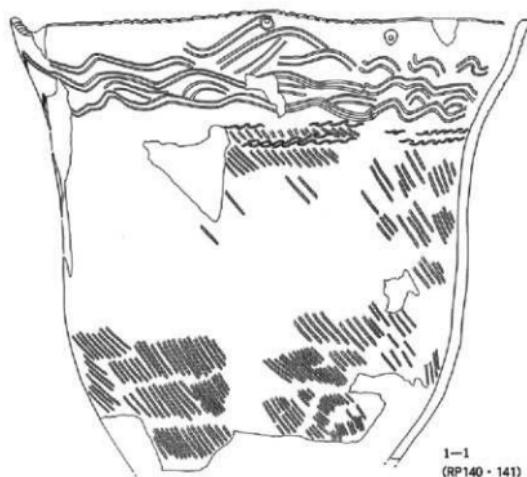
第88図 出土土器(11) ST11(4)



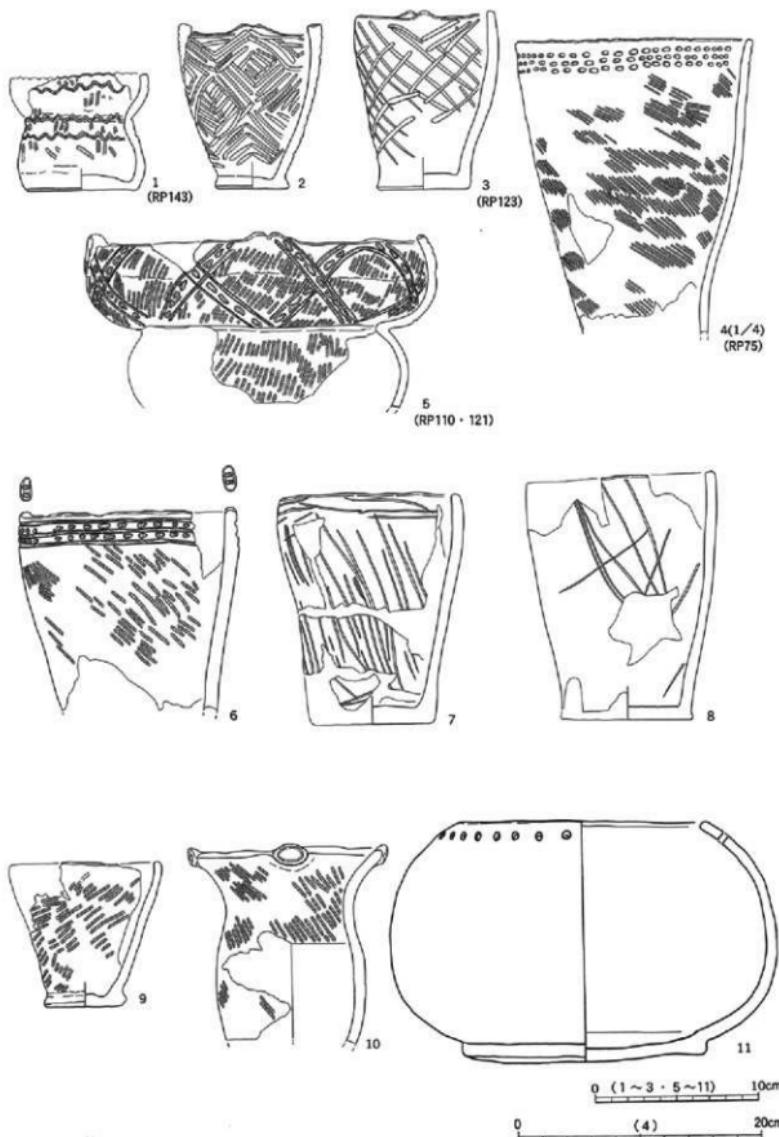
第89図 出土土器(12) ST11(5)



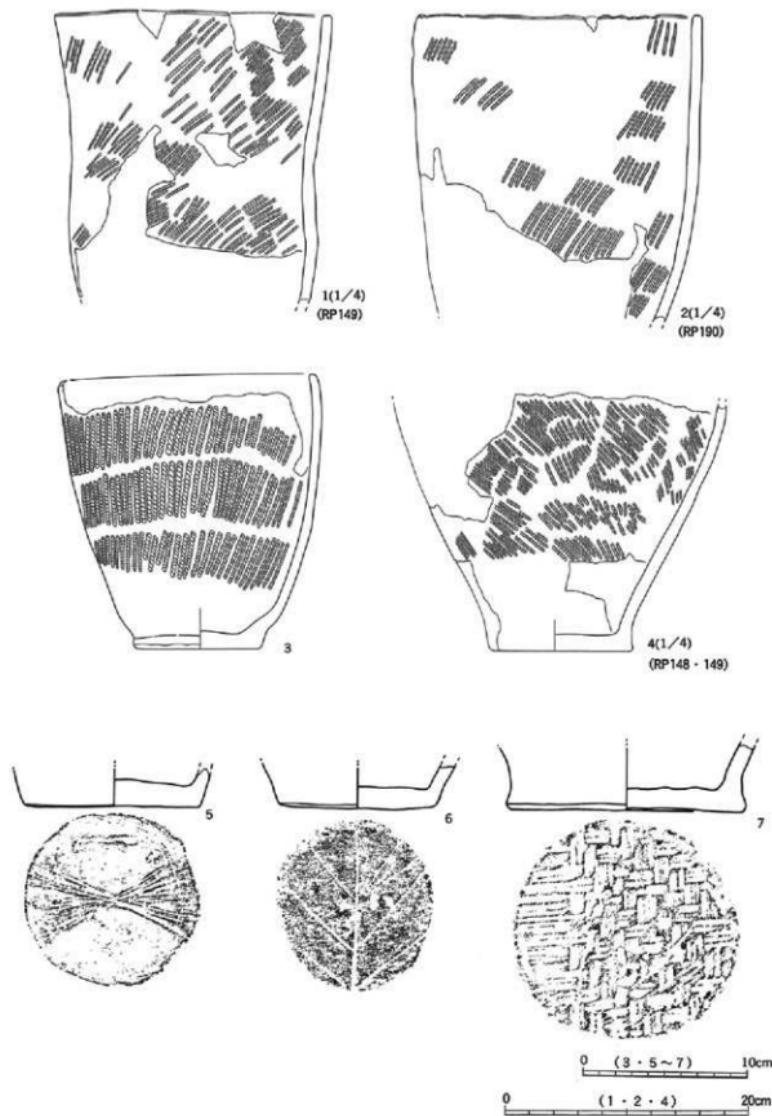
第90図 出土土器(13) ST11(6)



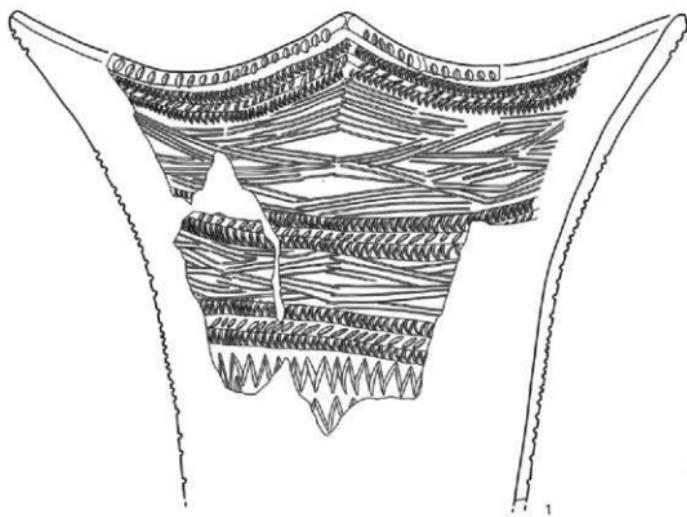
第91図 出土土器(14) ST11(7)



第92図 出土土器(15) ST11(8)

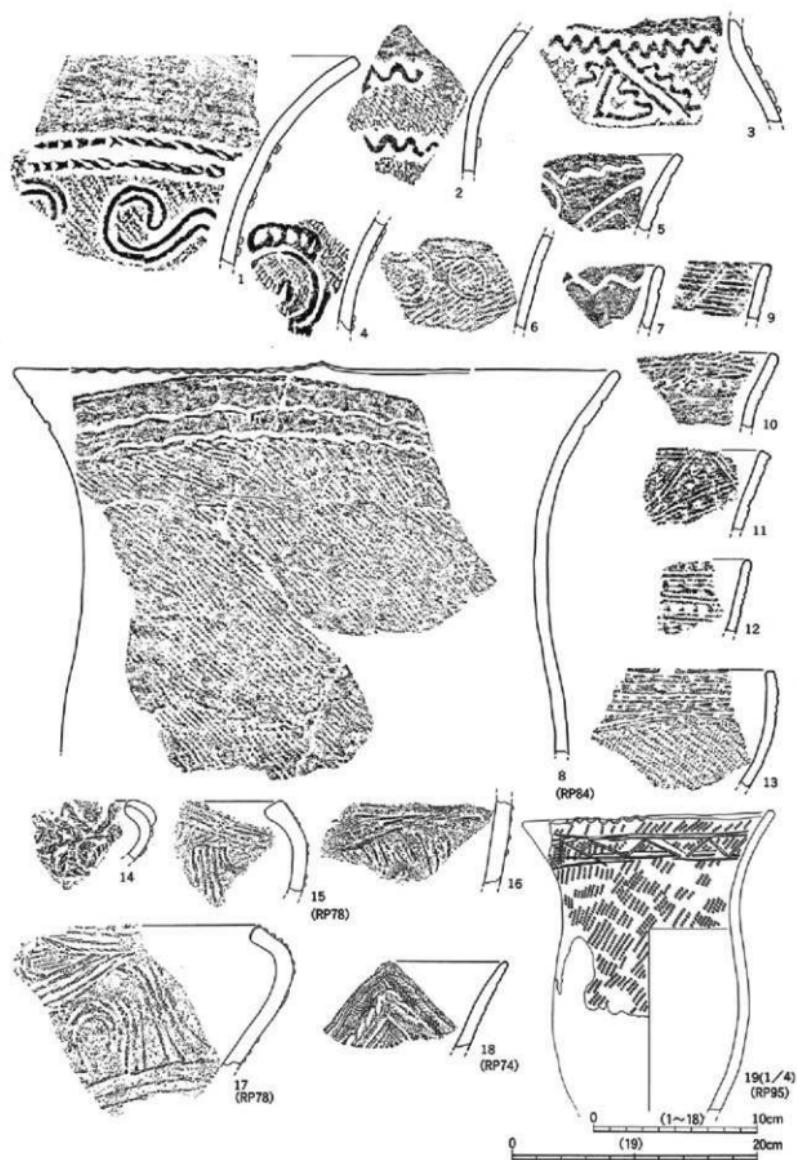


第93図 出土土器(16) ST11(9)

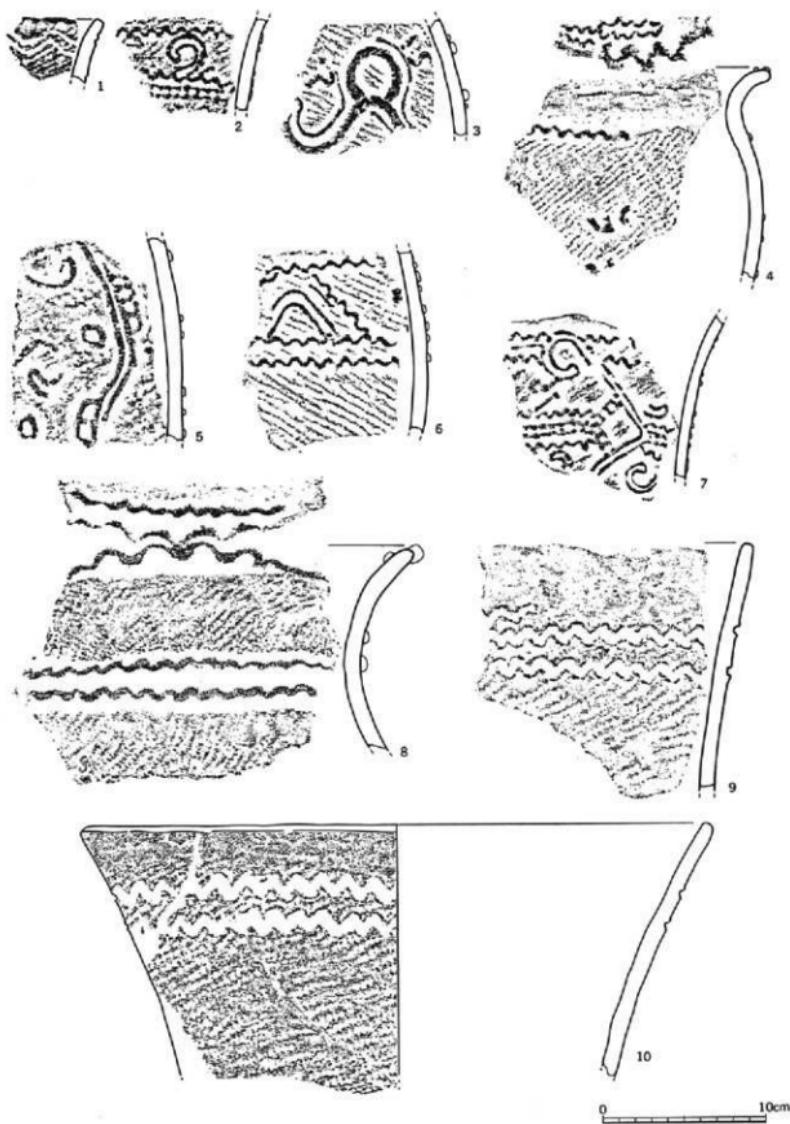


0 10cm

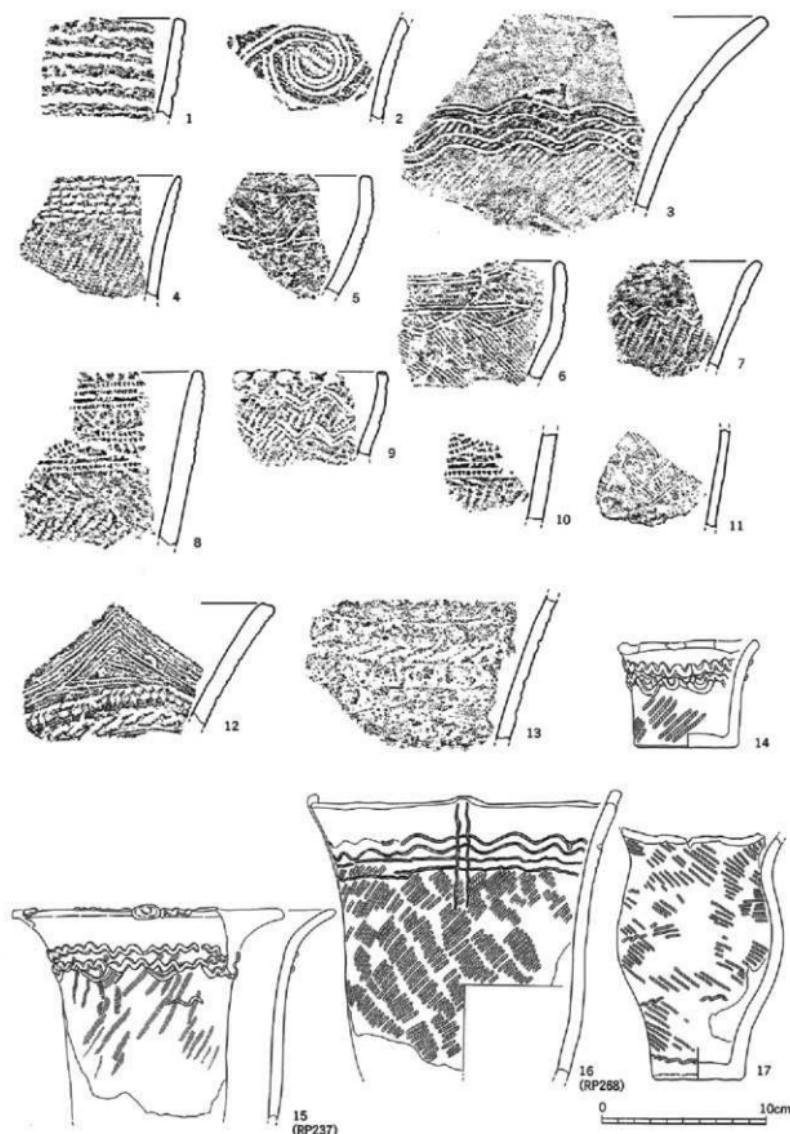
第94図 出土土器(17) ST11(10)



第95図 出土土器(18) ST12



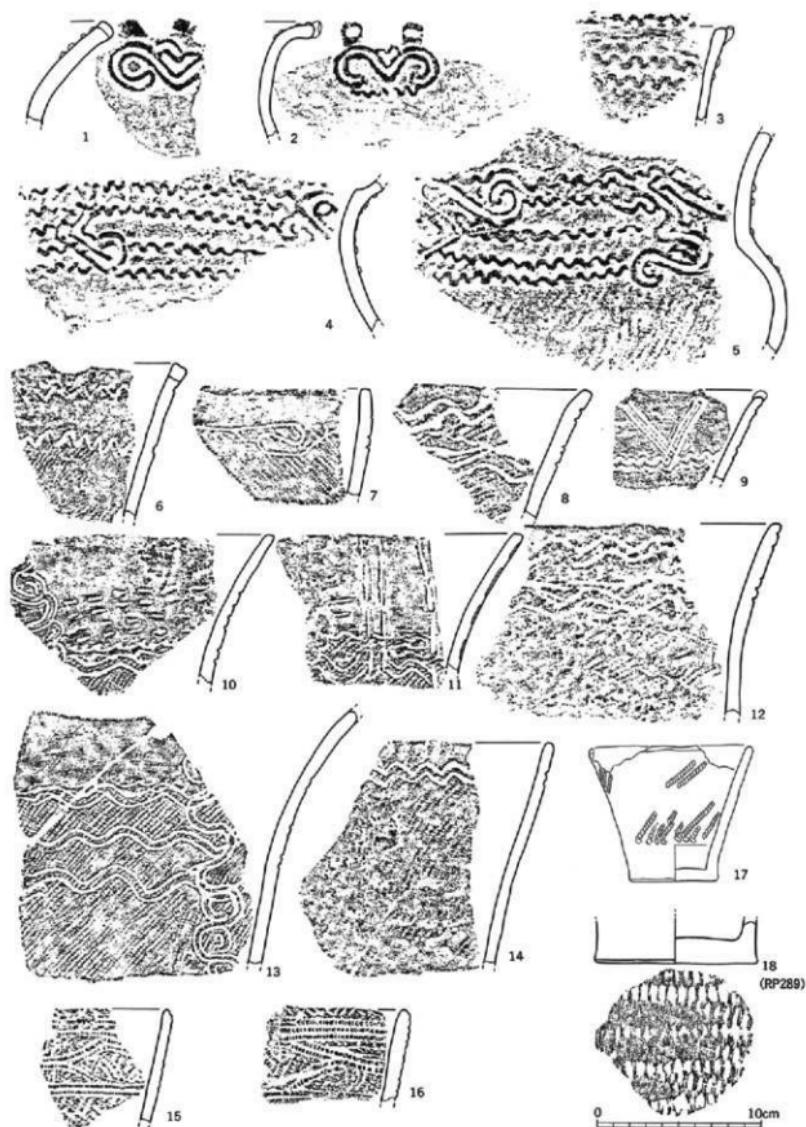
第96図 出土土器(19) ST13(1)



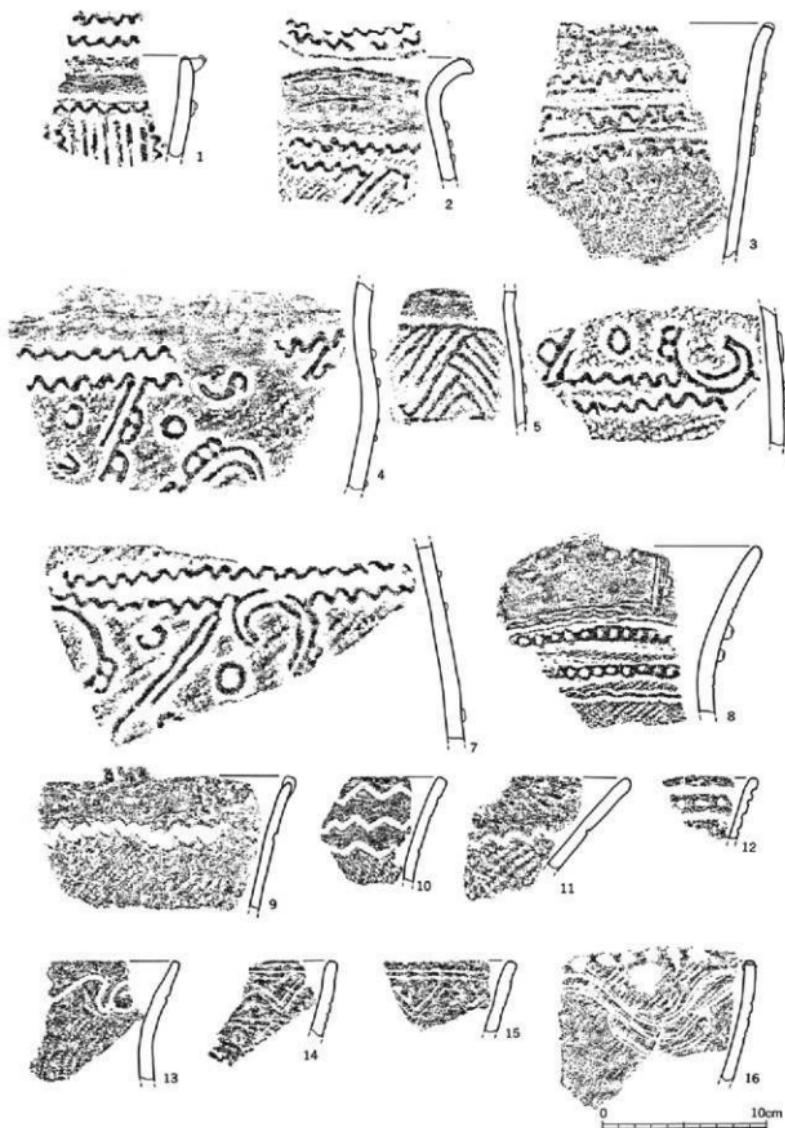
第97図 出土土器(20) ST13(2)



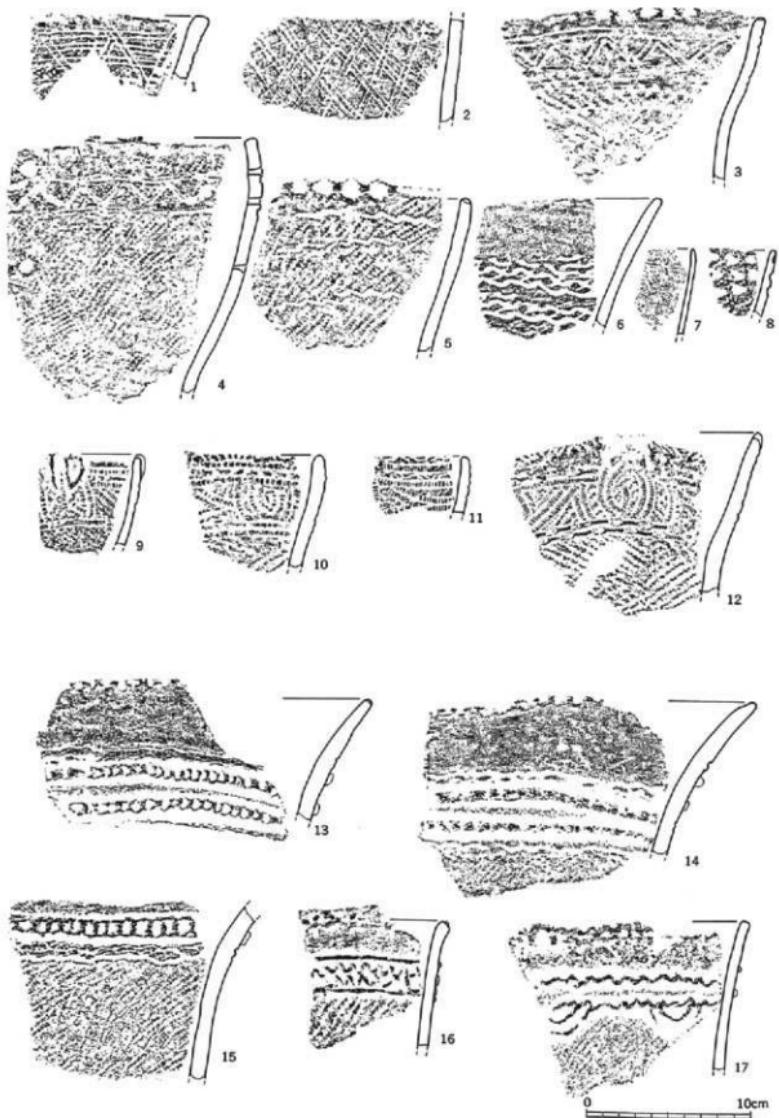
第98図 出土土器(21) ST13(3)



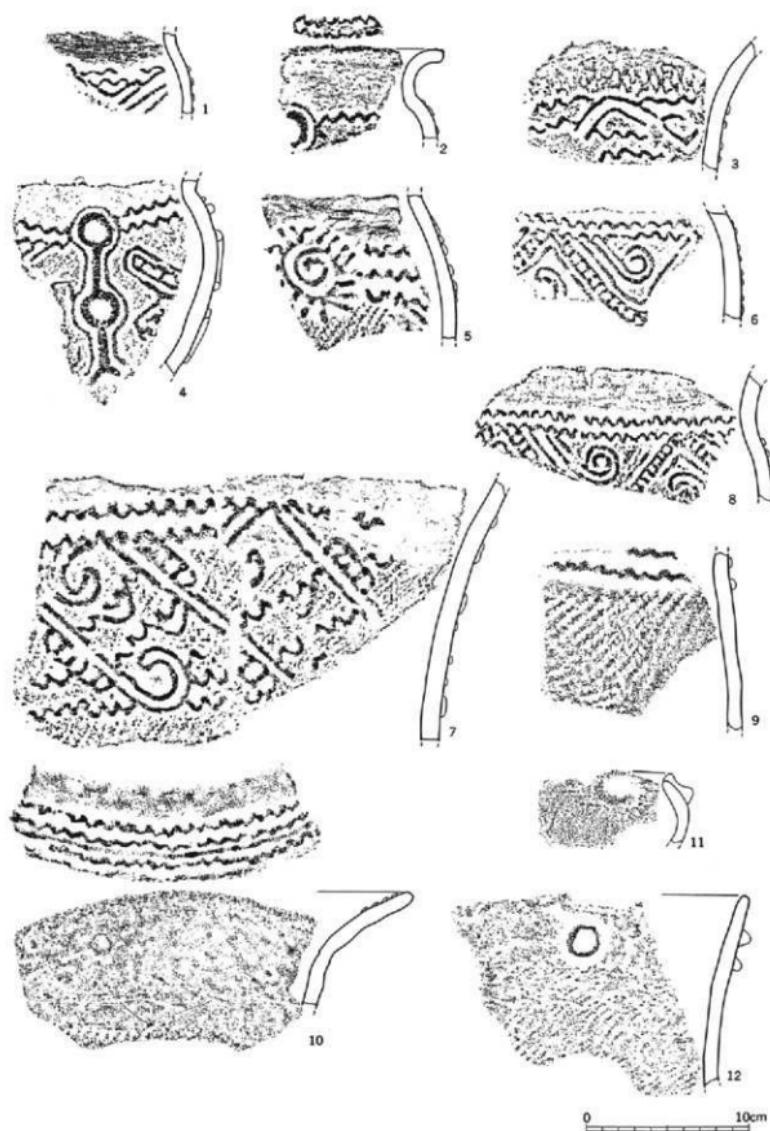
第99図 出土土器(22) ST14



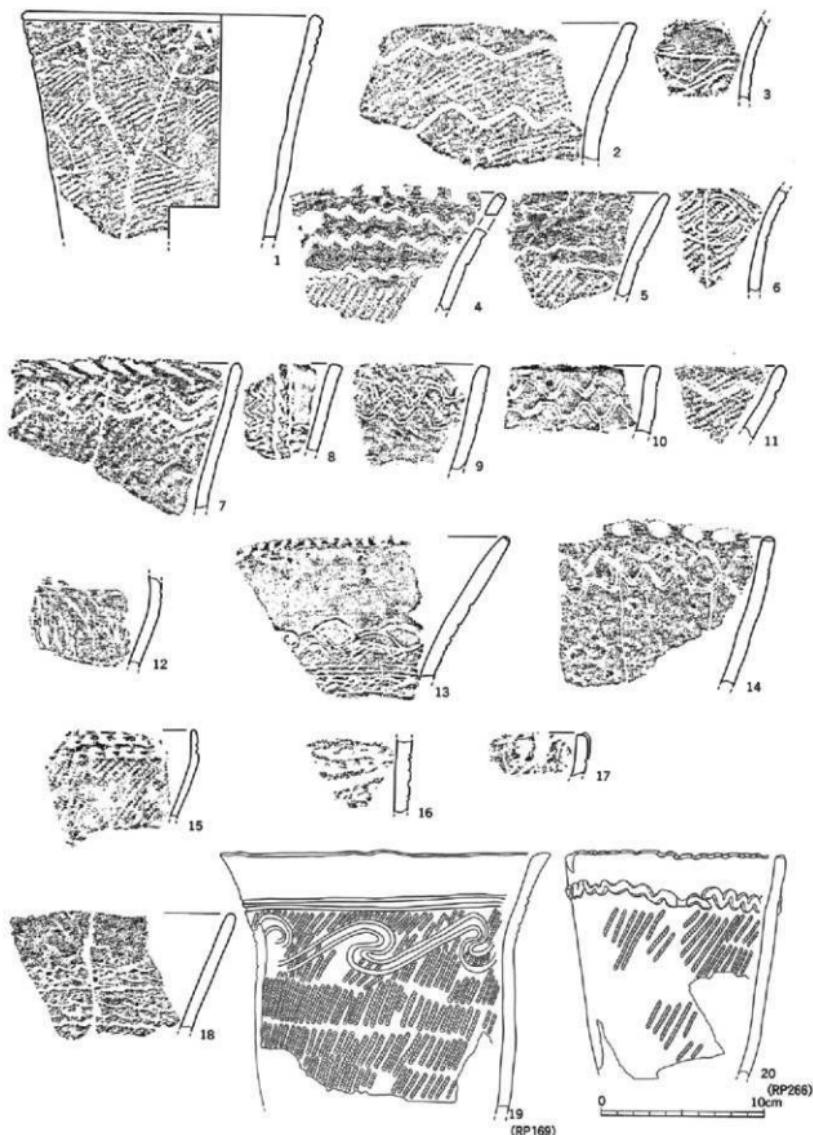
第100図 出土土器(23) ST15(1)



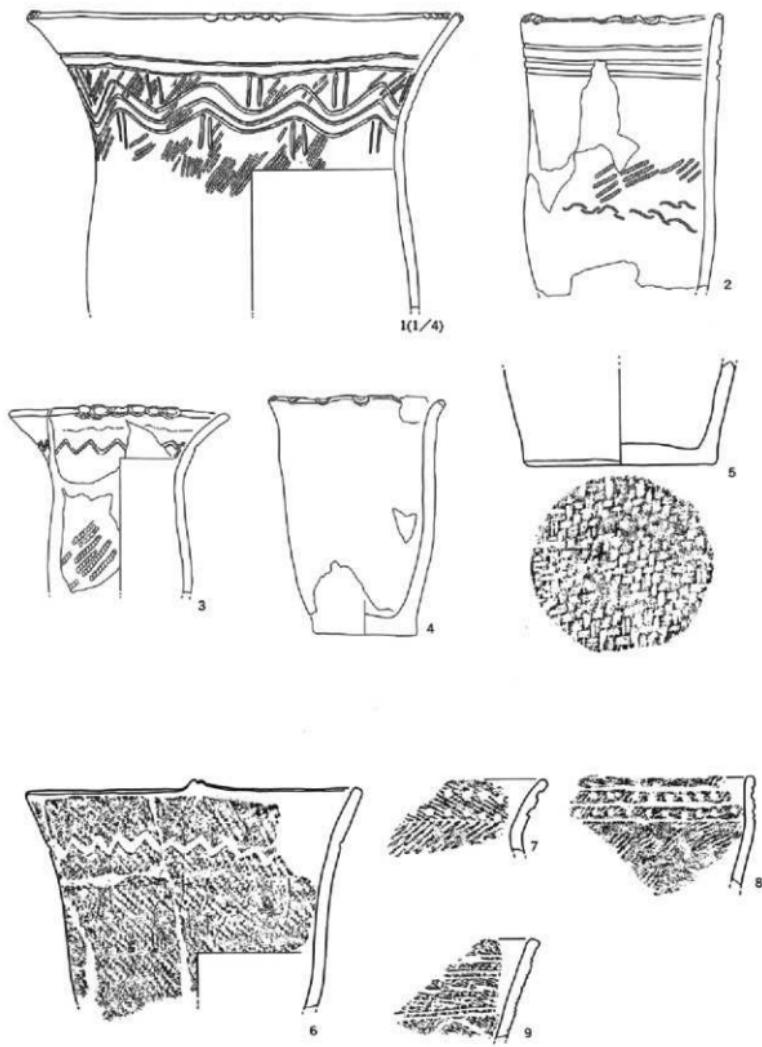
第101図 出土土器(24) ST15(2)(1~12)・ST16(1)(13~17)



第102図 出土土器(25) ST16(2)

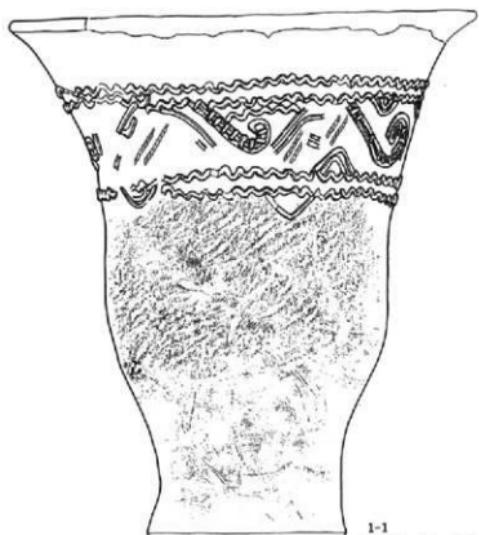


第103図 出土土器(26) ST16(3)(1~18・20)・ST15(19)

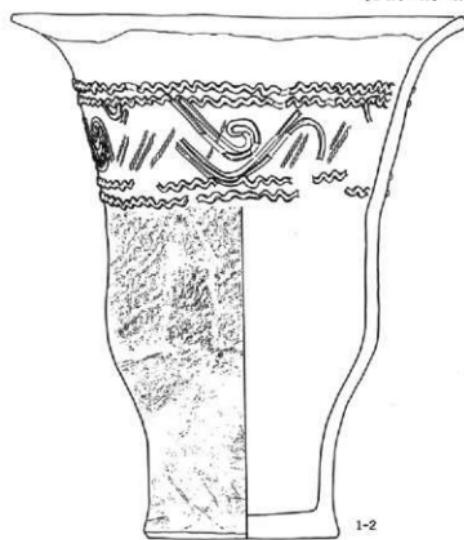


0 (2~9) 10cm
0 (1) 20cm

第104図 出土土器(27) ST16(4)(1~5)・ST17(6~9)

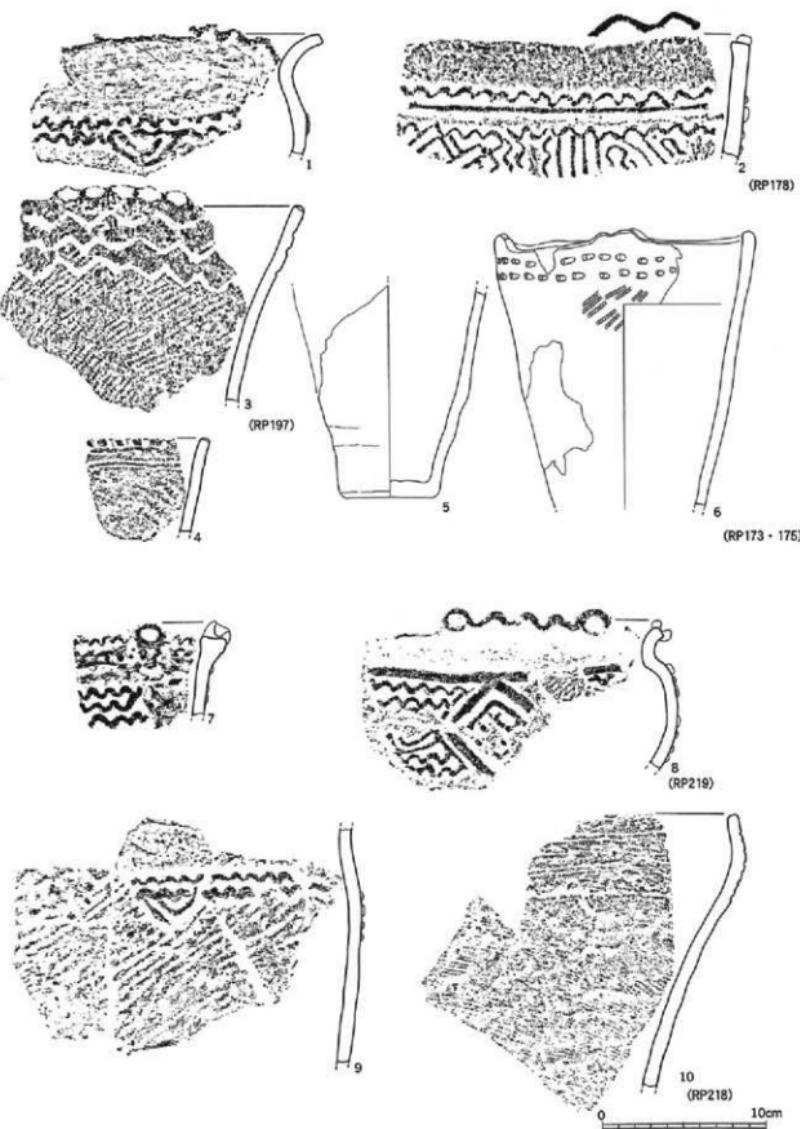


1-1
(RP173・178・179)

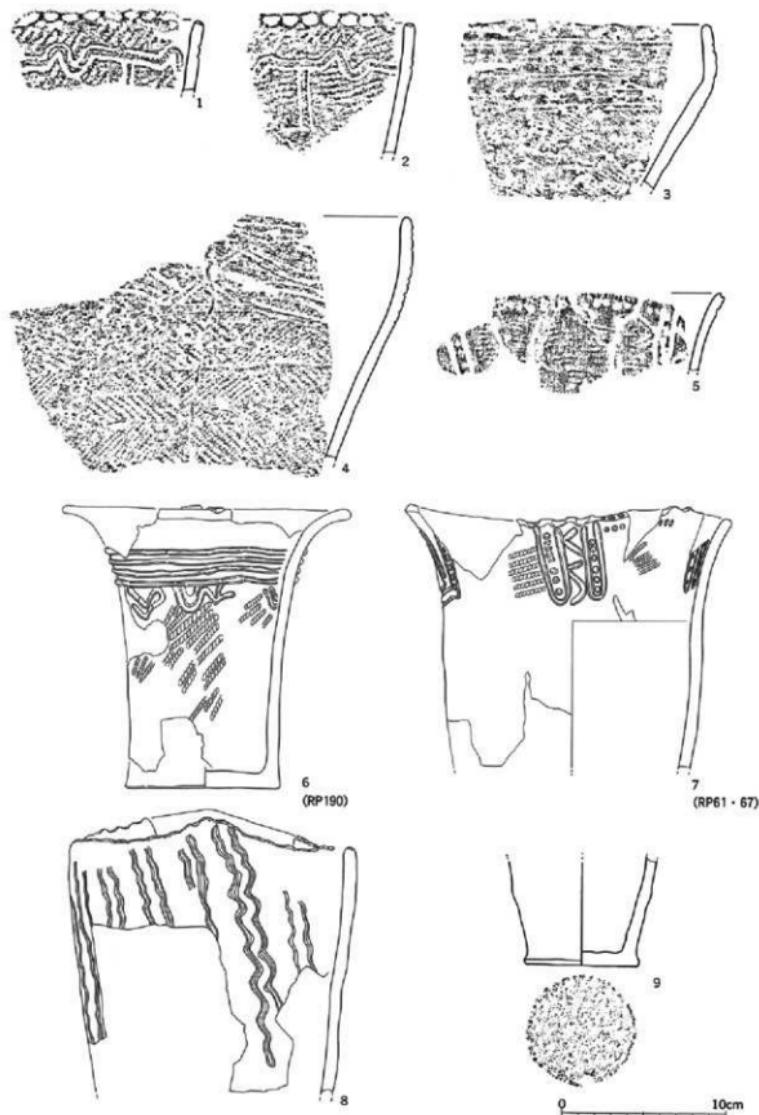


1-2
0 10cm

第105図 出土土器(28) ST18(1)



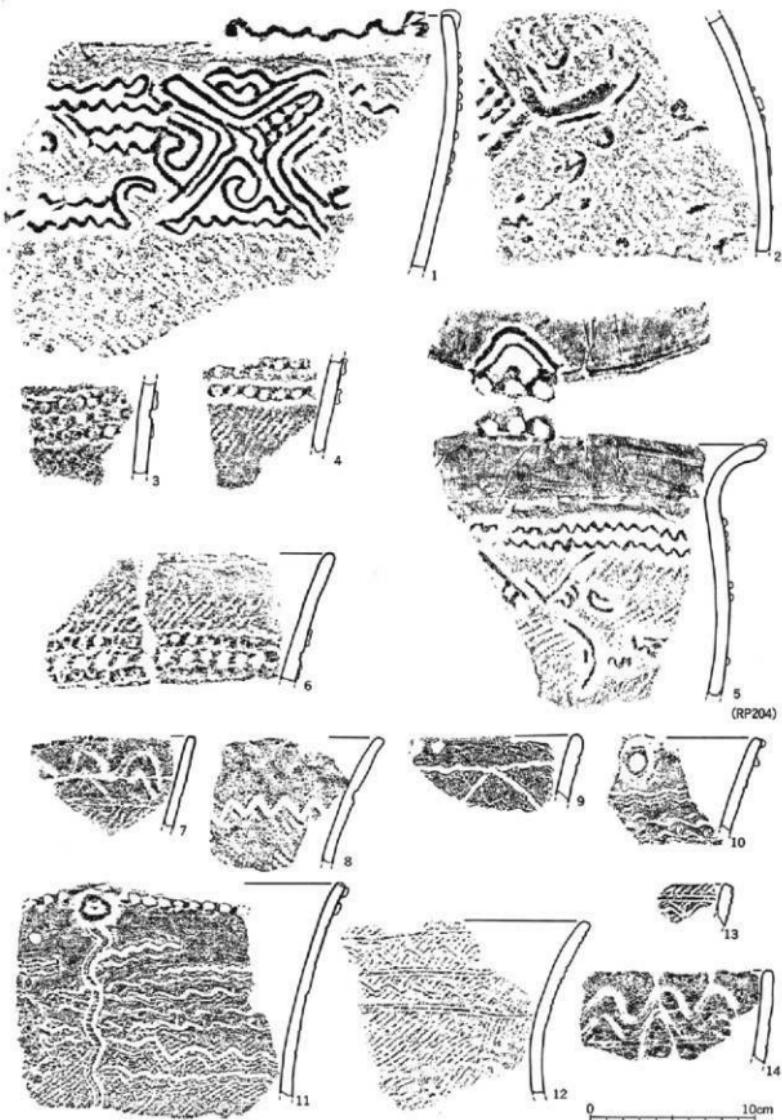
第106図 出土土器(29) ST18(2)(1~6)・ST19(1)(7~10)



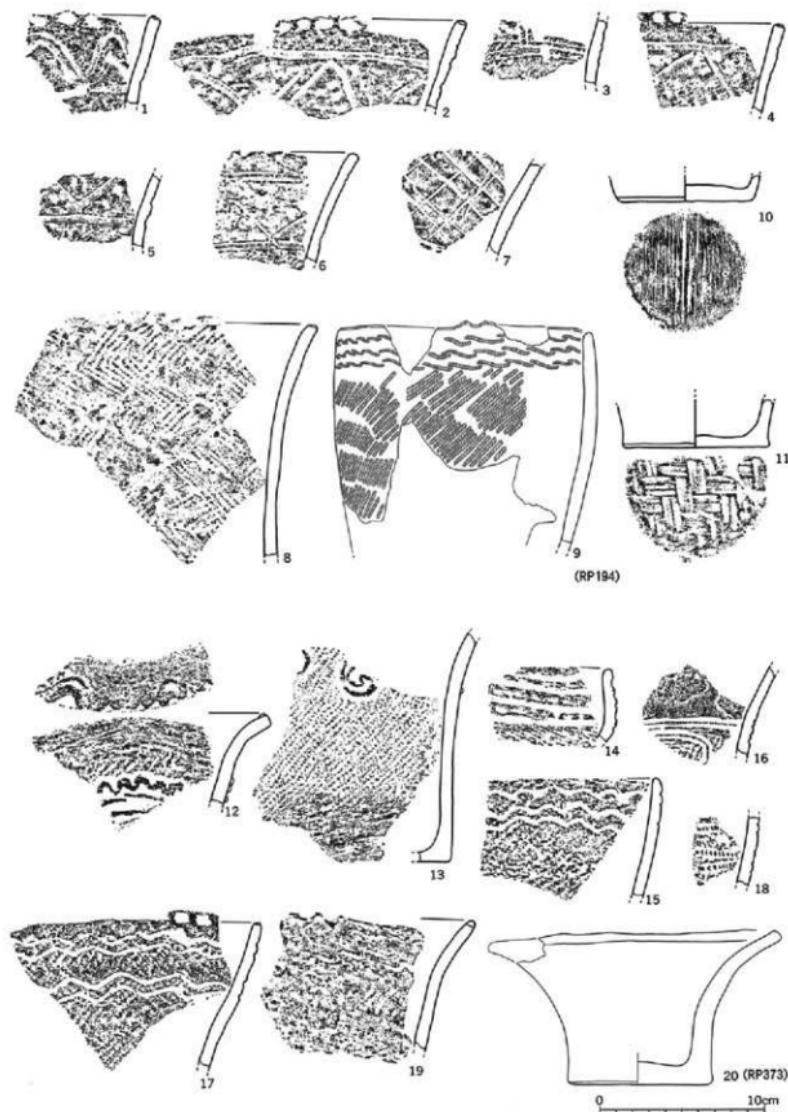
第107図 出土土器(30) ST19(2)



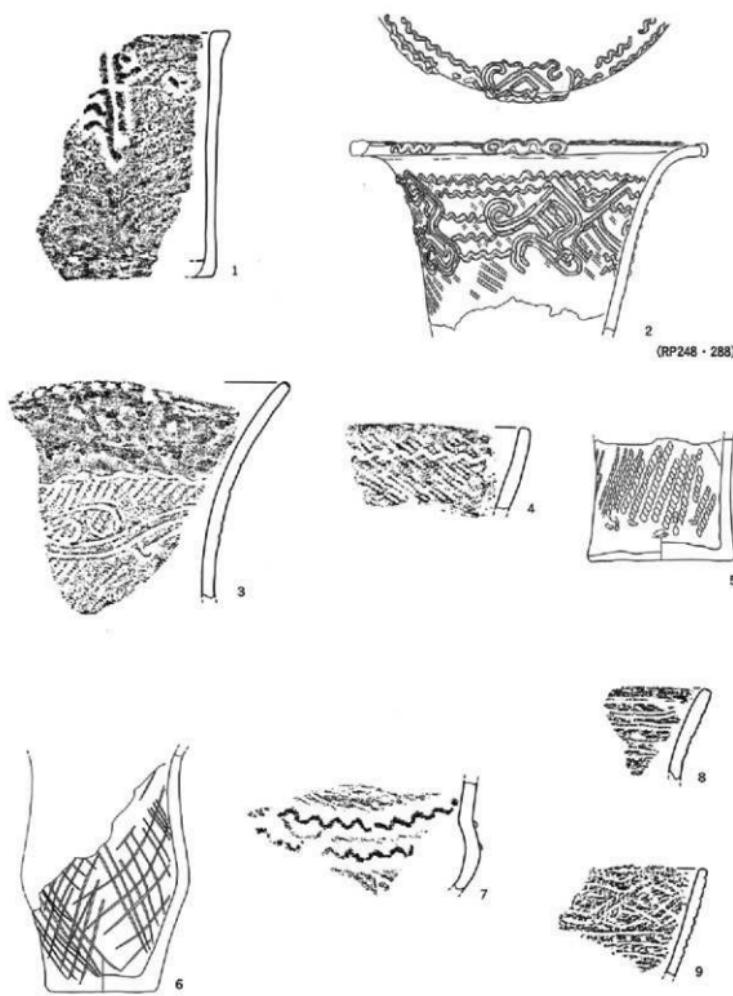
第108図 出土土器(31) ST20(1)



第109図 出土土器(32) ST20(2)

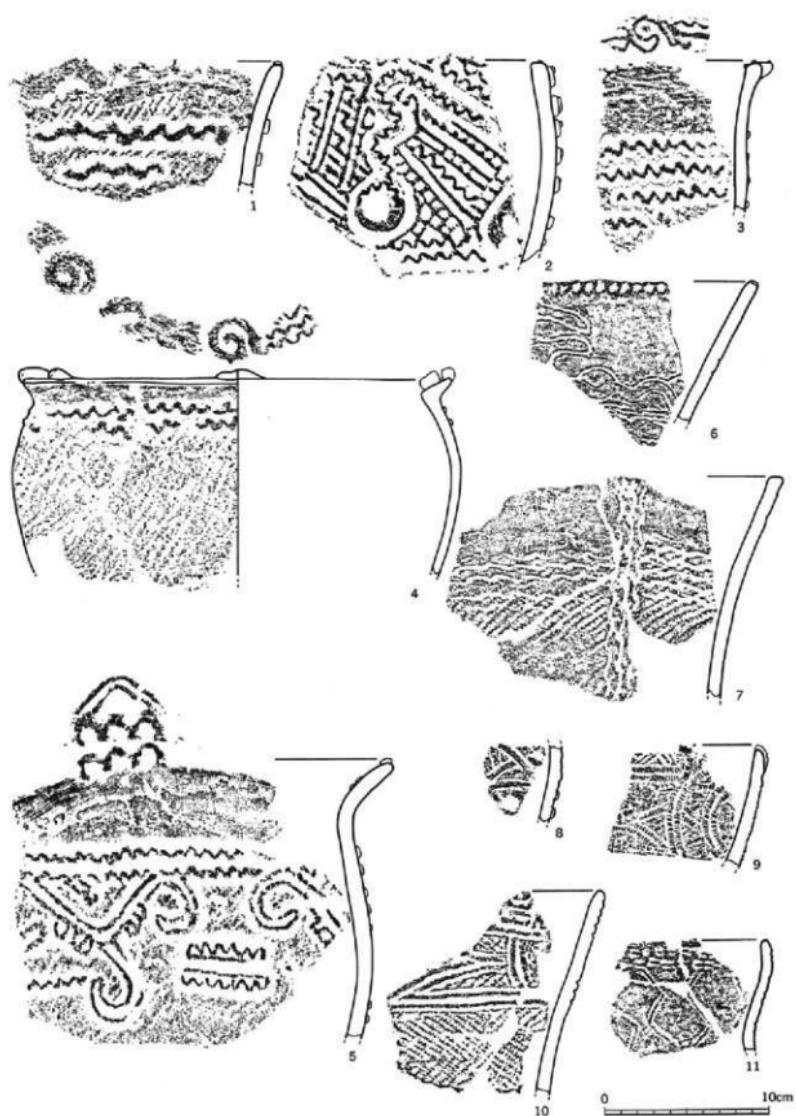


第110図 出土土器(33) ST20(3)(1~11)・ST26(12~20)

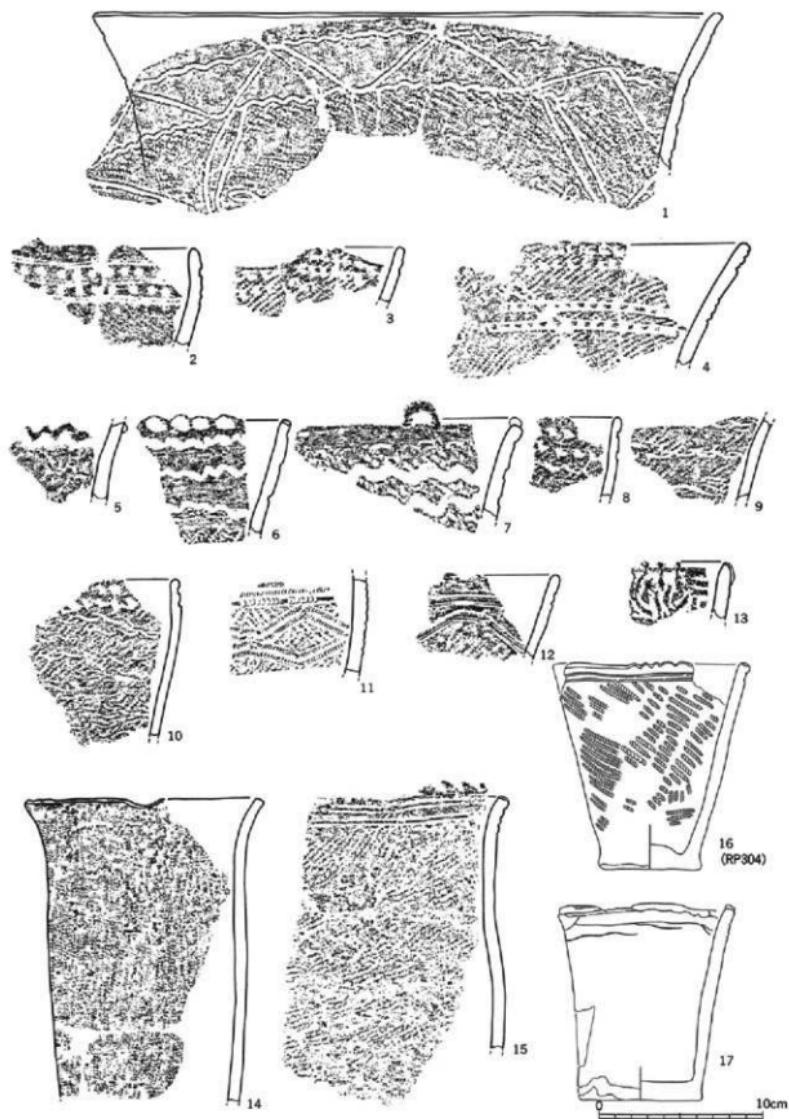


0 10cm

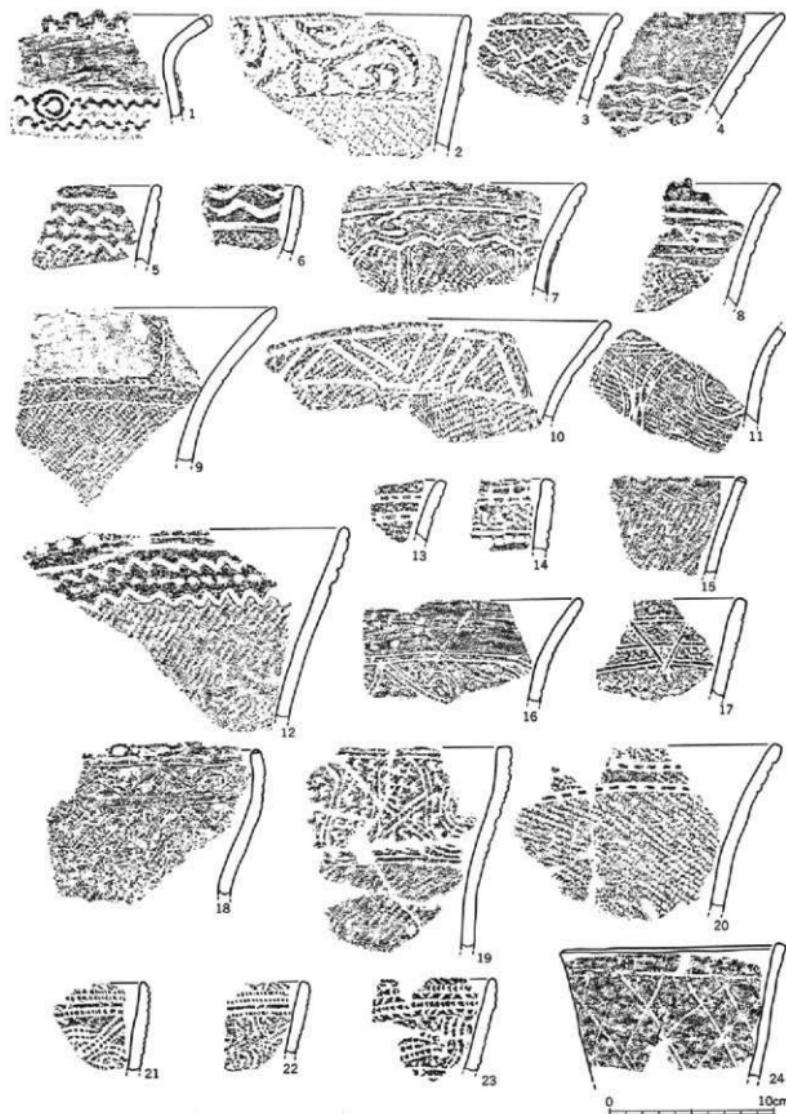
第111図 出土土器(34) ST21(1)・ST22(2)・ST23(3~6)・ST24(7~9)



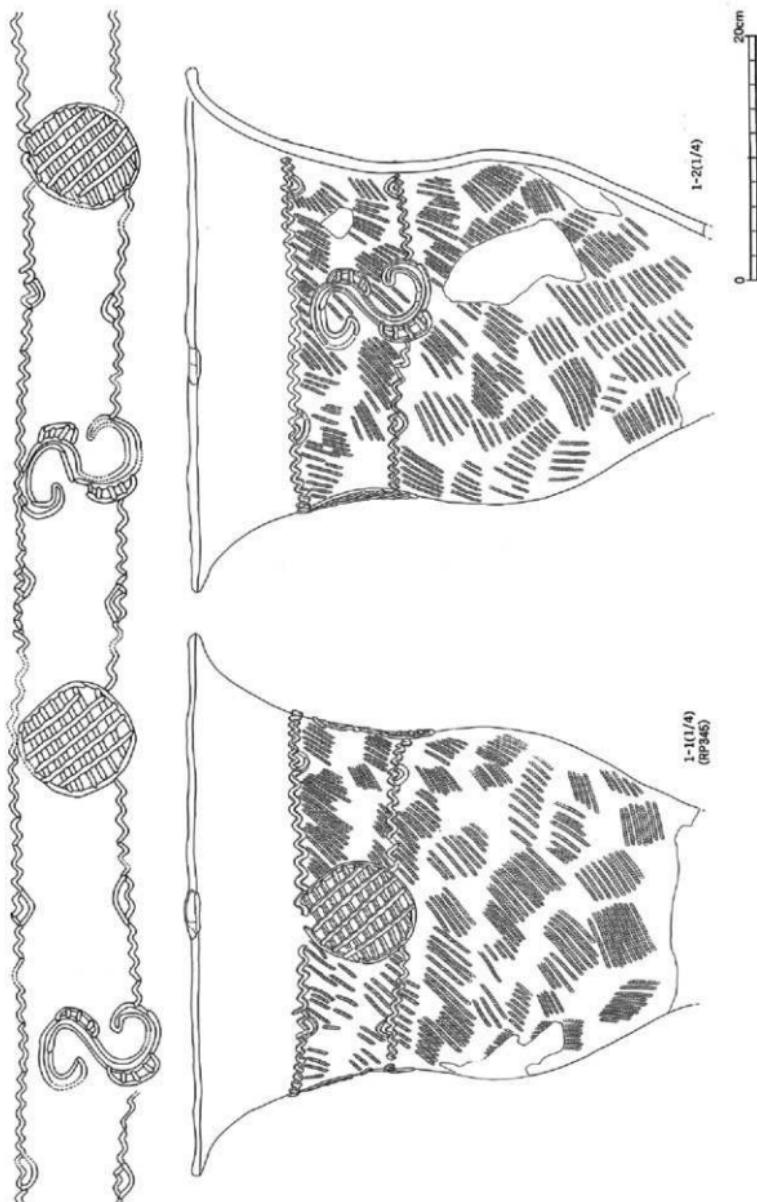
第112図 出土土器(35) ST25(1)



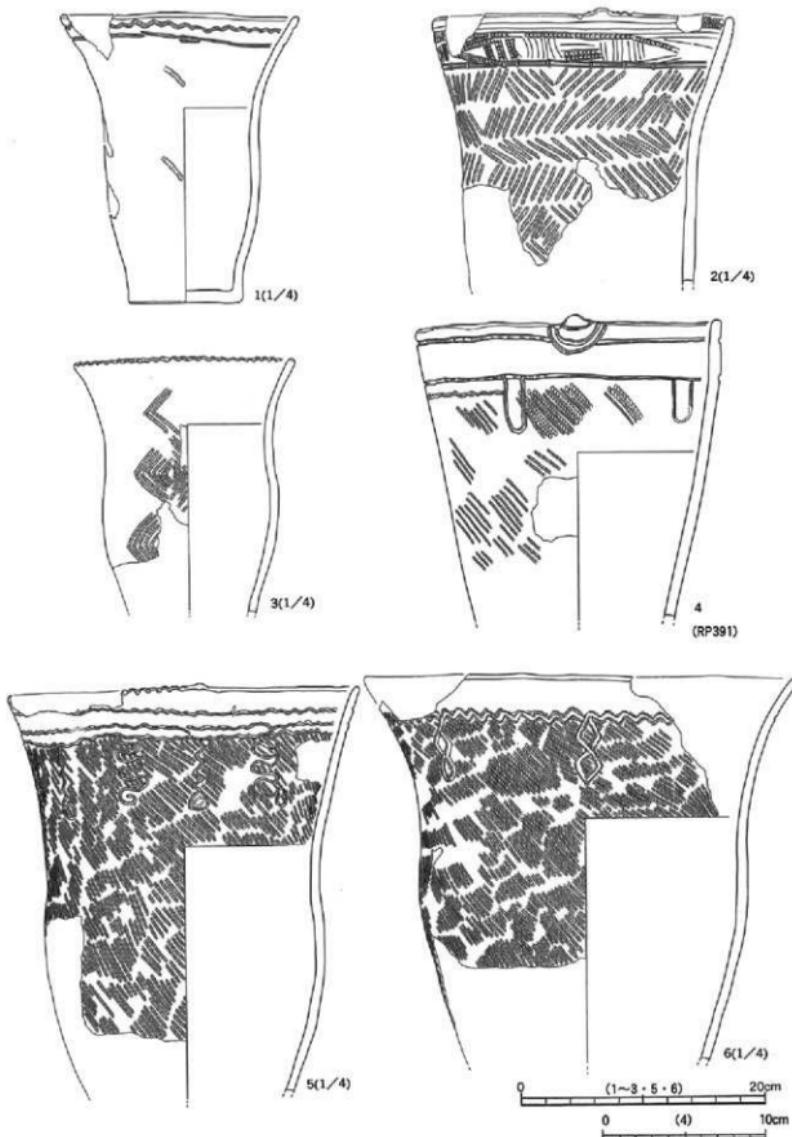
第113図 出土土器(36) ST25(2)(1~4)・ST27(5~10)・ST28(11・13)・ST29(12・14~17)



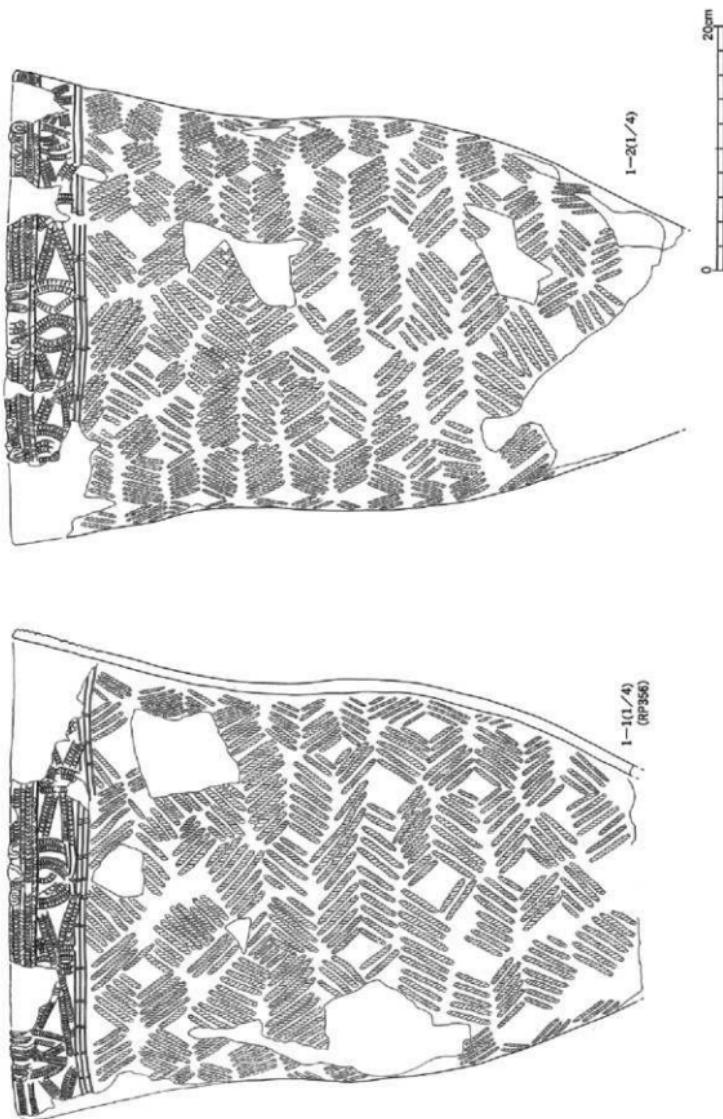
第114図 出土土器(37) ST30(1)



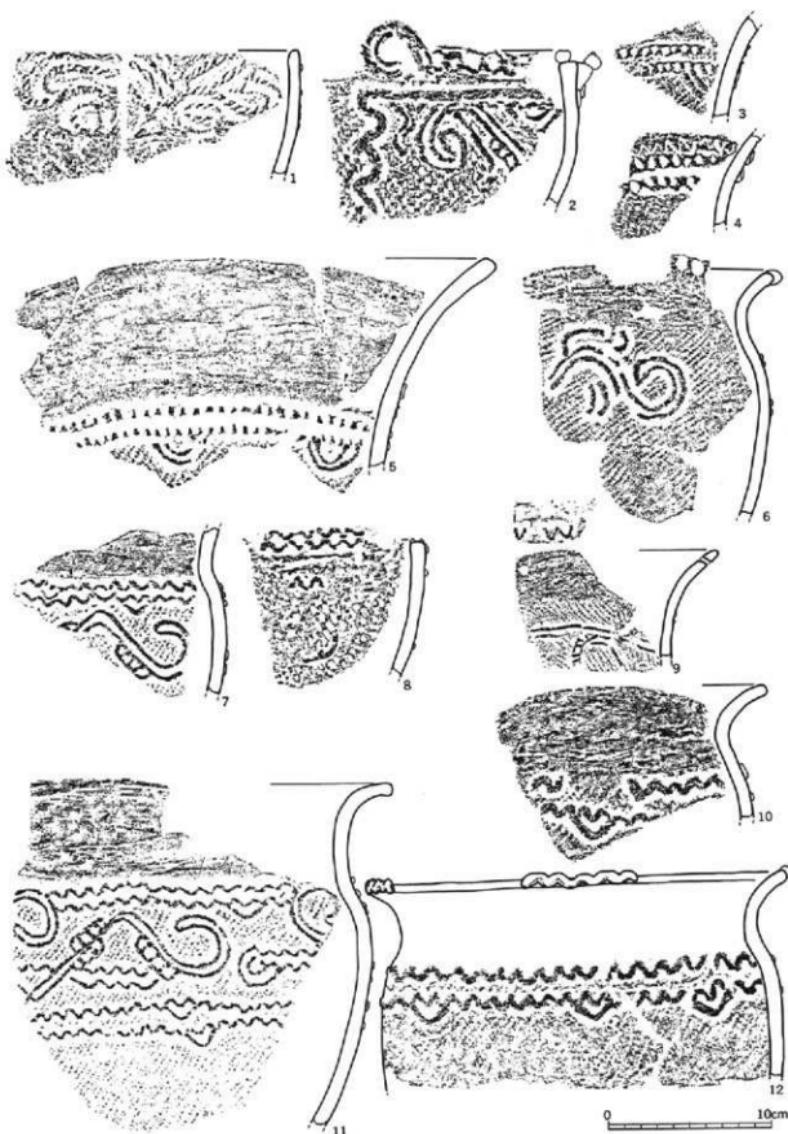
第115図 出土土器(38) ST30(2)



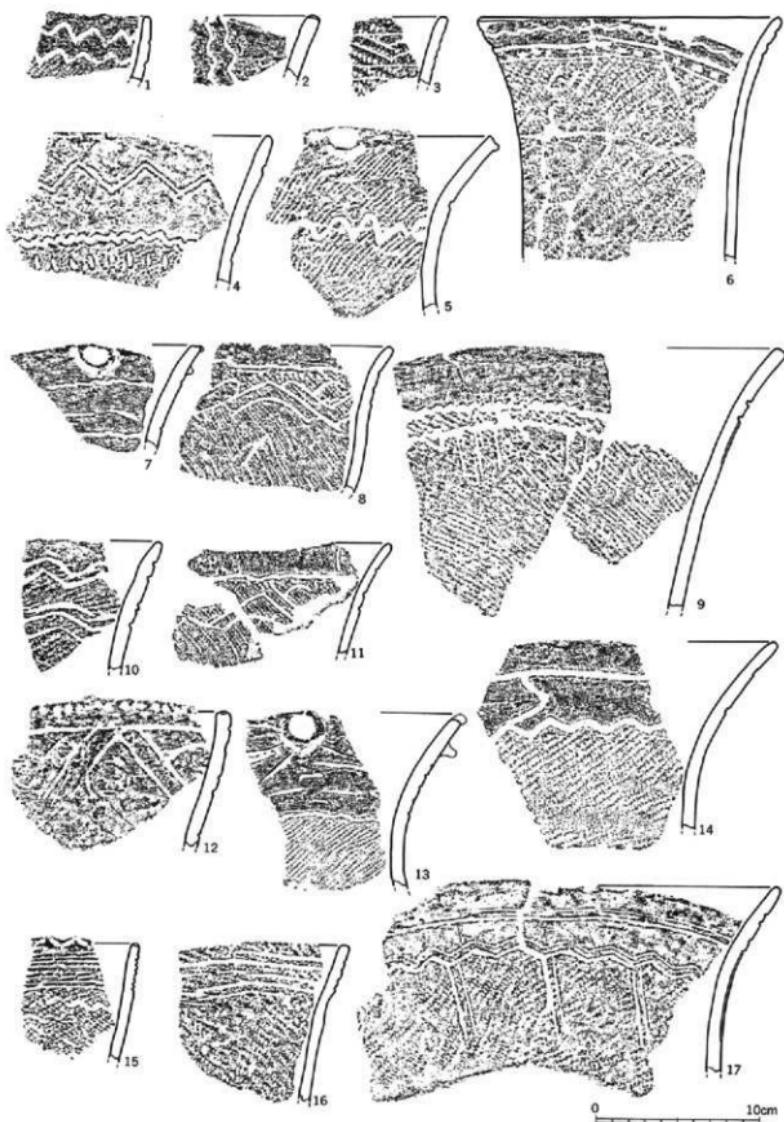
第116図 出土土器(39) ST30(3)



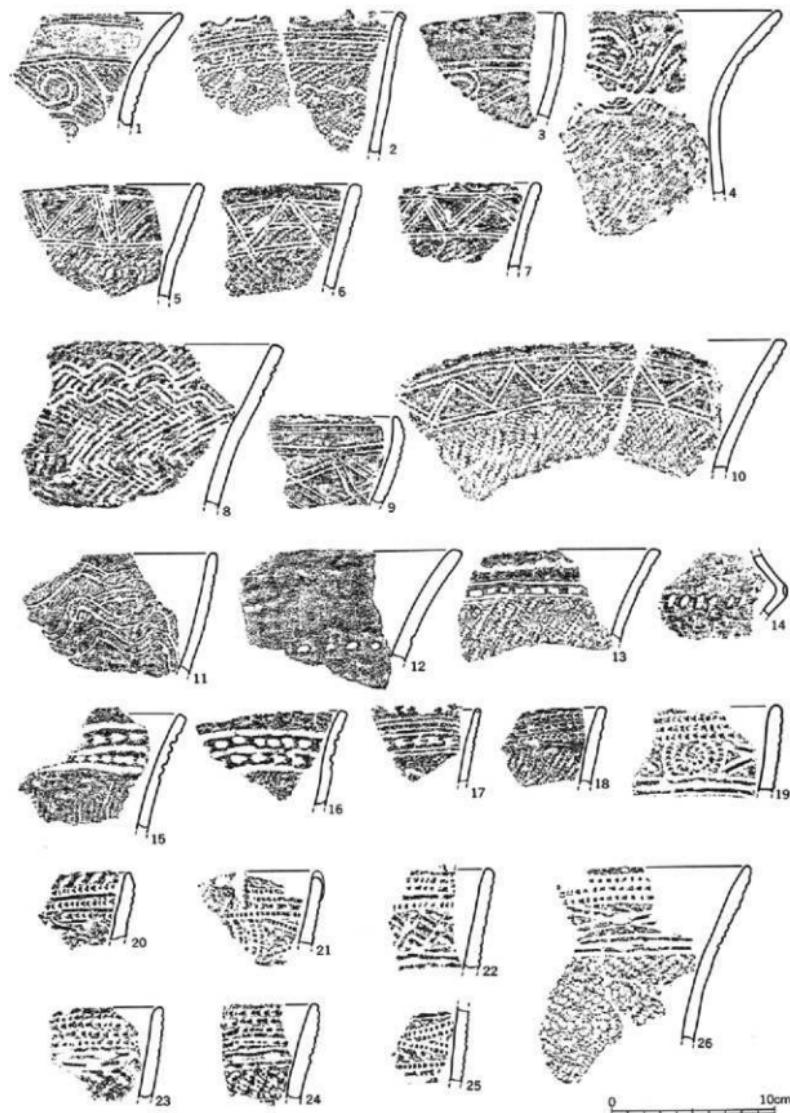
第117図 出土土器(40) ST30(4)



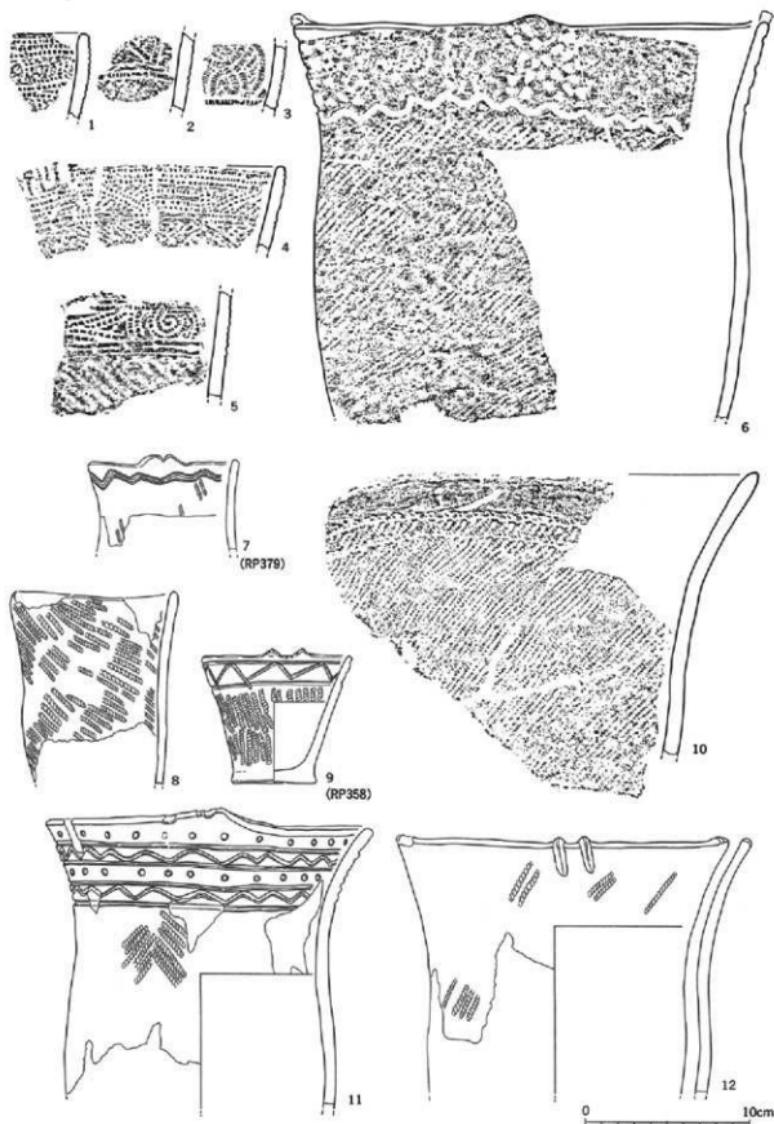
第118図 出土土器(41) ST31(1)



第119図 出土土器(42) ST31(2)



第120図 出土土器(43) ST31(3)

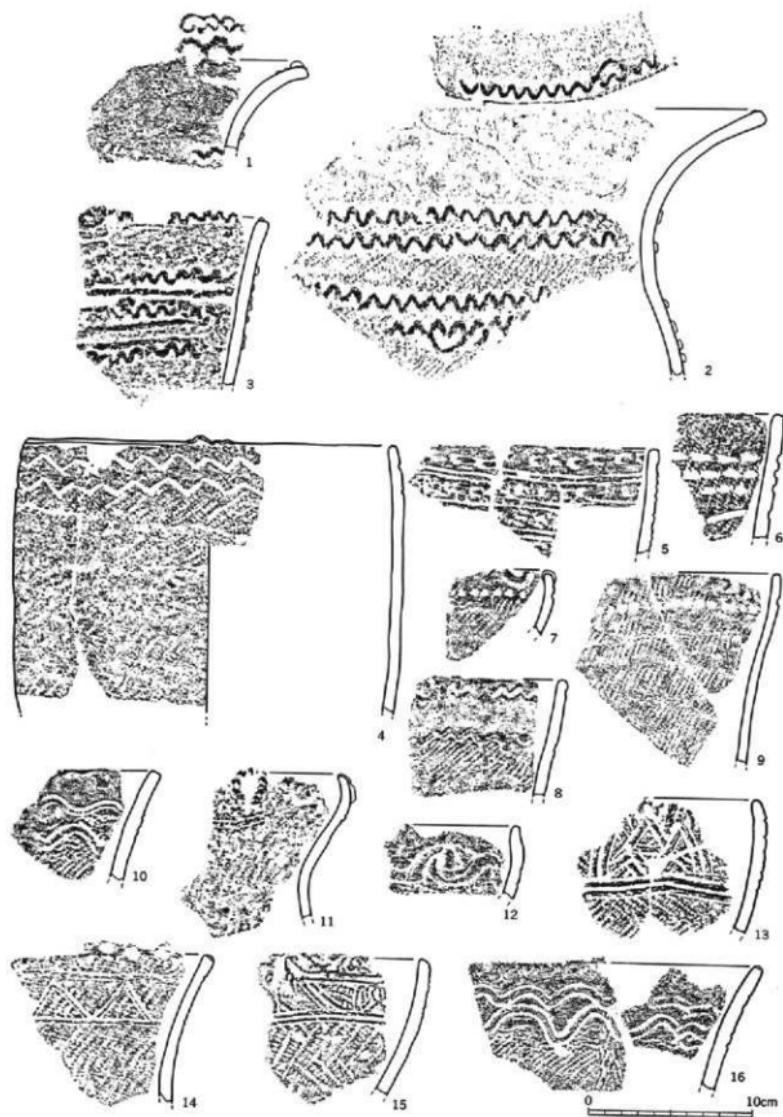


第121図 出土土器(44) ST31(4)



0 20cm

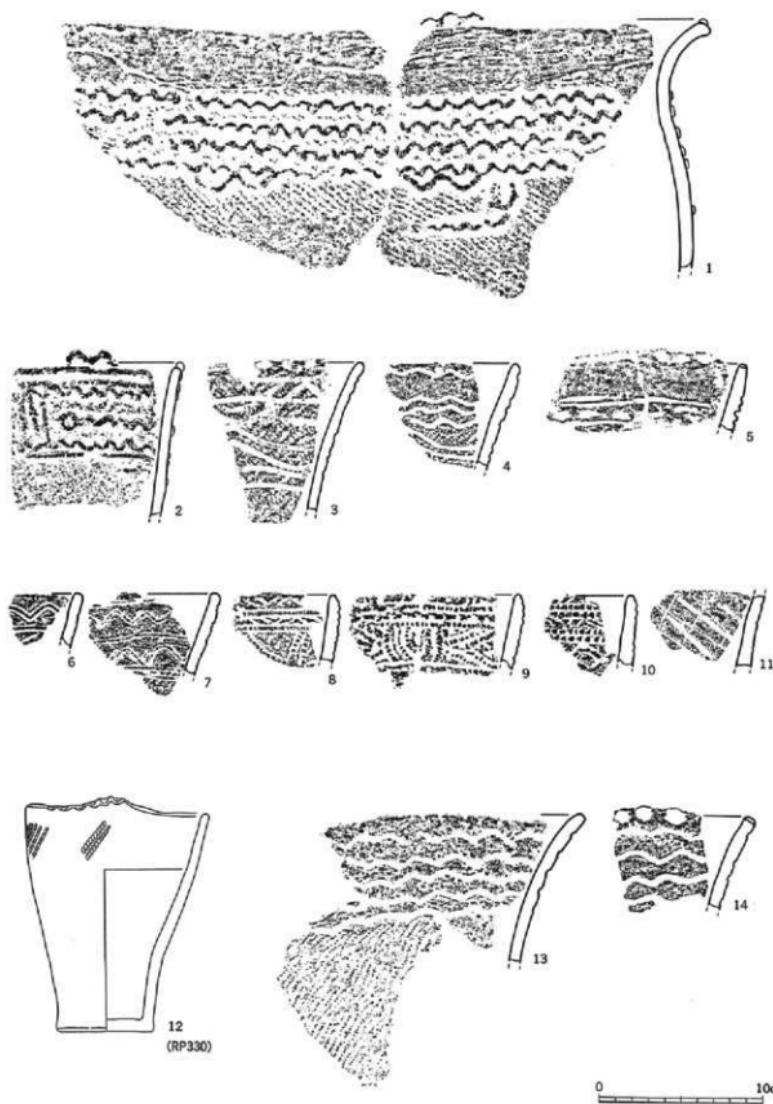
第122図 出土土器(45) ST31(5)



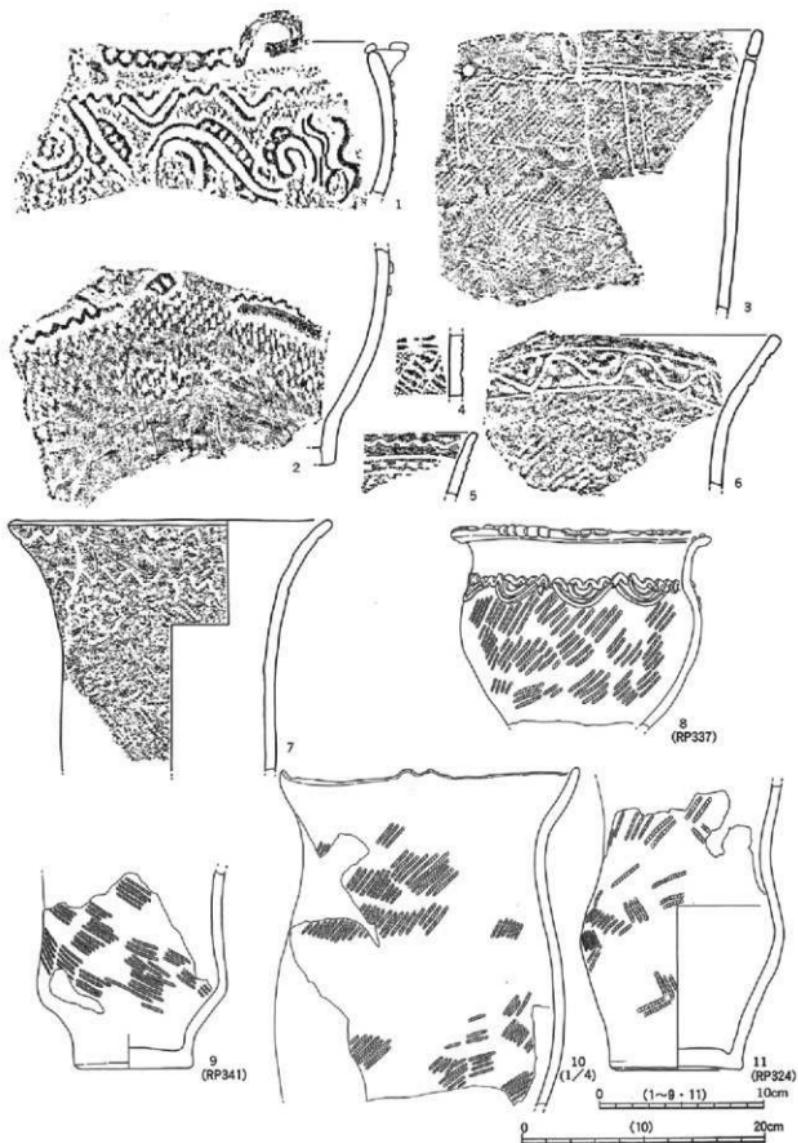
第123図 出土土器(46) ST32(1)



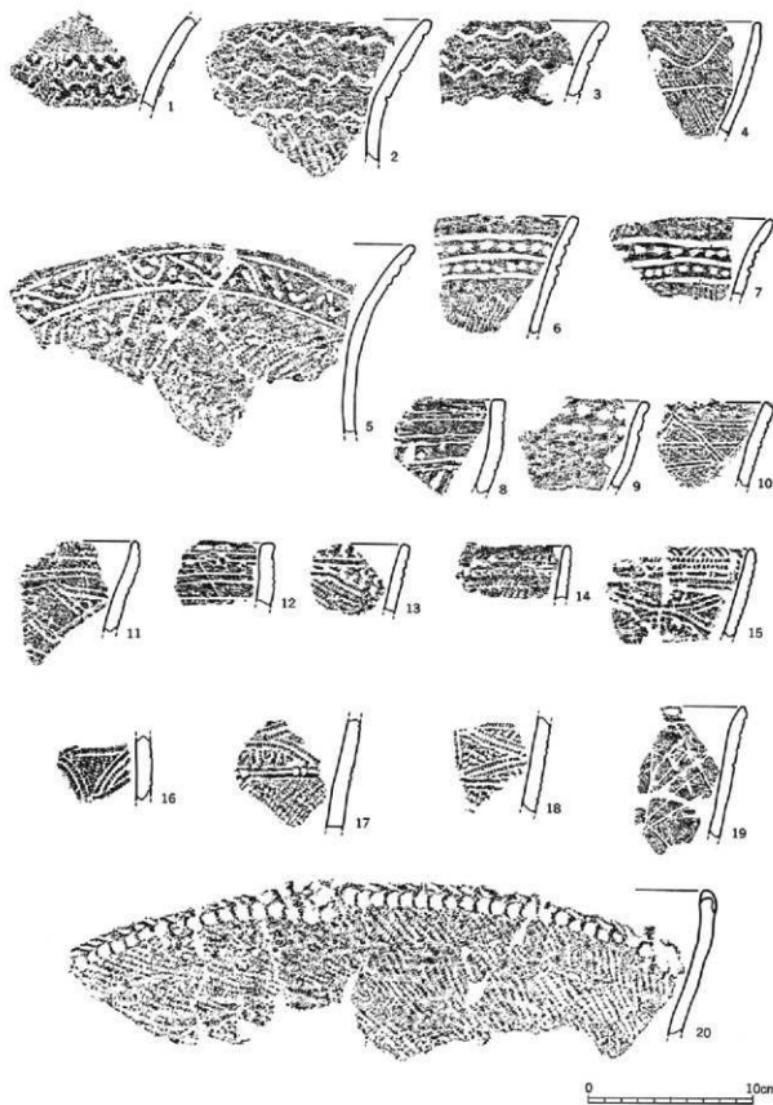
第124図 出土土器(47) ST32(2)(1~4)・ST33・38(5~9)



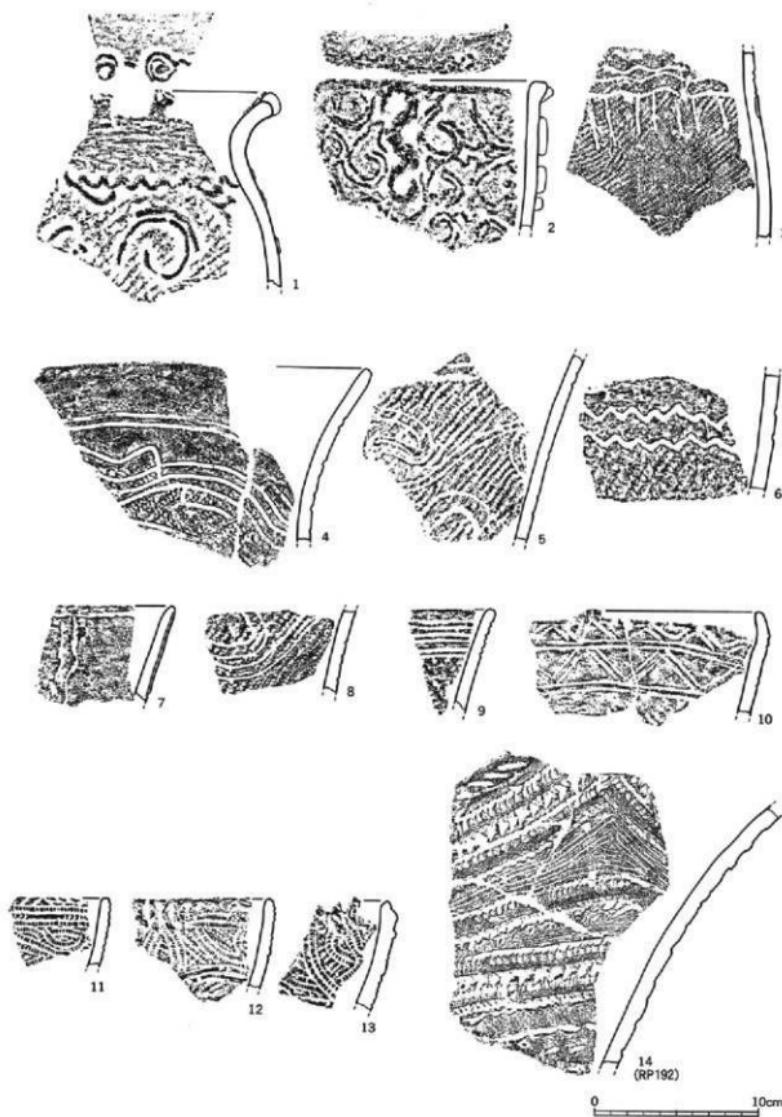
第125図 出土土器(48) ST34(1~12)・ST35(13・14)



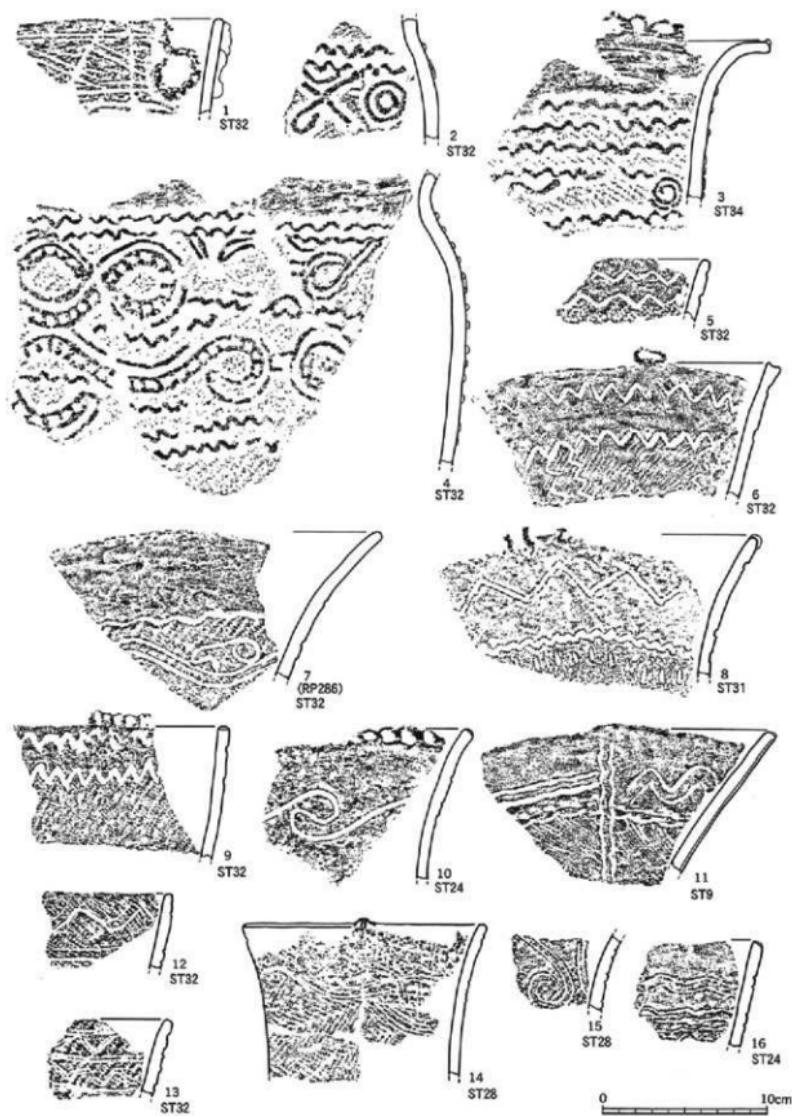
第126図 出土土器(49) ST37



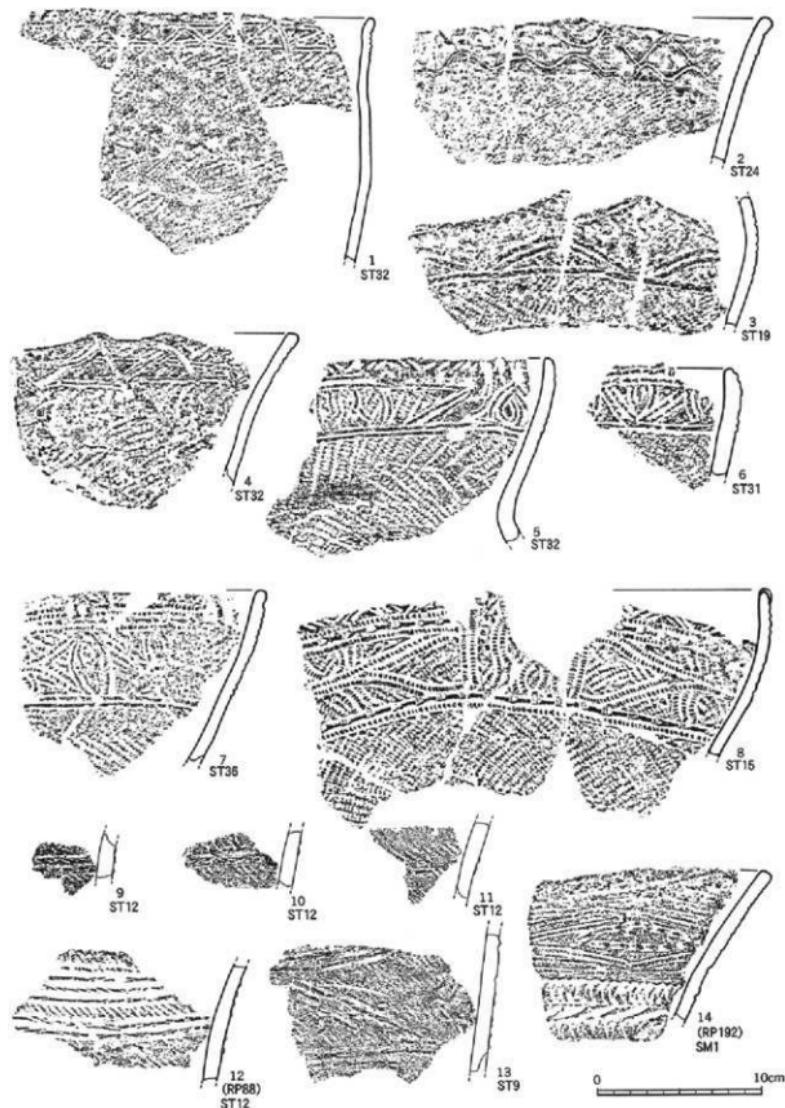
第127図 出土土器(50) ST39



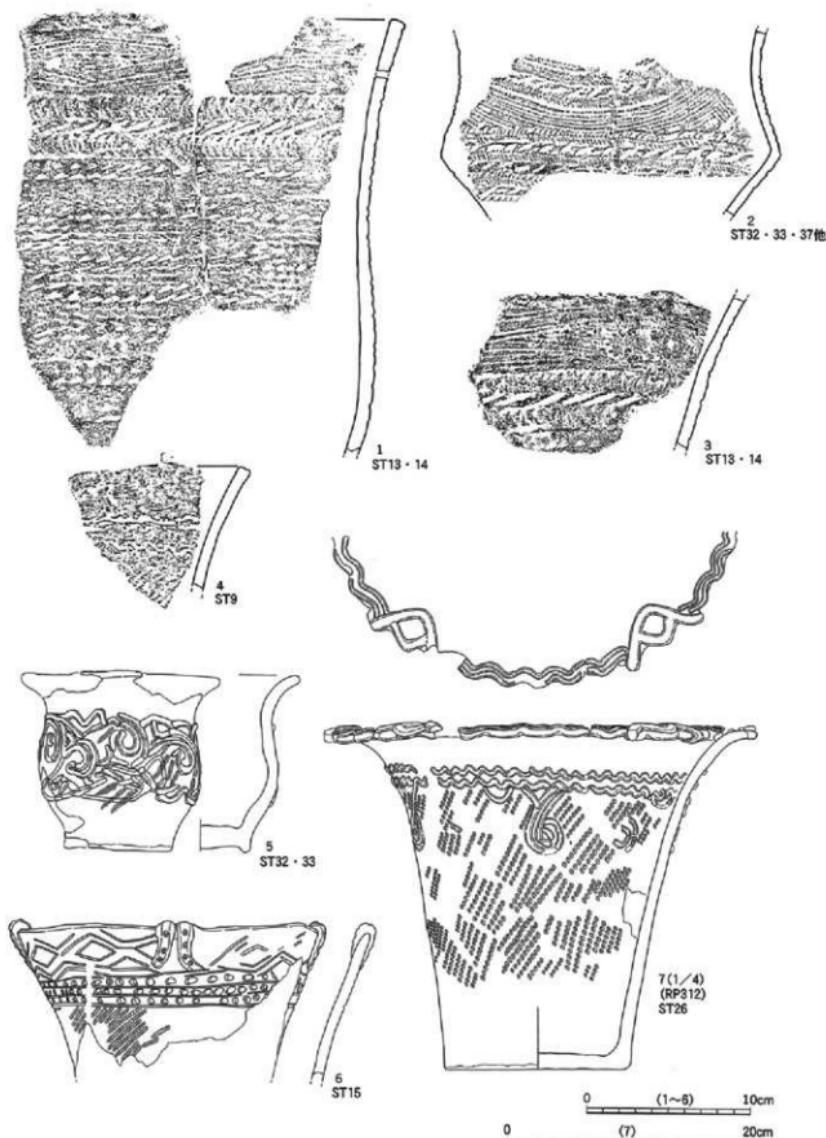
第128図 出土土器(51) SM1



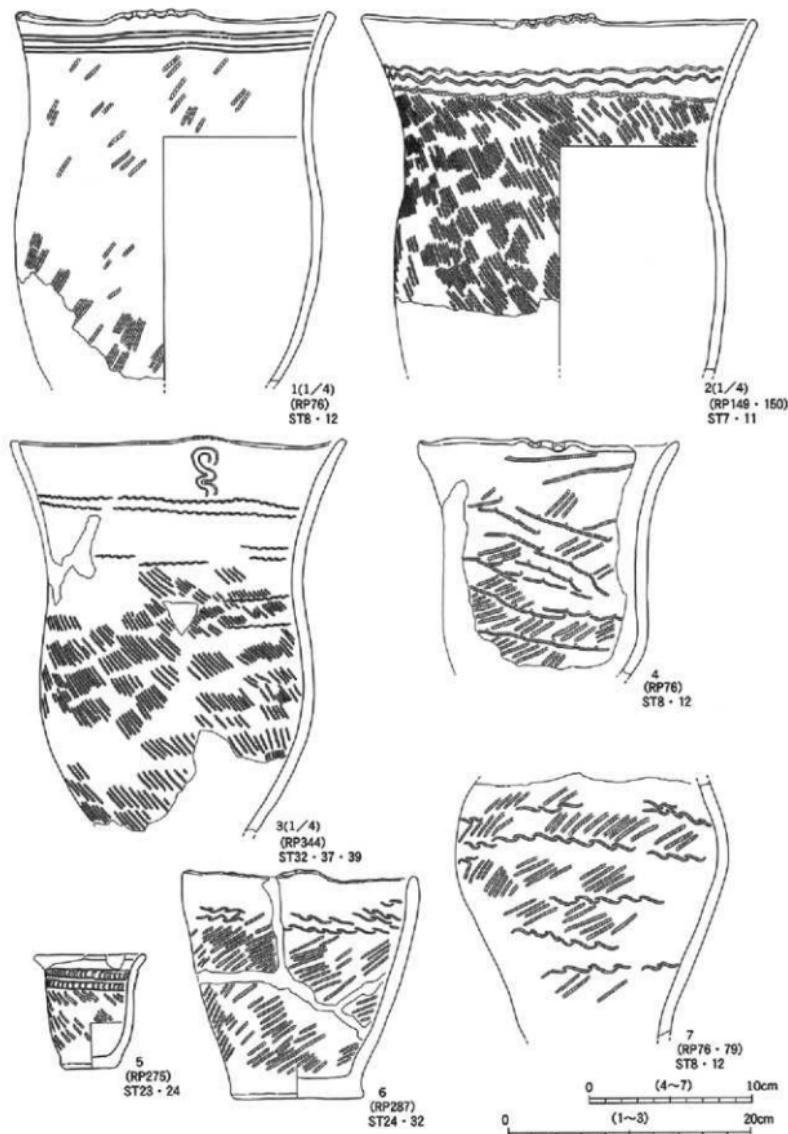
第129図 出土土器(52) 遺構に關係する土器(1)



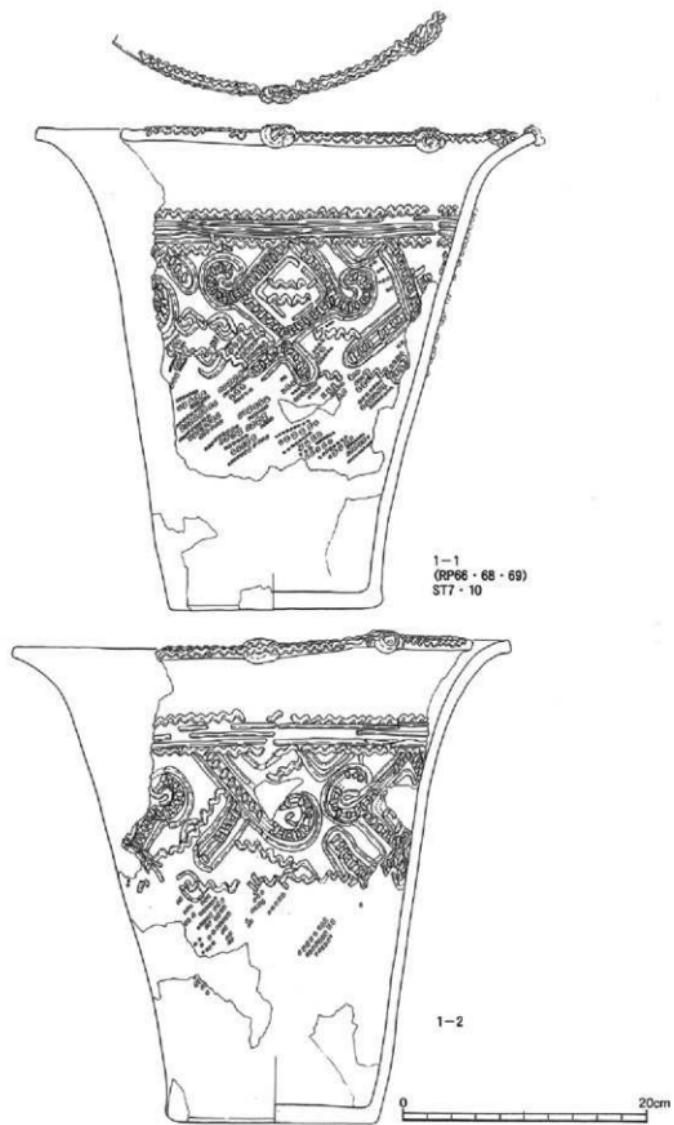
第130図 出土土器(53) 遺構に関係する土器(2)



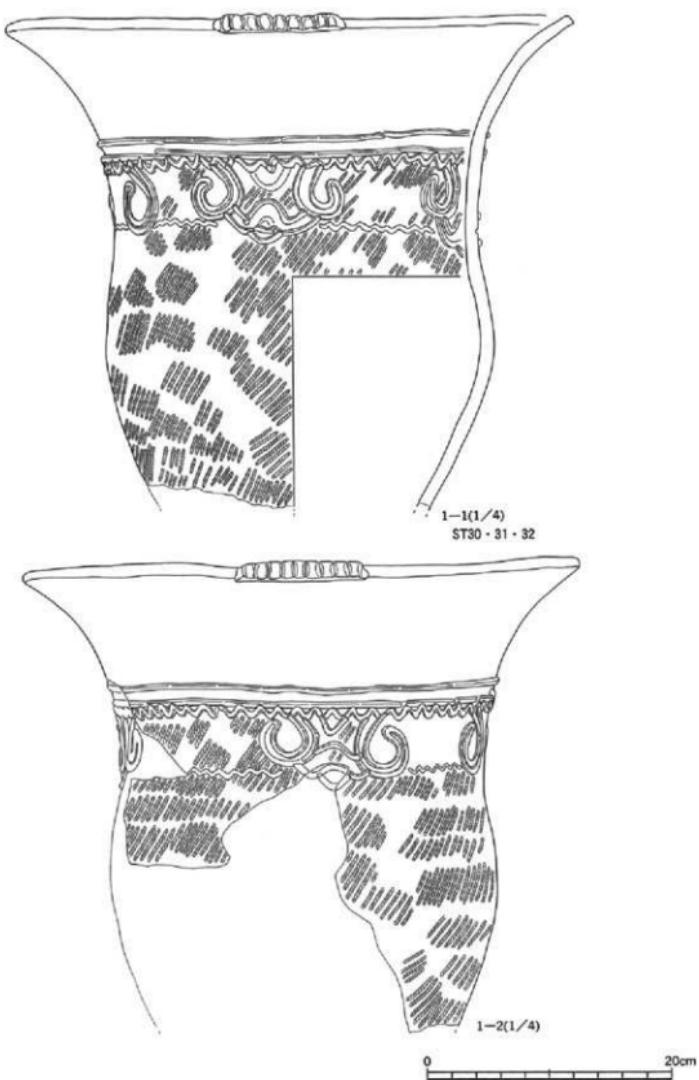
第131図 出土土器(54) 遺構に關係する土器(3)



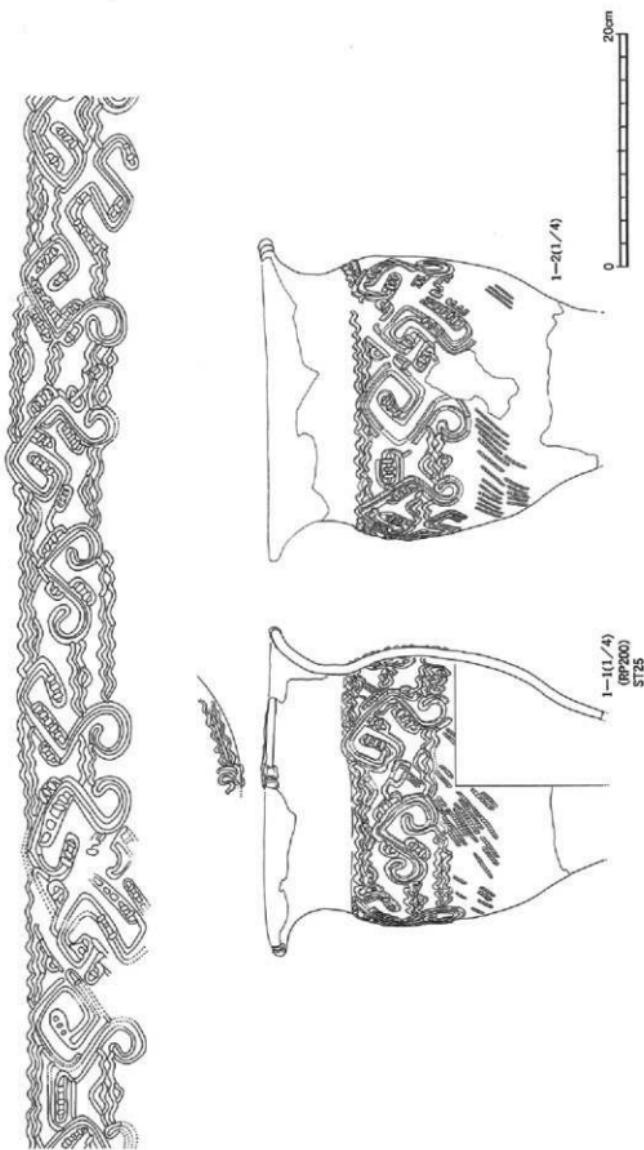
第132図 出土土器(55) 遺構に関係する土器(4)



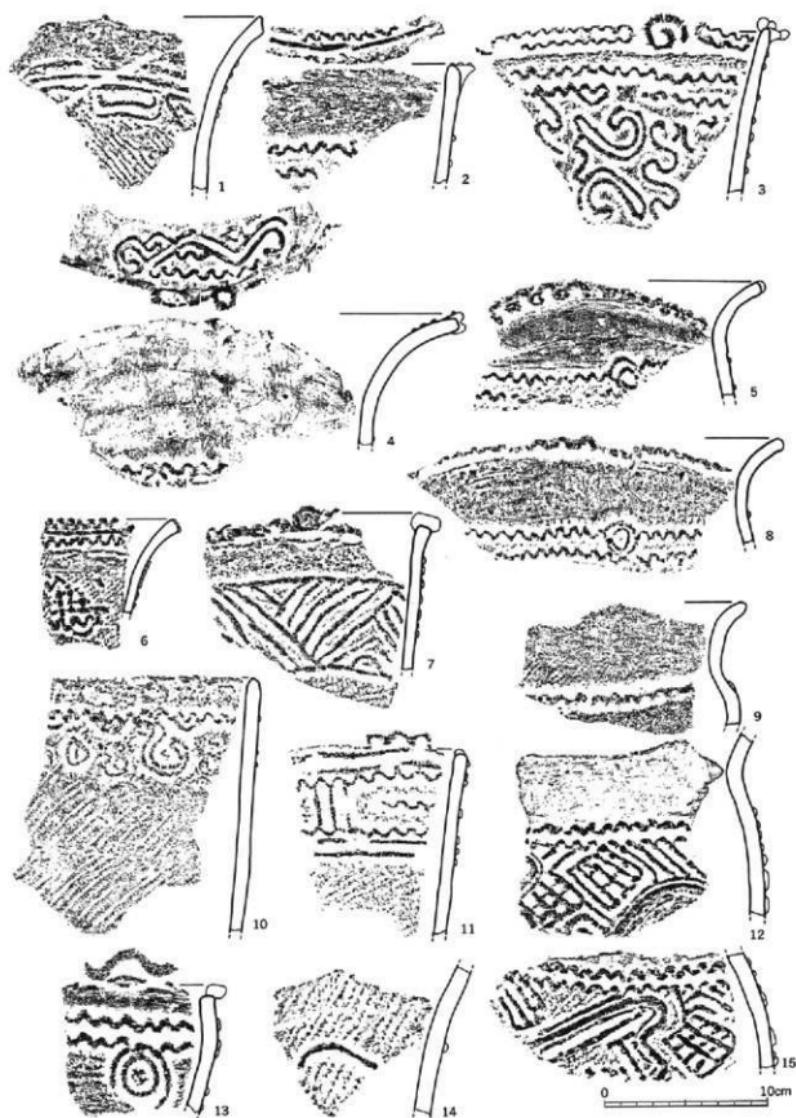
第133図 出土土器(56) 遺構に關係する土器(5)



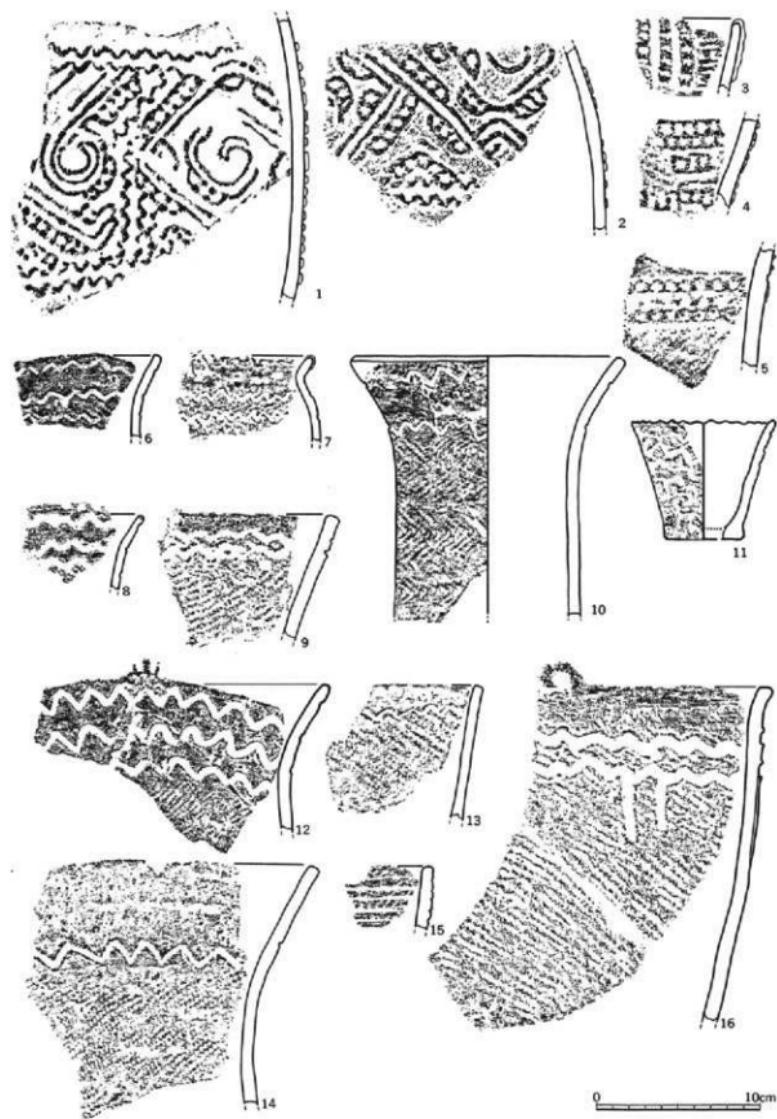
第134図 出土土器(57) 遺構に關係する土器(6)



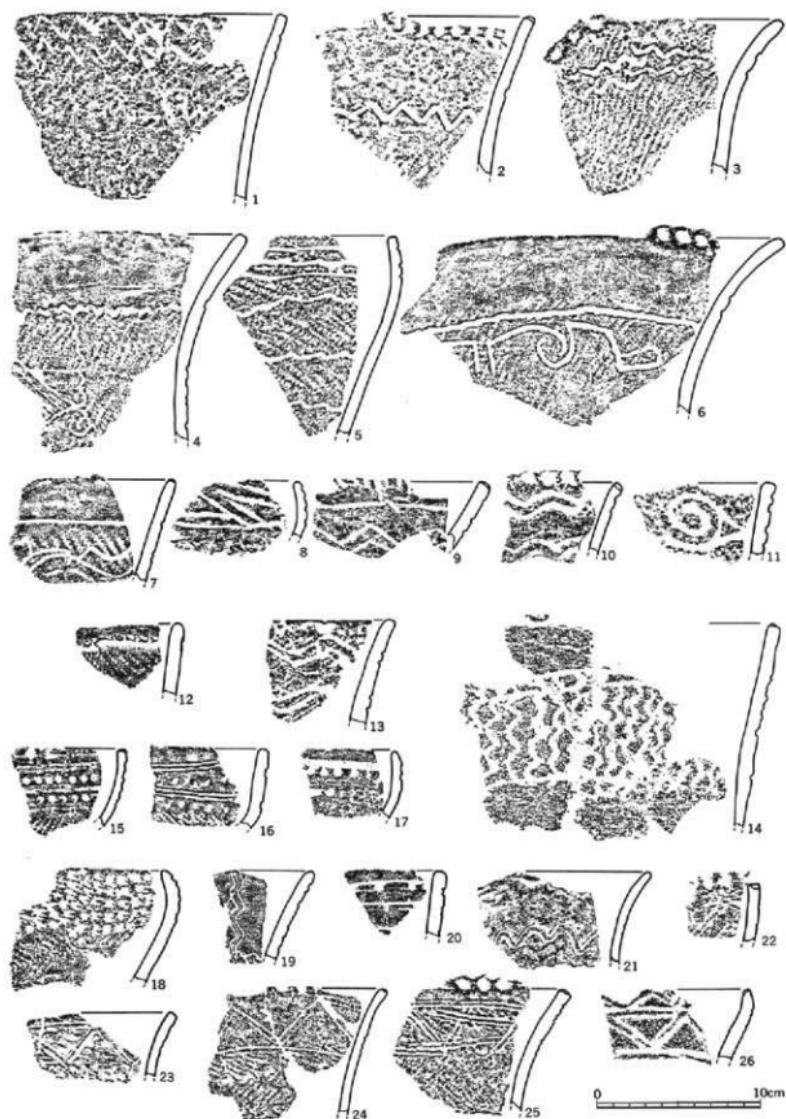
第135図 出土土器(58) 造構に関係する土器(7)



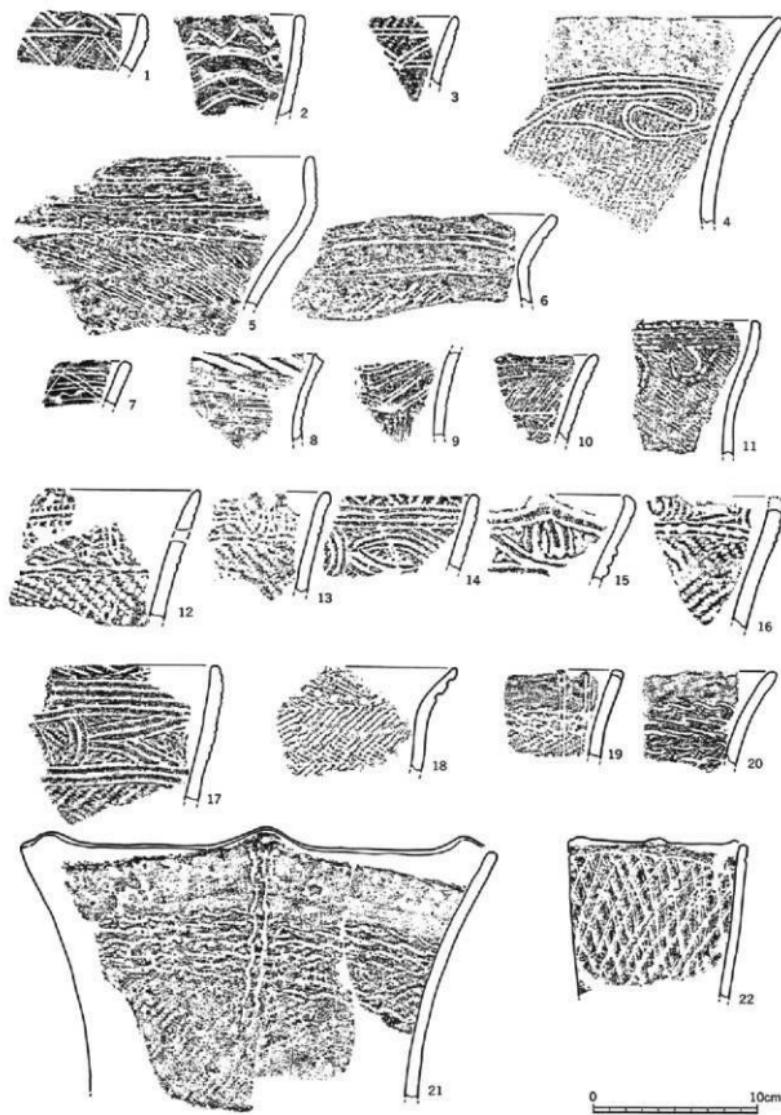
第136図 出土土器(59) 遺構外(1)



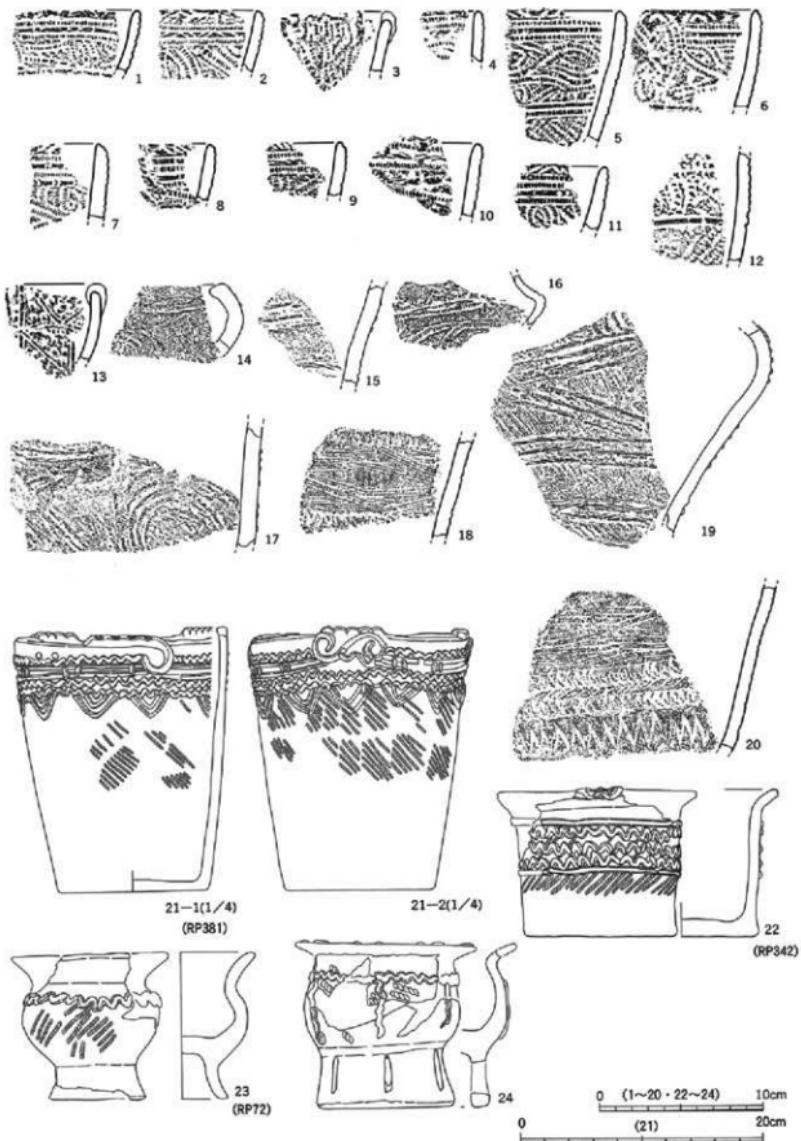
第137図 出土土器(60) 遺構外(2)



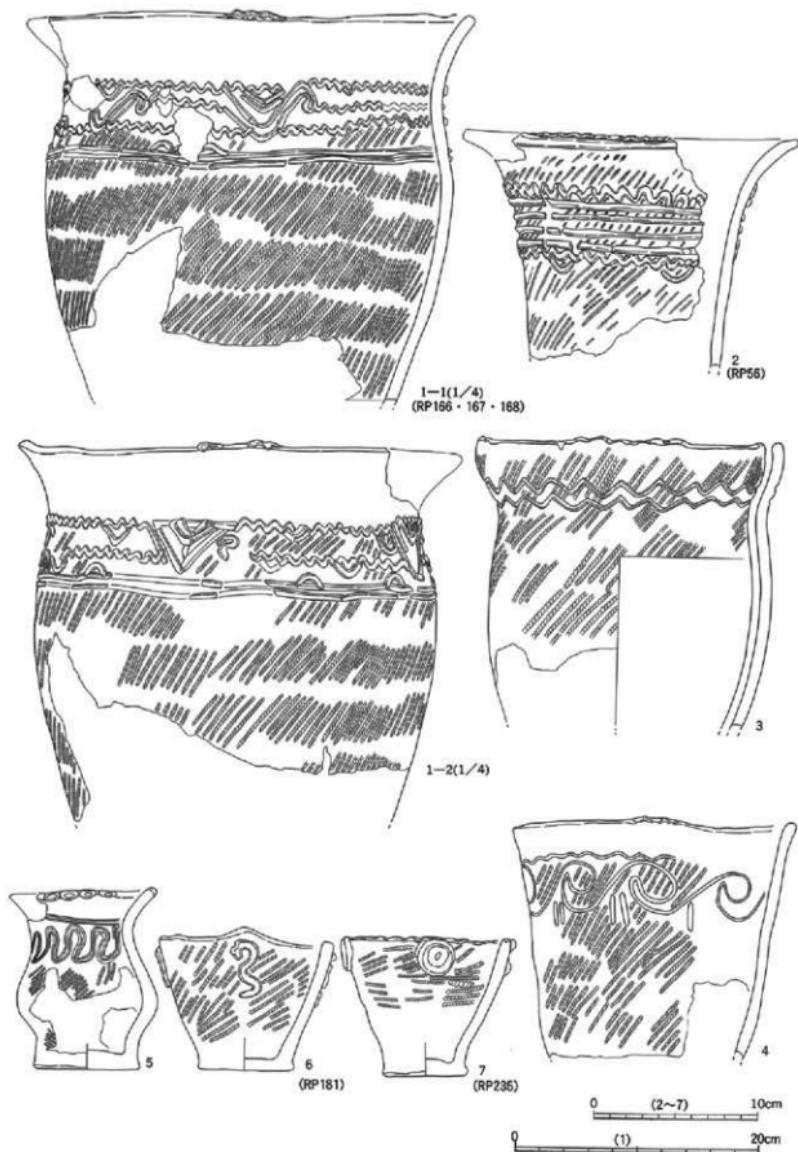
第138図 出出土器(61) 遺構外(3)



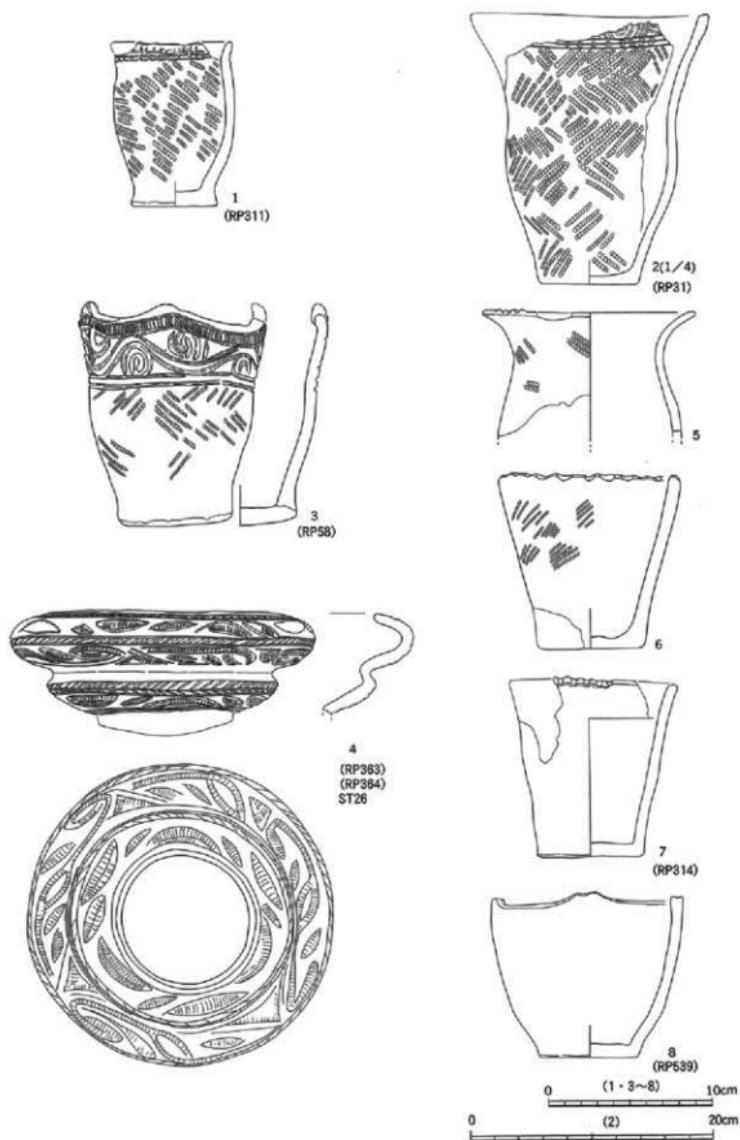
第139図 出土土器(62) 遺構外(4)



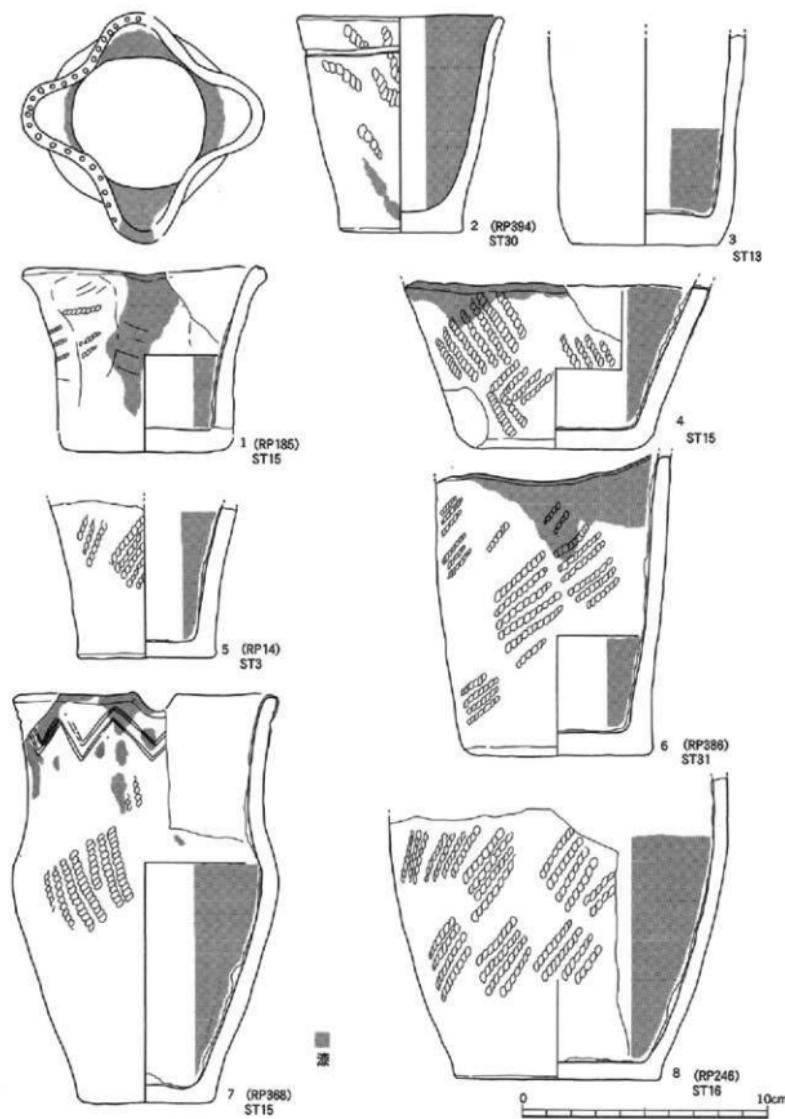
第140図 出土土器(63) 遺構外(5)



第141図 出土土器(64) 遺構外(6)



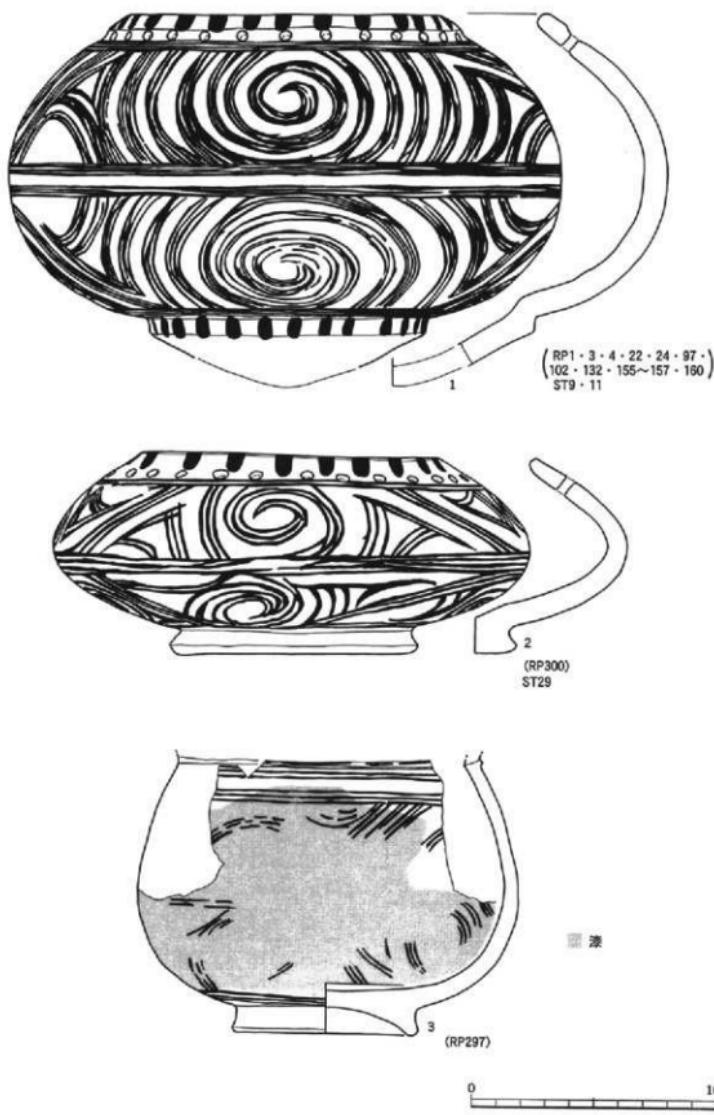
第142図 出土土器(65) 遺構外(7) (1~3・5~8)・ST26(4)



第143図 出土土器(66) 漆付着土器



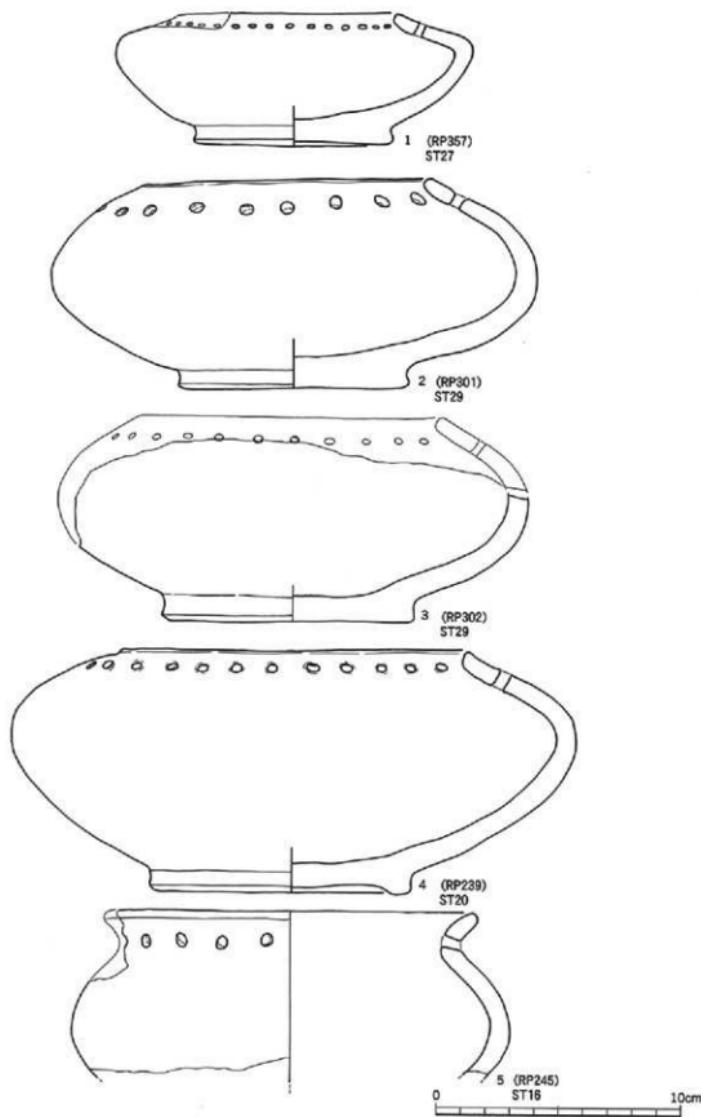
第144図 出土土器(67) 彩文土器(1)



第145図 出土土器(68) 彩文土器(2)



第146図 出土土器(69) 彩文土器(3)



第147図 出土土器(70) 彩文土器(4)

2 石 器

押出遺跡からは多量の石器類が出土した。これらの石器類は大部分が遺跡の主体である縄文時代前期中葉に比定できる資料と判断している。また少量であるが骨角器や狩猟の対象である動物骨等が出土していることも注目される。押出遺跡から出土した石器類について組成や石材、器種毎の特徴等についてまとめる。

(1) 器種組成

押出遺跡出土の石器の総数は83,334点を数える。その内訳は石鎌2,121点、押出型ポイント229点、石槍37点、石錐333点、石匙41点、籠状石器66点、三角スクレイバー713点、スクレイバー534点、打製石斧8点、磨製石斧77点、石皿24点、砥石38点、磨石430点、磨凹石232点、凹石46点、異形石器35点、石製品他25点、石核・剥片類78,345点である。これら押出遺跡の器種組成を表3と表4に示した。表4の左側の円グラフは石器類の総点数の比率、右側の円グラフは剥片類を除いた石器類の比率である。この円グラフから剥片類の割合が出土石器類総数の9割と非常に高いことがわかる。この現象は県内の他の遺跡においても同様な傾向をみせる遺跡が多く、石材供給地である最上川に近接しているため、煩雑に石器生産が行われていたとみられる。

剥片類を除いた石器の器種組成を見ると、狩猟具である石鎌が42.5%と高い比率を持ちながら、加工具である石匙が0.8%、石錐が6.7%、押出型ポイントが4.6%、磨石・磨凹石・凹石が14.2%とやや低い割合を持つ。伐採・土掘り具としての石斧・籠状石器が3%と極端に低いことも特殊である。一方、三角スクレイバー等の搔器・削器類が25%を占めている点も注目される。ただ三角スクレイバーとした石器は、一部に石鎌や籠状石器に近い大きさや形状を持つものもあり、石鎌や籠状石器に含めることも可能である。また押出型ポイントと分類した石器は、形態的に尖頭器様であるが、つまみ部の作り出しから縦型石匙の一一種との見方もあり、小型のものは類似した機能を持つ可能性がある。器種組成のあり方から、本遺跡の生活様相は狩猟及び植物採取を主としていたものとみられ、石錐などの漁労具類がほとんど出土していない点からも、山野、湿原に依存していた生活であったことがうかがえる。そして、これらの器種組成の特徴として以下の諸点を指摘できる。

- ① 石鎌の量的な多さと器種組成における割合の高さ
- ② 磨石・凹石類の量的な多さと多様な用途
- ③ 特徴的な石器（押出型ポンント・三角スクレイバー）の組成
- ④ 多様な異形石器の存在

表3 石器群の資料数

器種	個数	重量(g)
石鎌	2,121	—
押出型ポイント	229	—
石槍	37	—
石錐	333	—
石匙	41	—
籠状石器	66	—
三角スクレイバー	713	—
スクレイバー	534	—
打製石斧	8	—
磨製石斧	77	—
石皿	24	—
砥石	38	—
磨石	430	—
磨凹石	232	—
凹石	46	—
異形石器	35	—
石製品	25	—
剥片・碎片	78,345	319,633
計	83,334	—

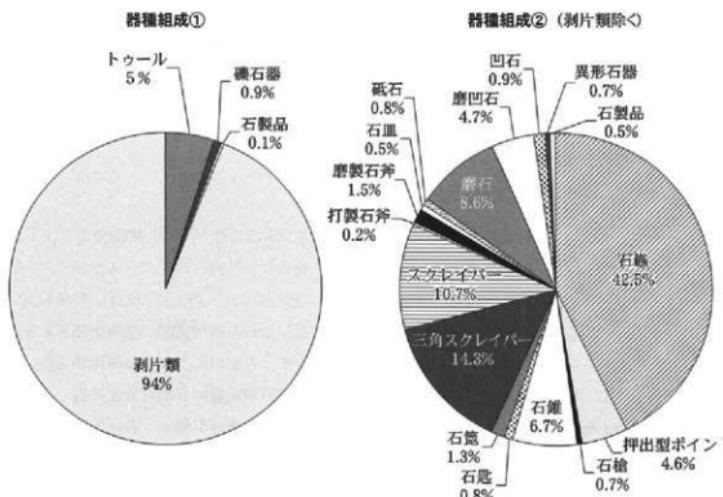


表4 石器組成比

(2) 石器石材

石材の点から出土石器をみると石錐・押出型ポイント・石匙・石錐・鎧状石器は珪質頁岩が主体であり、一部、流紋岩・碧玉あるいは珪化凝灰岩、玉髓が含まれる。磨石・凹石には安山岩が圧倒的に多く、石英粗面岩・流紋岩・花崗岩等の粗粒あるいは多孔質の石材も少量ではあるが用いられている。また、磨製石斧には蛇文岩・緑色片麻岩・凝灰質砂岩・溶結凝灰岩などが用いられている。押出造跡では石核を含めた各器種の珪質頁岩の比率が高く、良質の頁岩を最上川水系から原石あるいは石核として搬入するシステムが確立し、石器生産が行われたとみられる。完成品と判断した石器では、石錐・石錐・石匙・押出型ポイントで珪質頁岩の割合が8割以上を占め、次いで粗粒質頁岩や凝灰質頁岩などの頁岩類の石材が高い割合を持つ。

(3) 石器の分布

石器群全体の分布（第58～75図）をみると、住居跡の分布と重なるように石器類が分布するのがうかがえ、中に石器群が集中して多く分布する箇所がいくつか認められる。また、遺構が存在しない低湿地状の区域にも石器類が認められることは、住居外の低地縁辺において石器製作や石器の使用が行われていたり、廃棄される場になっていたと考えられる。遺構の広がりと同様に石器類も調査区外周辺に分布が広がっているものとみられる。

① ブロックの形成

石器群の分布から、石器の集中するブロックを認めることができる。大小合わせて12箇所ほどの

ブロックがあり、いずれも住居跡及び周辺に対応する。このことは住居や近辺での石器製作と使用が煩雑に行われて、しかも廃棄されたことを示している。中でもST11住居跡を中心とするエリア、ST31住居跡やST32住居跡を中心とするエリアからはおびただしい量の石器類が出土しており、活発に生業活動が行われたところと推測できる。

② 器種別分布（第59～75図）

石器の器種別の分布の傾向として以下の状況を読み取れる。

石 鋸：住居跡に重複した分布を示す。特にST30、ST31、ST32に多い。

押出型ポイント：ST11、ST15、ST16、ST31、ST32に多く分布する。反面、ST2、ST4、ST5、ST6、ST7、ST10付近には少ない。

石 匙：ST11、ST15、ST30、ST31に多く分布する。

三角スクリーパー：石鋸と同様な分布を見せるが、特にST32に多い。

石 錐：ST11、ST13、ST15、ST19、ST31、ST32に集中した分布がみられる。

籠 状 石 器：全体に散漫に分布し、住居跡に重複する。

磨 製 石 斧：籠状石器と類似する分布となる。

凹 石：ST11周辺に特に多く分布する。

磨 石：ST10、ST11、ST12、ST23・24、ST29、ST30、ST31、ST32に集中する。特にST11周辺に多い。

砥 石：ST7、ST11、ST19、ST31にまとまっている。

石 盆：ST11、ST31他からの出土。

異 形 石 器：ST11、ST13、ST15、ST31、ST32などの住居跡と関連して出土。

石 製 品：ST11、ST31他からの出土。

全体的にST11、ST30、ST31、ST32等の住居跡とその周辺に、完成品で使用された石器が多く認められる。この傾向は土器の分布とも一致する。また礫石器類（磨石・凹石・石皿）がST11とST31近辺にまとまっていることも注目される。遺物の集中は住居跡等の遺構エリアに多いが、間の低地部分（窪地）にも分布が広がっており、注目するところである。

③ 住居跡内の組成（第240～253図参照）

住居跡内の定形石器の分布をみると住居跡による器種の組成や量に隔たりがあることが看取される。遺跡全体の分布の状況からも住居を中心に石器が集中していることがうかがえたが、中でもST11、ST19、ST20、ST31の住居跡からの出土量が目立った。これらの住居跡からは石鋸や石匙・石錐がまとまっていることが共通している。さらに、ST11では押出型ポイントが41点と多く、ST31では石錐が46点と多いのが注目される。押出型ポイントや石錐の製作と、これらを用いた生業活動がより盛んに行われていた住居エリアとの推測もできよう。

礫石器類は、ST11周辺に多く分布し、石皿に関しては少數散発的な分布となった。破損品がほとんどであることから、廃棄されたものが残されていると考えられる。

(4) 石器各論

石 鐵 (第148~156図) 総数 2,121点出土した。このうち300点について図示した。形態としては、遺構堆積土・遺物包含層出土の石鐵は細部の形態が異なるものの基部が浅く窪み、側縁が直線的で全体形が二等辺三角状になるものと、その変異形が主体となる点で共通している。石鐵の長幅分布を表5に示した。長さ・幅・厚さ・重さの平均値はそれぞれ27.3mm、17.3mm、3.9mm、1.4 gで、長さは20~30mmの範囲に含まれるものが多い。重量分布(表7)からは、石鐵の平面形態の違いと大きさの間には強い相関はないようである。石鐵の大きさ・重さの違いは石器の使われ方や対象物の違いに関係するものと考えられるため、形態から次のように分類した。

I類：二等辺三角形を基調とし、基部に抉りが加えられ内湾部が作出されたもの。… 238点

(第148図19~30、第150図31・32・34~48、第151図1~10・35~50、第152図2~32、第153図1~16、第154図1~21等)

II類：二等辺三角形を基調とし、基部が直線的に加工されたもの。… 12点

(第148図6・8・9・11・12・18等)

III類：正三角形を基調とし、基部に抉りが入るもの。… 33点

(第148図2・13・15、第149図1・7、第150図2・6・9・20・25・27、第151図11・21、第155図19等)

IV類：基部が大きく内湾し、脚のよう広がるもの。… 16点

(第150図30・33、第151図34、第152図1、第153図25、第155図18・21、第156図1等)

V類：基部が突出しているもの。… 1点

(第156図21)

石鐵は第150図1~5などのように、小さいものでも幅は11mm以上ある。これは石鐵が装着された状態で「返し」が機能するために必要な大きさを示している。第156図19のように、幅が25mmを超える大型の石鐵も存在する。石鐵の加工状態を見ると300点中251点(約84%)は完全な両面加工である。一面に素材面を残すものは33点、また周辺加工で整形された石鐵は16点ある。これらの中には未製品や失敗品も含まれると思われるが、石鐵の中には第148図19のように石材素材が非常に薄いか小さいために加工が省略されている例があり、石器の製作過程に柔軟性がみえる。石鐵はほとんど剥片素材であり、ある程度素材の用い方がわかる例が12点ある。素材剥片の剥離方向は一定しないが、長さが3cmを超えるものについては、バルブの薄い剥片の打面側を基部にして利用する場合が認められる。石鐵の破損は先端部や基部のごく部分的な場合が多い。剥離面との切り合い関係から破損後の再加工が確認できるもの、先端部が著しく摩滅していて難に転用されていることが明らかなものもある。V類とした基部が突出した石鐵は1点のみである。石錐に含まれることも考えられるが薄い作りであり、先端部に使用の痕跡が認められないことから石鐵とした。

押出型ポイント (第157~163図) 基部に両側から抉りを入れて石匙のつまみと同様な作り方をした部分を持ち、両面あるいは半両面加工の尖頭器状の器体を持つものを「押出型ポイント」として分類した。229点出土したうちの101点について図示した。このうち9点は半分以上欠損している。

押出型ポイントは、石器群の中での組成比率が高い。この石器は石匙や尖頭器の中の一群として分類されたり、つまみ部を意識して「有撮石器」などと区分されてきた経緯があり、山形県では縄文時代前期初頭から大木6式期にかけて出土する傾向がある。押出型ポイントは器体中軸線で左右対称となり、中央部の断面は強弱あるレンズ形・三角形・菱形などを呈する。長さは大きいもので171mm、小さいもので32.6mm、平均で98.5mmを測る。重量からみると（表7）平均15.7gで、10~25gに集中する。全体の形状や二次調整のあり方によって、次のように細分される。欠損しているものは省いた。

I類：きれいな押圧剥離による両面調整が施され、つまみ部に比して幅広い器体を持つ木葉形のもの。大きさに長短がある。… 63点

（第157図1~3、第158図3、第159図12~16、第160図1~5、第161図2~12、第162図10~16、第163図16~19等）

II類：きれいな押圧剥離による両面調整が施され、つまみ部とほぼ同じくらいの幅の狭い器体を持つ柳葉形のもの。大きさに長短がある。… 20点

（第157図10~12、第158図10~12、第159図7、第160図8、第161図1、第163図11等）

I類は幅4cm以上で長さは4cm程の小型のものから10cmを超える大型のものまである。II類も長さは4cm程の小型のものから10cmを超える大型のものまである。加工状態をみるとI類とII類ともに両面加工がほとんどで、急角度の剥離で整形されるもの、細かい剥離が連続するもの、つまみ部の大小等加工のあり方が様々である。器体側縁部に使用痕と思われる光沢を持つものがあり、主にI類に多く認められる。また尖頭部に使用によると考えられる摩滅が認められるものもあり、使用痕はとりわけII類に多い。このような使用痕は穿孔に用いられたことを示している。I・II類で小型のものに、基部のつまみ部分の加工に特殊なものがある。例えば、第163図3・7・9・10は三角形状に平坦に仕上げ、第163図8・15は抉りが入っている。また、第162図1、第163図1のように有舌尖頭器を思わせるようなものもある。

石 槍（第164~166図） 両面加工もしくは半両面加工で尖った先端部を持つ一群を石槍とした。37点出土したうちの22点を図示した。相対的に出土量が少なく、大きさは押出型ポイントとほぼ同じである。両面加工がほとんどで丁寧な剥離調整が行われている。

I類：両面加工で平面形が木葉形や柳葉形となり槍先形を呈するもの。本類は大きさで次のa・bに細分できる。

a：全長が10cm未満のもの。（第164図4・5・7・8、第165図1・2）

b：全長が10cm以上のもの。（第165図6）

II類：基部につまみ状の舌部が作出されたもの。押出ポイントに属する可能性がある。
（第164図1）

III類：基部が寸詰まりで丸く加工され、上半に最大幅を持つ。大型の手持ちナイフのような機能が想定される。

（第165図9、第166図2・4）

I類はいわゆる槍先形尖頭器にあたり、II類は加工状況から剥離が粗く、押出型ポイントの未完成品も含まれていると想定される。第165図3・5・7・8は基部の作り出し加工があり、押出型ポイントの未完成品の可能性がある。III類は手持ちの指突ナイフを思わせる。その他、石槍としたものには、破損品や未完成品と考えられるものが多く認められる。

石匙 (第167~169図) 石器の端部に挟りを入れてつまみ部を作出しているものを石匙とした。石匙は総数41点あり、そのうち30点が完形資料で破損率が低い(約27%)。このうち32点について図示した。遺構内・包含層内間では石匙の形態にほとんど違いはない。表6の長幅分布グラフからは散漫な傾向が見て取れるが、縦型横型と形態の広がりがあるためである。石匙は剥片を素材とし、剥片の打面部をつまみにするものが多い。機能については動物の解体・処理具・農具・加工工具といつた諸説があるが、仙台市三神峰遺跡出土の石匙の使用痕観察(1982)から「皮・肉・角・骨などの動物質のものの加工の他に植物をも対象として様々な作業に使われていた」との報告から、主に食料加工工具として機能したことがうかがえる。石匙のつまみ部と刃部の位置関係及び刃部の形態から大きくI~V類に分類した。I~IV類は縦型、V類は横型である。

I類：縦長の形態を持ち、先端部から三角形の形状で斜めの刃部を作り出すもの。右上がりの刃部と左上がりの刃部がみられる。

(第167図5・10・11、第168図7、第169図7)

II類：縦長の形態を持ち、先端部が直線気味に加工されるもの。裏面にも加工が施されるものがある。

(第167図6・7、第168図1、第169図3・9)

III類：縦長の形態を持ち、先端が尖りつつ側縁に溝曲する刃部を形成するもの。

(第167図1~4・8・12、第168図4・5・9~11、第169図1)

IV類：縦長の形態を持ち、左右対称の尖った先端部を形成する。両面加工や半両面加工など加工法の差がみられる。

(第168図2・3・6・8)

V類：横型の石匙で、数は少ない。器体の加工は全体に及ばず刃部とつまみ部分のみである。

(第169図5・6)

石匙のスクレイバー状の加工が施された刃部が縦長となるものが63%を占め、最も多い。形態と素材の利用法との間に特定の関係は見出せないが、刃部には両面加工から片面加工のものがあり、相対的に半両面加工のものが主体である。素材とつまみ部の付けられる位置関係では素材の縦長剥片の打点付近につまみを作り出すものが全体の8割程度認められ、比較的規則性の強い製作技術によって作り出されていることがわかる。また、斜め刃部の立ち上がり方向は左上がりのものが多い。刃部の末端部が尖る形状のものには、その先端部に摩滅が認められるものがあり、石錐を志向していた可能性がある。さらに縦長の石匙には側縁に光沢部分を持つものもある。第167図7・10、第168図5等は、いわゆる「松原型石匙」と称されてきた石匙の製作工程を踏んだと考えられ、製作技術の系統をとらえる上で注目される。IV類とした石匙は小型ながら形態的に「押出型ポイント」に含まれることも考えられる。

三角スクレイバー (第170~175図) 石鏃より大型で、三角形状の形態で尖頭部を持つものを「三角スクレイバー」として分類した。この石器は石鏃や箇状石器の中の一群として分類されたり、大きいものは尖頭器として区分されてきた経緯がある。この種の石器は713点出土している。このうち100点を図示した。長幅分布グラフ(表6)や重量分布グラフ(表7)をみると、長さ幅ともに30mmのグループと、長さ75mm幅50mm前後のグループに2分できそうである。全体の形状や大きさ、二次調整のあり方、底部の形状に着目し細分した。

I類：基部が直線気味に整形されるもの。… 33点

(第170図11・14~16・19、第171図9~12等)

II類：基部が丸く弧を描くように整形されるもの。… 67点

(第170図12・13、第168図14、第173図3・5・6等)

大きさをみると2cmのものから12.5cmのものまで幅が見られるため、大きいものと小さいものでは機能的な違いも想定される。ただ、このタイプの石器は総数713点と量的に安定して出土しているため、道具として嗜好される「形」であったことは間違いないと考えられる。一部の資料については、石鏃や箇状石器との区別がつかず、形態的な近似による分類とした。

スクレイバー類 (第176~184図) 器体表面に急角度の調整加工によって刃部を作出した石器をスクレイバーとした。スクレイバーは534点と数多く出土しており、このうち87点を図示した。形状や刃部の位置からさらに大きく二つに分けることができる。一つは刃部の作出に際し、樋状剥離が多用される。石材はほとんどが頁岩である。素材は縦長剥片のほかに横長剥片も用いられるがいずれも長軸端に刃部を作出するものである。もう一つは剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器である。それぞれさらに加工の部位や形態から細分が可能である。

I類：素材の全周が刃部となり片面加工と両面加工がある。… 22点

(第176図4・5・8、第177図2・6・10、第178図3・8、第179図4・7、第182図1~7、第183図3・4・6、第184図2・7)

II類：素材の長軸先端部に刃部を作出したもの。… 3点

(第176図9、第177図5、第179図2)

III類：素材の端部や側辺に刃部を作出したもの。… 29点

(第176図1・3・6・7・11・13~15、第177図1・4・7・8・14・15、第178図1・2・4・6・7・9・10等)

IV類：素材長軸の側辺に抉りを入れて刃部を作出しているもの。… 27点

(第176図10・12、第177図3・9・11~13、第178図5、第179図1・3・5・6・8、第180図1~7、第181図1~6)

V類：基部から撥状に刃部が広がっているもの。… 6点

(第176図2、第183図5・8・9、第184図3・5)

スクレイバーの素材としては、縦長のものと横長のものと利用されているが、側辺を刃部として利用するものは縦長の素材が多く、先端加工や撥状のものは横長剥片を素材にしている傾向がうか

がえる。側辺に加工を施し刃部を形成するものは、側辺への加工が集中しているため削ったり裂いたりする機能が特徴的であったことがうかがえる。また、三日月状に抉りが入るスクレイバーは、抉り部分に使用痕による光沢が認められるものが多い。押出遺跡出土のスクレイバーには切断された部分を持つものが認められる(第177図14・15、第183図8・9、第184図6等)。二次加工された部位が刃部になると考えられ、他の辺に施された切断調整は刃潰しを目的としていたと推測され、切断技術を使用することによって簡単に刃潰し効果があげられた有効な加工技術といえる。この種の技術は阿古島香(1979)により「切断調整石器」として注目されたり、岡村道雄(1979)には縄文時代全般に普遍的に認められる技術として指摘されていた。なお押出遺跡で見られる切断面は意図的に加工されたものかどうか、より詳細な観察が必要である。

範状石器(第185~187図) 平面形が撥形あるいは短冊形・長方形・小判形等のいわゆる“ヘラ状”を呈し、一端に刃部が作出された石器である。66点あるうちの25点を図示した。器体中軸線で左右対称となり、断面形は凸レンズ状あるいは板かまぼこ状になる。大きさは平均で長さ73.5mm、幅39.2mm、厚さ13.5mm、重さ41.2gで、長さは5~10cm、幅2.5~5cmの範囲に含まれるものが多い。重量が100gを超える石斧に近いものもある。刃部と基部の形状から以下のように分類した。

I類：平面形が撥形を呈し、刃部に最大幅を持つもの。基部は丸くなるものや尖るものがある。

(第185図1・2・4・9、第186図3・4・6~8、第187図6)

II類：刃部と基部がほぼ同じ幅で側縁が平行する。

(第185図3・8、第186図2・5、第187図5)

III類：刃部が弧を描くもの。

(第185図5~7・10、第186図1・9、第187図1~4)

刃部は片刃が多いが、第186図1~7のように両面加工で両刃の石器が16点ある。刃部の平面觀は直線的なものを9点、湾曲するものを16点図示した。また第185図8、第187図5のように石器の長軸に対して刃向が傾く扁刃が16%ほど見られる。基部形態をみると基部が尖るもの、丸くなるもの、直線的で全体が短冊形に近くなるものもある。

範状石器の素材は厚手の剥片が用いられ、自然面が残される場合もある。素材の位置取りとしては、縦長剥片の打面を基部にしたり、横長の剥片はその形態に即して用いる傾向がうかがえる。多くの範状石器は片面ないし半両面加工であり、腹面側に素材面を残している。また側縁の加工は階段状剥離になるものが目立つ。範状石器は基部がすばまる形態という点で共通することから、着柄して使用されたものと考えられる。刃部は平均70度と大きい。刃部を観察すると肉眼でも使用痕が認められる資料があり、とりわけ刃部の裏側に摩滅や光沢がみられる。扁刃の刃部は正面右上がりになるものが多い。

石錐(第188~195図) 棒状の尖頭部を持ち、その断面形は三角もしくは四角形を呈する石器である。石錐は333点ある。全体形が棒状をなすものと、つまみ部を持ち一端に尖頭部が作出されたものに大別される。このうち146点について図示した。

I類：全体形が棒状でつまみ部がなく、断面が円形ないし四角形の棒状のもの。… 30点

(第191図21～24、第193図3・4・14・15等)

II類：棒状の錐部とつまみ部の境が明瞭で、錐部の長いもの短いもの。… 45点

(第192図1～3、第193図17～19等)

III類：錐部とつまみ部の境が漸移的で不明瞭なもの。… 60点

(第189図19～23、第190図7・10・12等)

IV類：つまみ部がやや大きめの棒状になり、抉りが入るもの。… 11点

(第194図8・12、第195図1～9)

I～IV類は幅1cm前後で長さは4cm以下の小型のものと5cmを超える大型のものがある。IV類の多くは幅1～3cm、長さ4～7cmの範囲に含まれる。加工状態をみると、I類とIV類は両面加工がほとんどだが、II類とIII類は切断面をもつもの、急角度の剥離で整形されるもの、細かい剥離が連続するもの、摘み部の大きさ等加工のあり方が様々である。石錐の30%の尖頭部には、使用によると考えられる摩滅が認められる。使用痕はとりわけI類とII類に多い。I類には両端が摩滅しているもの、摩滅の範囲が先端から11mmに及ぶものなどがある。肉眼で摩滅が確認できる石錐は、先端が丸くなるまで使用されていて、回転運動を示す線状痕が認められる資料が少なくない。石錐のこのような使用痕は、石錐が単純な突き錐でなく、連続的な回転運動による孔の整形をも含めた穿孔に用いられたことを示している。対象物は骨角等の硬質な素材が予想される。またI類はその形態から着柄して用いられたと考えられる。形態的に石鎌と同じものもある(第188図5・19・26等)。IV類とした石錐は押出ポイントの基部と類似し、再加工による活用との推測もできる。石鎌・石匙の中にも先端部に著しい摩滅の認められる器器があることは、石鎌から石錐への転用、縦型石匙を穿孔に用いることが柔軟に行われていたことを示唆している。

打製石斧 (第196図) 打製石斧として分類したものは8点と少ない。このうち6点を図示した。形態的に箇状石器と類似する部分が多いが、大型で基部よりも刃部を意識した作りになっているもの、側縁の加工が両面から加えられて角度が鋭角になっているものを取り上げた。第196図2・3・5・6は加工の度合からみて、箇状石器の未完成品とすべきかもしれない。形態は縦型の台形状や撥形になっているものがある。

磨製石斧 (第197～199図) 破片資料も含めると全部で77点の出土がある。完形品は少なく、刃部を中心とした破損が認められる資料が多い。大型のものと小型のものとに二分でき、小型の磨製石斧のほうがより丁寧にきめ細かく研磨されている。石材は蛇文岩、石英粗面岩・溶結凝灰岩・緑色片麻岩などがある。図示したものは32点で、以下のように分類できる。

I類：全長10cmを超える大型のもの

a：側刃が刃部側に向かって開くもので、断面はやや丸みのある長方形となっている。

刃部は緩やかに外湾し、側面に擦り切り痕の見られるものもある。

(第198図9・12、第199図1・6)

b : 側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので、断面は楕円形を呈する。刃部は緩やかに外湾している。

(第198図11、第199図2～5)

c : 側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので、断面は楕円形を呈する。刃部は弧を描いて外湾している。

(第198図3・7・10)

II類：全長10cm以下の小型のもの

a : 側辺が刃部に向かって開くもので、断面は扁平となる。刃部は緩やかに外湾している。

(第197図7・8・12～14、第198図1)

b : 側辺が刃部側に向かってあまり開かない細長い形態のもので断面は扁平となる。刃部は緩やかに外湾している。

(第197図1・4～6・10)

全体として破損しているものが目立ち、破損部は刃部や基部に集中する。使用によるものかどうかは不明である。刃部の形態が大きく偏っているものがある。使用による片減りか破損による再加工が要因として考えられる。また、小型の磨製石斧は、石材に玉髓や蛇文岩が利用されている。

磨石・凹石類（第200～207図）

総数708点ある。これらの石器は從来、使用痕の違いによって磨石・凹石等に分類されてきた。石材は安山岩が圧倒的に多く、石英粗面岩・流紋岩・砂質凝灰岩・花崗岩が少量含まれる。多くは粗粒の円盤・楕円盤を素材とする点で共通しており、また一つの石器に複数の使用加工痕が認められる資料もあるため単純に分類できない面がある。以下では礫石器として一括した。

・磨石 川原石が石皿などと組み合わされて使用された結果、礫面に磨痕を持つに至った石器で、これらは川原で採取された段階で、道具としての形が整っていたと考えられる。したがって観察されるのは使用痕としての磨痕で、中に凹痕や敲き痕のあるものもあるが、別器種として扱った。磨石は合わせて430点出土しており、本遺跡の組成を代表する石器の一つである。磨痕の位置によって分類した。

I類：礫の二面に磨痕があるもの。扁平盤の表裏に磨痕をもつものや表面と側縁にあるもの、側縁だけにあるものなどがある。

(第200図1・2・4・5・7～10等)

II類：礫の三～四面に磨痕があるもの。表裏と側縁に磨痕が認められる。

(第200図3・6、第203図7～9等)

・凹石 川原石の表面に敲打痕と考えられる凹痕をもつ石器である。磨痕を合わせ持つ磨凹石は232点を数え、全部で278点の出土があった。利用された礫の形態としては円形・楕円形・長方形のものがあり、いずれも片面や両面に1～5個程度の凹みを持つ。

I類：扁平な円形の礫面に1～数個の凹みを持つ。

(第205図2・5～8、第206図1～6・8・10、第207図2)

II類：扁平な楕円形の礫面に1～数個の凹みを持つ。

(第205図3・4・9、第207図1・3~6)

III類：扁平な長方形の礫面に1~数個の凹みを持つ。

(第205図1、第206図7・9、第207図7・9)

磨石と凹石は区分したが、両者に属するものもあり、複合した機能を持ち合わせているといえる。特に長方形の磨石や凹石は敲石としても使用されたらしく、敲き痕の認められるものがある。

石皿 (第208、209図) 石皿と思われるものが24点ある。このうち8点を図示した。

I類：皿部分が平坦をなすもの。

(第208図3・5、第209図1)

II類：皿部分が著しく凹面をなすもの。

(第208図2・4、第209図2・3)

I類は大形がII類は小形が多く、素材選択の段階で両者に差がある。また機能面ではI類が光沢のある磨り面が多く、II類は線状痕のある磨り面が多い。両者は当初から異なる機能を有していたとも考えられる。また第209図3のように複数の凹みが認められるものもあり、合理的な活用の一端も見られる。

砥石 (第210~212図) 不定形の礫面に大小長短の溝が刻み込まれている石器で、38点確認している。このうち22点を図示した。円礫や亜角礫の表裏面に断面形がV字やU字状の溝が施されたものである。

I類：円礫に一条以上の溝があるもの。

(第210図1~4、第212図4)

II類：楕円形・長方形の礫面に一条以上の溝があるもの。

(第210図8・9、第211図2・4~6、第212図1・2)

III類：矢柄研磨器と類似するもの。

(第210図6、第211図3、第212図5)

I類とした砥石は円礫表面に平行線状に或いは放射線状に溝が刻まれている。凹痕を持つものもある。II類とした砥石は礫の長軸方向に数条の溝が認められ、礫表面は磨り面となっているものもある。また溝は、幅1cm以上の太いものと1cm未溝の細いものと2タイプがある。III類とした矢柄研磨器類似の資料は、破損品のため全体の形状は不明ながら、一条の溝が礫面中軸線上に配置していることから区別した。砥石の用途については、骨角器を研磨する砥石との見方や竹管・半截竹管の加工、玦状耳飾や有孔石製品などをを作るための砥石としての利用が指摘されているものの、押出遺跡での用途は不明である。

石製品 (第213図) 石製品は破損品や未完成品も合わせて25点あり、主なものについて種類別に述べる。

・玦状耳飾 ST18、SM1、窪地から1点ずつの計3点の出土があった。第213図1は流紋岩製

で長さ48mm、幅51mmの円形を呈し、厚さは6mmある。中央孔と切れ目は表裏面から穿孔・擦り切りされており、径3mmの中央孔はやや上寄りに位置し、切れ目が長くなっている。なお、表面は丁寧に研磨されて光沢をもつ。上部に破損による補修孔と考えられる孔が2ヶ所認められる。第213図2は石材が黒曜石で、第213図4は半分に破損している。玦状耳飾は、山形県内では遊佐町吹浦遺跡から石製3点、土製6点、大石田町白金遺跡や長井市長者屋敷遺跡等から1点ずつ出土している。

・有孔石製品等 第231図3は、凝灰岩製で径5mmのやや大きめの穿孔が施された石製品で、厚さは12mmある。中央孔は表裏面から穿孔・擦り切りされている。表面は丁寧に研磨されて光沢をもつ。第213図5・6は小形の石製円盤で、6には2ヶ所に穿孔が施してある。第213図7は、磨製石斧の形態の基部に穿孔がある資料で、頁岩を用いている。

・石 棒 大小2種類の小形の陽物似

の石棒である。第213図8は頁岩製と思われる。第213図9は、ST14から出土し、安山岩製と思われる。どちらも表面は丁寧な研磨が施されている。

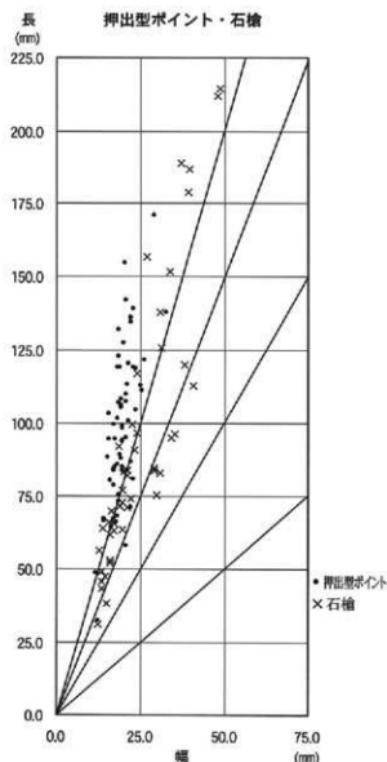
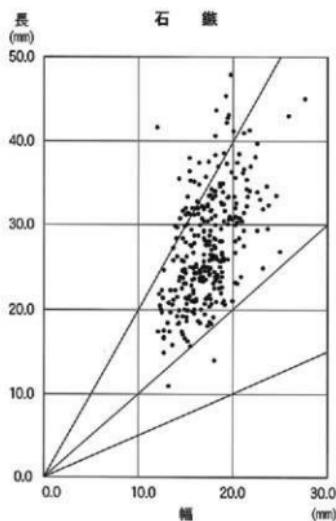


表5 石器類の長幅分布1

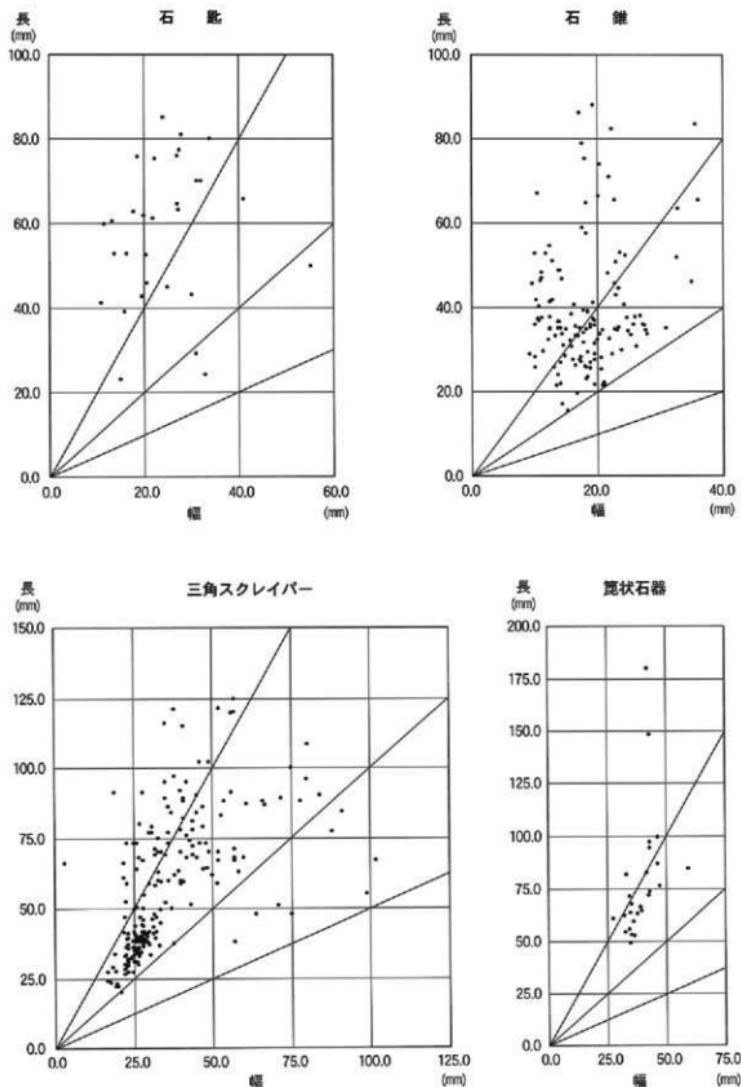


表6 石器類の長幅分布 2

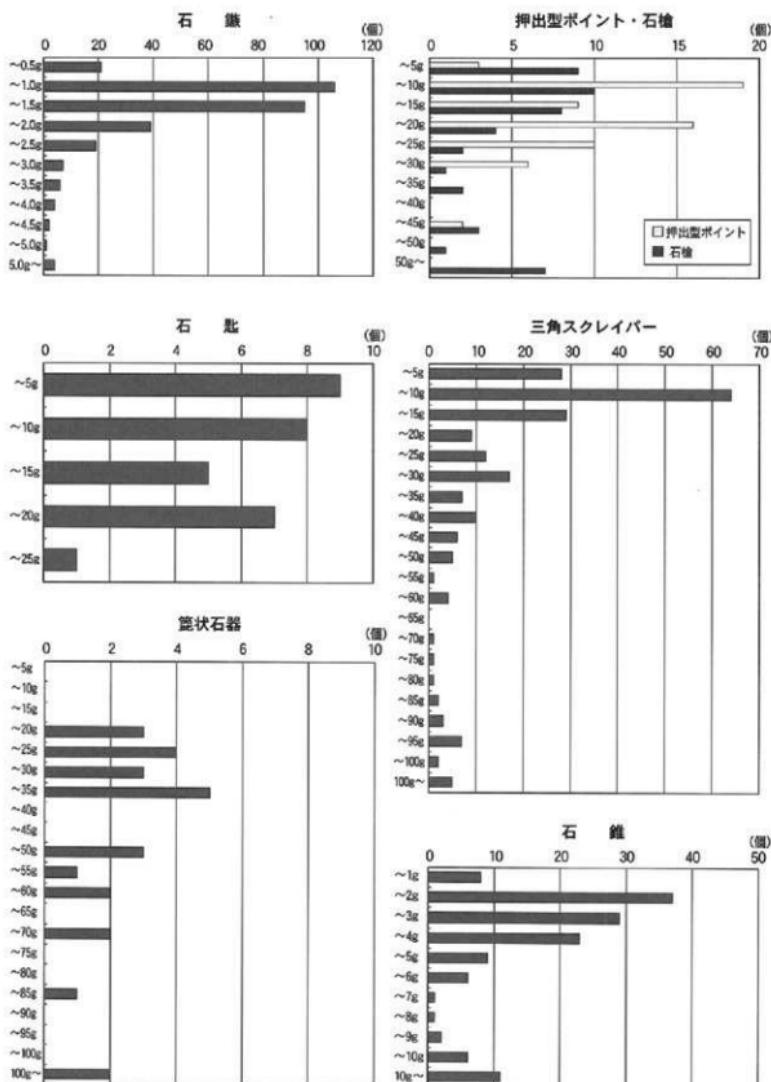


表7 石器類の重量分布

異形石器 (第214図) 従来の石器型式にない特殊な形態を持つ石器で、35点出土した。異形石器として区別し、さらにその形態から5種類に細分した。図示したものは、32点である。

I類：釣り針形 (第214図8・11～13・16・19・20・24・25・28・29・31)

II類：糸巻き形・X字形 (第214図3・4・6・7・10・26)

III類：さす殷形 (第214図5・14・15・18・21～23・27)

IV類：三脚形 (第214図32)

V類：鋸歯状形 (第214図2・9・17・30)

I類の釣り針形の石器は三日月様の曲線をなし、基部につまみ状の加工を持つものである。第214図29のように両側刃に張り出した形のものもある。II類の糸巻き・X字形の石器では、糸巻き様石器の突起が大きく張り出しているものをX字形とした。石材としては、鉄石英を利用しているものが多い。III類のさす殷形は石匙を思わせるようなつまみ部分を持ち、先端がV字に広がる形状をする。第214図18の棒状のものは、石錐の複合したものともみえる。V類の鋸歯形は縦長の素材に著しい凹凸を刻み、鋸状に加工し銳利な先端部を多数作出するものである。第214図30は先端部が刃こぼれしており、ドリルとして使用された形跡がある。X字或いは三脚形の変異とも解釈は可能である。

(5) 押出遺跡の石器群の特色

押出遺跡の石器群の特色として、石器組成に高い割合で組成する特殊な石器が注目される。一つは「押出型ポイント」として設定した石器と、「三角スクレイバー」として分類した一群である。もう一つは従来の石器型式に当たはまらない異形の石器類である。それと組成全体からみた石錐の量的な多さが注目される。これらの石器についてまとめておく。

① 「押出型ポイント」について

「押出型ポイント」はこれまで石匙あるいは尖頭器の一つとして理解されてきた石器である。このタイプの石器が一遺跡から10点以上もまとまって出土することは稀で、新しい器種として認識されることはなかった。ただ秋田県能代市上ノ山遺跡においては「有撮石器」として分類され、特殊な形態と機能を持つ石器として注目されていた。山形県内では遊佐町吹浦遺跡から大木6式の土器群と、大石田町庚申町遺跡より大木1式の土器群と、山形市にひやく寺遺跡や温海町大淵台遺跡では早期末から前期初頭にかけての土器群とともに出土している。ただ、これらの遺跡では石匙の一部として分類しており、にひやく寺遺跡、大淵台遺跡ではやや小型、庚申町遺跡では大型のものもあるが細身が主である。吹浦遺跡では、Ia類と区分し「押出型ポイント」に近い形態と大きさをもつものが出土している。今のところ、小型のものを含めて、両面加工の尖頭器状の器体につまみ部分を持つ石器は縄文時代前期初頭から確認でき、前期末の大木6式期まで出土例が認められる。押出遺跡からは、手持ちナイフとしての石槍(第166図7～9、第167図3・4等)もあり、両面加工の石器が槍先以外の機能を保持していたことがうかがえ、「押出型ポイント」にみるつまみ部分の存在は、槍への装着部というよりも手工具の柄部分との見方が妥当のような印象を受ける。押出遺跡出土の動物骨の理化学分析で、「ニホンジカ」「イノシシ」の骨碎片の出土が報告されていることから、シカやイノシシの解体道具として活用されたとも考えられよう。

② 三角スクレイバーについて

713点確認した三角スクレイバーは、安定した組成比率から高い嗜好性がうかがえ、一つの確立した石器の道具として利用されていたと考えられる。押出遺跡で多用された石器の一つと理解したい。ただ先にも示したように、一部の資料については石鏃や鉗状石器との区別がつかず、両者が混在している部分もあるため、より詳細な分類基準が必要と考える。特に三角スクレイバーⅠ類としたグループについては、石鏃を大きくしたような形態を持つことから、槍先に使用したとも考えられ、遊佐町吹浦遺跡で尖頭器Ⅱ類として紹介されている一群に概当するが、量的には少ない状況にあり、県内での類例の発見が待たれる。

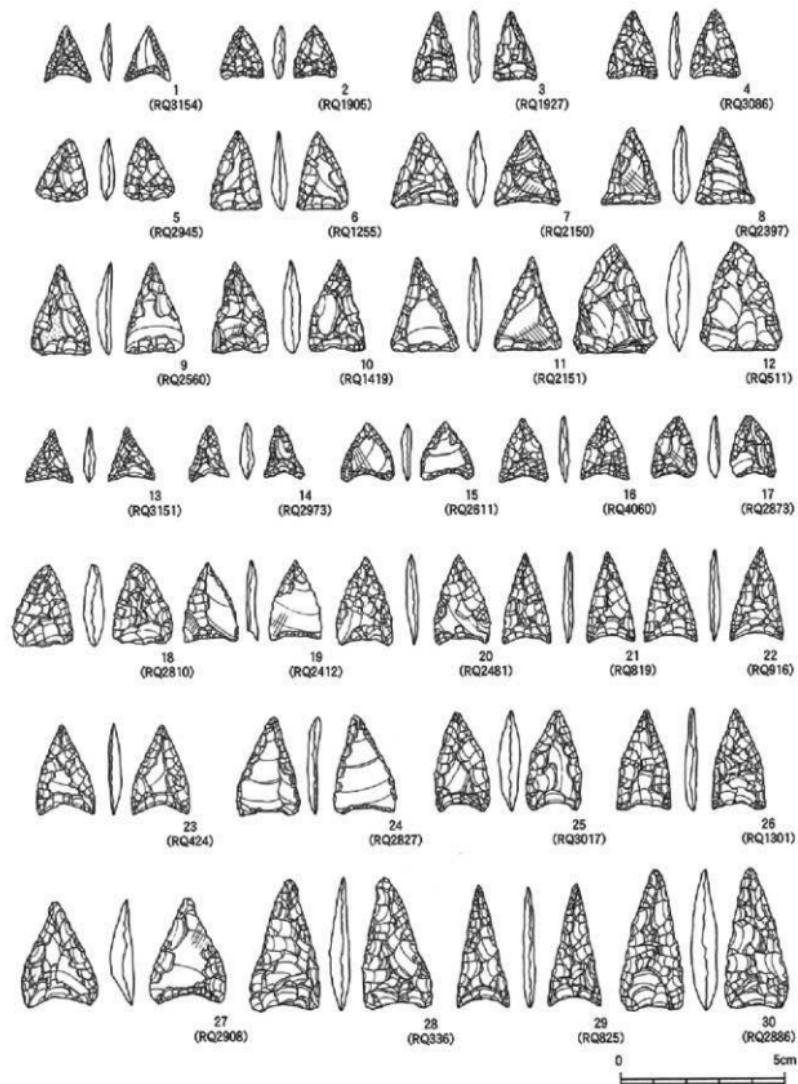
③ 異形石器について

5種類に分類した異形石器は、それぞれ異なる機能や目的を有しているとみられるが、数量的に少なく、日常的な道具として利用されていたとは考えられない。釣り針形や糸巻き形には石材として鉄石英が利用されており、より特殊な場合の道具あるいは装飾的な「モノ」として使われていた可能性もある。個々の形態の石器について類例を探してみると、糸巻き形に関しては前期初頭の大石田町庚申町遺跡、東根市小林A遺跡、宮城県名取市今熊野遺跡から同様な石器が出土している。釣り針形の石器は南陽市月ノ木B遺跡、遊佐町吹浦遺跡、宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡からの出土が報じられている。吹浦遺跡のものは、石材に鉄石英を用いている点で類似する。さす般形石器は上山市思い川遺跡で石匙の一種として紹介されており、大木7式～8式の土器群が共伴して出土している。吹浦遺跡では石匙状の摘みを持つ先端部分がさす般に加工してあるものが2点出土し、異形石器として紹介されている。県外では、秋田県能代市上ノ山I遺跡や岩手県北上市滝ノ沢遺跡でも同様な石器が出土している。併出した土器群は大木4式、5式期に相当する。

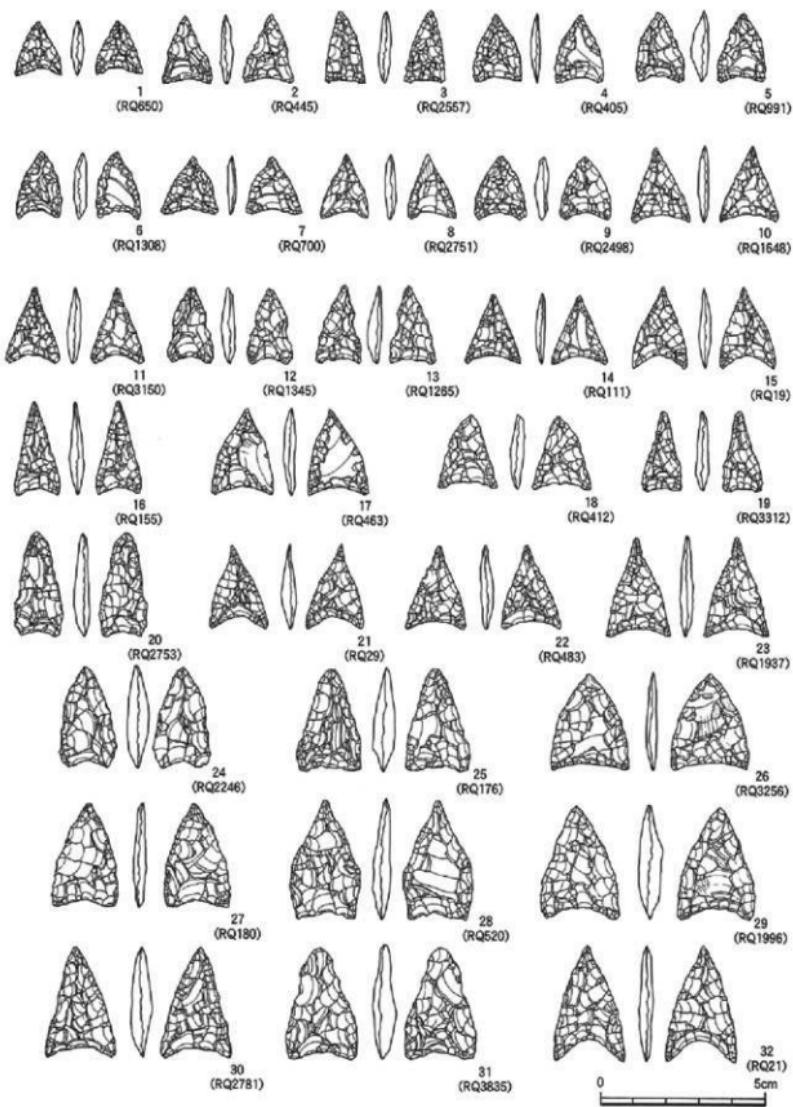
異形石器として取り上げた石器の中でも、釣り針形やさす般形など石器は装飾品としての見方も考えられ、使用痕観察を含めた分析が課題となってくる。

④ 石鏃の高い組成比率について

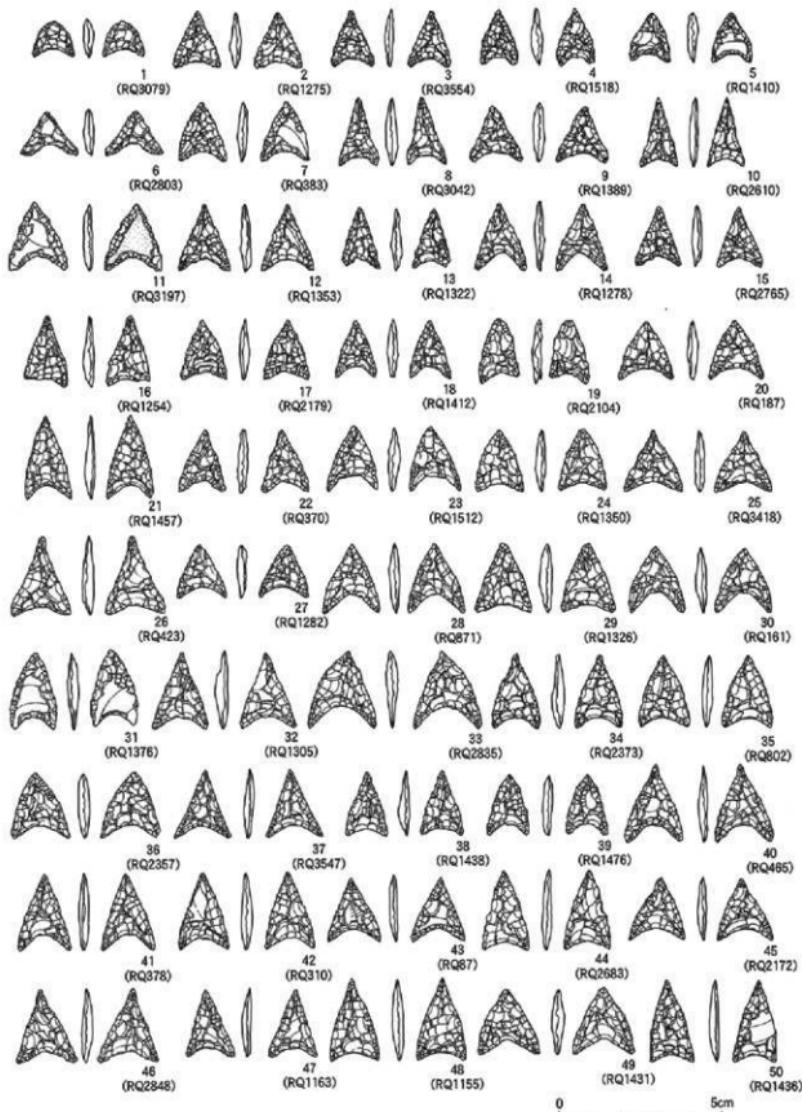
押出遺跡出土の石鏃は、総数2,121点を数え、石器組成での割合は42.5%と高い組成比率を持つ。縄文時代前期前半に石鏃の組成比率が高いことについては、これまで東根市小林A遺跡や宮城県名取市今熊野遺跡、福井県三方町島浜貝塚等で指摘されている。小林A遺跡（大木2式、3式）では、器種組成に占める石鏃の割合が20.6%と高い値を示し、同じく凹石の割合も高い。島浜貝塚も石鏃の組成比が46%と高く、合わせてここでは漁労具の組成比も高い。狩猟採取と植物食料の依存度が大きかったことが言える。一方、大木5式を主体とする立川町早坂台遺跡では石鏃よりも石斧や打製石斧の組成比が高く、生業活動の違いをうかがわせる。ともかく、縄文時代前期に始まる縄文海進と気候の温暖化による照葉樹林帯の広がりが自然環境を大きく変化させ、食料となる動物や植物の生態にも影響を与えたことは明らかで、大谷地の湿地帯が広がる押出周辺でも、生態系の変化があったろうことは想像される。石鏃の多さは、生業の変化を物語っている。



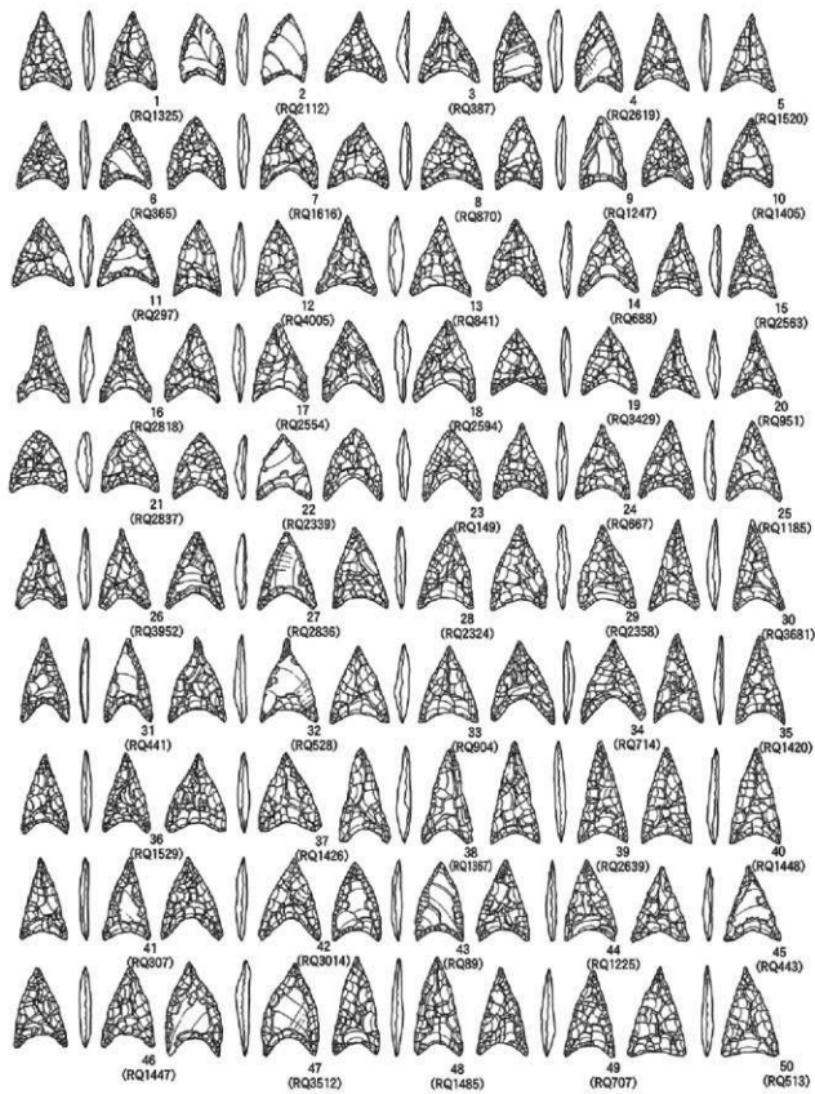
第148図 出土石器(1) 石鏃(1)



第149図 出土石器(2) 石鏃(2)

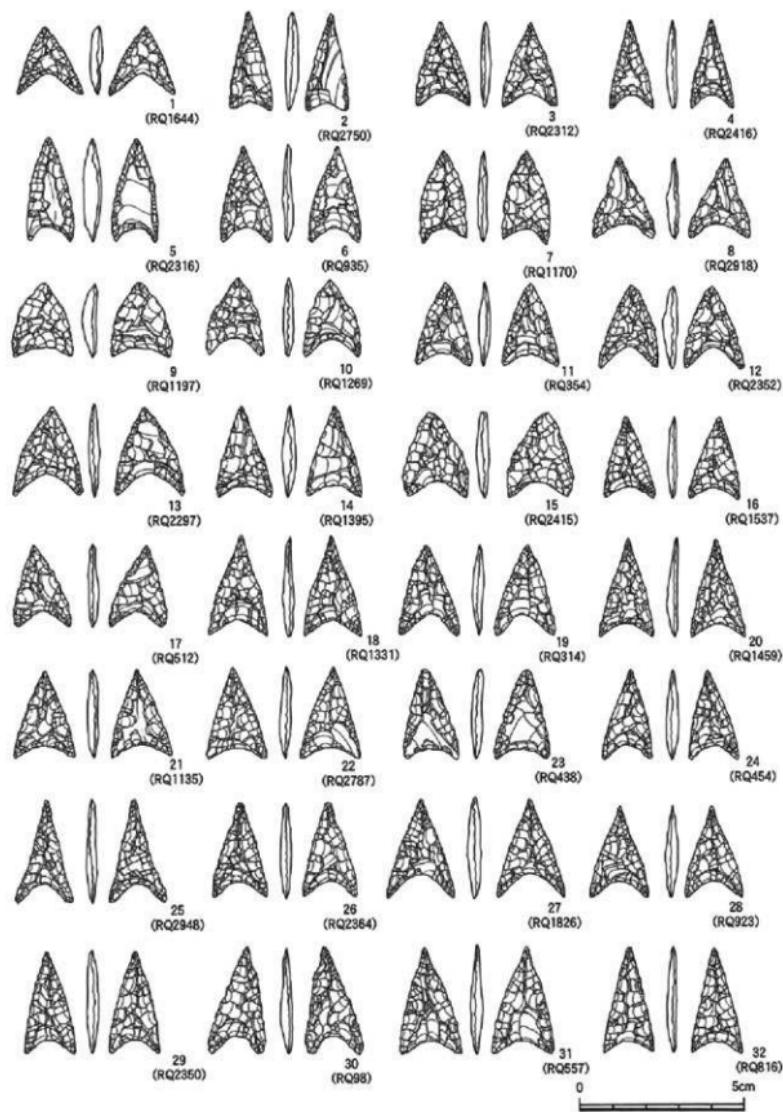


第150図 出土石器(3) 石鏃(3)

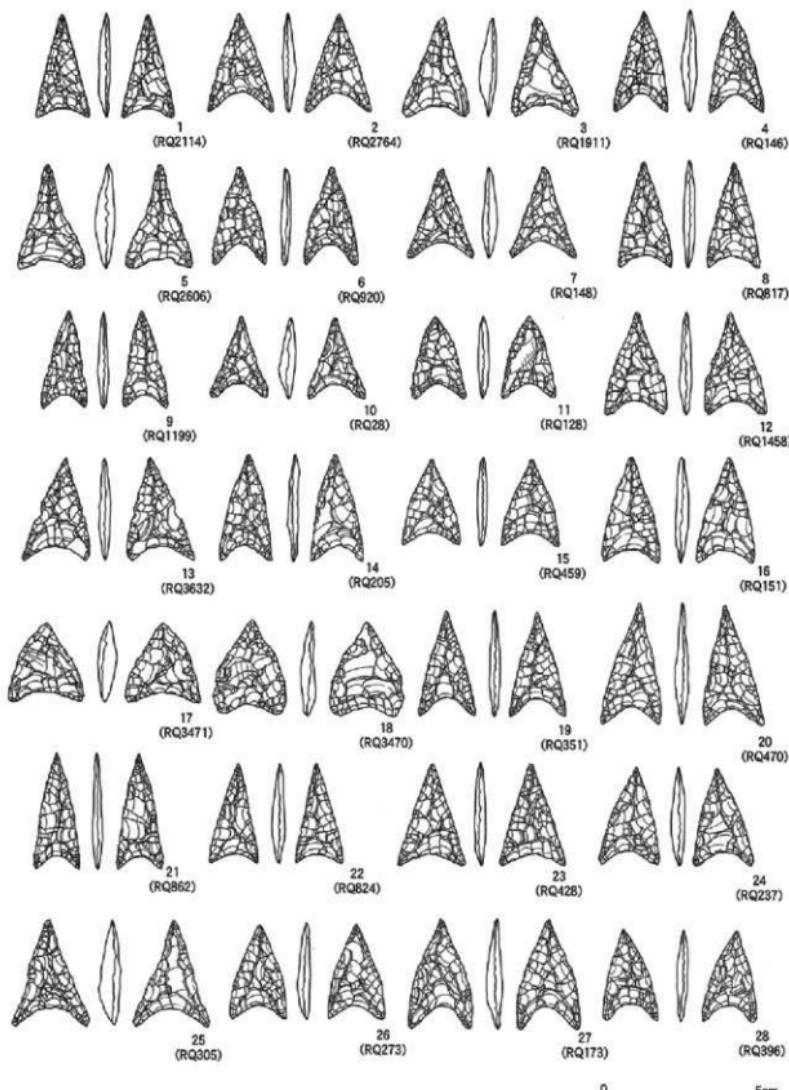


0 5cm

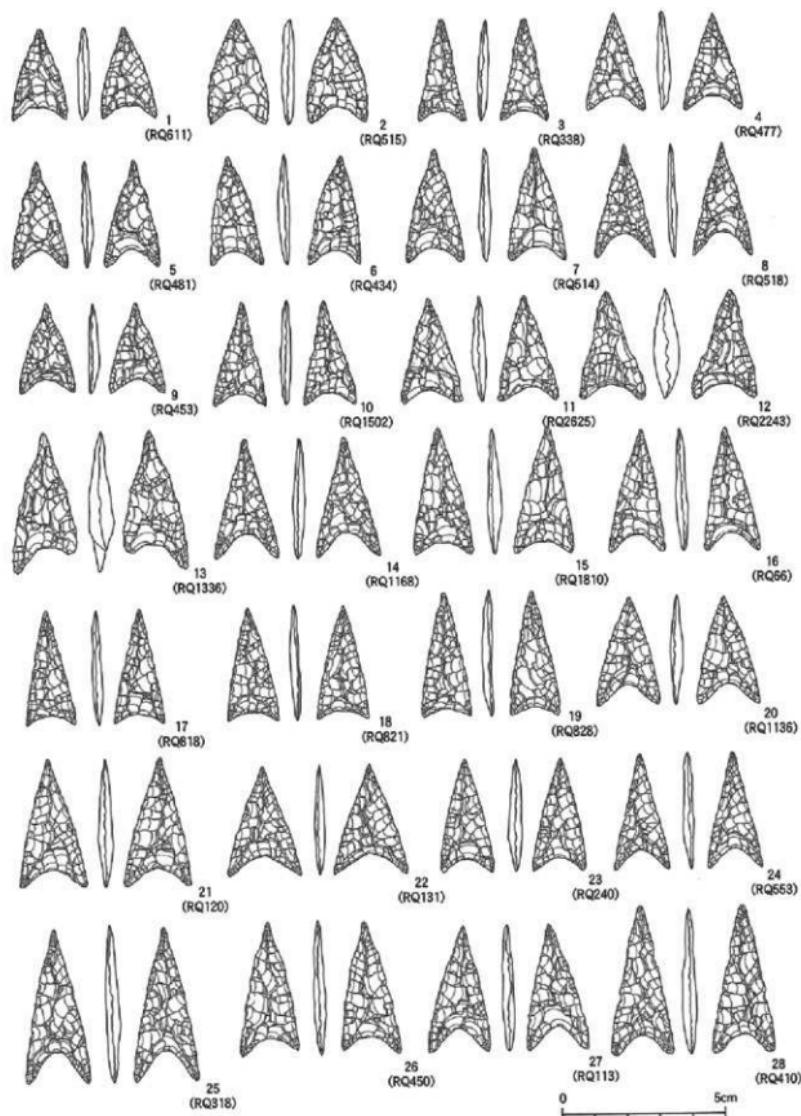
第151図 出土石器(4) 石鏃(4)



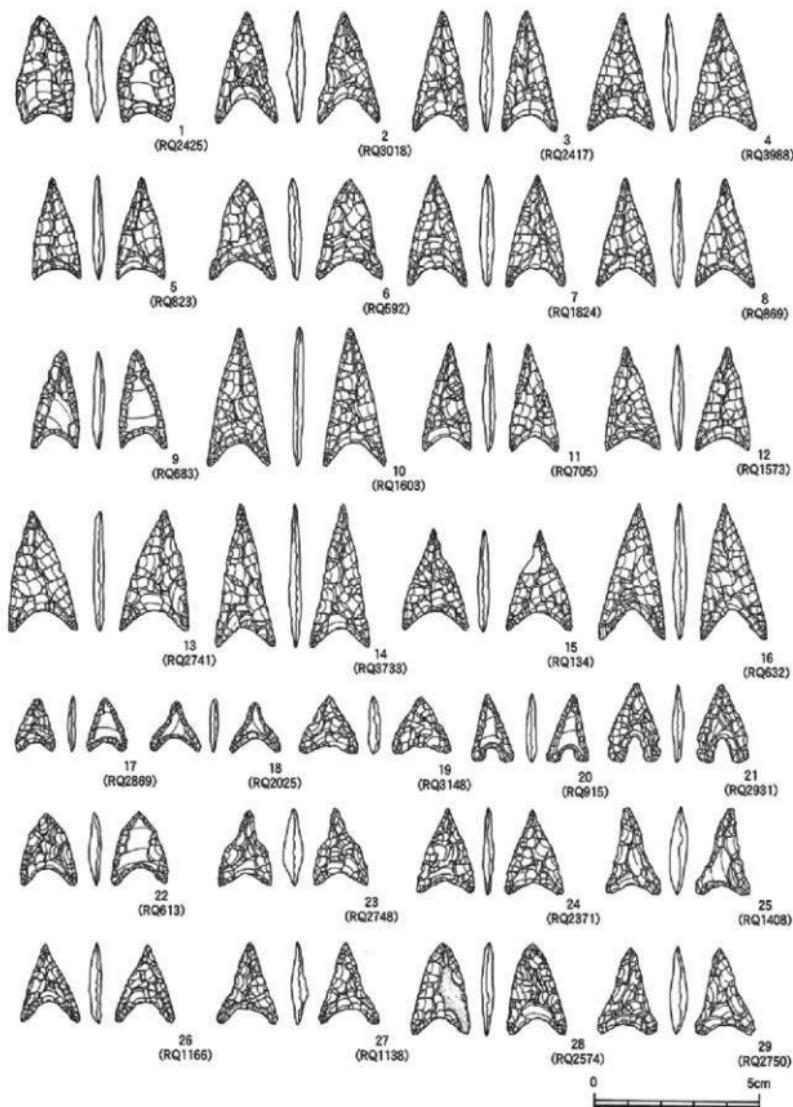
第152図 出土石器(5) 石鏃(5)



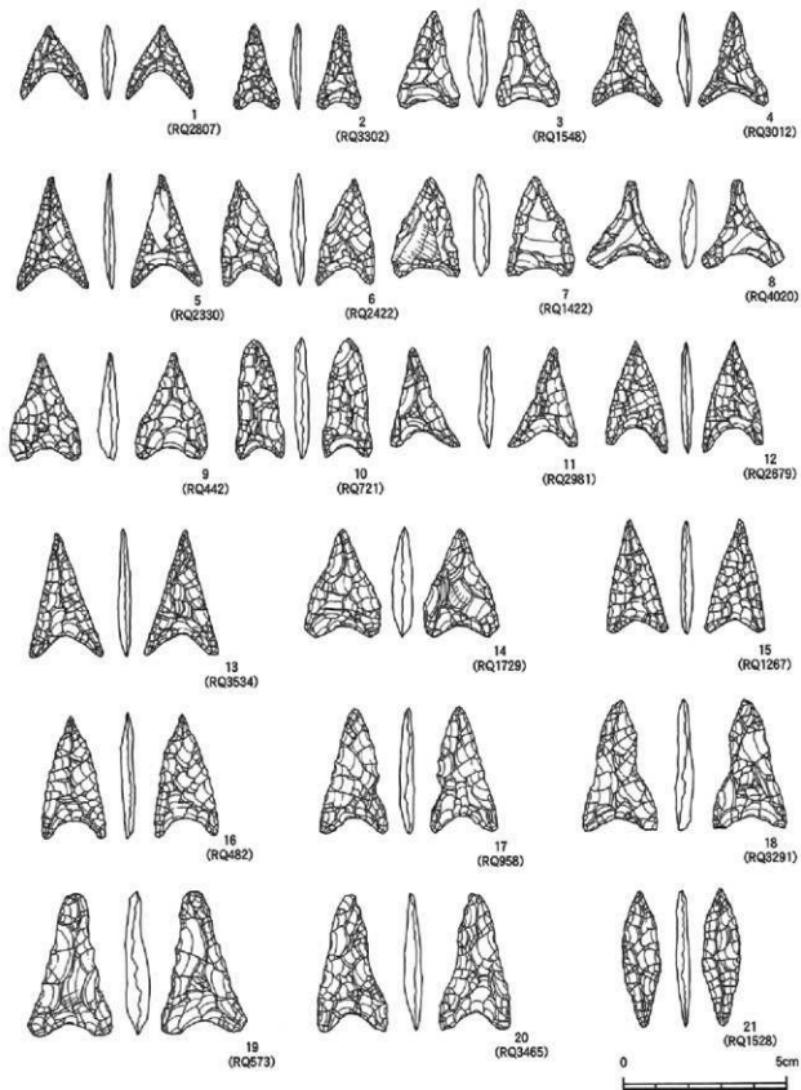
第153図 出土石器(6) 石鏃(6)



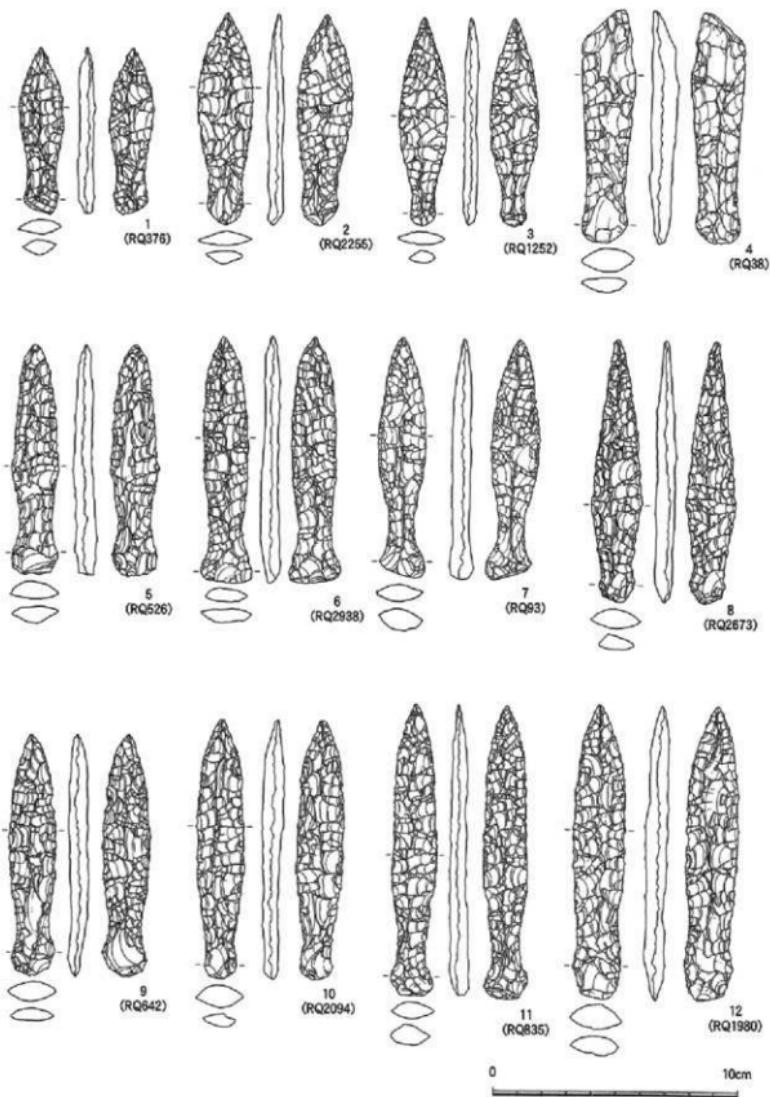
第154図 出土石器(7) 石鏃(7)



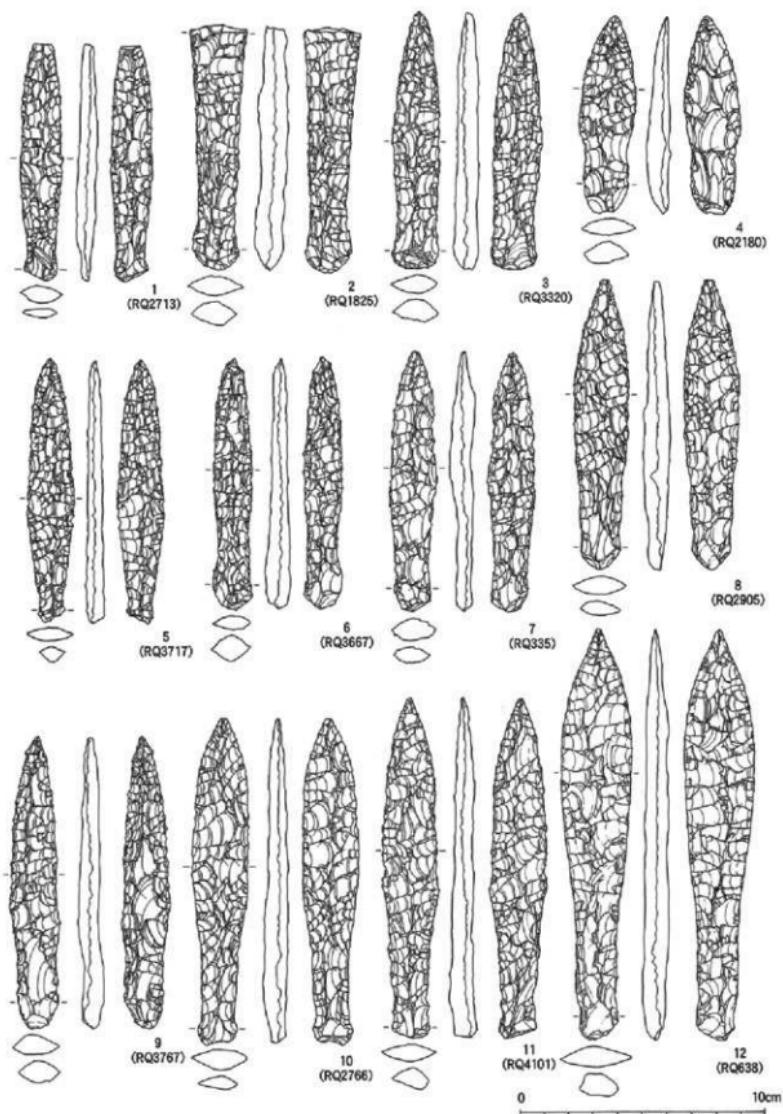
第155図 出土石器(8) 石鏃(8)



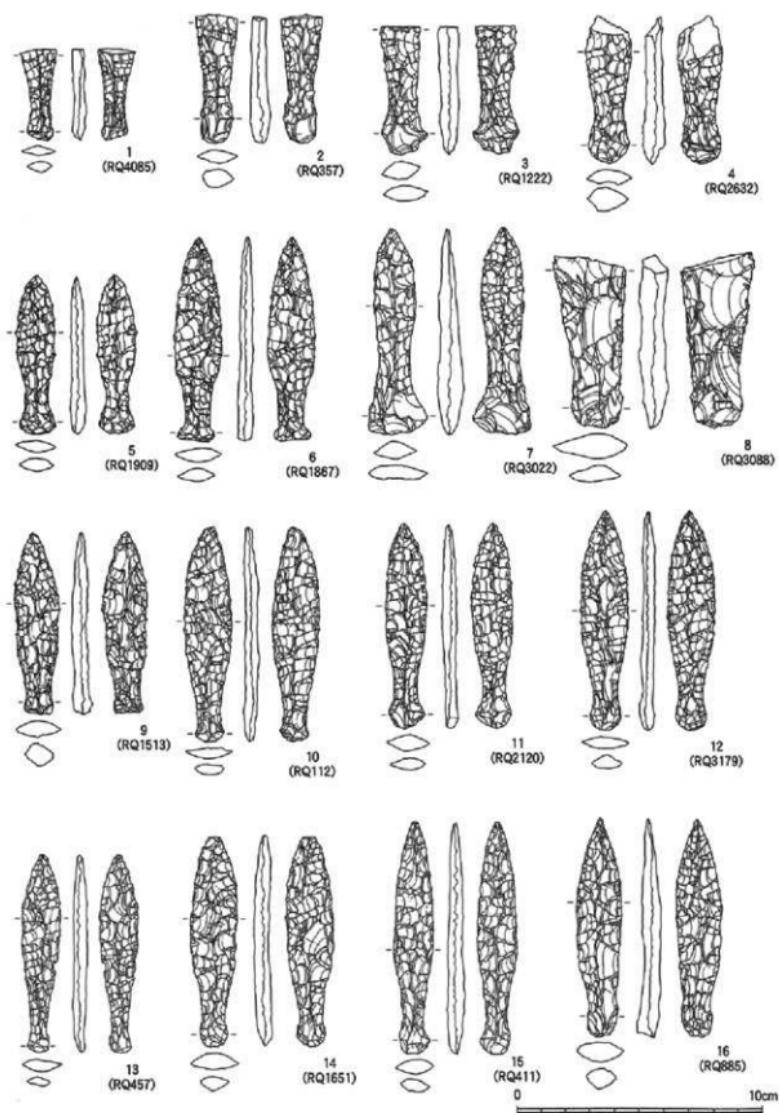
第156図 出土石器(9) 石鏃(9)



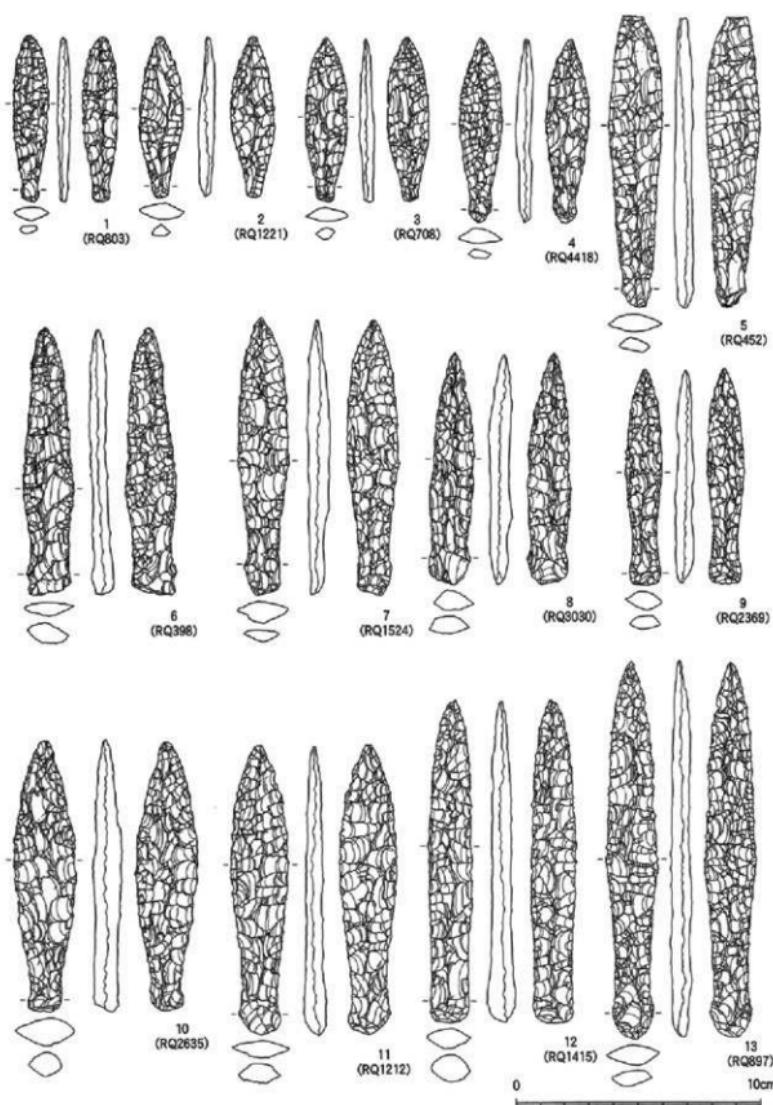
第157図 出土石器(10) 押出型ポイント(1)



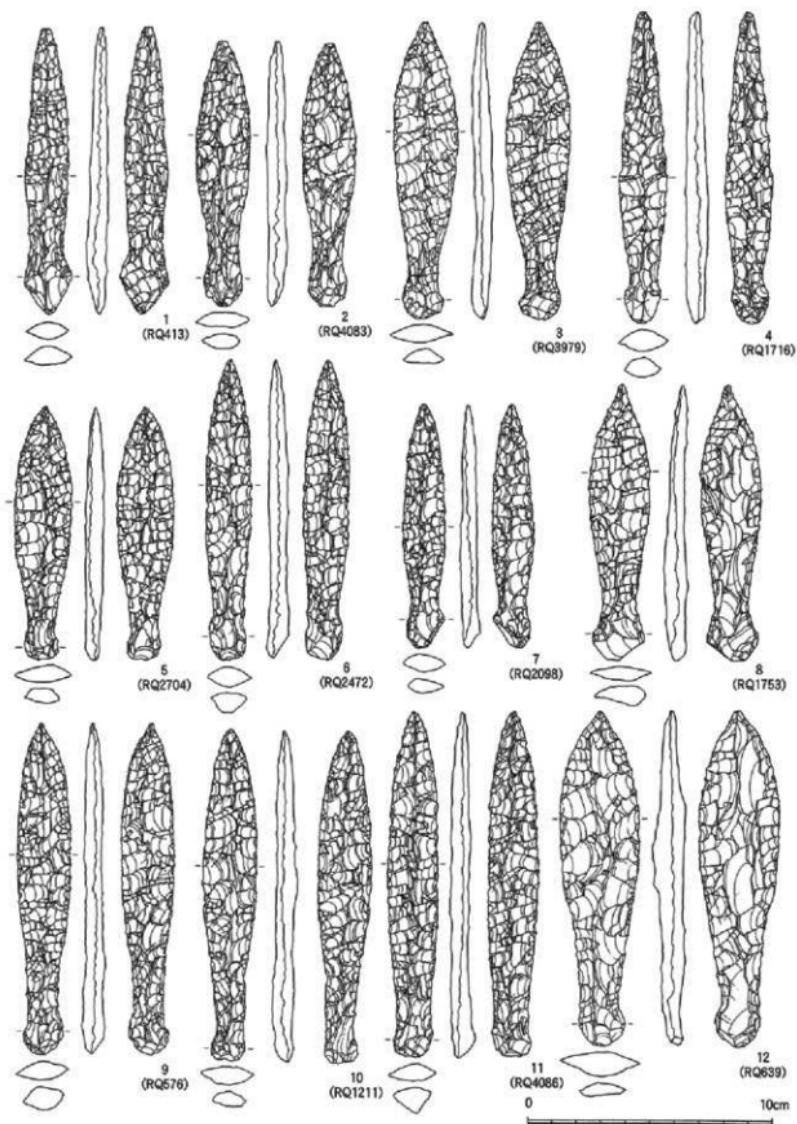
第158図 出土石器(11) 押出型ポイント(2)



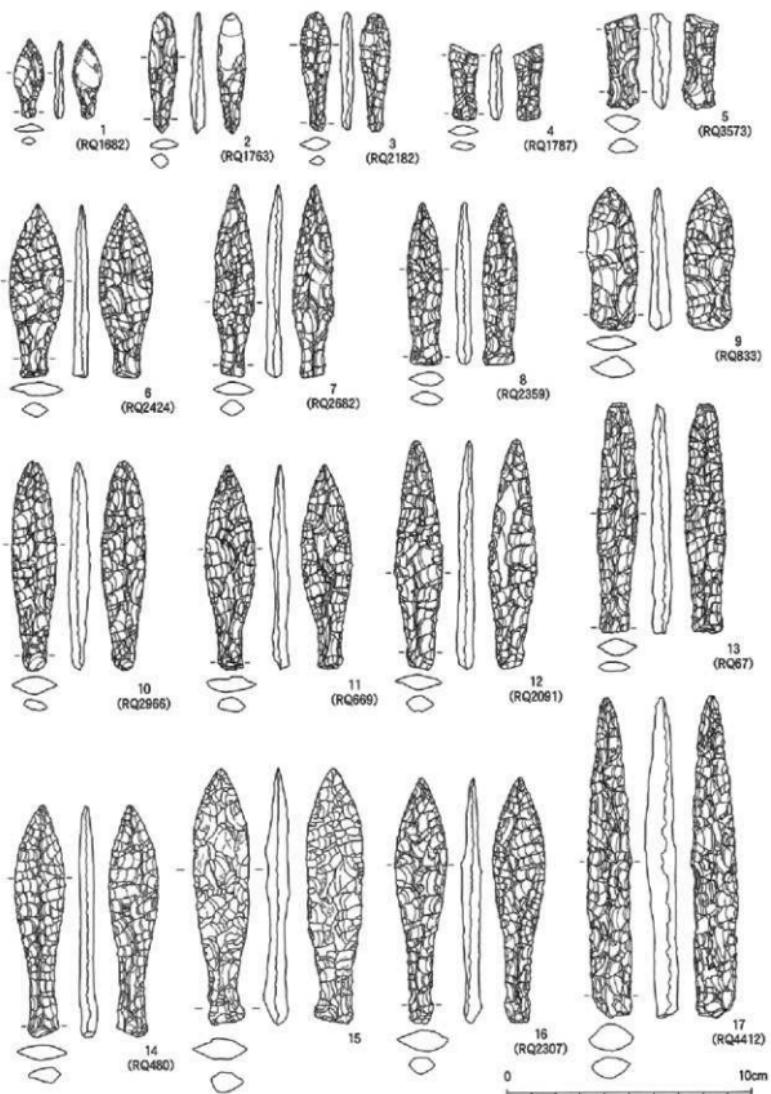
第159図 出土石器(12) 押出型ポイント(3)



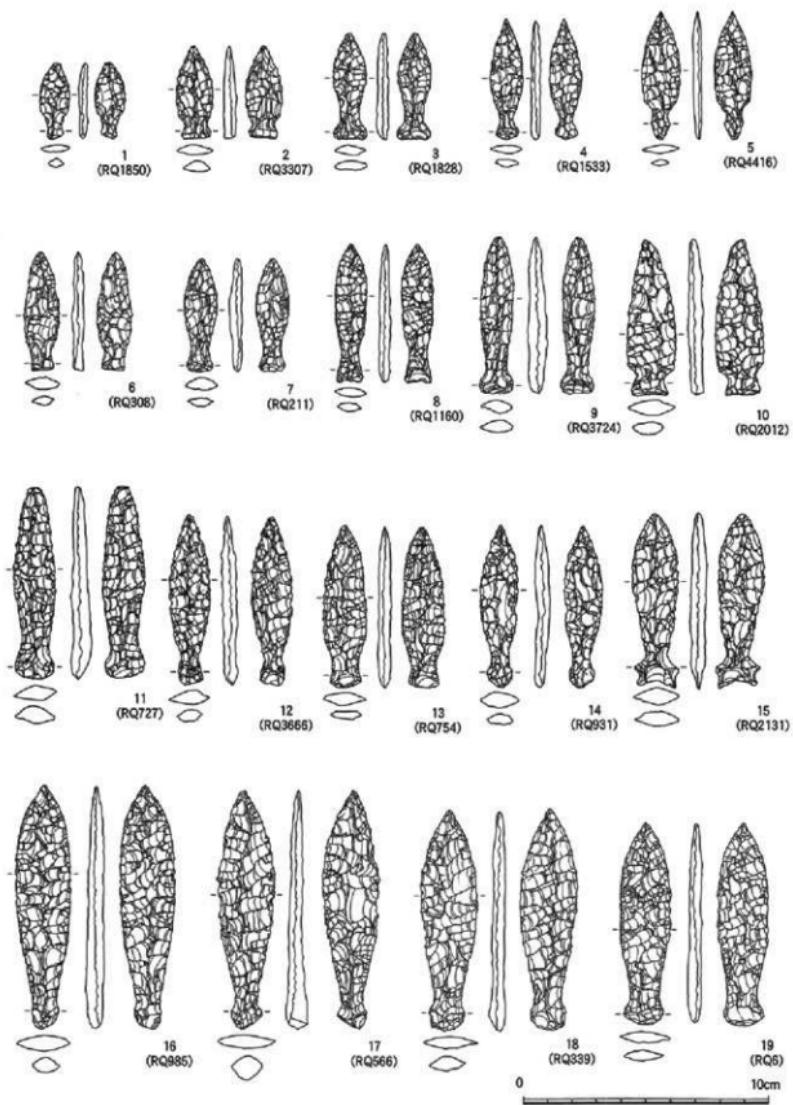
第160図 出土石器(13) 押出型ポイント(4)



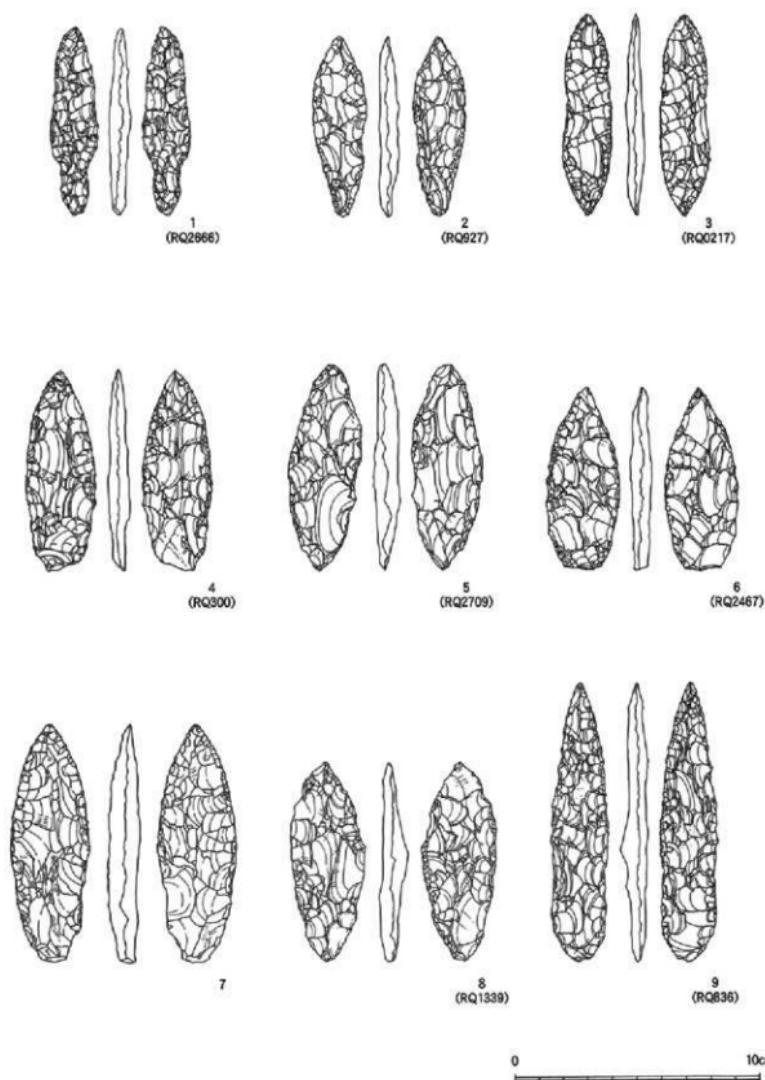
第161図 出土石器(14) 押出型ポイント(5)



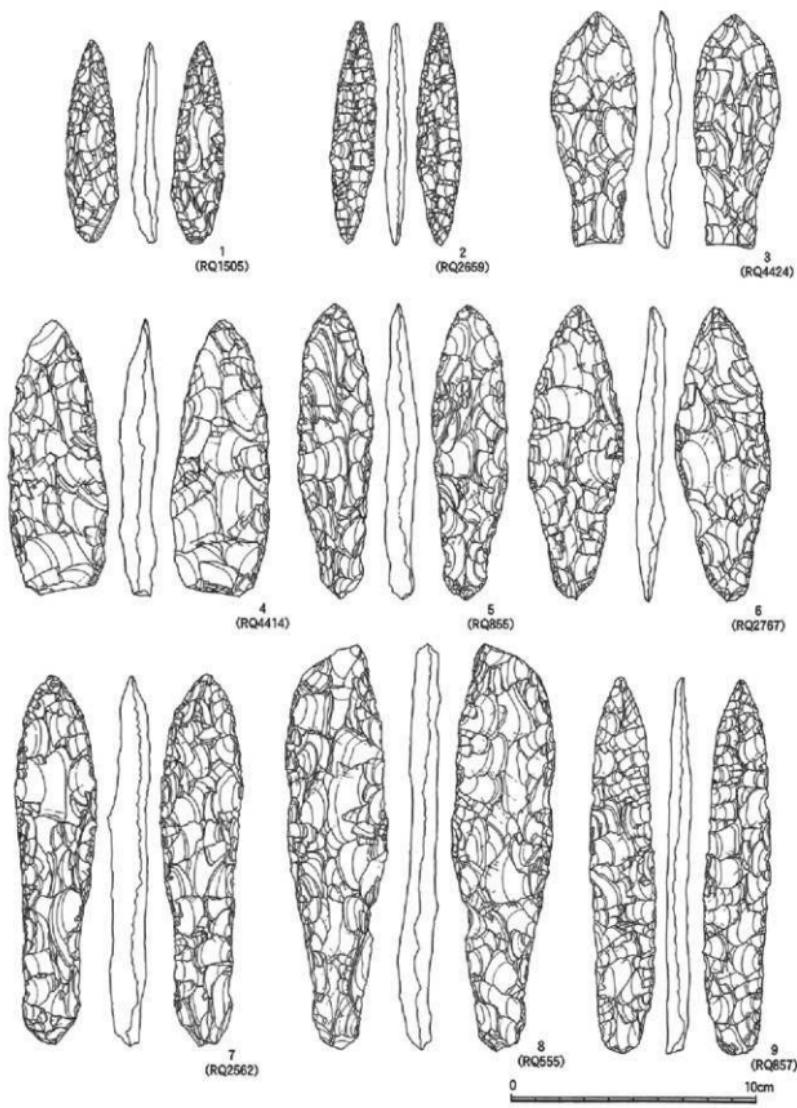
第162図 出土石器(15) 押出型ポイント(6)



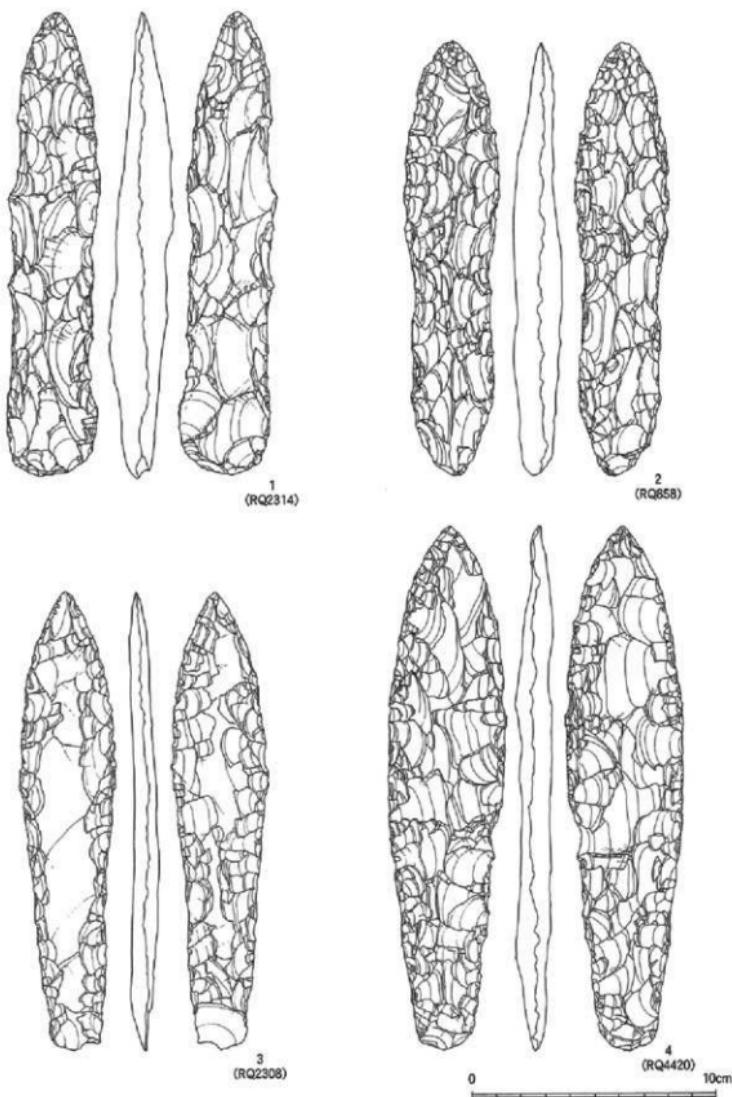
第163図 出土石器(16) 押出型ポイント(7)



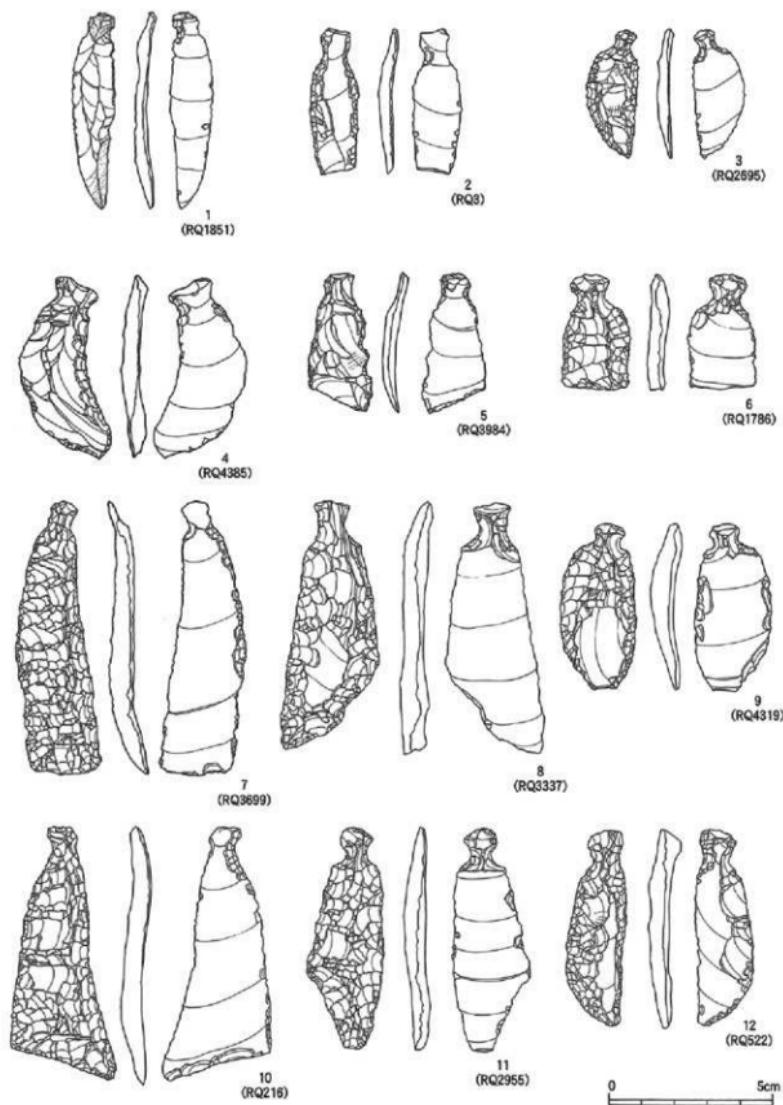
第164図 出土石器(17) 石槍(1)



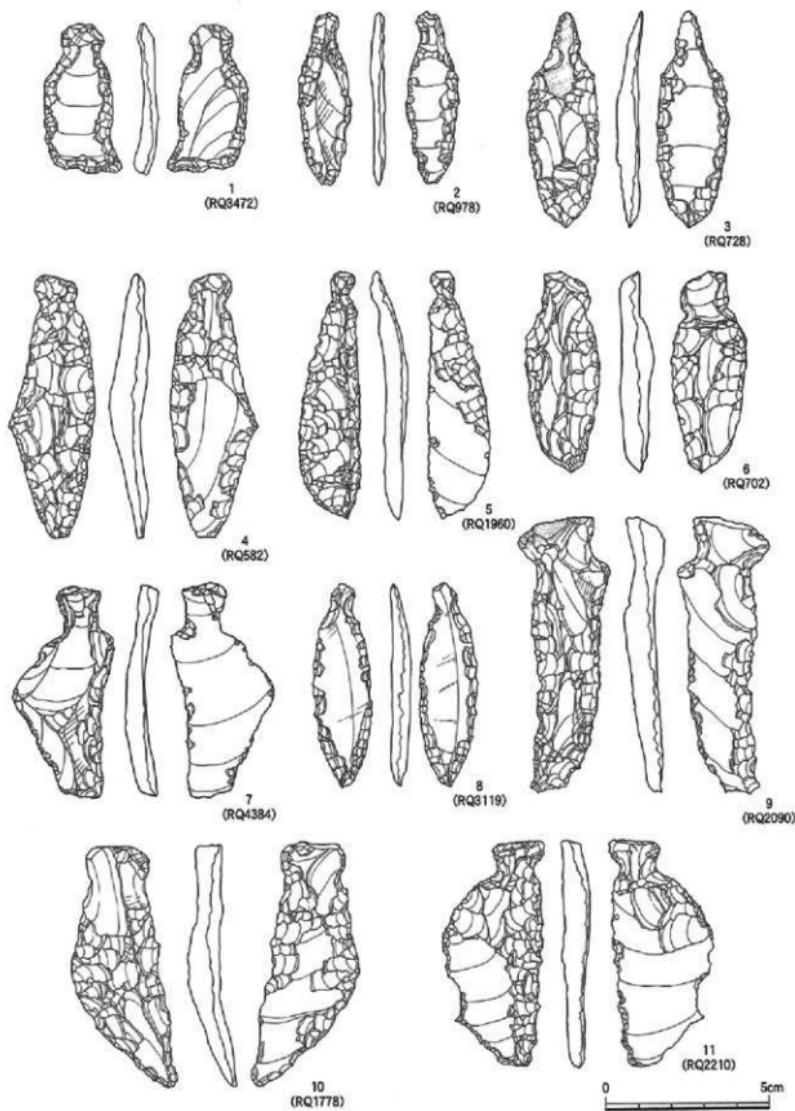
第165図 出土石器(18) 石捨(2)



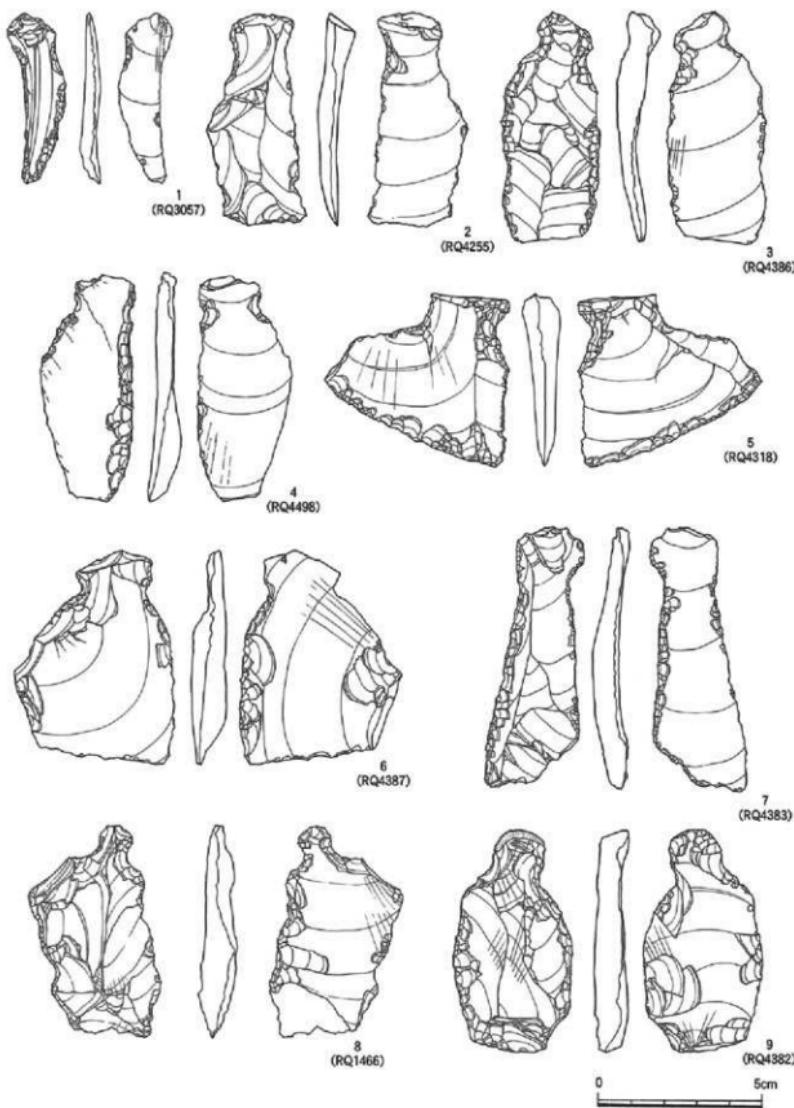
第166図 出土石器(19) 石槍(3)



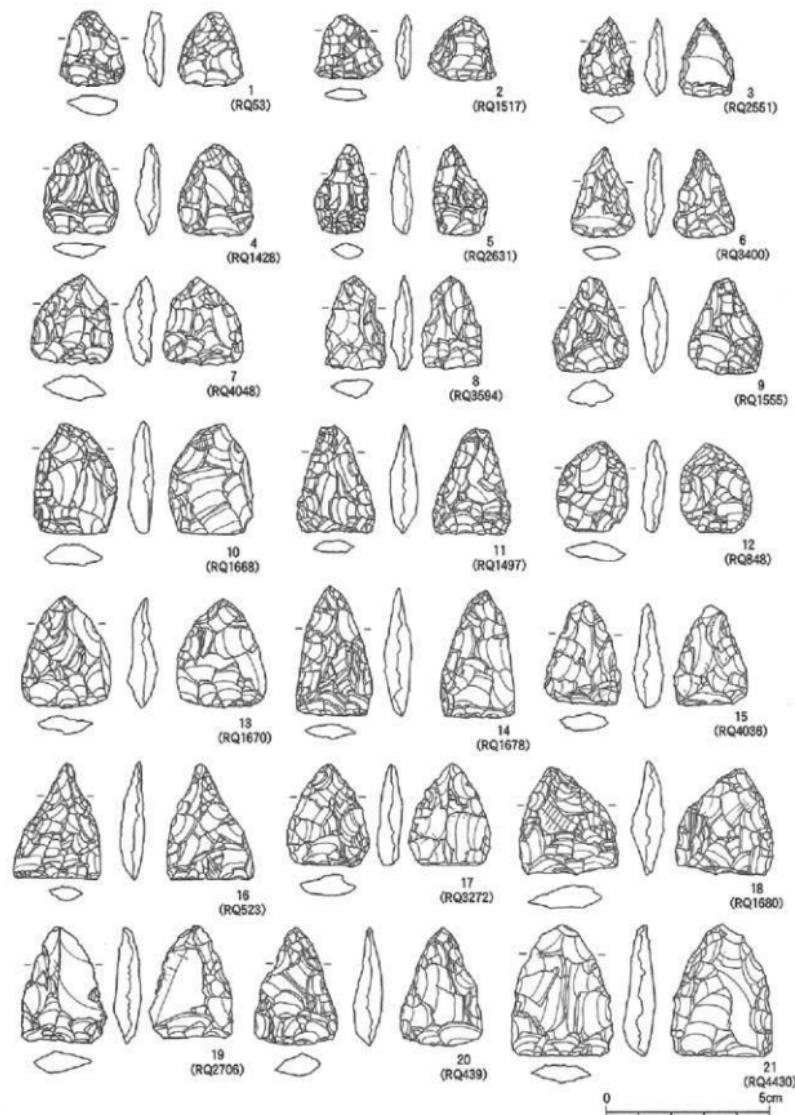
第167図 出土石器(20) 石匙(1)



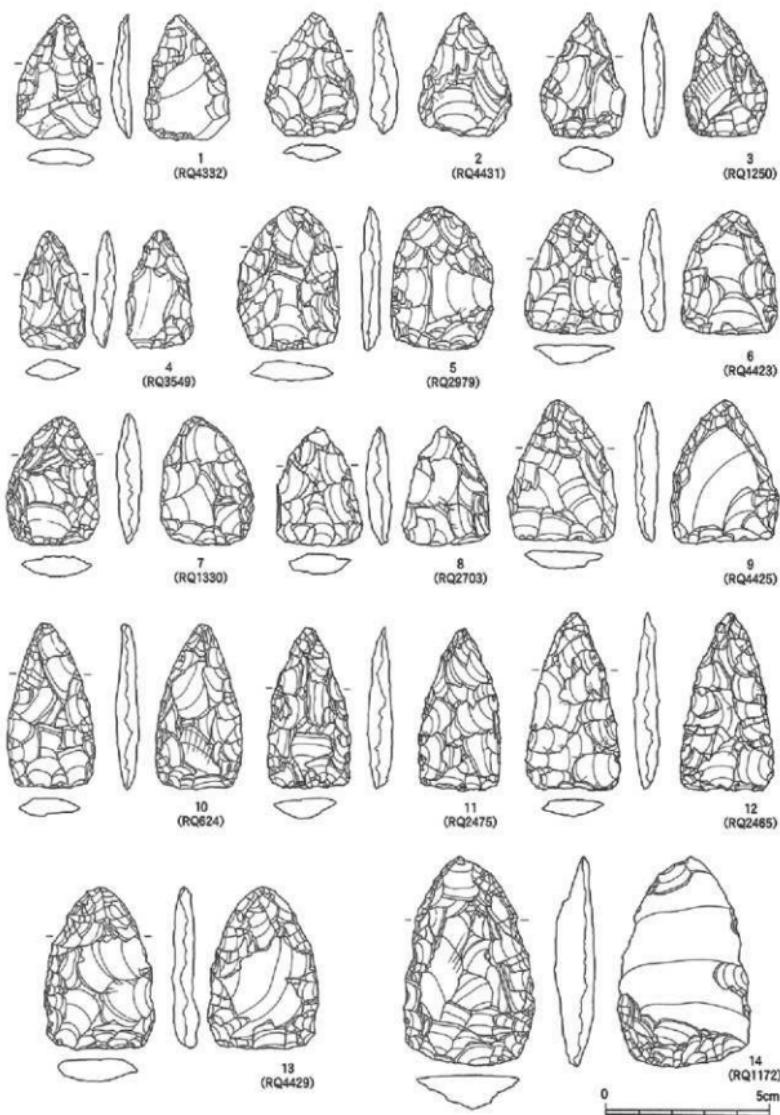
第168図 出土石器(21) 石匙(2)



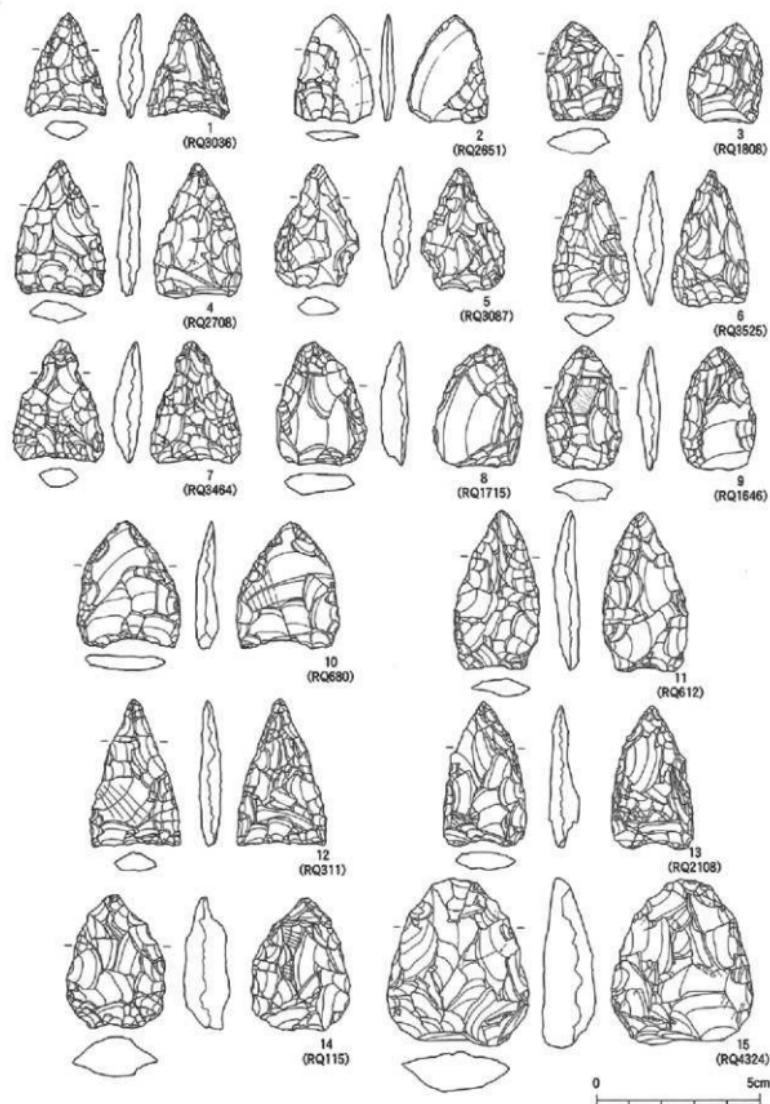
第169図 出土石器(22) 石匙(3)



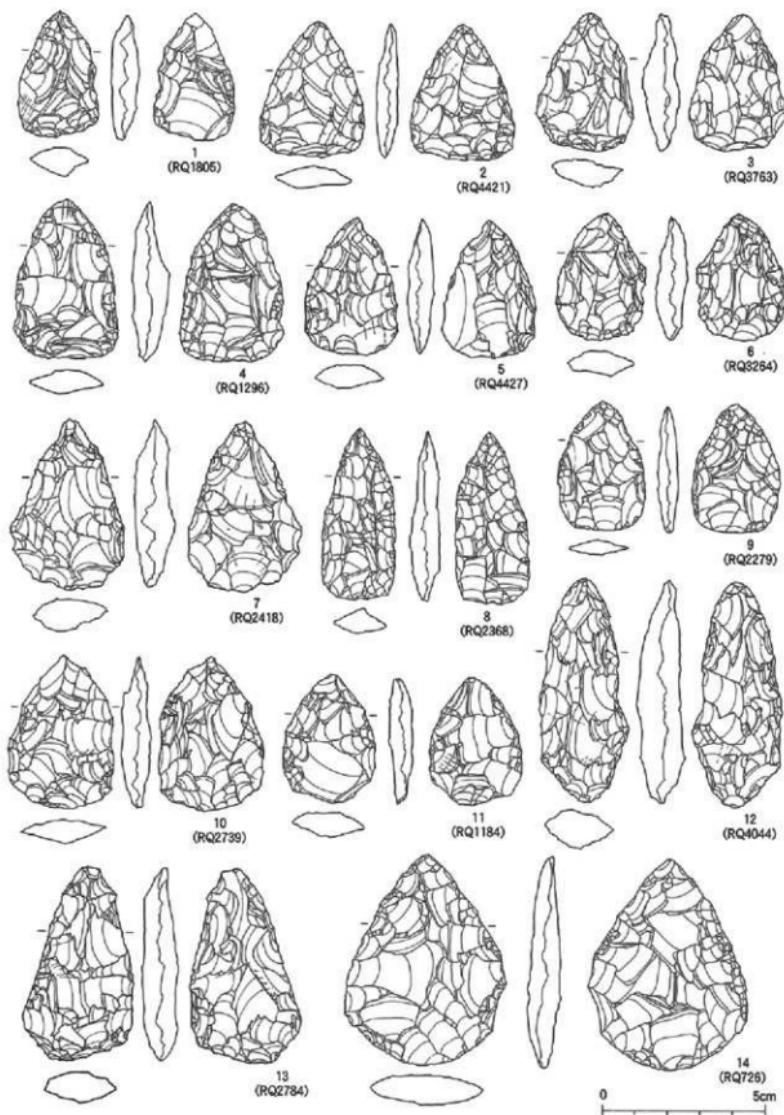
第170図 出土石器(23) 三角スクレイバー(1)



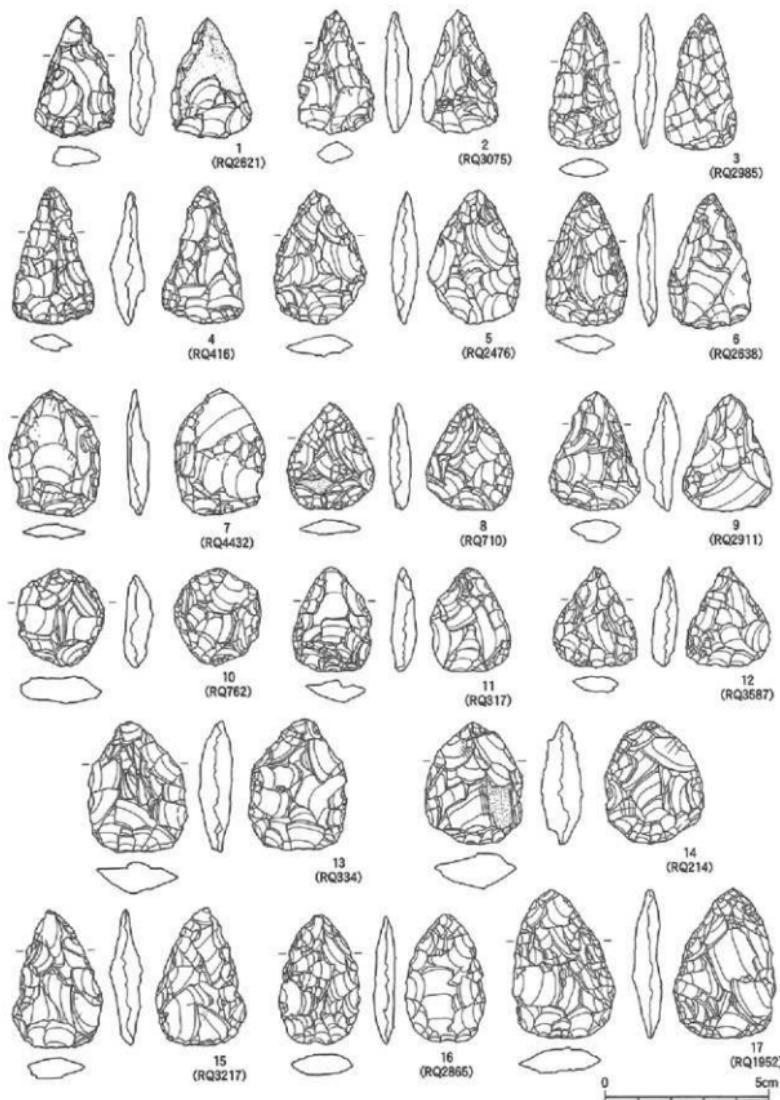
第171図 出土石器(24) 三角スクレイバー(2)



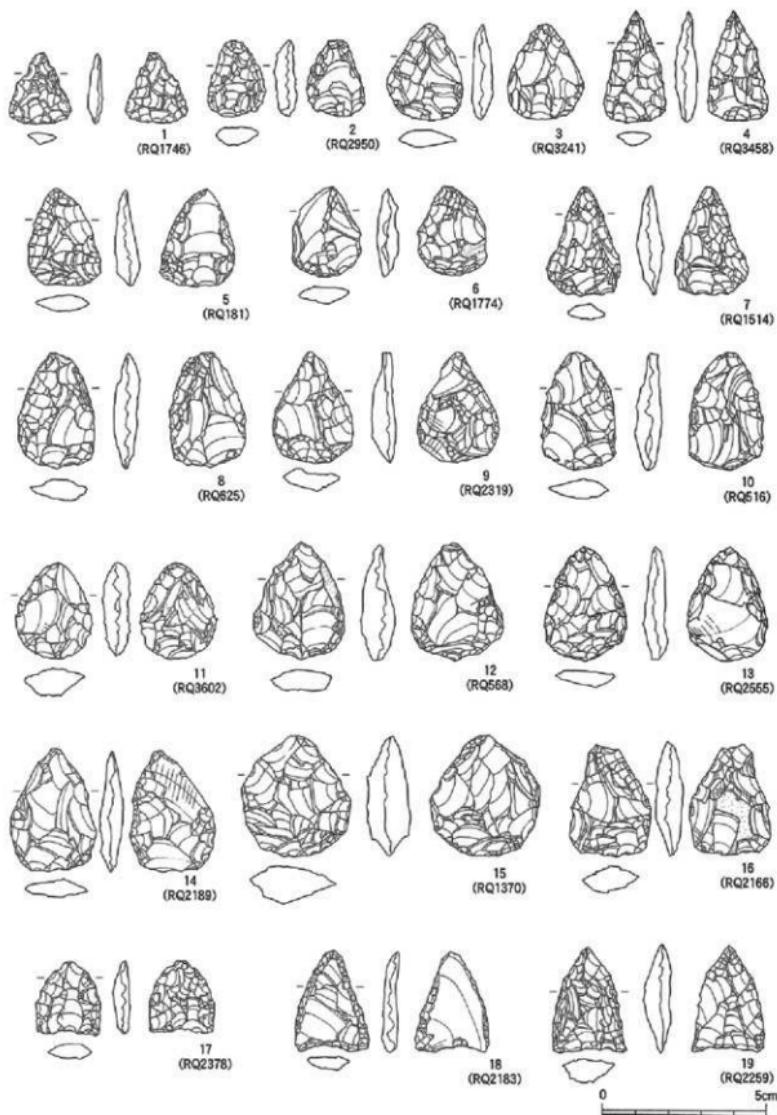
第172図 出土石器(25) 三角スクレイバー(3)



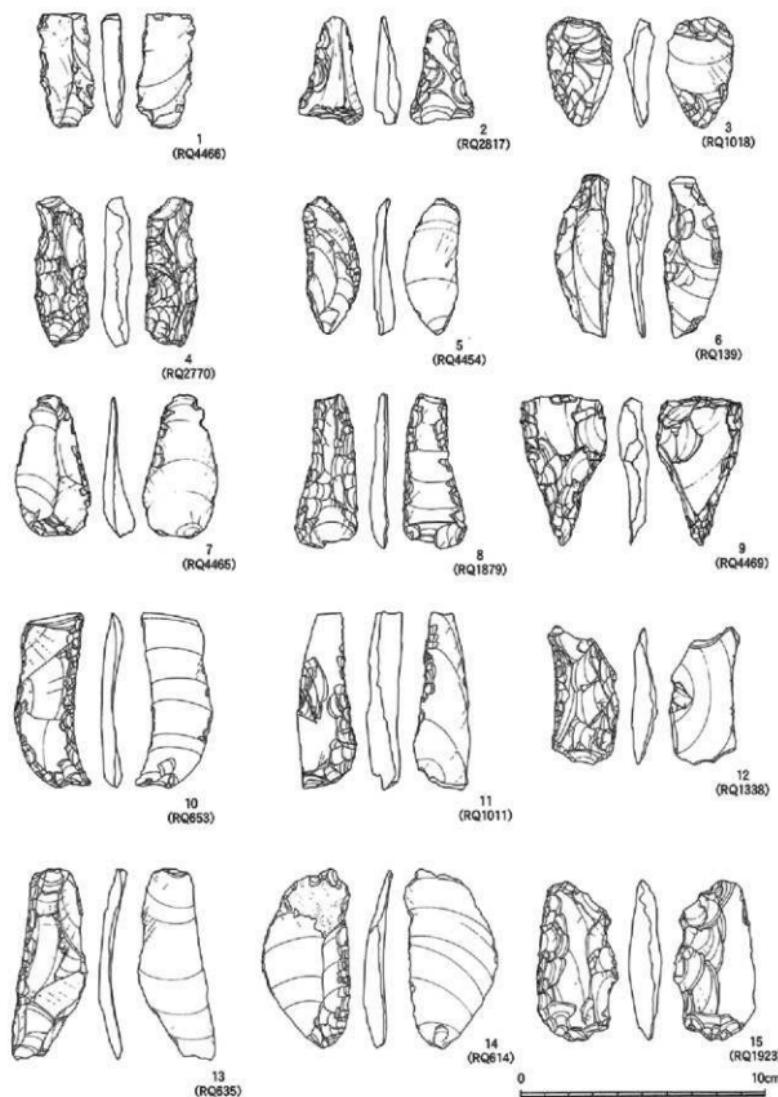
第173図 出土石器(26) 三角スクリーバー(4)



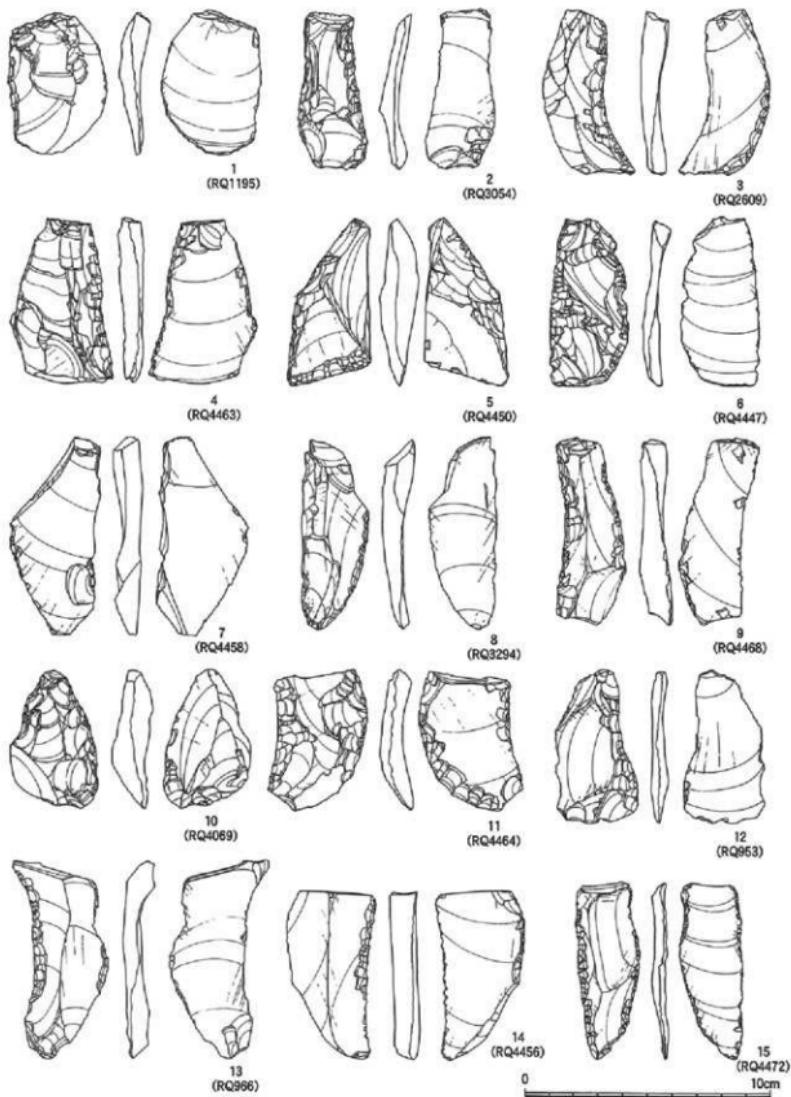
第174図 出土石器(27) 三角スクレイバー(5)



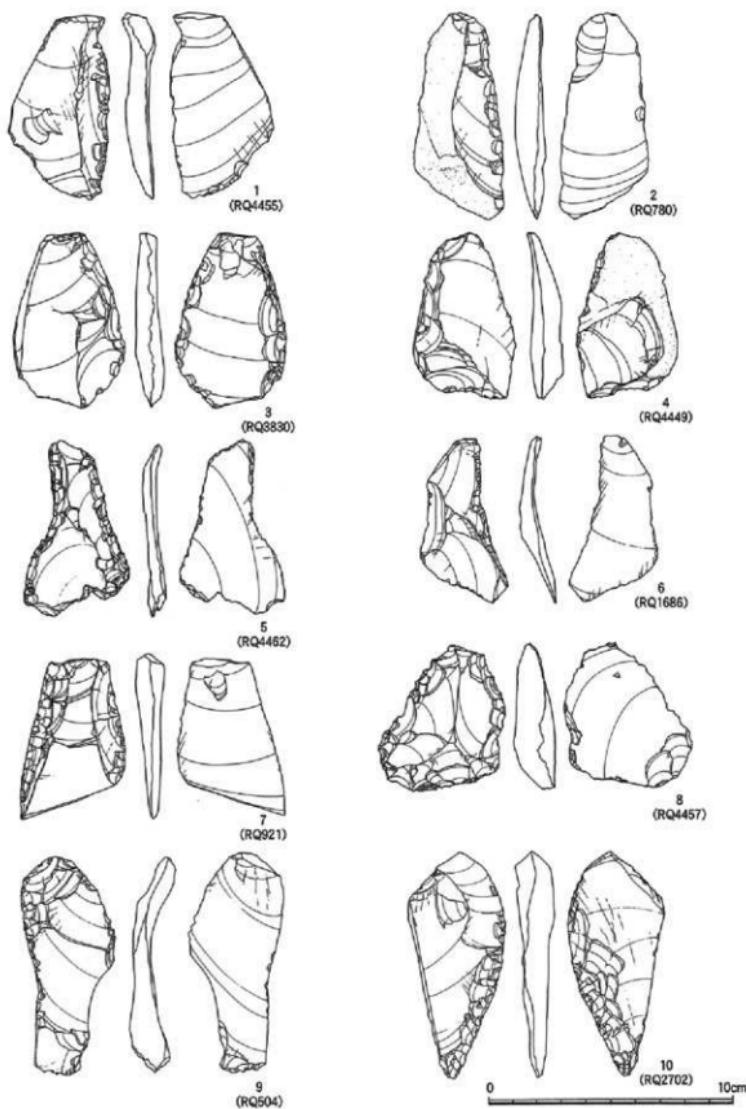
第175図 出土石器(28) 三角スクレイバー(6)



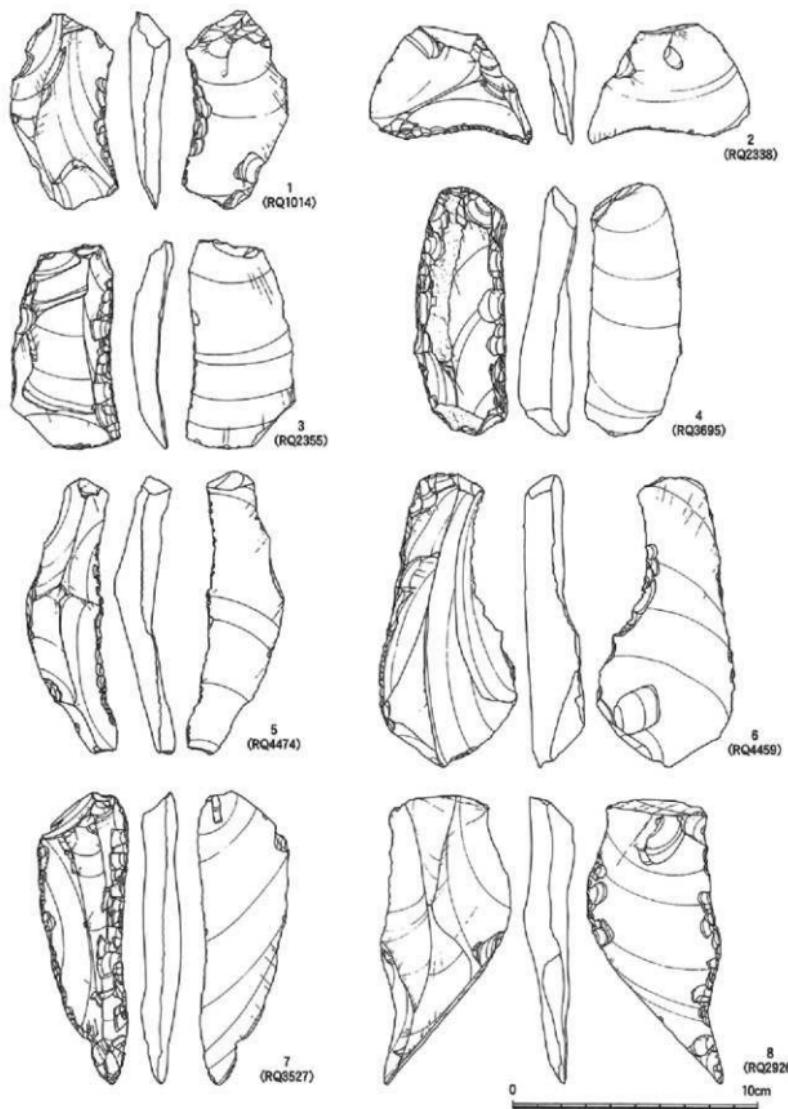
第176図 出土石器(29) スクレイパー(1)



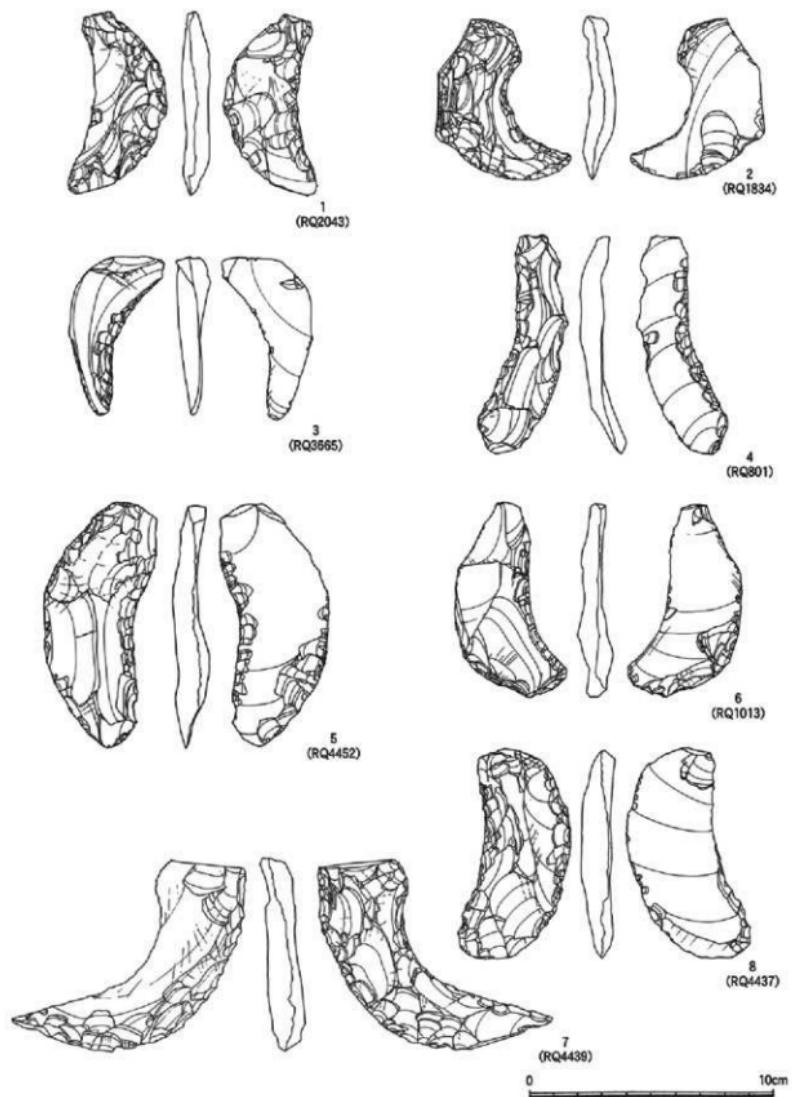
第177図 出土石器(30) スクレイバー(2)



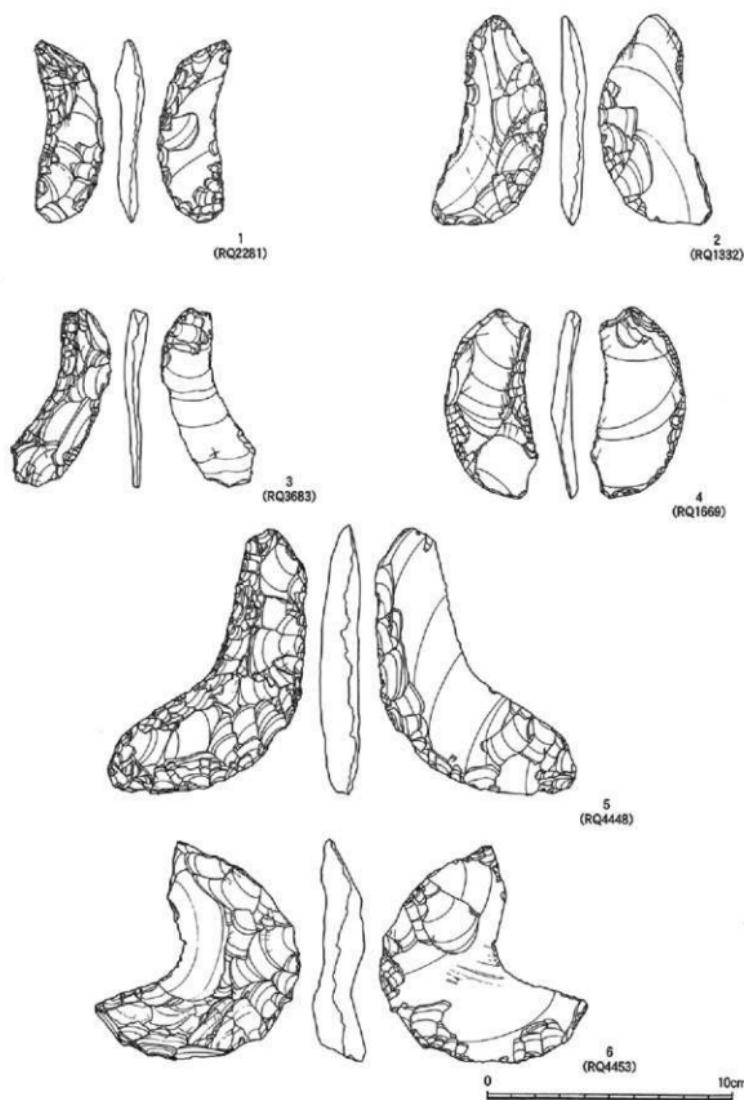
第178図 出土石器(31) スクレイパー(3)



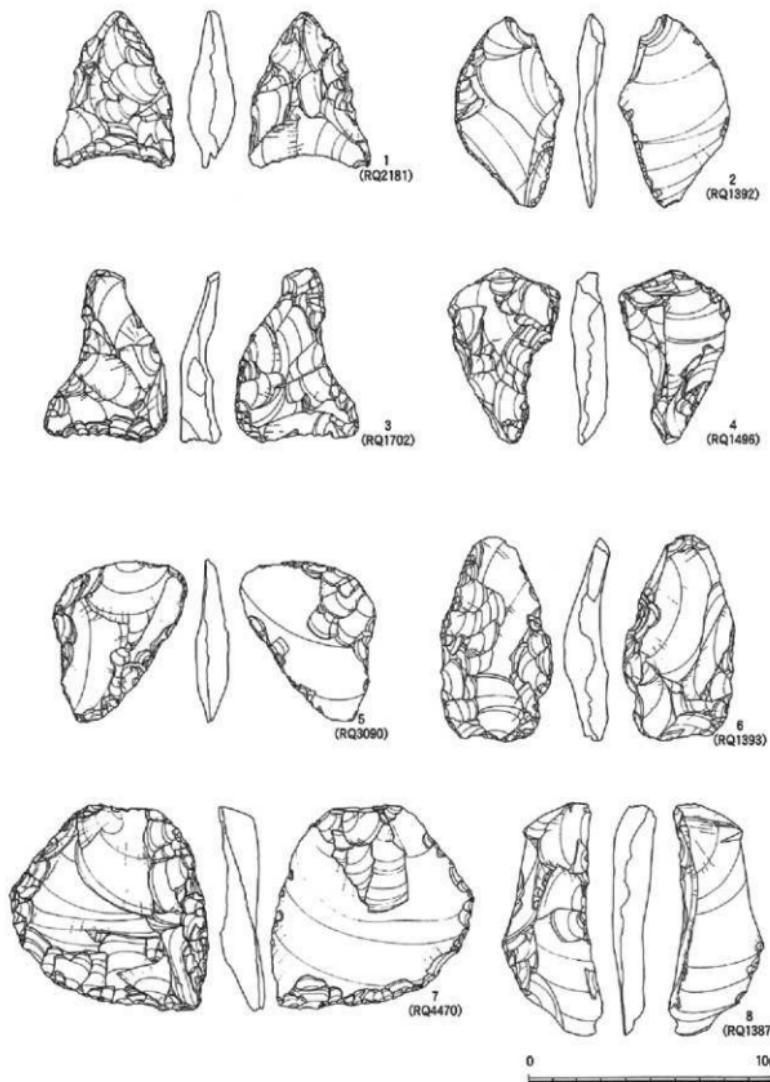
第179図 出土石器(32) スクレイパー(4)



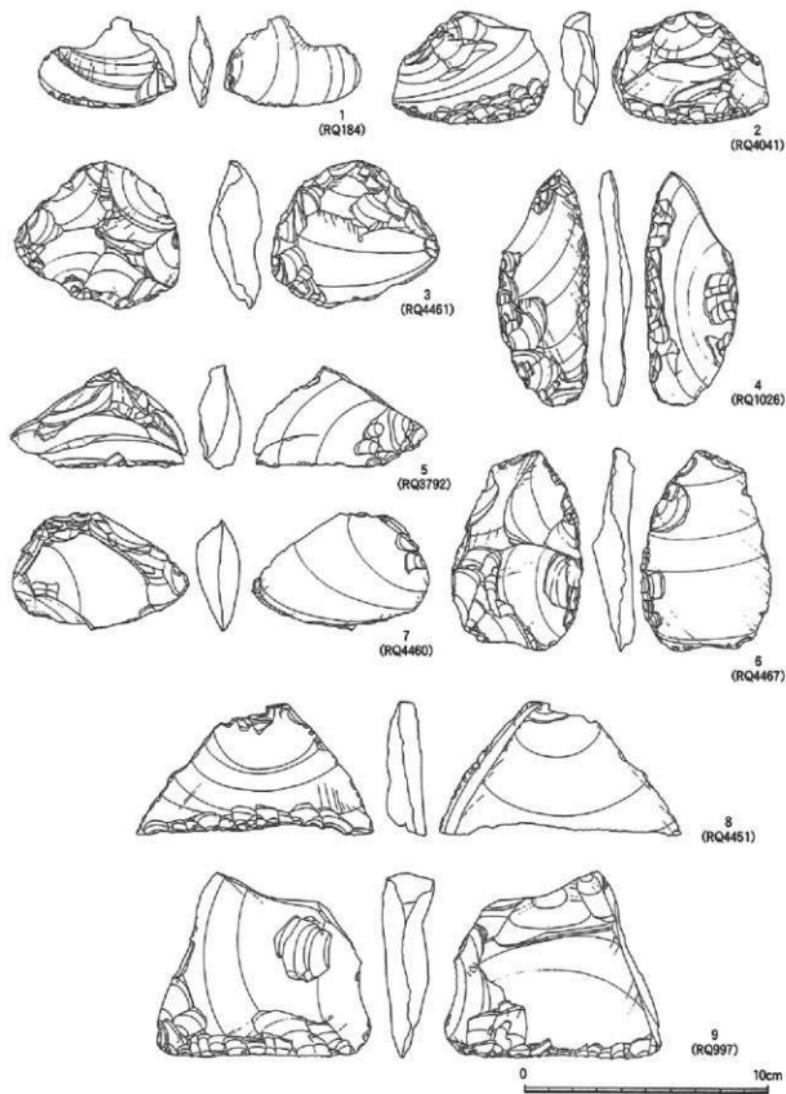
第180図 出土石器(33) スクレイパー(5)



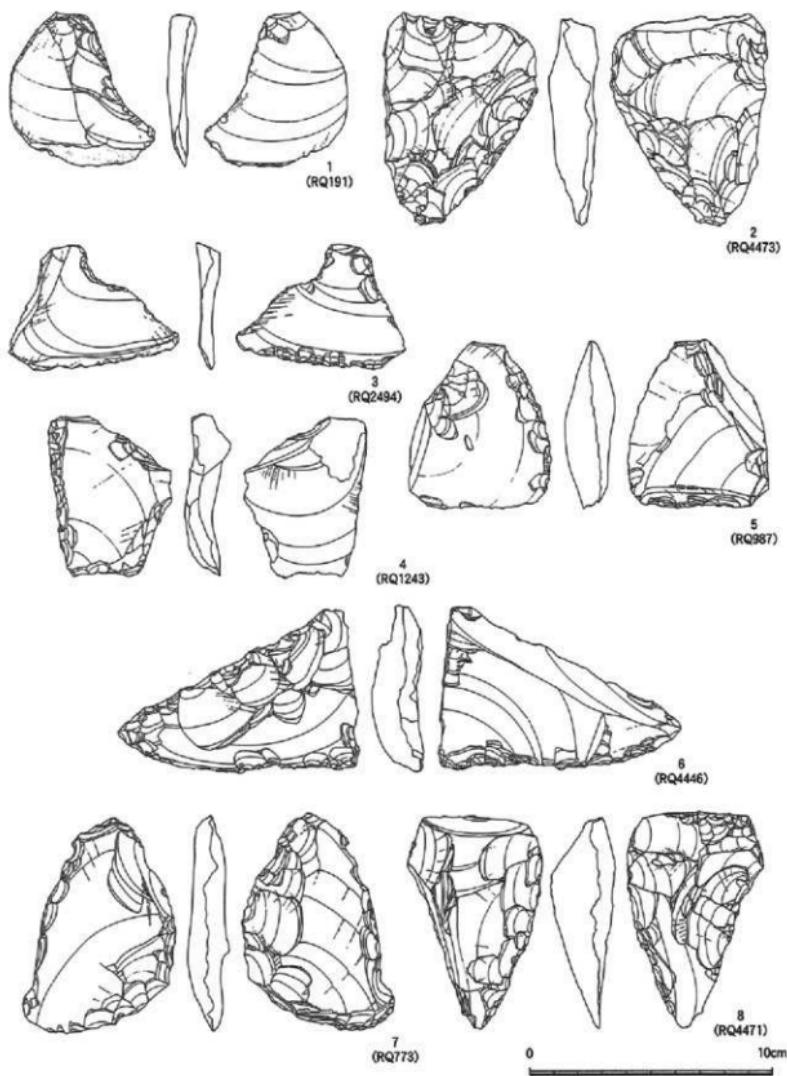
第181図 出土石器(34) スクレイバー(6)



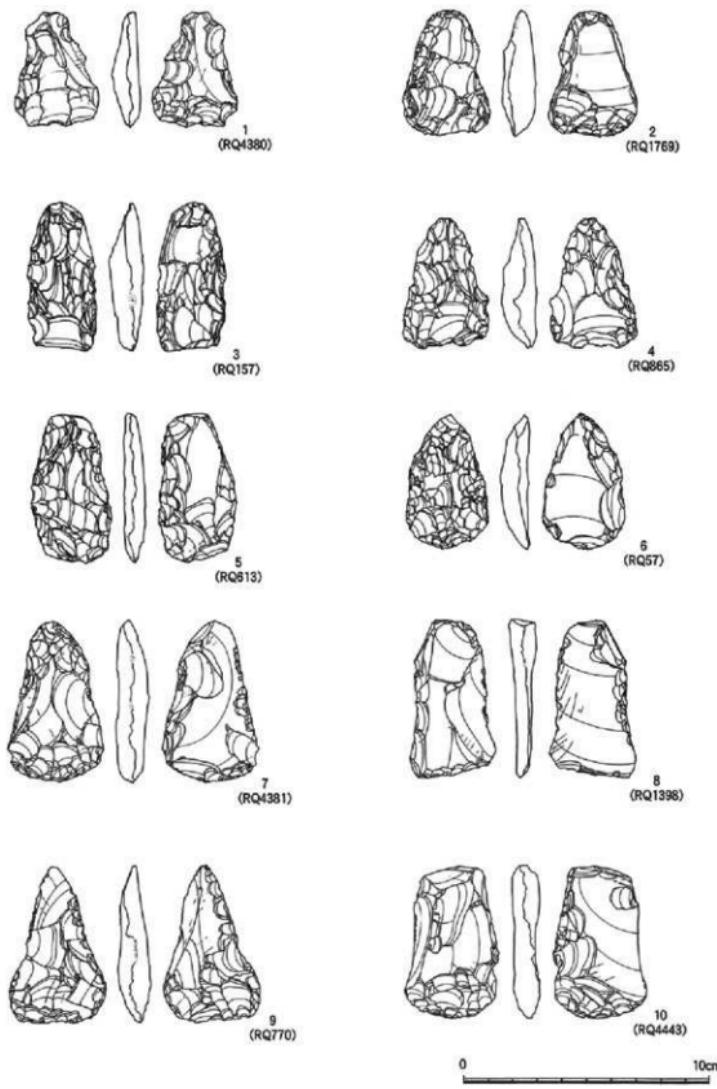
第182図 出土石器(35) スクレイパー(7)



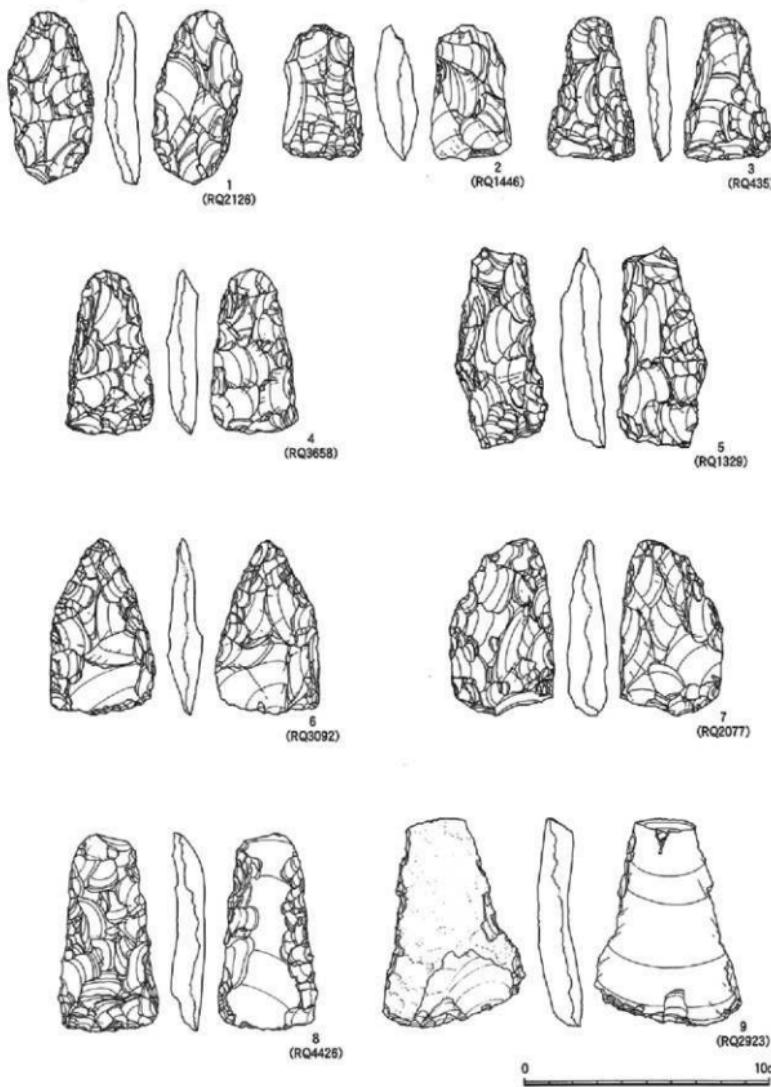
第183図 出土石器(36) スクレイバー(8)



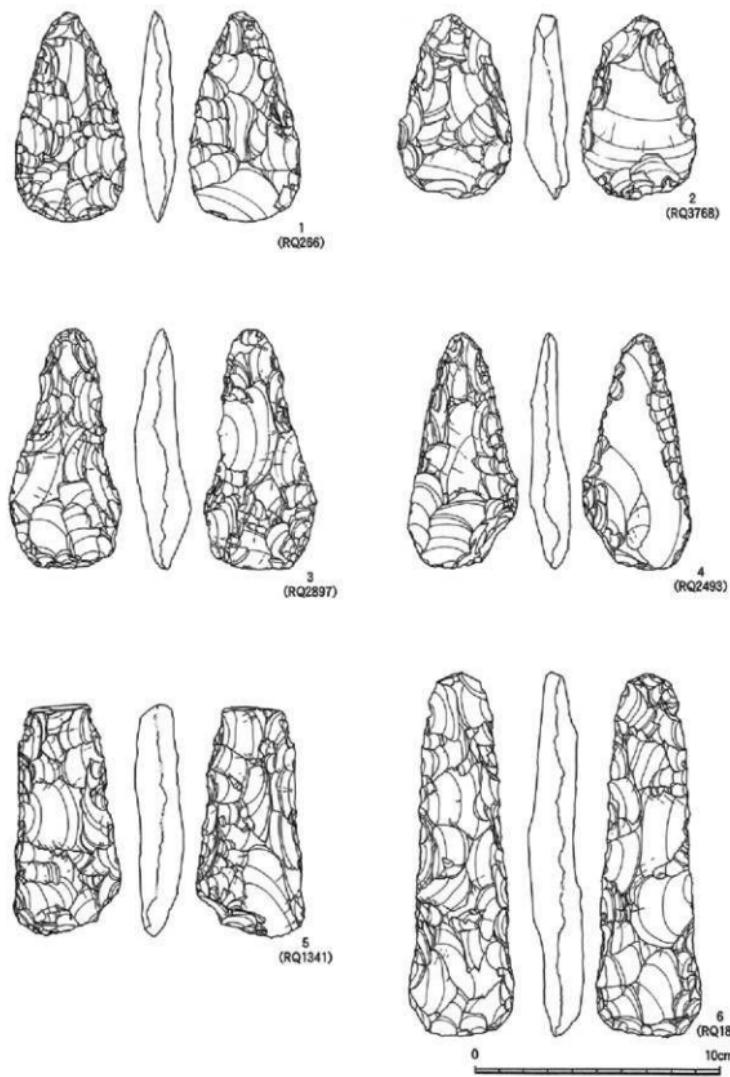
第184図 出土石器(37) スクレイパー(9)



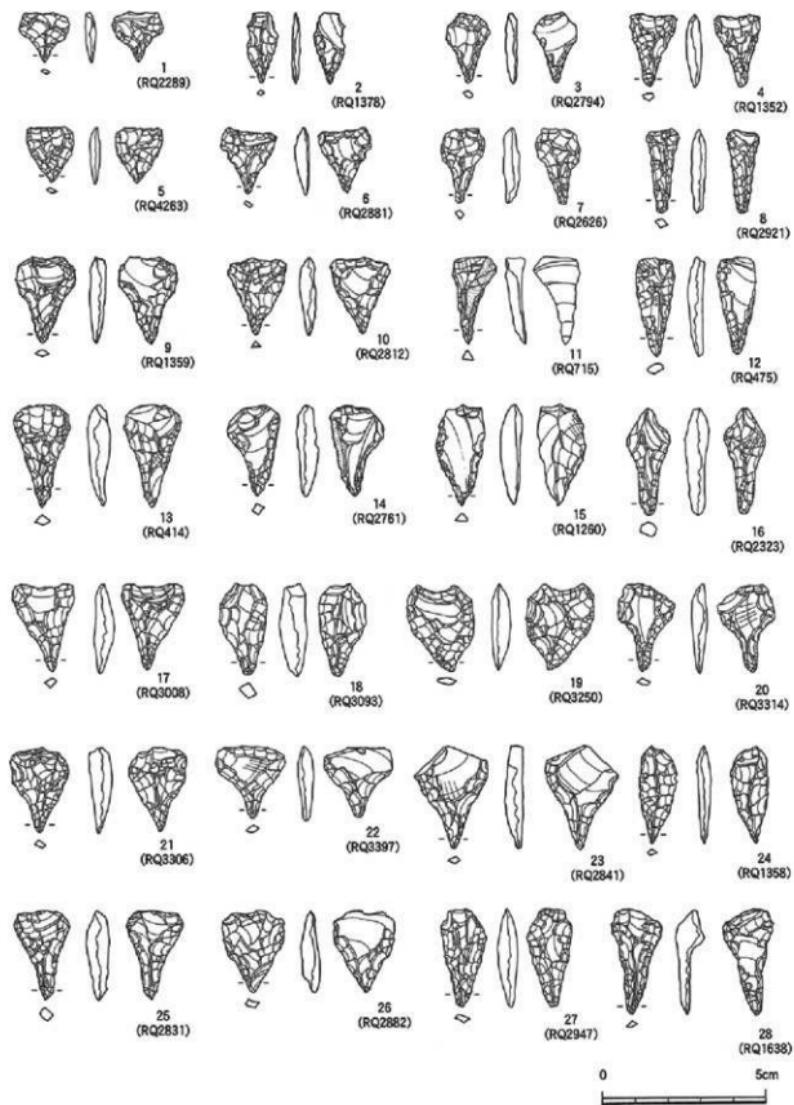
第185図 出土石器(38) 菩状石器(1)



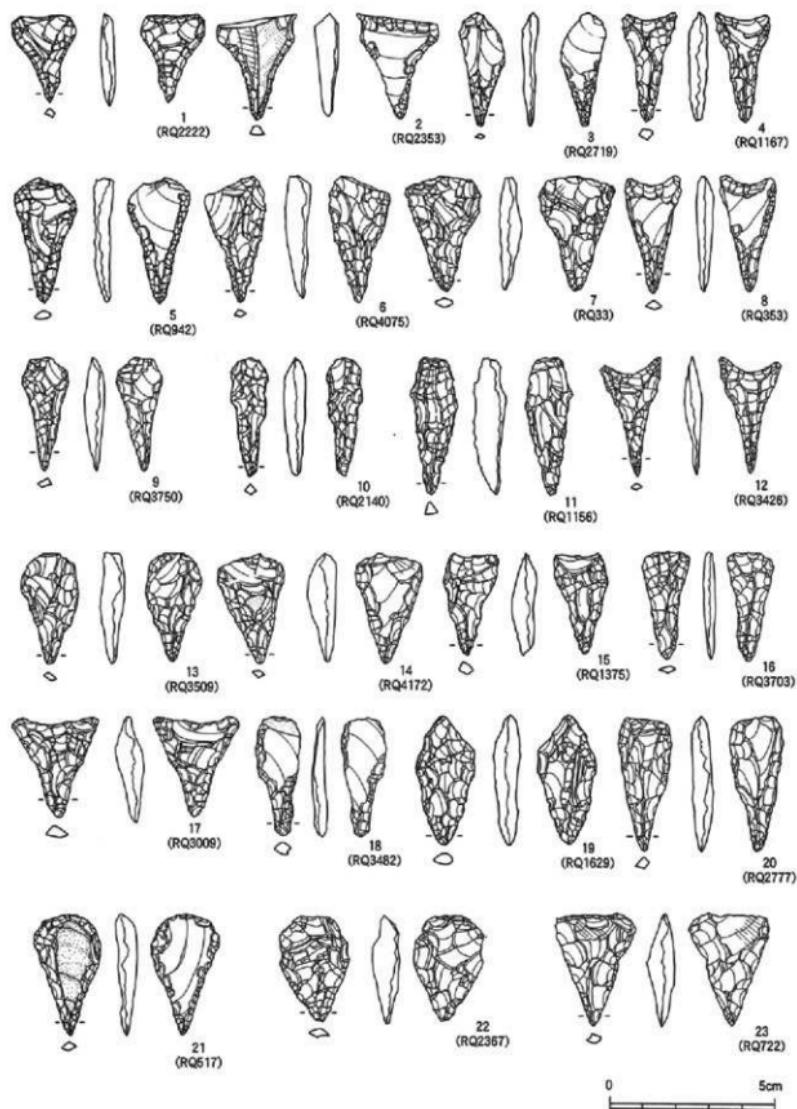
第186図 出土石器(39) 鑿状石器(2)



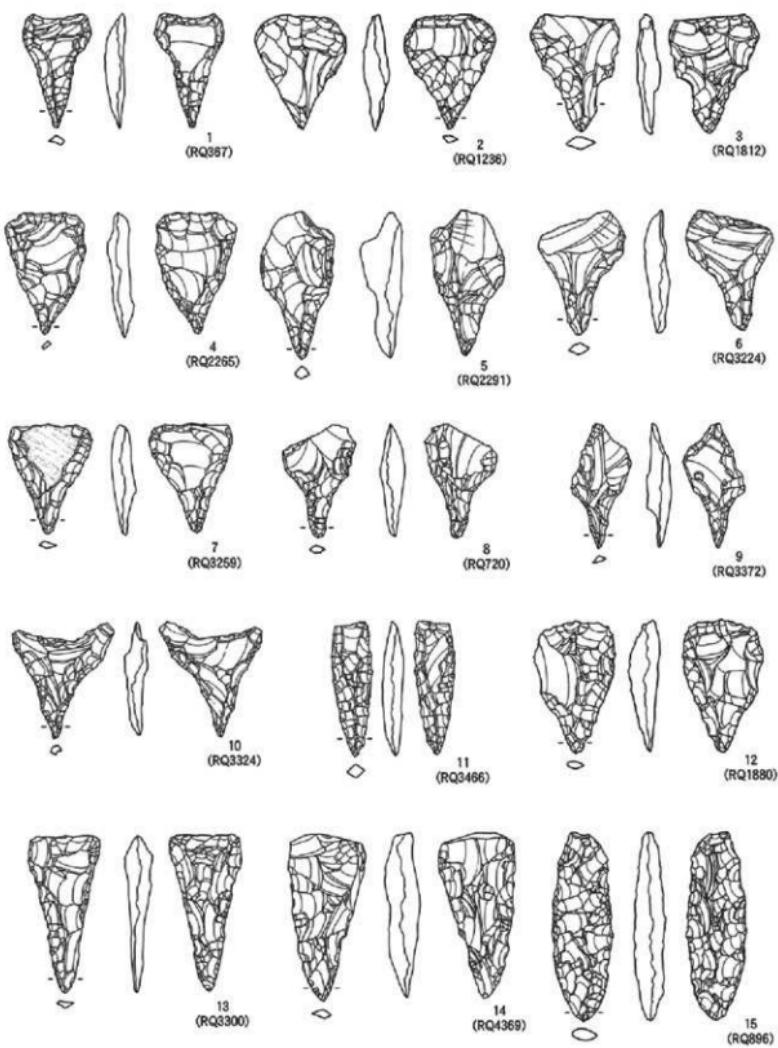
第187図 出土石器(40) 茖状石器(3)



第188図 出土石器(41) 石錐(1)

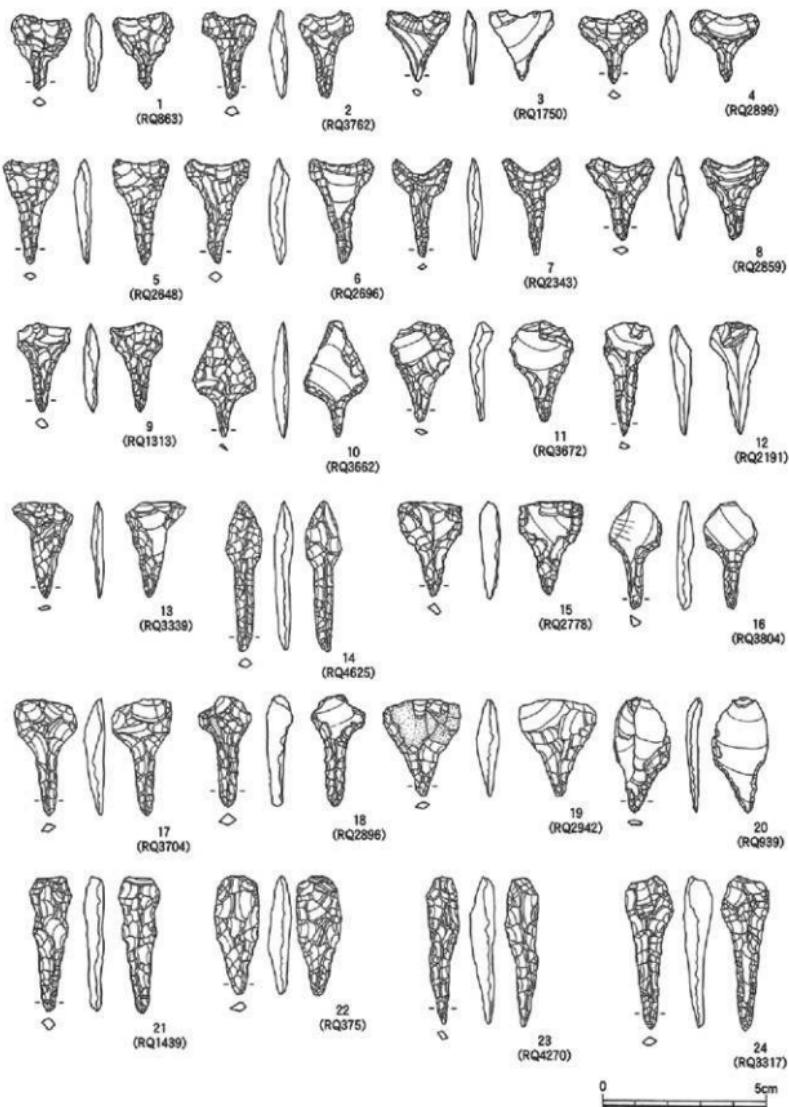


第189図 出土石器(42) 石錐(2)

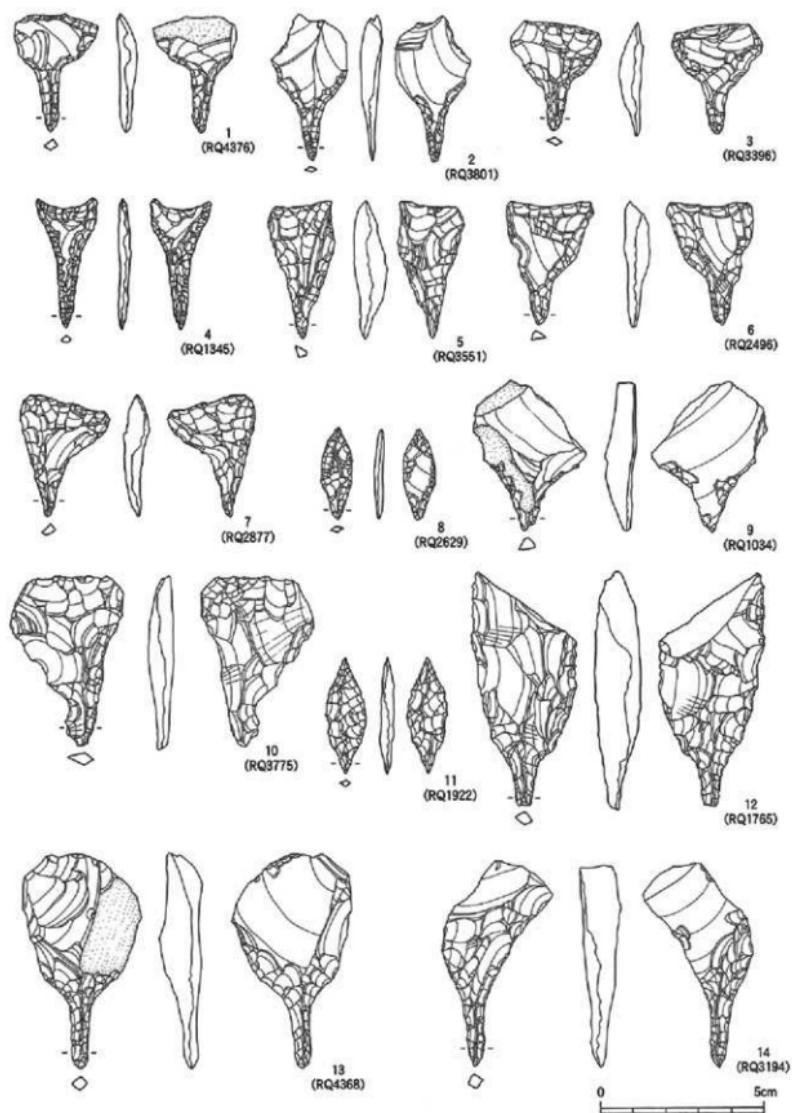


0 5cm

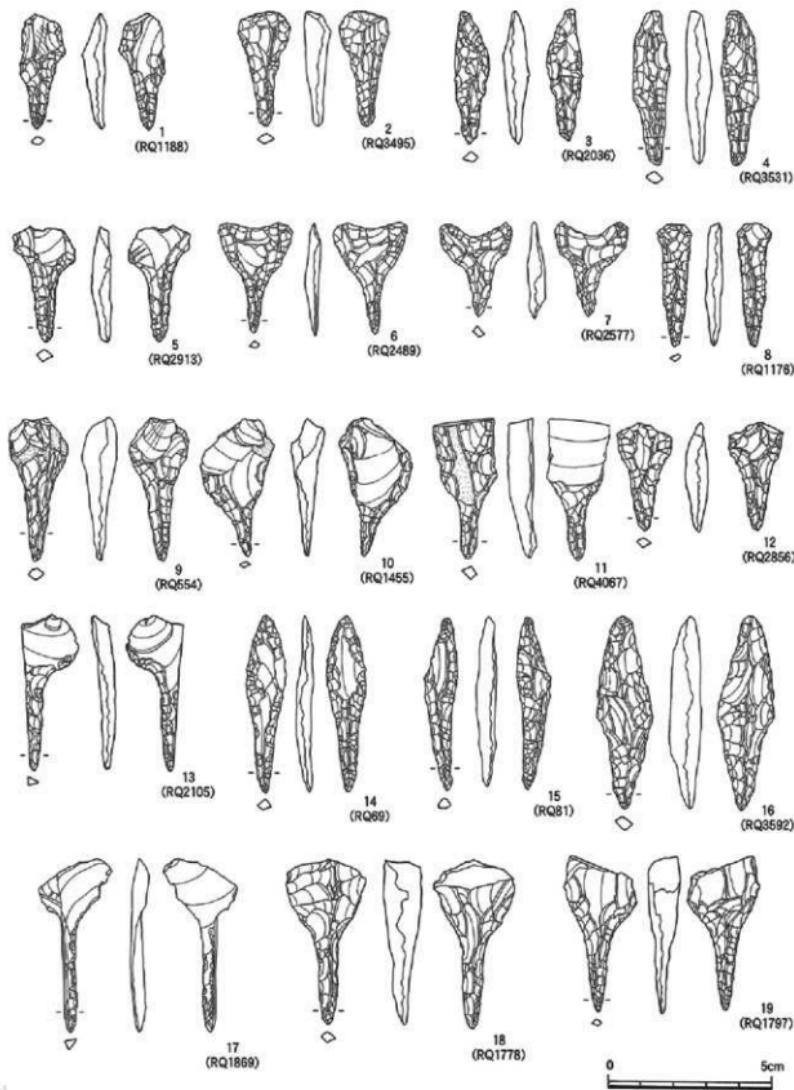
第190図 出土石器(43) 石錐(3)



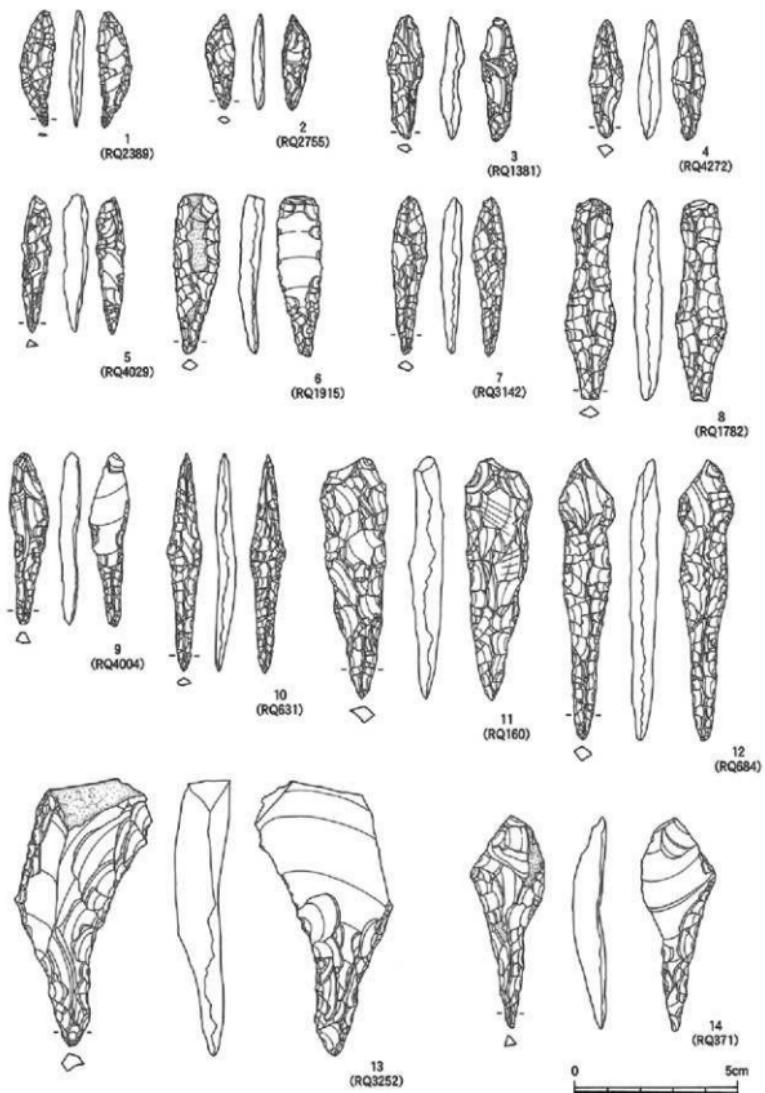
第191図 出土石器(44) 石錐(4)



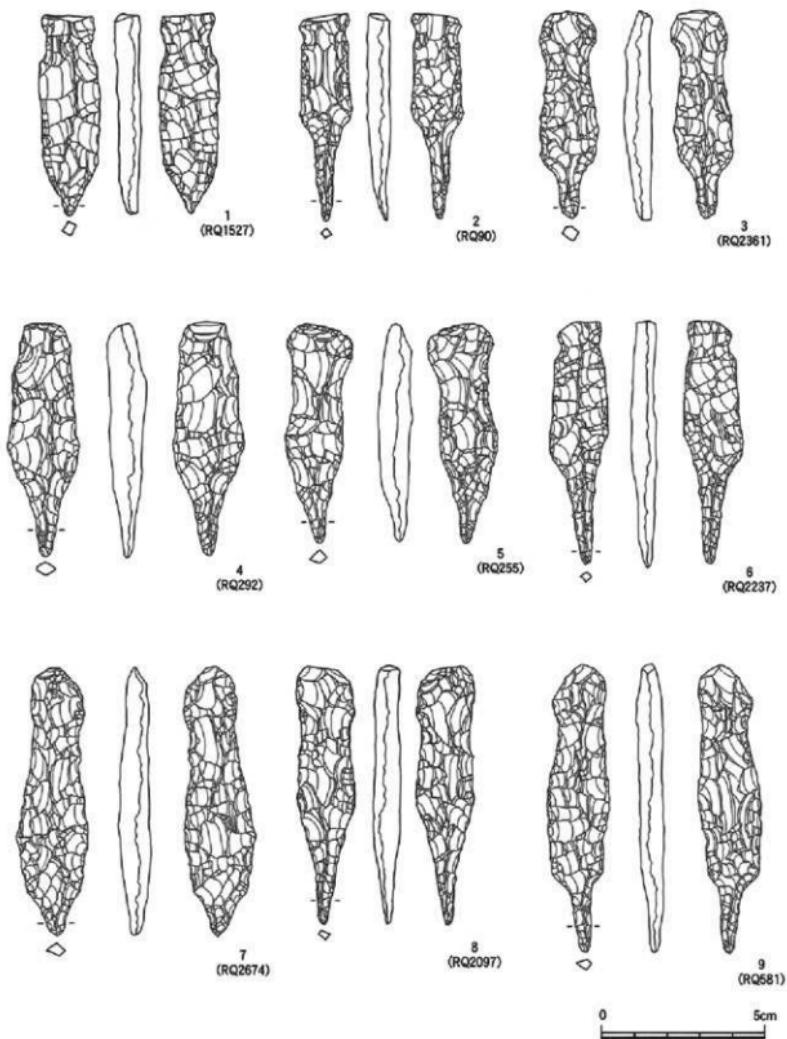
第192図 出土石器(45) 石錐(5)



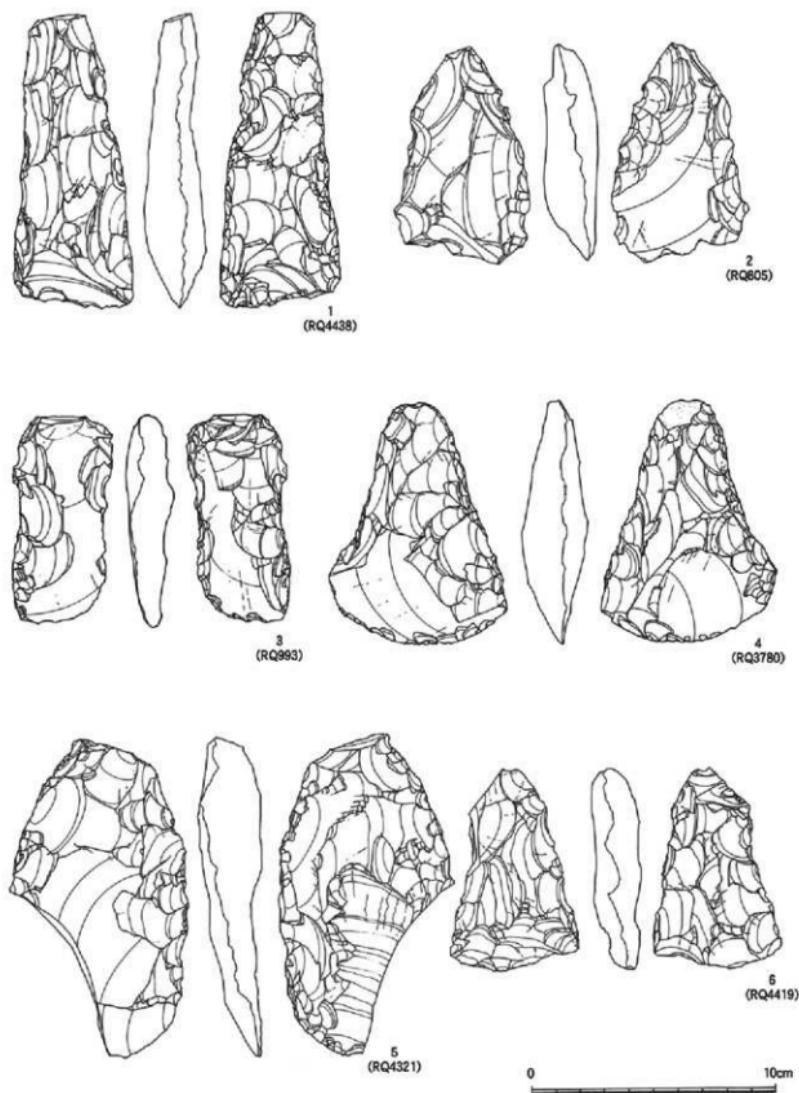
第193図 出土石器(46) 石錐(6)



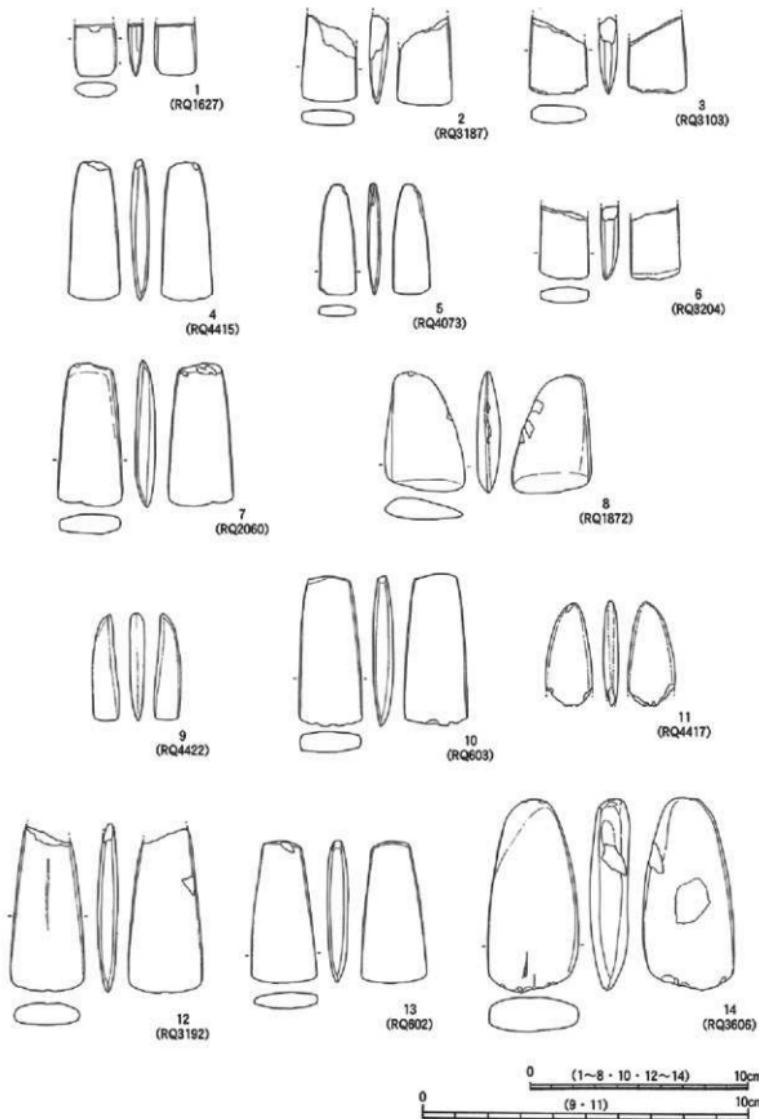
第194図 出土石器(47) 石錐(7)



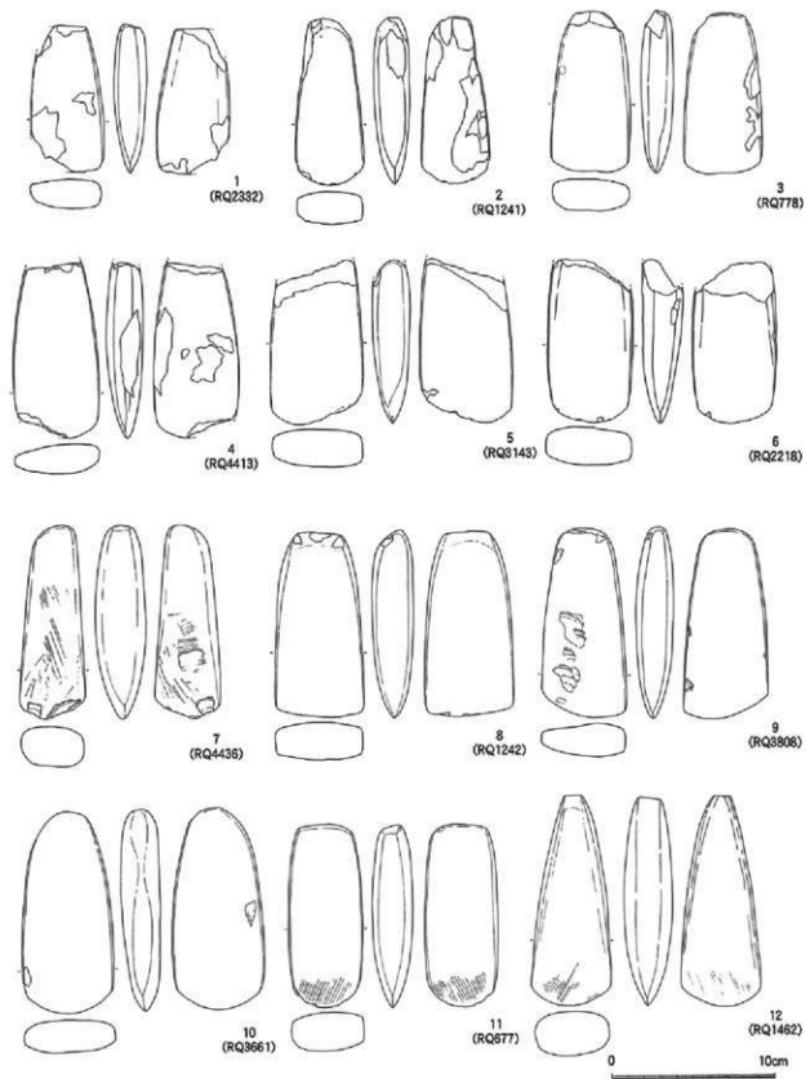
第195図 出土石器(48) 石錐(8)



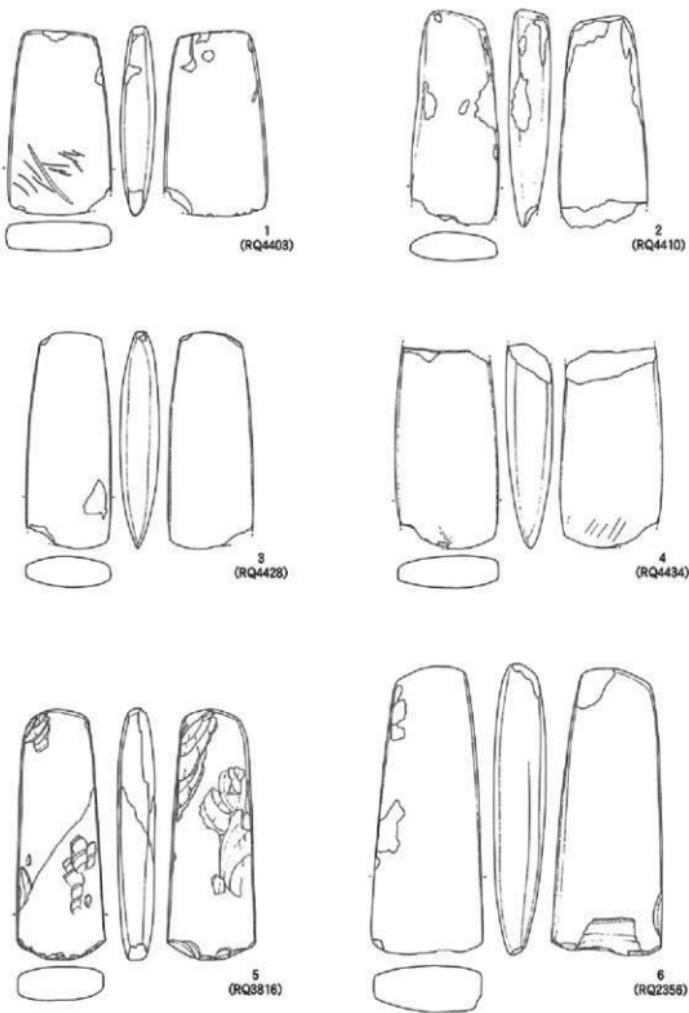
第196図 出土石器(49) 打製石斧



第197図 出土石器(50) 磨製石斧(1)

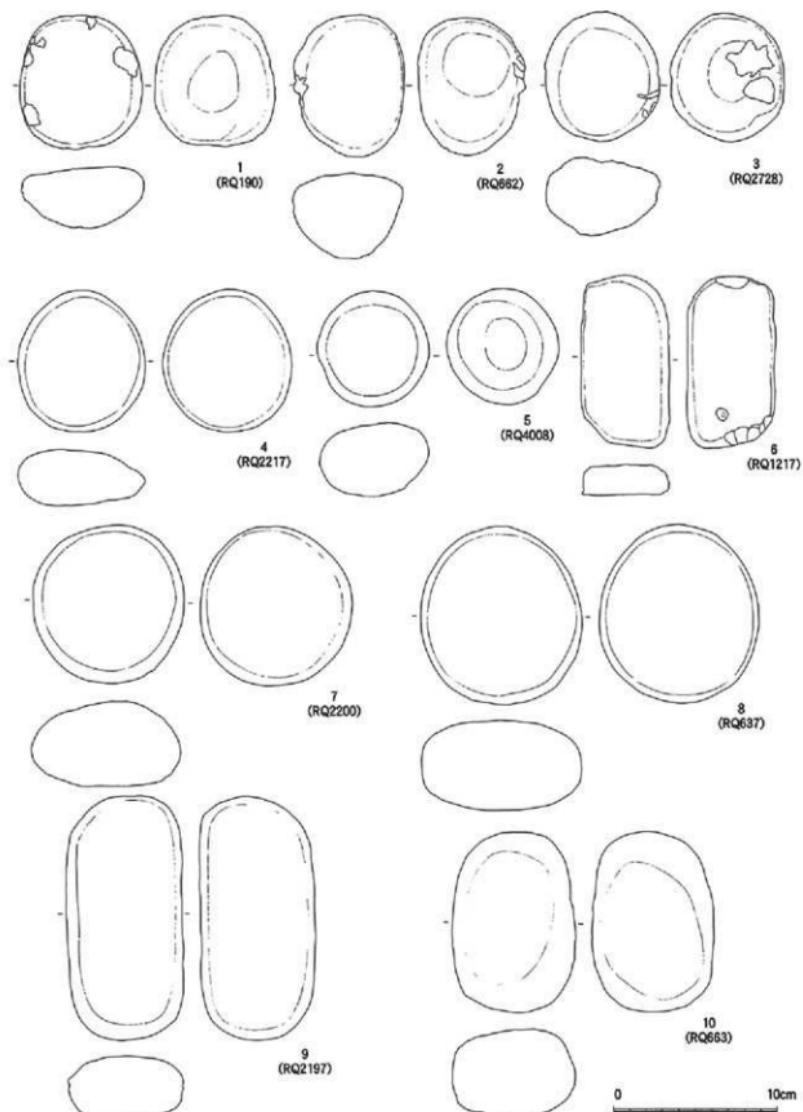


第198図 出土石器(51) 磨製石斧(2)

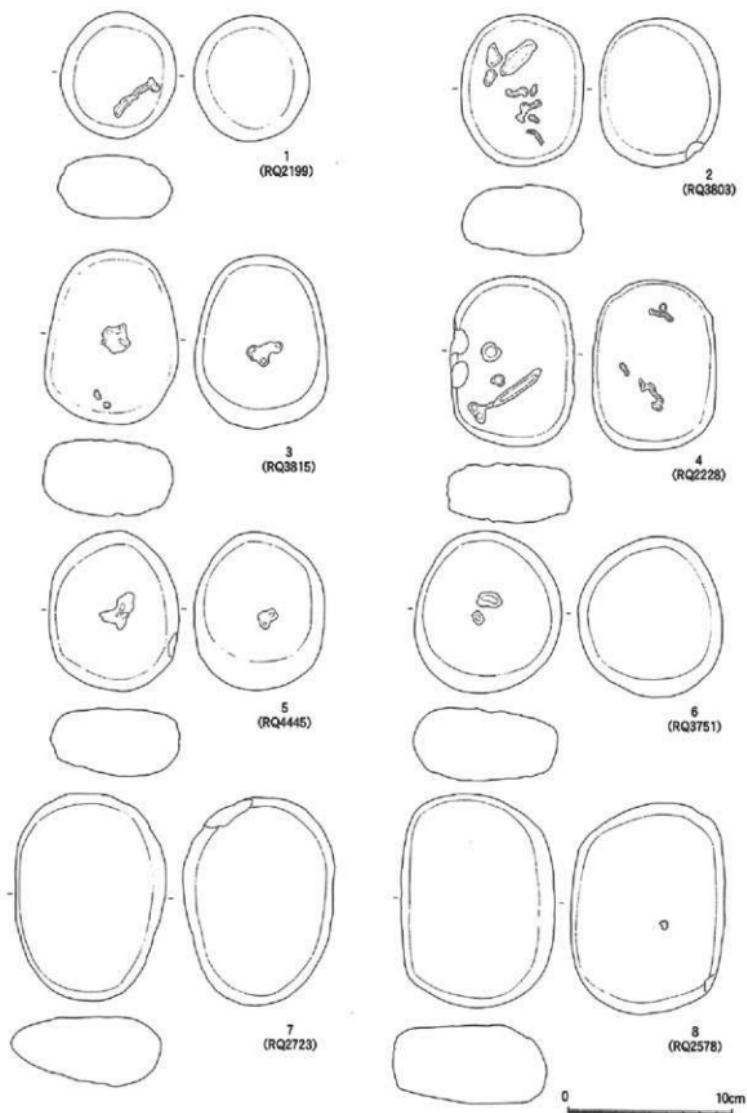


0 10cm

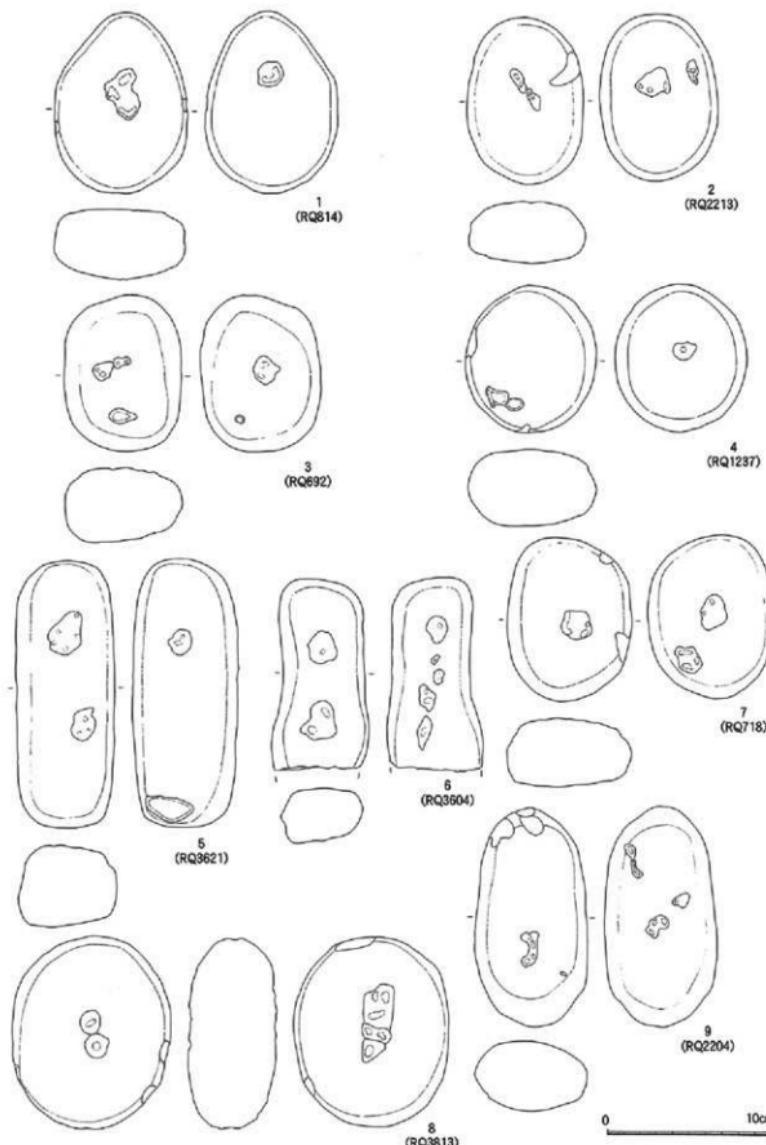
第199図 出土石器(52) 磨製石斧(3)



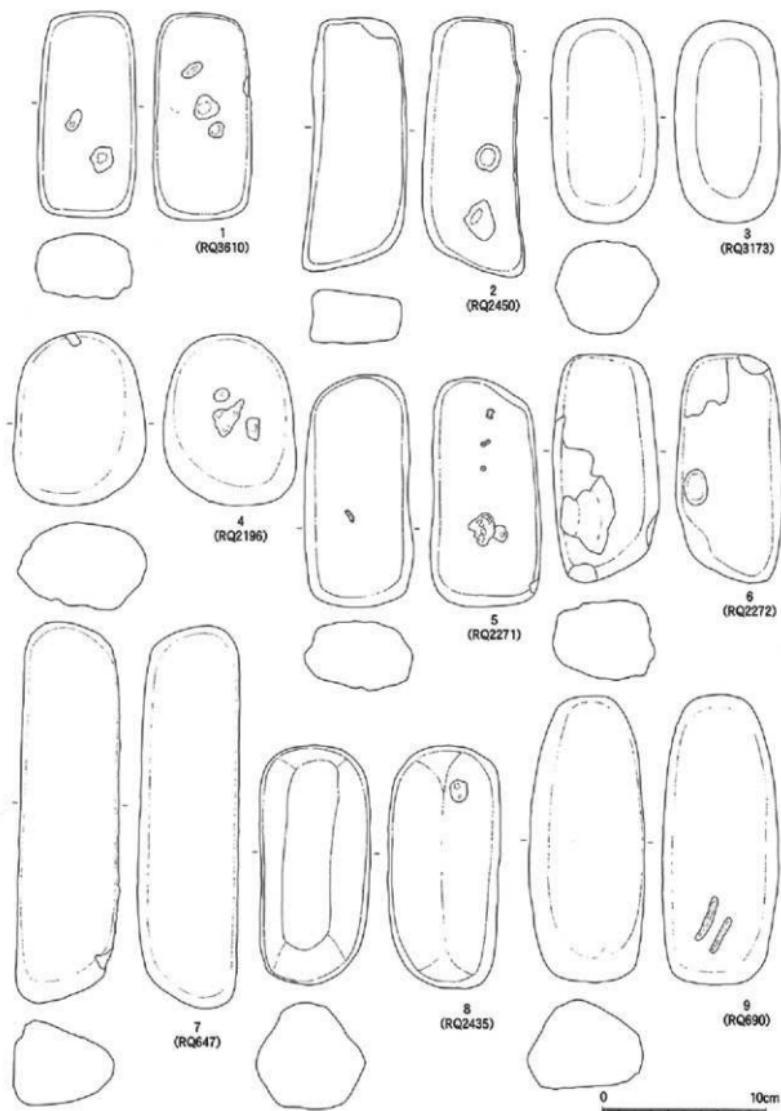
第200図 出土石器(53) 磨石(1)



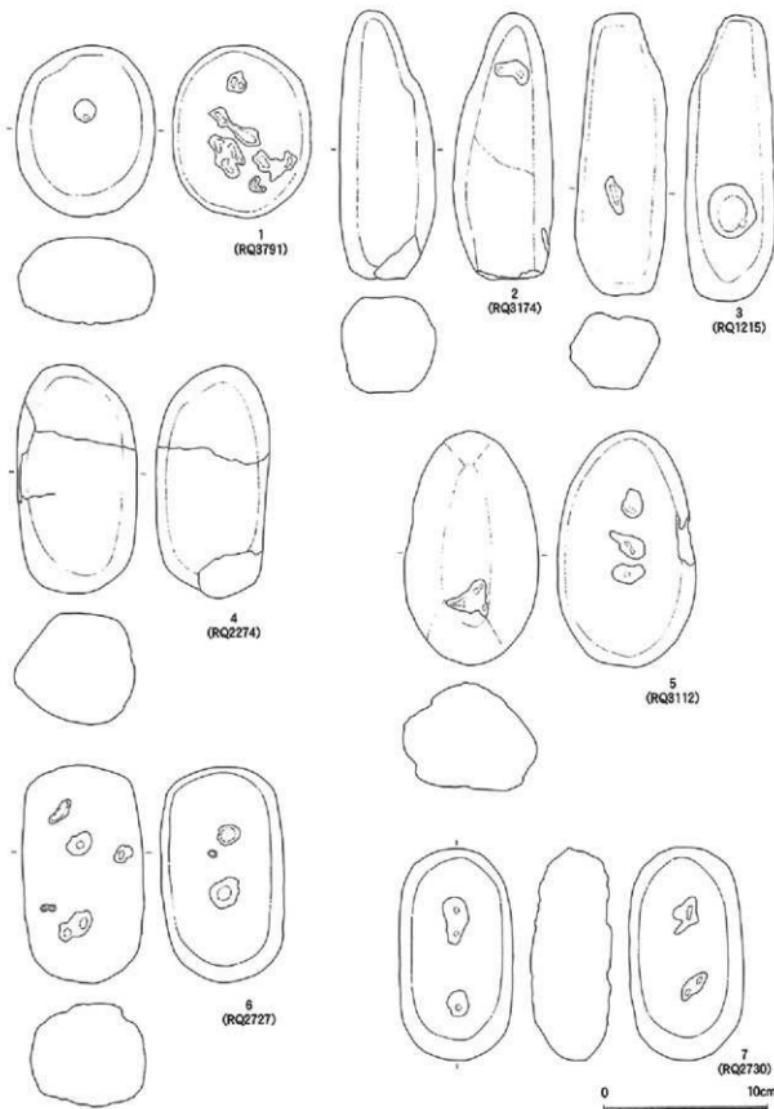
第201図 出土石器(54) 磨石(2)



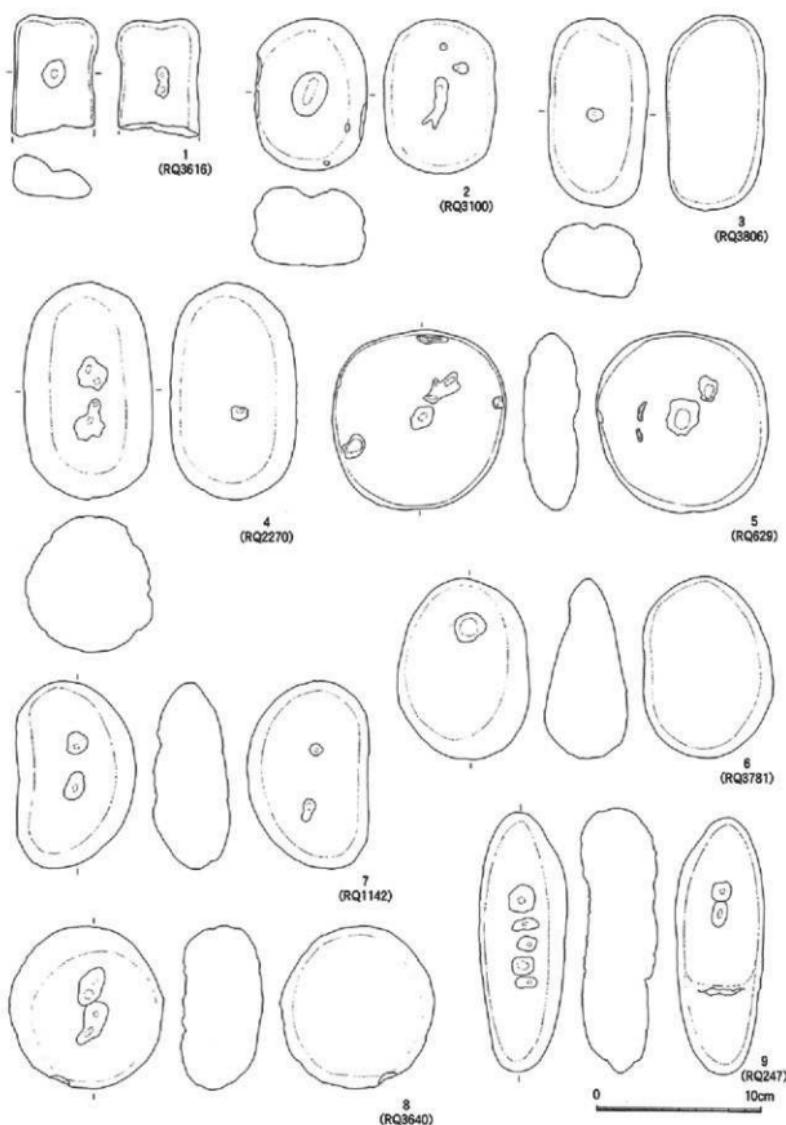
第202図 出土石器(55) 磨石(3)



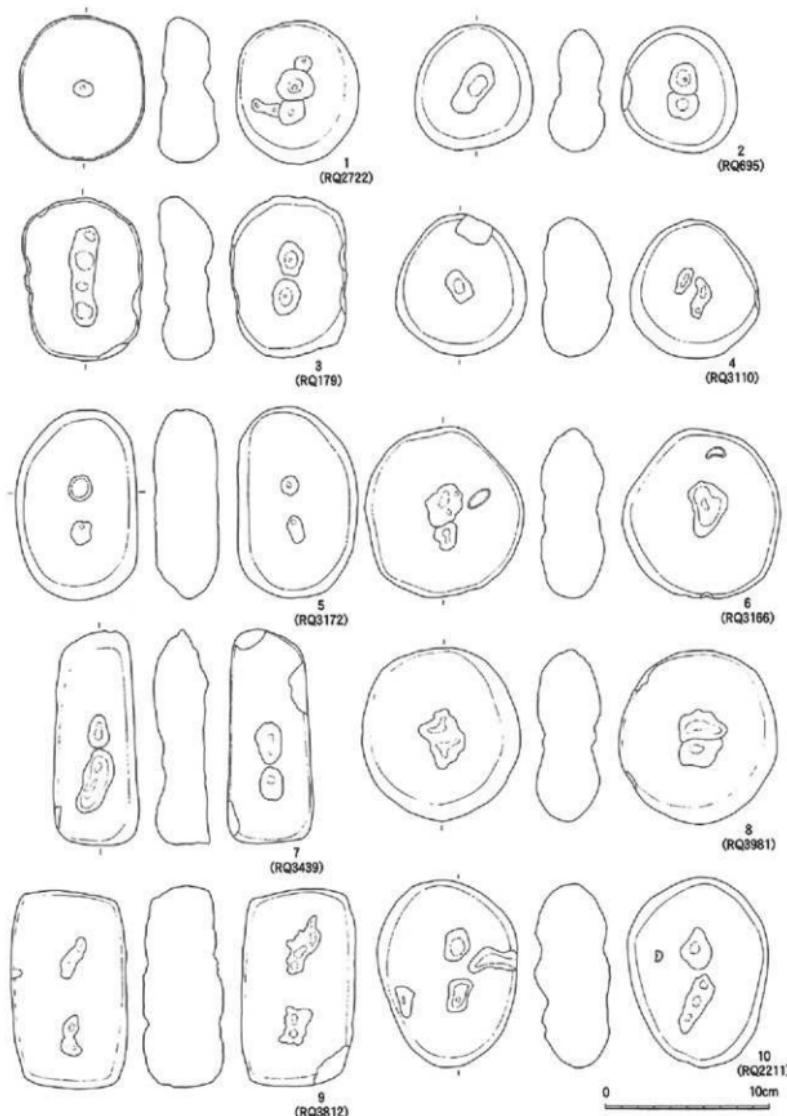
第203図 出土石器(56) 磨石(4)



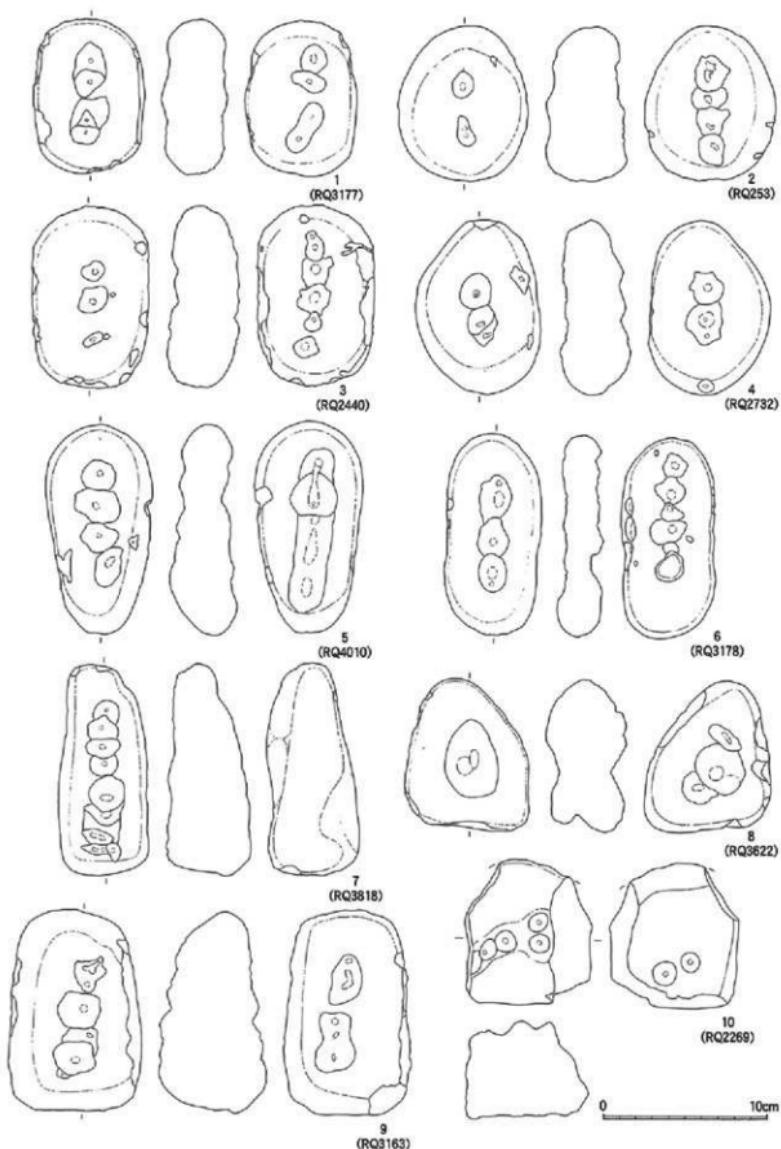
第204図 出土石器(57) 磨石(5)



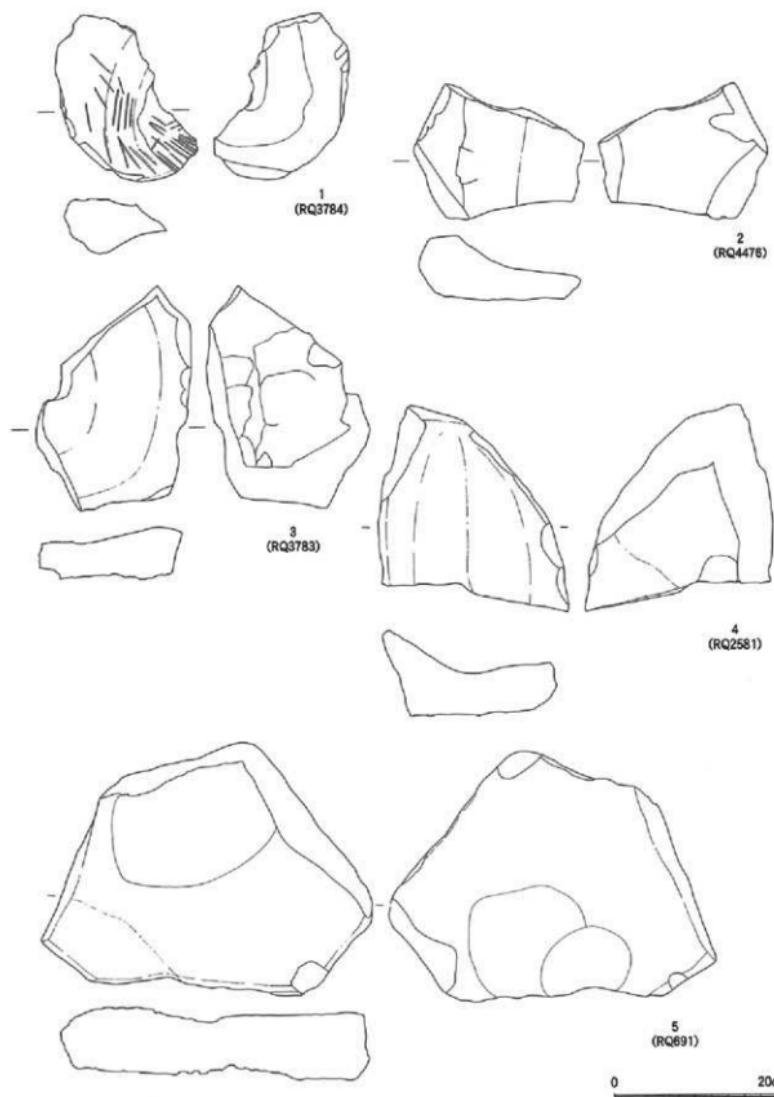
第205図 出土石器(58) 凹石(1)



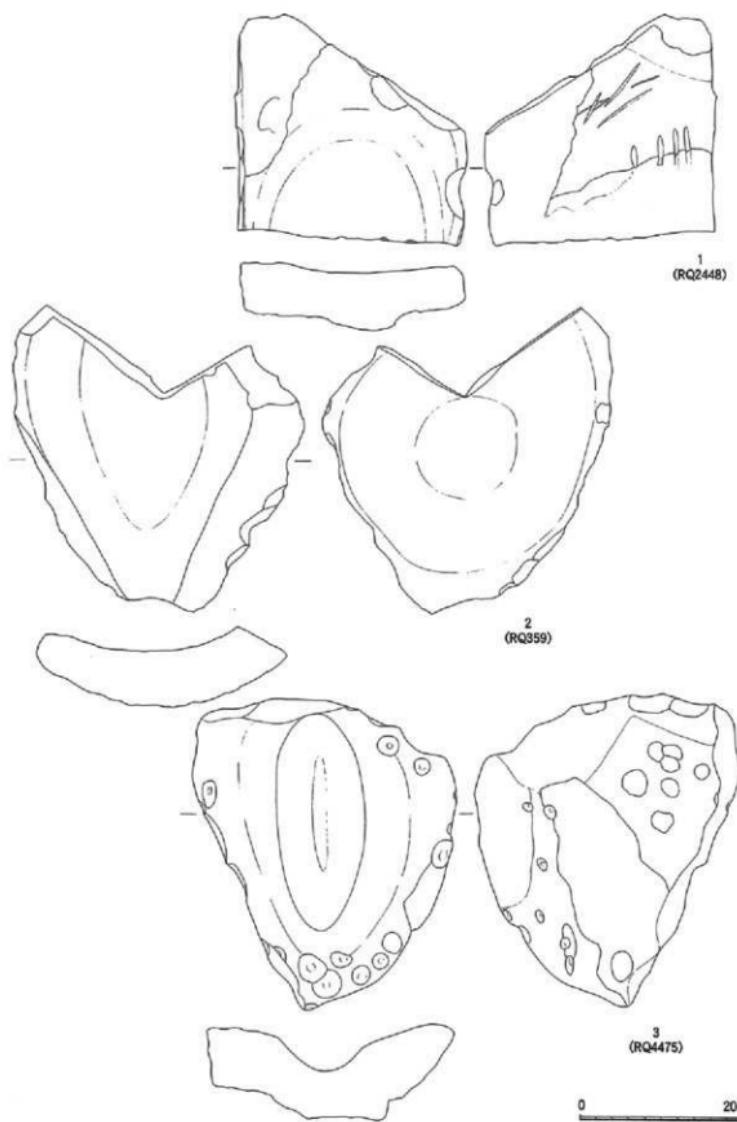
第206図 出土石器(59) 凹石(2)



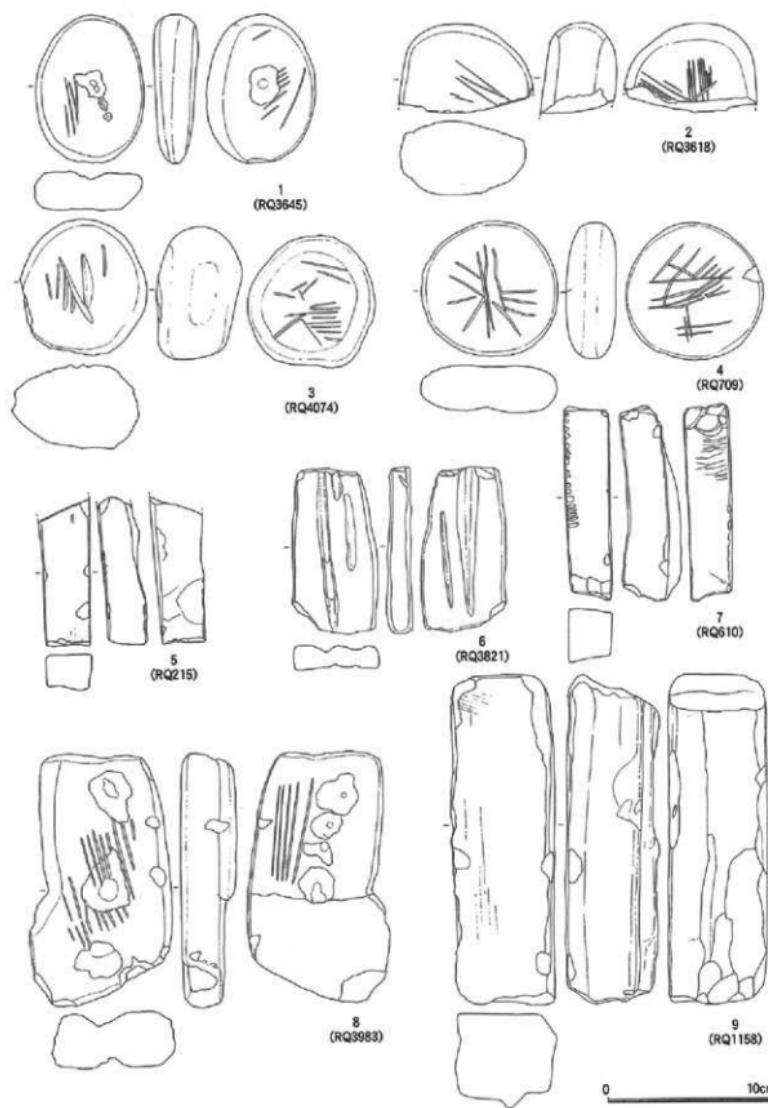
第207図 出土石器(60) 凹石(3)



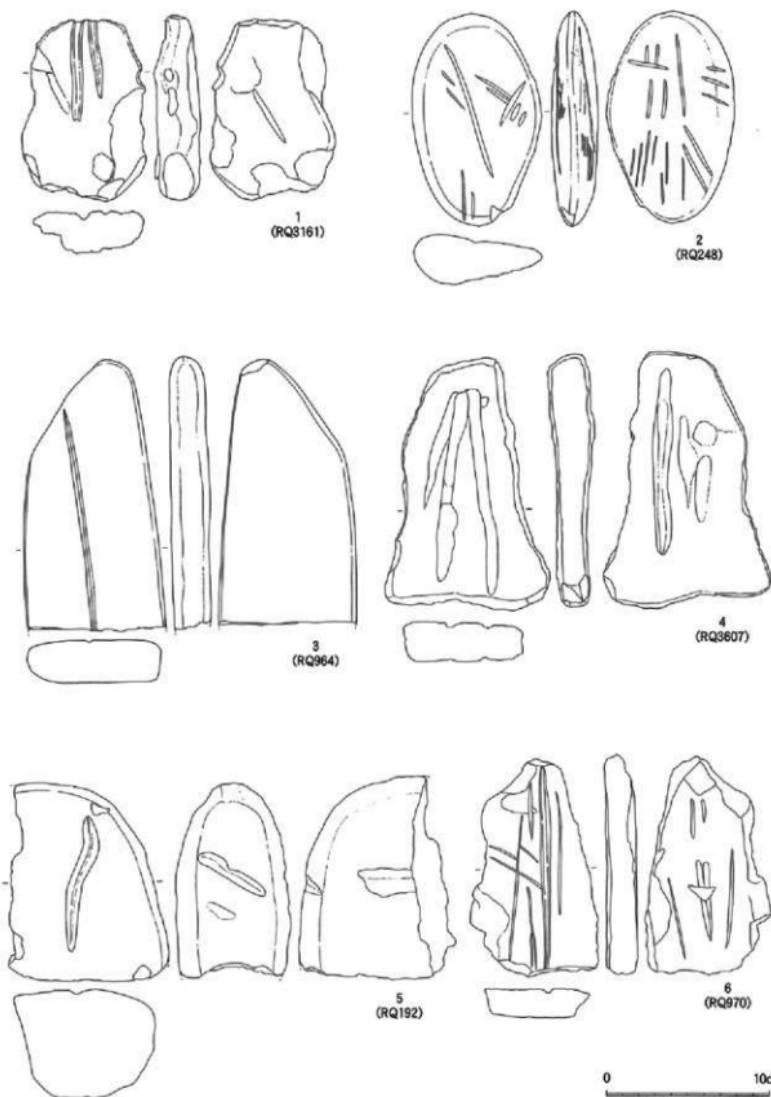
第208図 出土石器(61) 石皿(1)



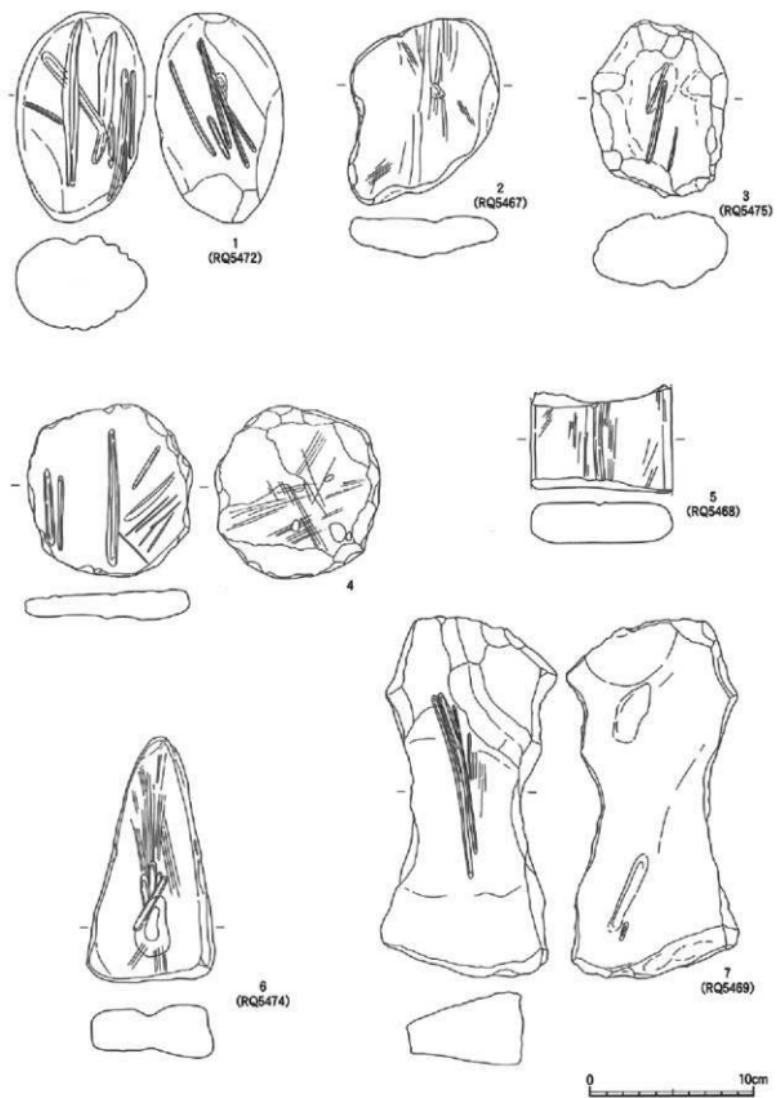
第209図 出土石器(62) 石皿(2)



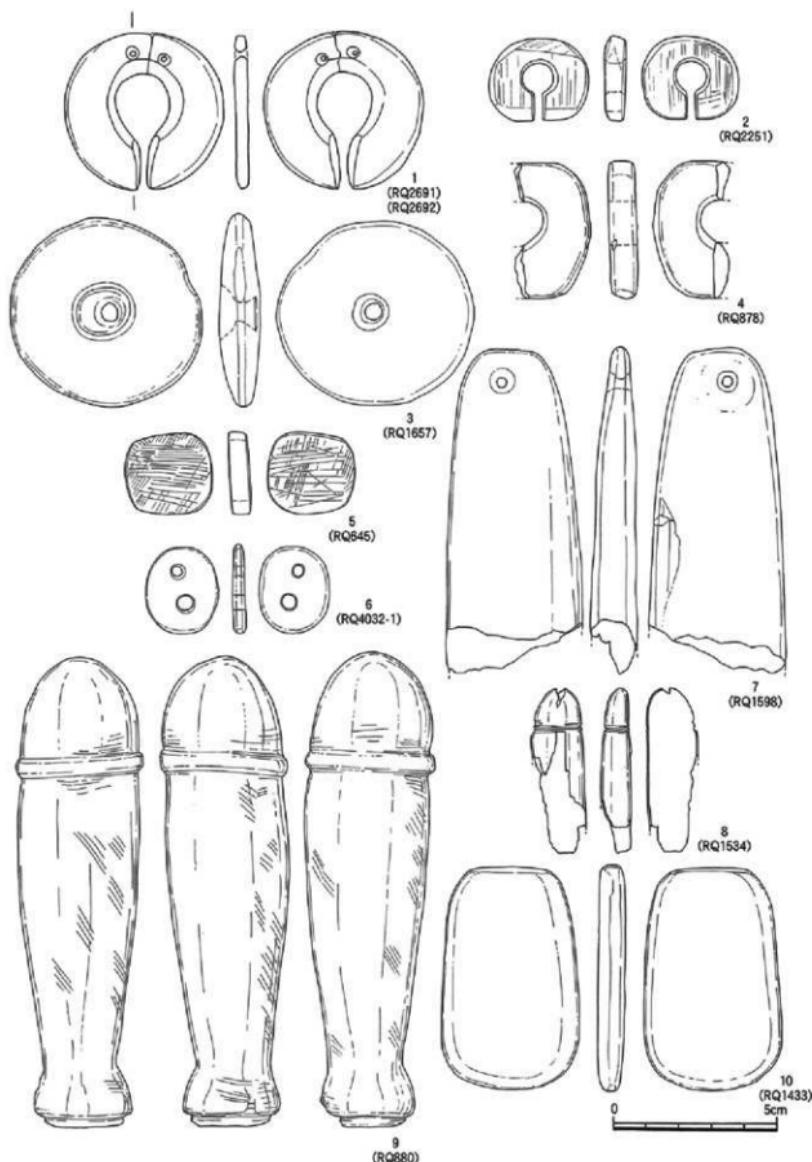
第210図 出土石器(63) 砥石(1)



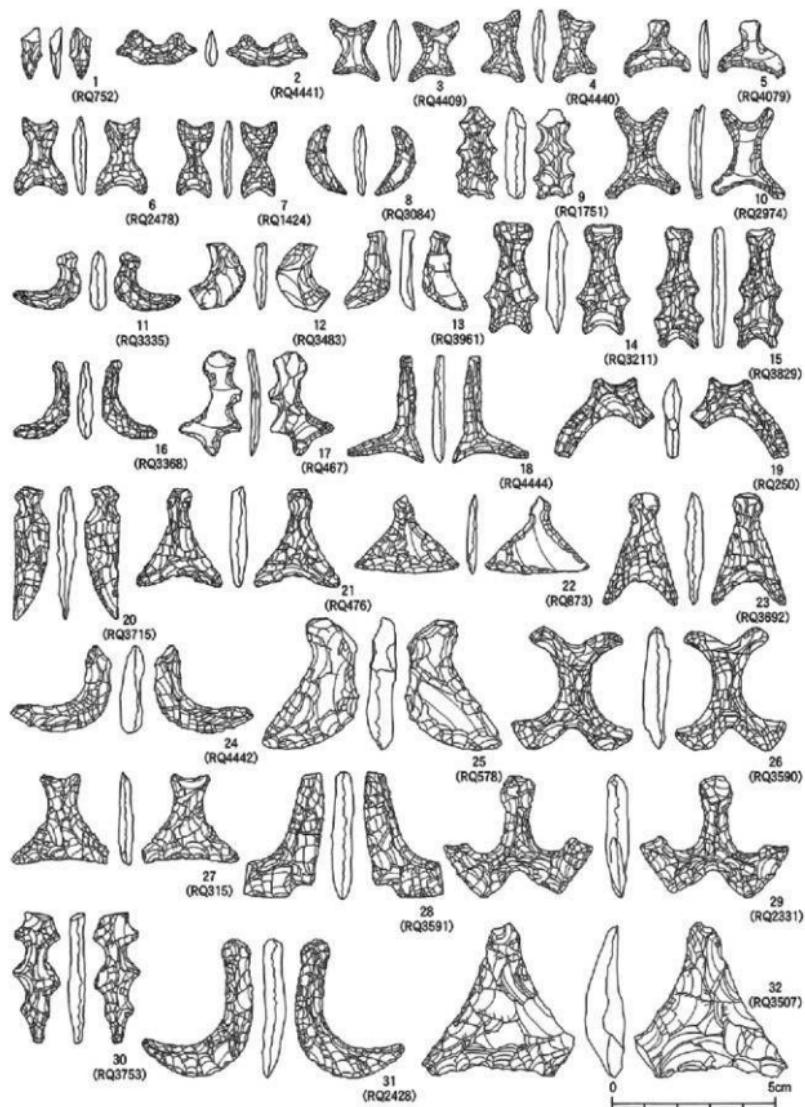
第211図 出土石器(64) 砧石(2)



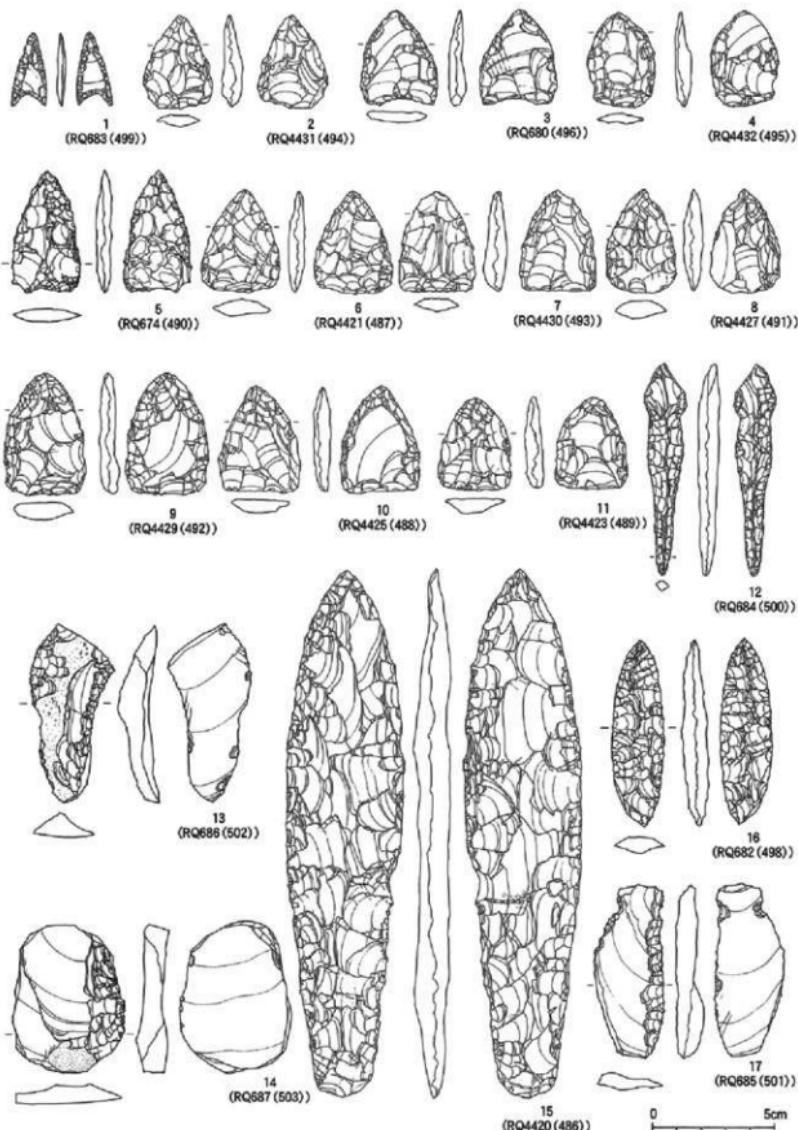
第212図 出土石器(65) 砕石(3)



第213図 出土石器(66) 石製装飾品・小形石棒



第214図 出土石器(67) 異形石器



第215図 道具箱遺物実測図集成

・「道具箱」の石器について

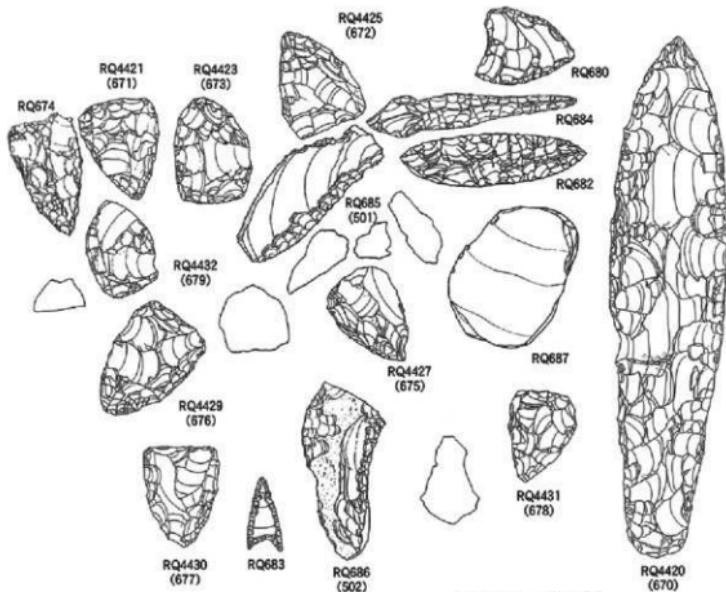
昭和60年11月7日にST11住居跡の調査を進めていたところ、石器が配置されたような状況を呈して一括して出土した。ここではこの一括出土石器について、その出土状況から「道具箱」の石器と呼んでおきたい。

出土地点は、S-21グリッドであり、マウンドを形成している黒色土からの出土であった。ここはST11住居跡（第7・18・19・85～94・215・242図、図版20～24・78・123～125）のほぼ中央部付近にある。この住居跡は出土遺物が非常に多かった。

図版24は出土直後の写真であるが、これによれば出土遺物は合計22点である。下図は写真的状況をもとに実測図で出土状況を復元したものである。図示できないものについては、外郭線で出土位置を示している。出土遺物のうち図示したものは17点である（第215図）。

その組み合わせは、石鏨1点（第215図1）、石槍2点（第215図15・16）、石匙1点（第215図17）、三角スクレーパー10点（第215図2～11）、スクレーパー2点（第215図13・14）、石錐1点（第215図12）、図示できないもの6点の合計23点である。

石器はいずれも、よく使いこまれていて摩滅し付着物が認められる。加熱されたためか、はじけて割れているもの（第215図5・14など）も見ることができる。



「道具箱」石器配置

3 木 製 品

押出遺跡は低湿地遺跡という希有な立地状況を示すことから、通常は遺存しない多種多様な木製品が出土した。

出土木製品の種類は、判別の可能なものでは、籠状木製品・櫛状木製品・杓状木製品・弓状木製品・棒状木製品・板状木製品・タモ状木製品・大杯・把手付木製品・樹皮製品・石斧の柄・樹皮巻木製品・櫛・木胎漆器・その他の加工された木製品などが認められた。この他には流木などが多数遺存していた。遺物は脆弱であり、実測図として図示できたものは少なかった。図版のみの提示とならざるを得ないものも多い。

(1) 把手付木製品 (第216図2、図版113-4)

第216図2 (図版113-4) は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるS-31グリッドである。現存長7.3cm、現存幅5.3cm、厚さ0.7cmである。残存部は、漆が施された把手付木製品の把手部分とその周辺のみで、全体的な形状は不明である。樹種はブナ科のクヌギ節またはコナラ節に属するものと同定される。

(2) 樹皮製品 (第216図4、図版114-8・9)

第216図4 (図版114-9) は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるQ-44グリッドである。樹皮を折り袋状にし、左右の縁を細い樹皮で縫ったものである。長さ8.6cm、幅5.7cm、厚さ1.3cmである。

図版としてのみ提示したものが、図版114-8である。樹皮を折り袋状にし、左右の縁を細い樹皮で縫う樹皮製品の、製品になる過程のものと考えられる。長さ10.4cm、幅4.6cmである。

(3) 杓状木製品 (第216図6・7、図版115-1・2)

第216図6 (図版115-2) は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるK-40グリッドである。杓子の柄の部分で、現存長7.5cm、現存幅2.7cm、厚さ2.0cmである。樹種はケヤキである。

第216図7 (図版115-1) は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるF-23グリッドである。杓子のスプーン状になっている部分で、現存長8.0cm、幅4.4cm、厚さ1.7cmである。樹種はケンボナシである。

(4) 篦状木製品 (第216図8、第217図2・4・5、第218図1~3、第219図1、図版99-1・2、図版100-1・2、図版102-3・4、図版110-4・5、図版117-2)

第216図8 (図版110-4) は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-47グリッドである。現存長16.2cm、現存幅4.3cm、厚さ1.2cmであり、樹種はクリである。

第217図2 (図版117-2) は、現存長23.5cm、幅2.8cm、厚さ0.6cmである。樹種はヒノキ科に属するヒノキ、アスナロ、サクラ等のいずれかに同定される。

第217図4は、第3次調査区のST28から出土した。現存長34.2cm、幅6.8cm、厚さ0.7cmであり、

樹種は二葉松類に同定される。

第217図5（図版100-1）は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるJ-24グリッドである。長さ29.5cm、幅7.0cm、厚さ1.2cmであり、樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

第218図1（図版99-2）は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-45グリッドである。現存長44.0cm、幅8.0cm、厚さ1.8cmであり、樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

第218図2（図版99-1）は、長さ43.8cm、幅6.0cm、厚さ2.0cmである。樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

第218図3は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるE-48グリッドである。長さ21.8cm、幅6.0cm、厚さ1.0cmであり、樹種は不明である。

第219図1は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-32グリッドである。現存長46.2cm、幅5.8cm、厚さ1.4cmであり、樹種はスギである。

図版としてのみ提示したものが、図版100-2、図版102-3・4、図版110-5である。図版100-2、図版102-3・4、図版110-5はいずれも完形品ではないため、籠状ではあるが全体の形状は不明である。

(5) 有孔木製品（第216図3・5、第217図3、図版116-1、図版117-1・3）

第216図3（図版117-1）は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-47グリッドである。剣形を呈し、縁に沿つていくつも孔があけられている。現存長9.2cm、幅3.2cm、厚さ0.3cmであり、樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

第216図5（図版117-3）は、第1次調査のST1から出土した。剣形の木製品の一部とも考えられ、先端付近に梢円状の1cm程の孔が1つあけられている。現存長9.0cm、現存幅5.0cm、厚さ1.1cmであり、樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

第217図3（図版116-1）は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-25グリッドである。大きな梢円状の孔があいた木製品で、現存長27.7cm、幅7.5cm、厚さ1.4cmである。樹種は二葉松類に属するアカマツ、クロマツ等と同定される。

(6) 篦状木製品（第219図2、図版101-1～3、図版102-1・2）

第219図2（図版101-1）は、第1次調査で出土した。出土地点は、O-39グリッドである。現存長43.8cm、幅4.4cm、厚さ1.3cmであり、樹種は不明である。

図版としてのみ提示したものが、図版101-2・3、図版102-1・2である。図版101-2は、現存長154.0cm、現存幅8.5cm、厚さ2.0cmで、中央部分付近が完全に接合しないものの、完形に近い。図版101-3は上部のみの写真である。

(7) 棒状木製品（第217図1、図版119-3～5、図版120-1・3・4～7、図版121-1～6）
第217図1（図版120-3）は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-47グリッドである。現存長18.2cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmであり、樹種は不明である。

図版としてのみ提示したものが、図版119-3～5、図版120-1・4～7、図版121-1～6である。図版120-6は、現存長53.4cm、幅2.7cm、厚さ2.3cmであり、樹種はヌルデである。棒状木製品の中には、図版120-5、図版121-3・4・6のように、先端が尖っているものもある。

(8) 石斧の柄（第218図4、図版118-1）

第218図4（図版118-1）は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるK-46グリッドである。残存部は石斧の装着部分にあたり、現存長15.0cm、幅3.7cm、厚さ6.5cmである。樹種はブナ科のクヌギ節またはコナラ節に属するものと同定される。

(9) 大杯（第220図1・2、第221図1・2、図版105-1～3、図版106-1・2、図版107-1～3、図版109-1～3、図版110-1～3、図版111-1～3）

第220図1（図版105-1）は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるQ-29・R-29グリッドである。木胎漆器の高台付大杯で、現存長39.6cm、現存幅10.9cm、厚さ0.5cmである。樹種はケンボナシである。

第220図2（図版105-2）は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-31グリッドである。木胎漆器の高台付大杯で、現存長43.2cm、現存幅13.4cm、厚さ1.2cmである。樹種はクリである。

第221図1（図版105-3）は、第3次調査区のST37から出土した。木胎漆器の高台付大杯で、現存長23.4cm、現存幅18.6cm、厚さ1.9cmである。樹種はケヤキである。

第221図2（図版107-3）は、第1次調査で出土した。出土地点は、O-22グリッドである。木胎漆器の大杯で、現存長31.6cm、現存幅8.5cm、厚さ0.8cmである。樹種はケンボナシである。

図版106-2は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-44・S-44グリッドである。現存長16.4cm、現存幅11.0cm、厚さ1.7cmで、木胎漆器の大杯の一部とみられる。樹種はケンボナシである。

図版107-1は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるP-23グリッドである。現存長17.6cm、現存幅8.2cm、厚さ1.1cmで、木胎漆器の大杯の一部とみられる。樹種はケンボナシである。

図版107-2は、現存長7.5cm、現存幅7.0cm、厚さ0.9cmで、木胎漆器の大杯の一部とみられる。樹種はケンボナシである。

図版109-3は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるU-44グリッドである。現存長8.8cm、現存幅7.9cm、厚さ0.8cmで、木胎漆器の大杯の一部とみられる。樹種はケンボナシである。

図版110-3は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるC-46グリッドである。現存長7.1cm、現存幅5.2cm、厚さ0.8cmである。木胎漆器の大杯の一部とみられ、赤漆が施されている。

図版111-1は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-30グリッドである。現存長7.2cm、現存幅2.9cm、厚さ0.6cmである。木胎漆器の大杯の口縁部とみられ、赤漆が施されている。

図版111-3は、第2次調査区のST18から出土した。現存長14.8cm、現存幅4.8cm、厚さ0.6cmで、木胎漆器の大杯の一部とみられる。

図版106-1、図版109-1・2、図版110-1・2、図版111-2も大杯の一部とみられ、いずれも木胎漆器である。

00 タモ状木製品（図版103-2）

手網枠と考えられる。実測図として図示できなかったので、図版としてのみ提示したものである。図版103-2は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-18グリッドである。現存長50.0cm、現存幅30.0cm、厚さ1.0cmで大きく湾曲している。樹種はカヤである。

01 弓状木製品（図版103-1、図版104-1～3）

弓なりに湾曲した木製品である。図版として提示したものは以下である。図版104-1はQ-28グリッドからの出土、図版104-2はP-27グリッドからの出土で、いずれも第1次調査区の窪地にあたる。

02 板状木製品（図版108-1、図版119-1・2）

実測図として図示できなかったので、図版としてのみ提示した。図版119-1は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるD-46グリッドである。現存長15.6cm、幅5.4cmで、刻みのような跡が見受けられる。

03 樹皮巻木製品（図版120-2）

樹皮が巻かれた木製品である。実測図として図示できなかったので、図版としてのみ提示した。図版120-2は、長さ6.7cm、幅2.3cmで、樹皮の種類等は不明である。

04 櫛（図版114-4～6）

実測図として図示できなかったので、図版としてのみ提示した。

図版114-4は、第2次調査で出土した。出土地点は、N-49グリッドである。赤漆を施した櫛で、撚り紐を漆で固めている。現存長4.3cm、現存幅4.2cm、厚さ0.4cmで、遺存部分は櫛の基部と歯の一部とみられる。

図版114-5は、第2次調査で出土した。出土地点は、N-49グリッドである。赤漆を施した櫛で、撚り紐を漆で固めている。現存長5.5cm、現存幅4.0cm、厚さ0.5cmで、遺存部分は櫛の基部と

歯の一部とみられる。

図版114-6は、第2次調査で出土した。出土地点は、N-38グリッドである。赤漆を施した結歯式の整櫛で、櫛歯7本の痕跡がある。繊維が巻きつけられた基部のみが遺存しており、現存長5.1cm、現存幅3.7cm、厚さ0.7cmである。

(5) 加工木製品 (図版118-2・3)

実測図として図示できなかったので、図版としてのみ提示した。

図版118-2は、第2次調査区のST20から出土した。現存部分は一辺8.6cmの三角形状であるが、全体の形状は不明である。

図版118-3は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるS-29グリッドである。現存長11.4cm、現存幅4.5cmで、太い棒状に加工されているようだが、全体の形状は不明である。

(6) その他の木胎漆器 (第216図1、図版108-2・3、図版112-1~11、図版113-1~3・5~8)

第216図1(図版113-5)は、第3次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるR-45グリッドである。現存長3.5cm、現存幅2.3cm、厚さ0.3cmの木胎漆器で赤漆が施されているが、破片のため製品の形状は不明である。

図版としてのみ提示したものは、図版108-2・3、図版112-1~11、図版113-1~3・6~8である。

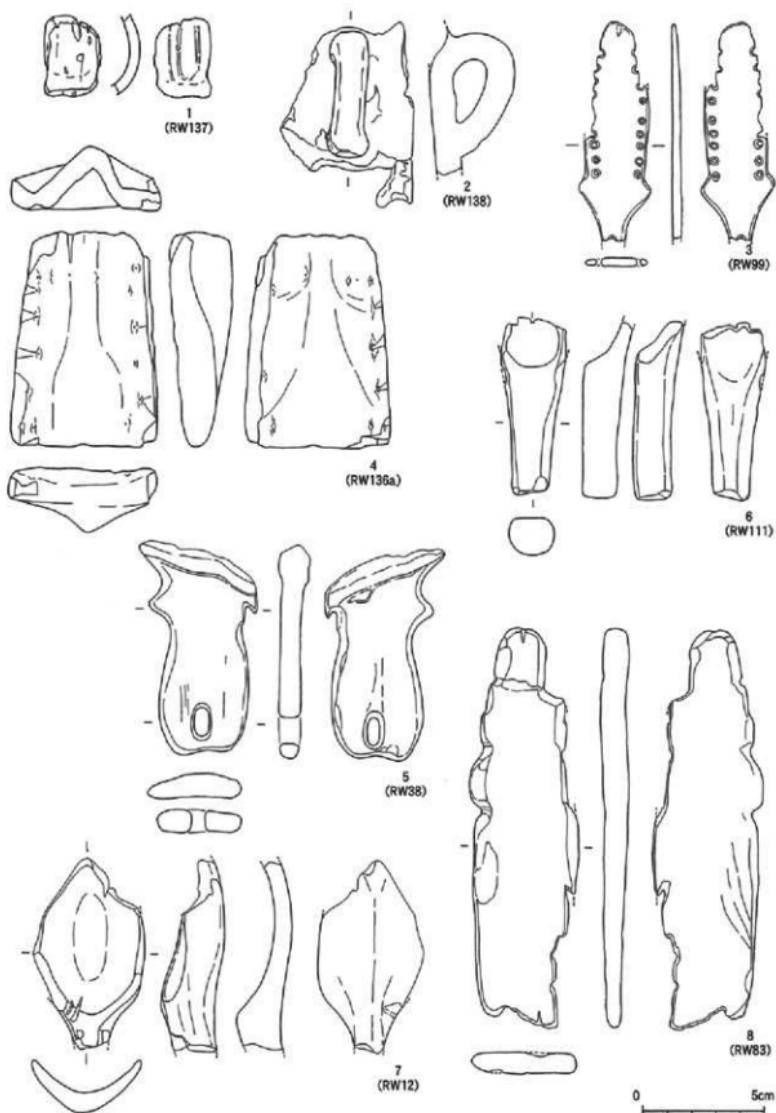
図版108-2は、現存長23.4cm、現存幅18.2cmの板状である。図版108-3は、現存長28.8cm、現存幅15.6cmだが、中央部分が抜けた状態である。いずれも第1次調査区のST5から出土しており、大杯の一部の可能性もある。

図版112-5は、第1次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるH-24グリッドである。現存長4.6cm、現存幅2.6cm、厚さ0.7cmで、樹種はケヤキである。

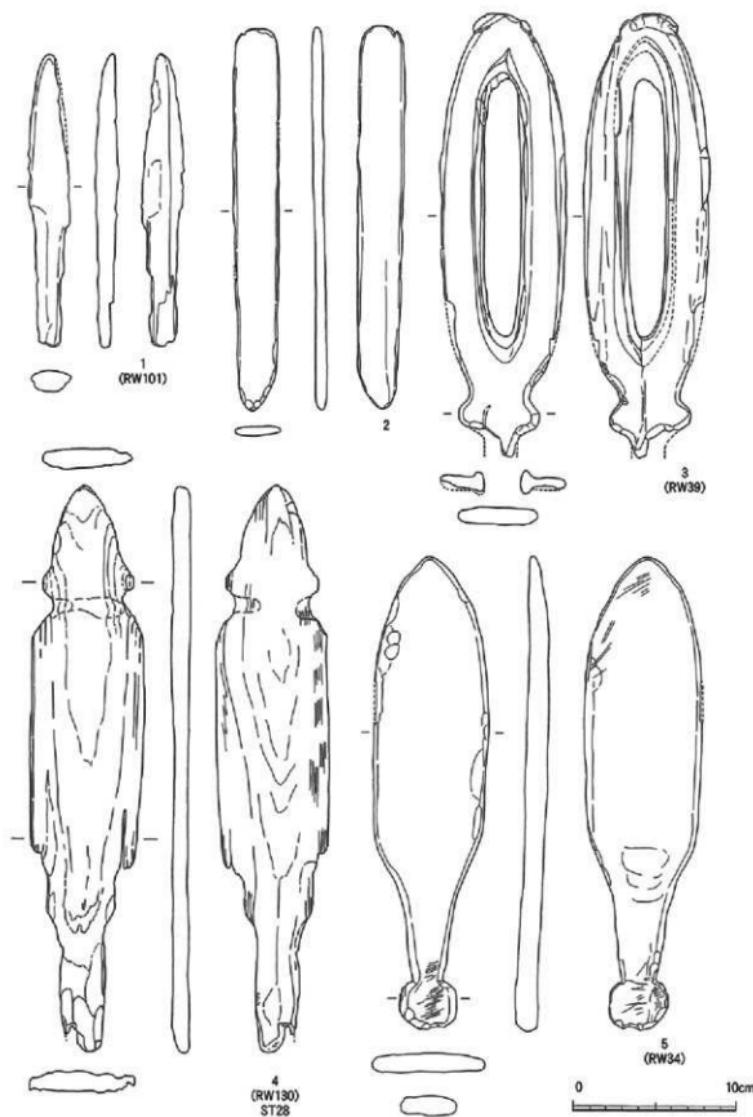
図版113-1は、第2次調査で出土した。出土地点は、窪地にあたるE-44グリッドである。現存長4.7cm、現存幅4.6cm、厚さ1.1cmである。赤漆が施された波状の口縁部で、樹種はケヤキである。

図版112-2・3、図版113-2・7・8は、赤漆が施された木胎漆器片である。

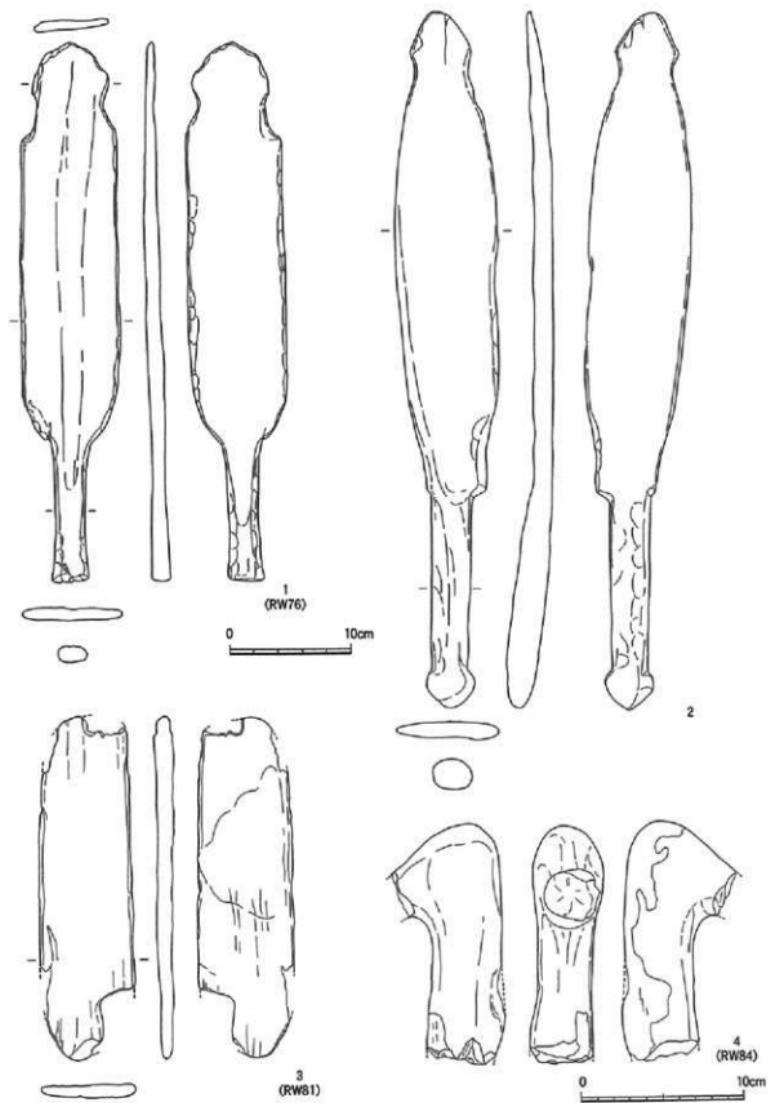
また、図版112-1~11は、破片が小さいので確定はできないが、大杯の一部の可能性が高い。



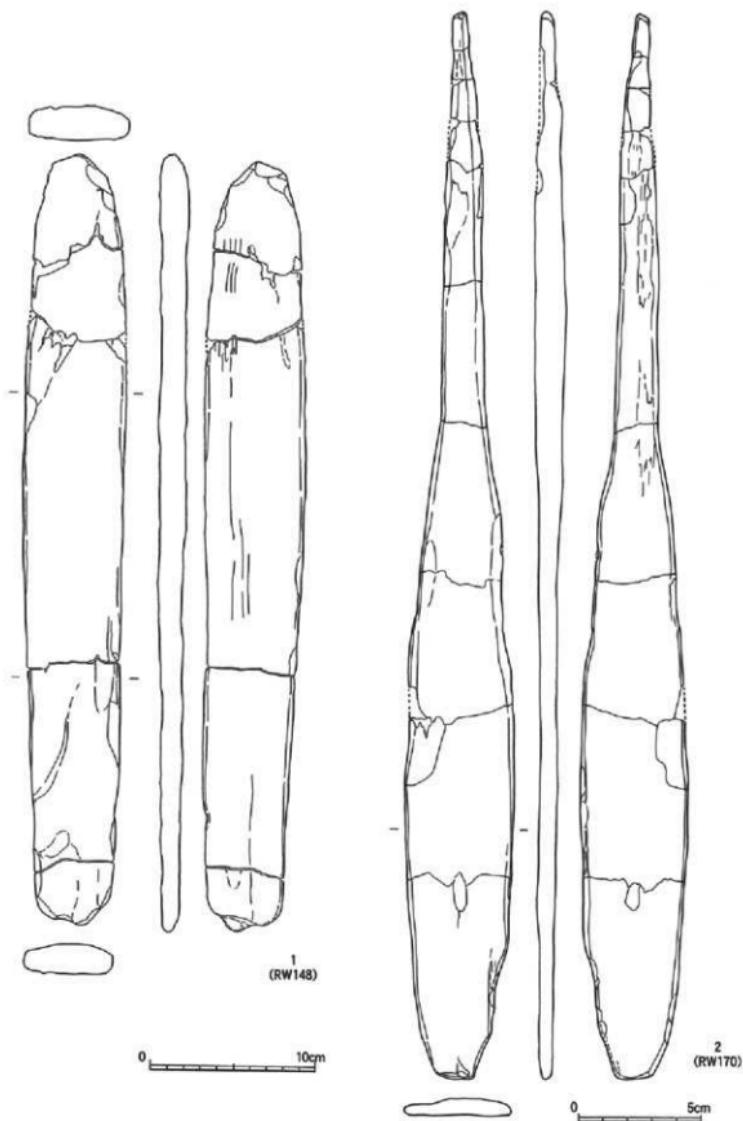
第216図 出土木製品(1)



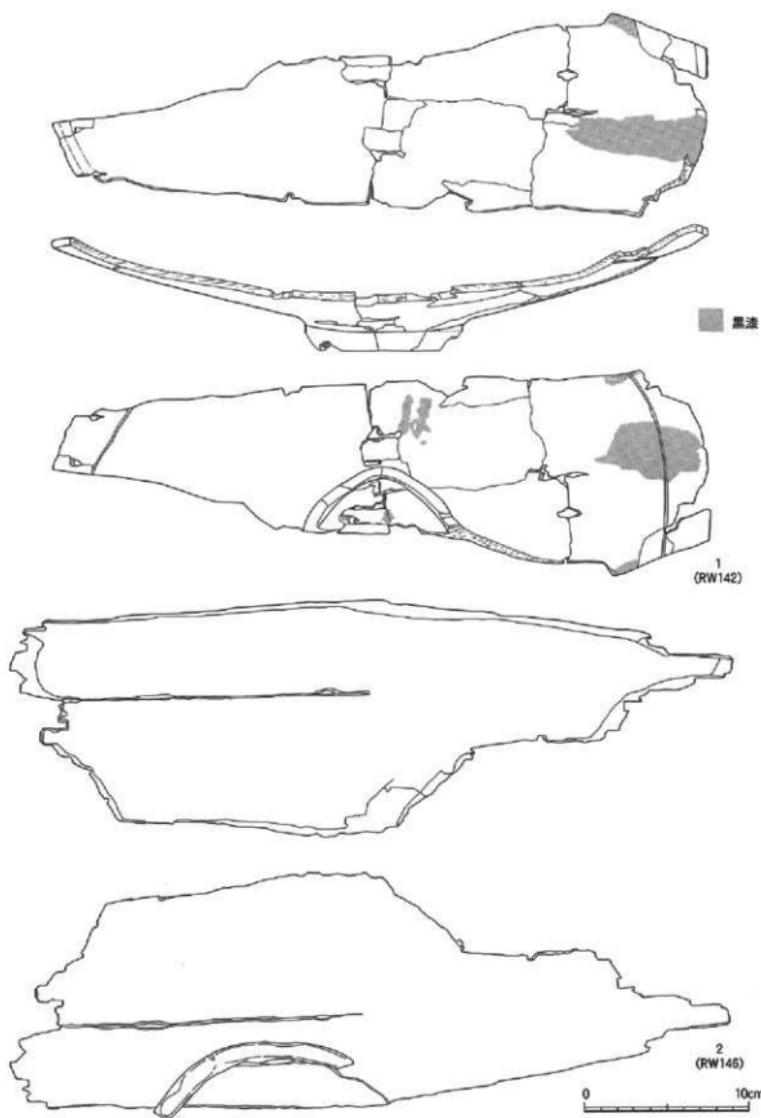
第217図 出土木製品(2)



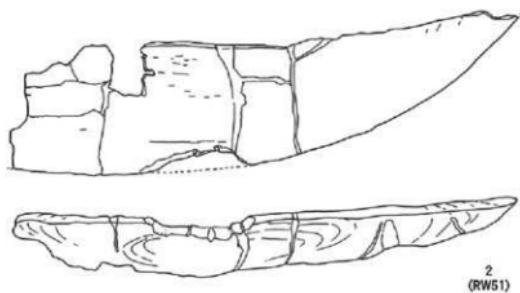
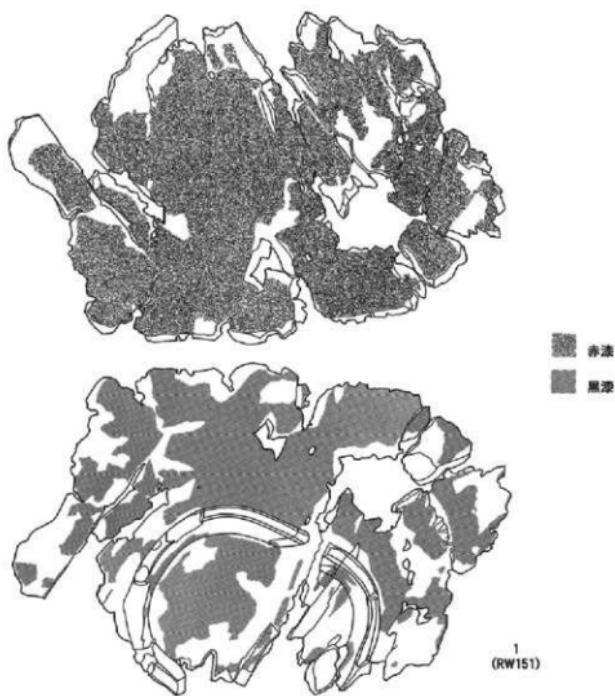
第218図 出土木製品(3)



第219図 出土木製品(4)



第220図 出土木製品(5)



0 10cm

第221図 出土木製品(6)

4 木 柱

(1) 調査状況

1～3次調査を通算して、4,000本以上の木柱が検出された。これらは、全て明確に加工された打ち込み柱あるいは杭であり、当時の住居構造・集落のあり方の実態を知る手がかりとして重要である。また、これらとは別に「転ばし根太」と通称した、住居趾内の床面付近、無遺物層直上に横に並べ置かれた丸太材の一群があった。

低湿地での柱の検出は困難をきわめた。諸般の事情から、柱はそのすべてを取り上げ保存することが困難であったため、主としてST10・11・15・17・32の各住居を構成するとみられる柱について、これを抜き取り、保存・実測にあてた。

その他の柱については、一部を輪切りにして採取するにとどめ、これを樹種の同定に使用した。一方、「転ばし根太」はST10・11・15・31・32の住居趾プラン柱列の内側にあったが、遺存状態が悪く、これを取り上げて保存することも断念せざるを得なかつた。

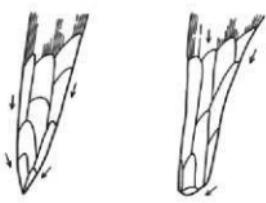
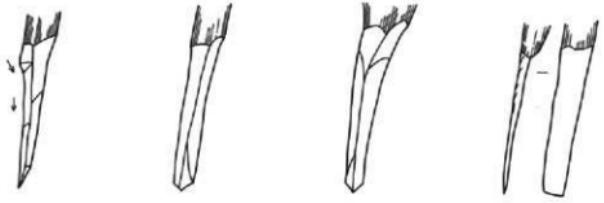
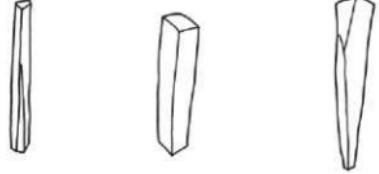
住居趾プランは、円形・方形・隅丸方形・楕円形である。柱の列が二重・三重に巡っているもの多かった。土層状況から判断するに、柱を地面を掘って埋めたことを示唆するような土色変化はみられず、したがって、これらの柱はいわゆる掘立柱ではなく、打ち込み柱であったと考えられる。柱の上の部分は、ほぼいずれの柱も腐食して消滅してしまっている。

また、木柱を現地で検出・精査した時には、樹皮のついているものがほとんどであったが、抜き取り作業の際、そのほとんどが剥離してしまった。柱の上部の検出レベルは、だいたい208～210cmであり、現在の地表面より約2m下の低湿に埋没していた。

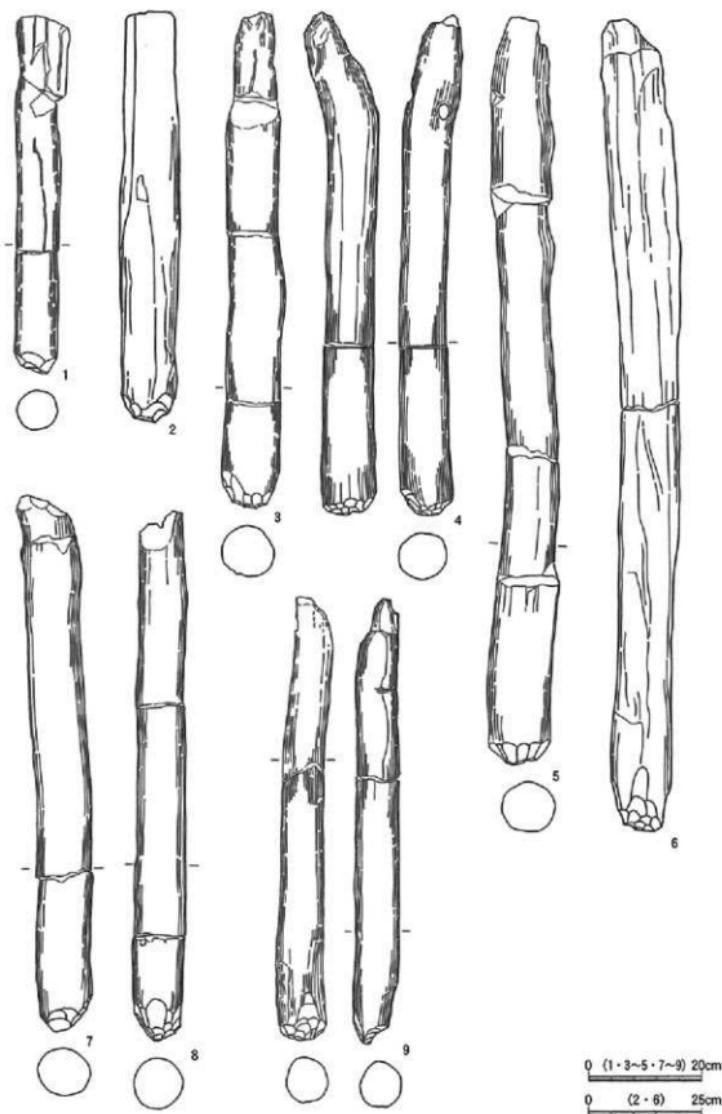
(2) 木柱の分類（第222図）

取り上げた柱については、形状が明瞭で、かつ典型的または特徴的なもの270本についてのみ実測をおこなつた。木柱先端部の尖形の形や加工の仕方等によって、いくつかの類型に分類することができる。柱の主体部における断面形は、径5～20cmの円・楕円の丸太材がほとんどであり、最大級のものでも30cm、また最少級のものでは5cm未満のものもいくつか存在した。先端部尖形の形状の特徴は、これら材の太さに対応しておむね決まっているように思われる。木柱は必ずしもまつすぐなものだけではなく、木の節があるために途中で屈曲しているような形のものや、二又材を用いているものもみられた。柱の先端にかけて焼痕のみられるものもあった。

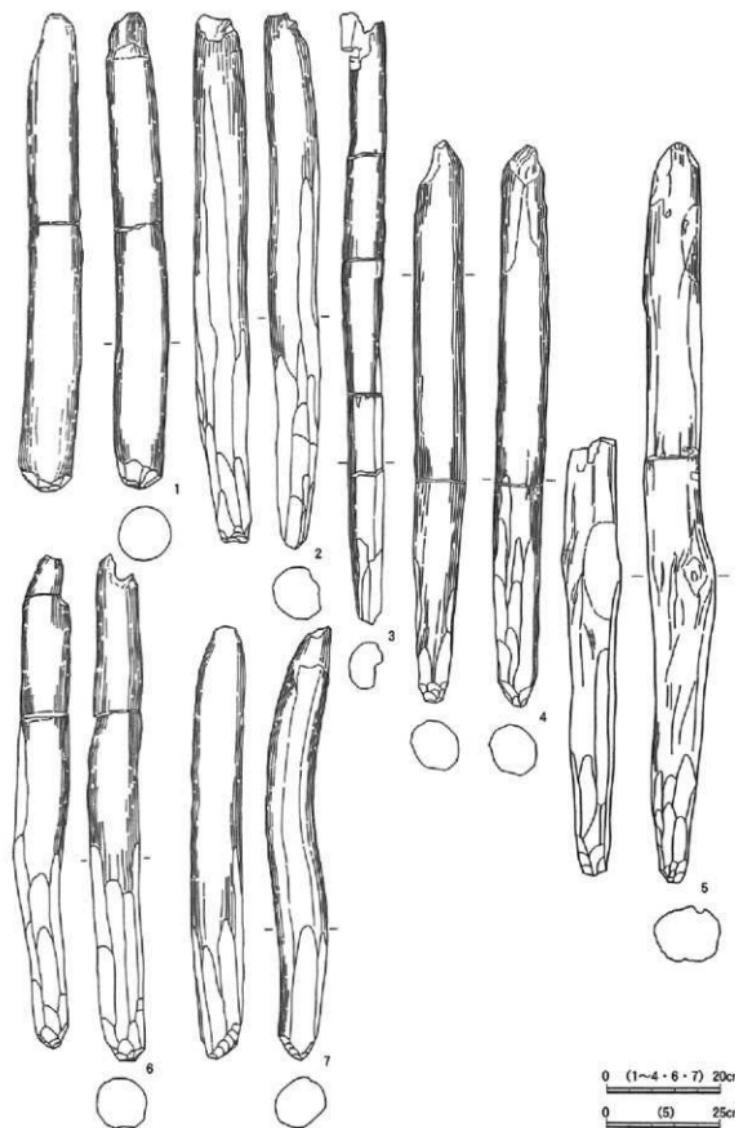
まず、第222図のようにa・b・c・d・e群の5つの類型に分けてみると、a群は切削加工された部分が、ごく先端部に限られているもの、b・c・d群はいくらか柱の上の方から鋭角に削りを入れるか、なれば先端部分だけ割り削ったように細くなっているもの、e群は木を割り裂いて加工したものとみることができる。このうち、aまたはbが最も多くみられる典型的な形状である。また、bおよびdの場合の削られた部分の断面形は多様であり、半円・1/3円・1/4円・1/6円・台形・三角形・長方形・正方形・平行四辺形・五角形・その他不規則な多様形など様々である。

分類	模式図
a	 
b	
c	
d	
e	

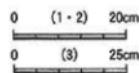
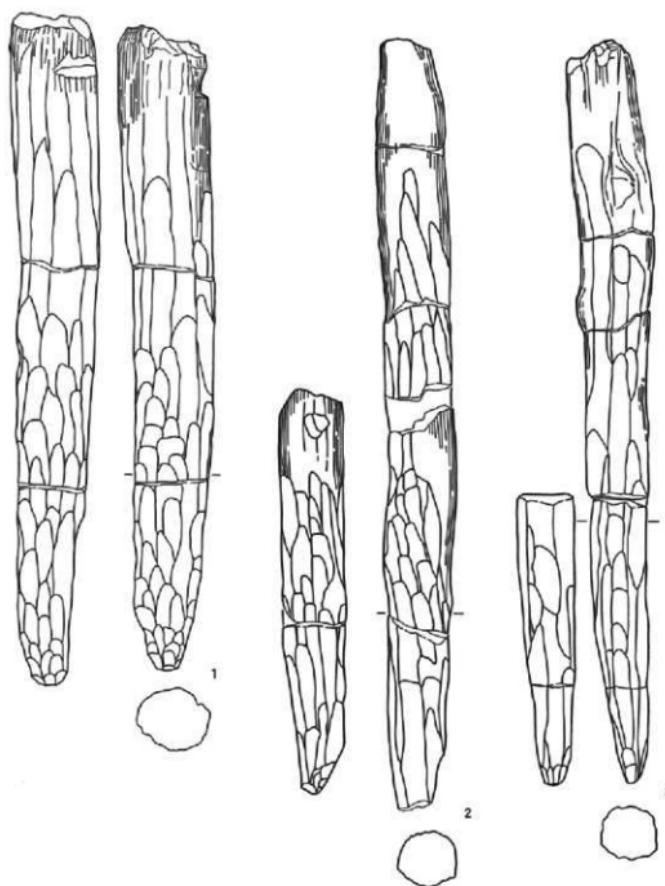
第222図 木柱成形模式図



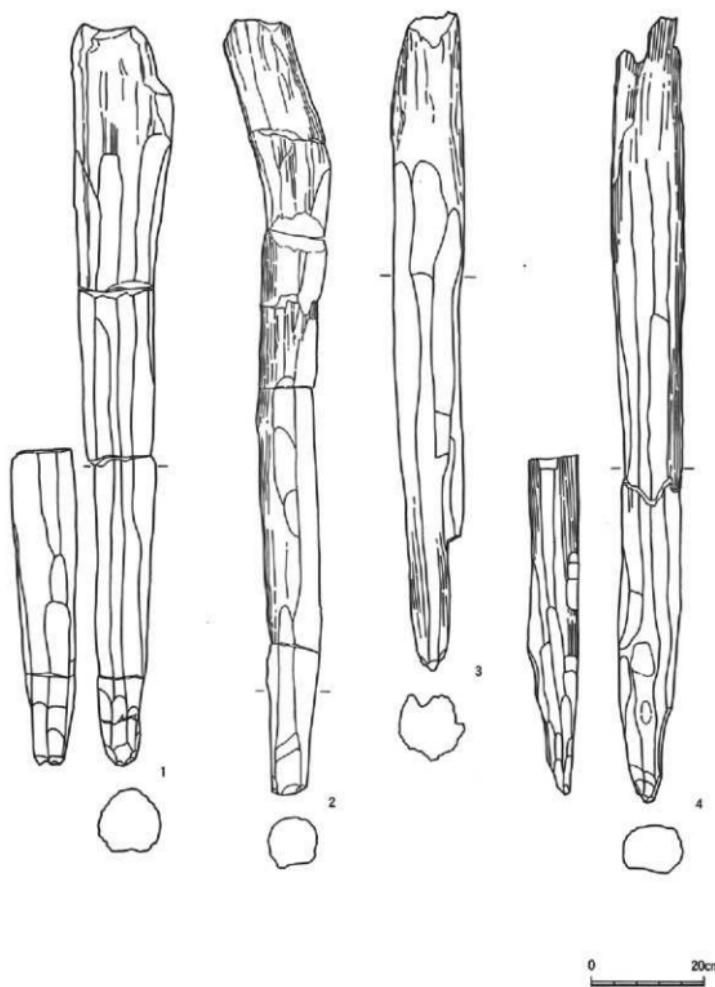
第223図 出土木柱(1) ST1(1・3・5・7・8)・ST11(2・6)・ST17(4・9)



第224図 出土木柱(2) ST4(3)・ST6(5)・ST17(1・2・4・6・7)

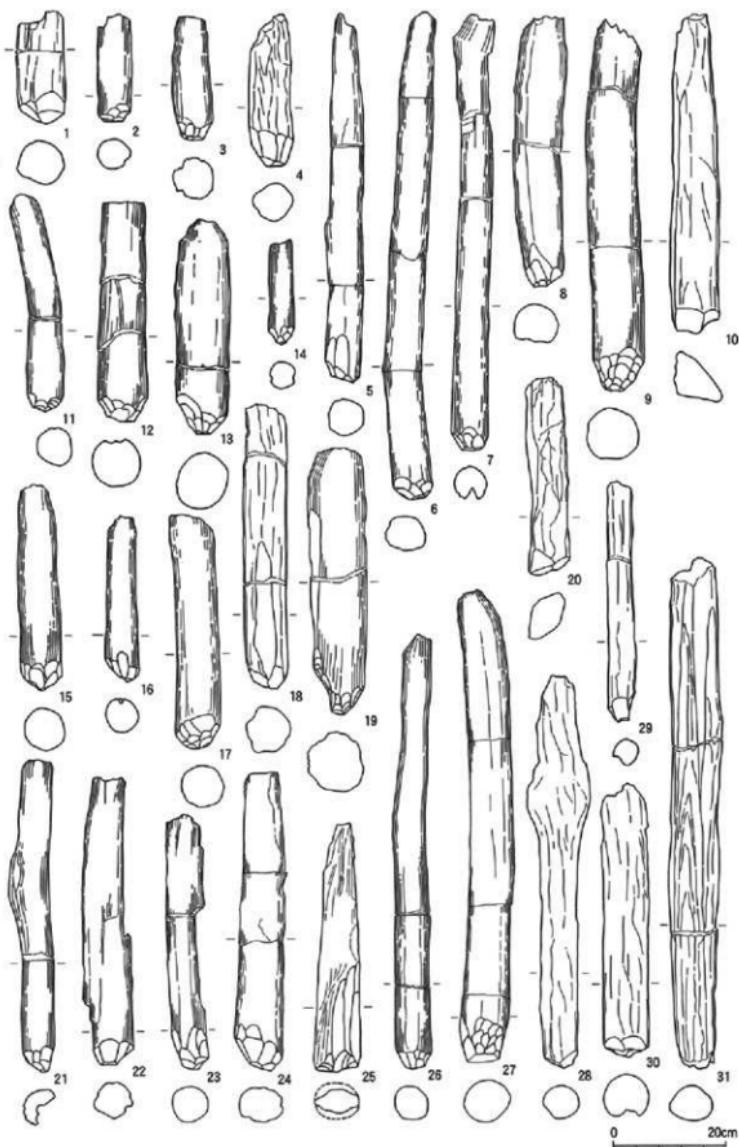


第225図 出土木柱(3) ST11(2・3)・ST14(1)

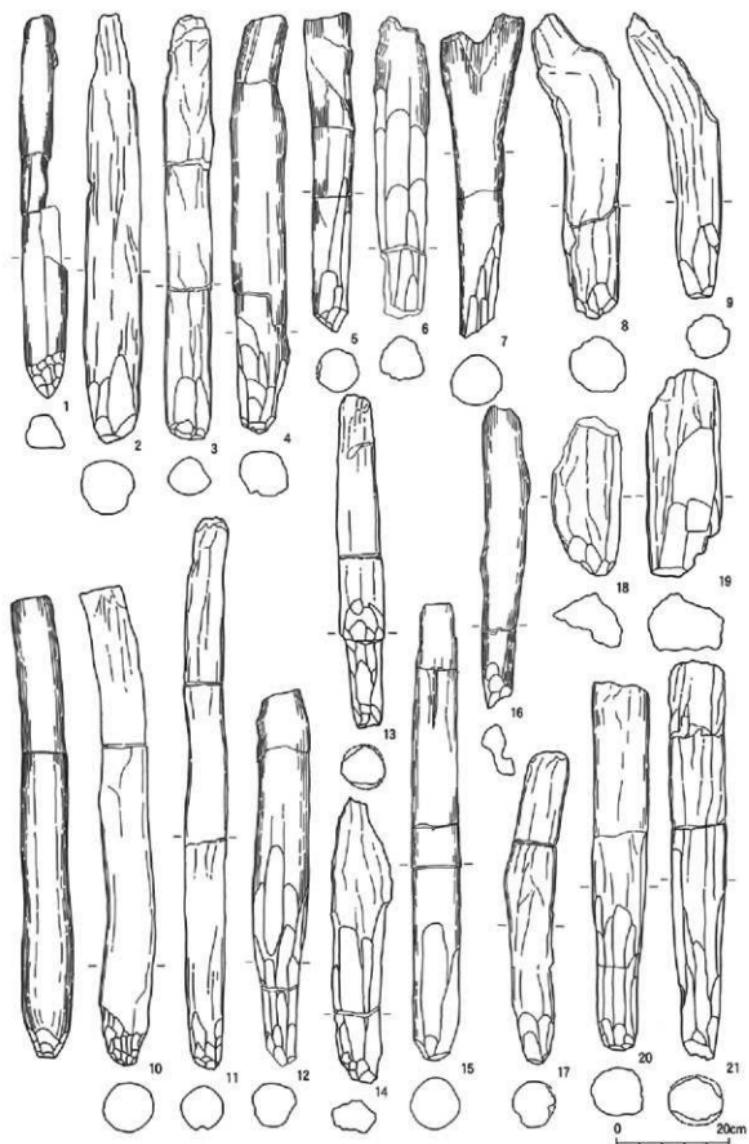


0 20cm

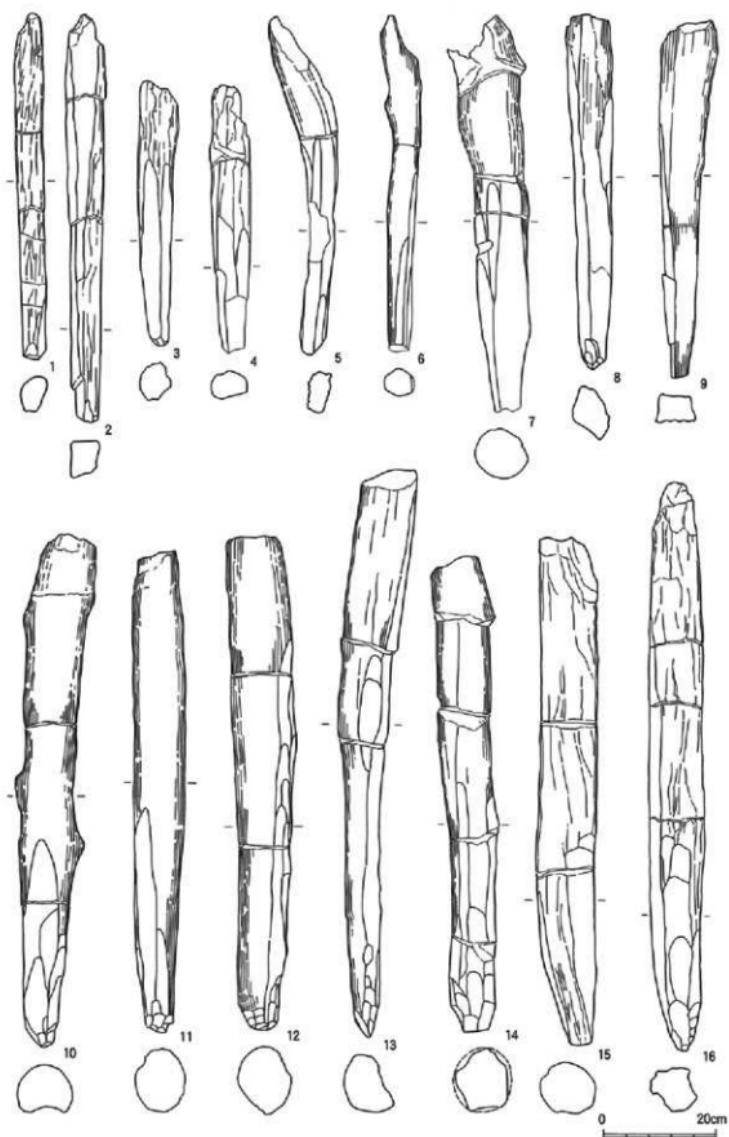
第226図 出土木柱(4) ST6(1)・ST10(3)・ST11(2・4)



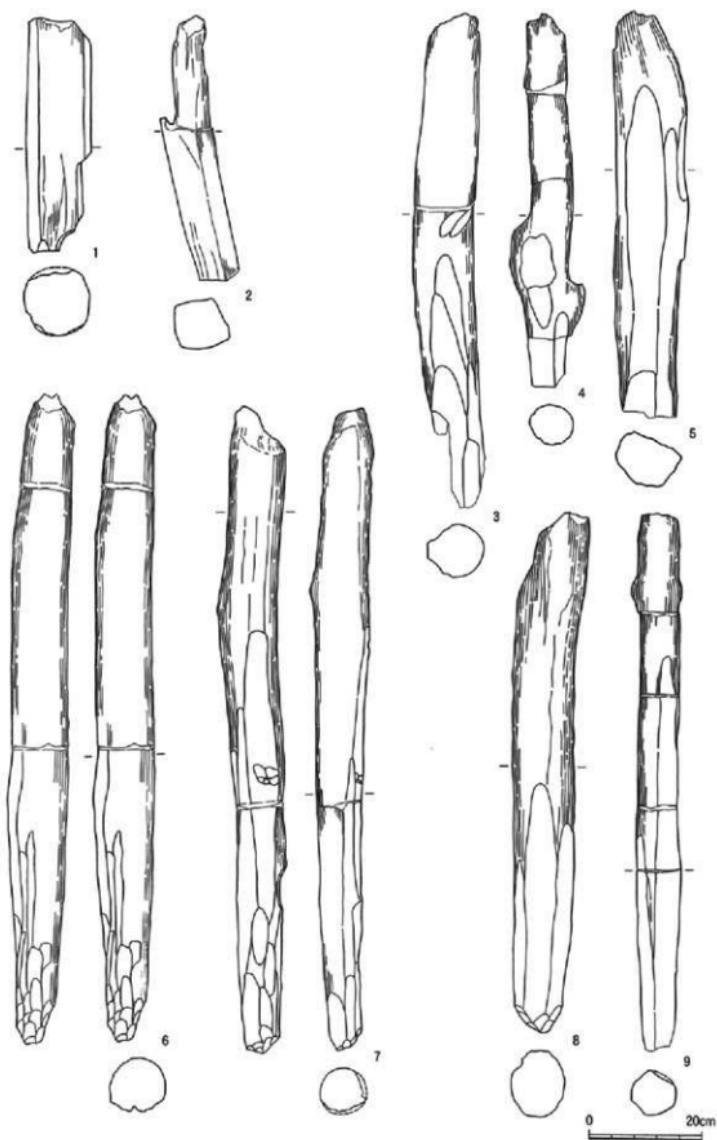
第227図 出土木柱(5) ST15(1)(1~31)



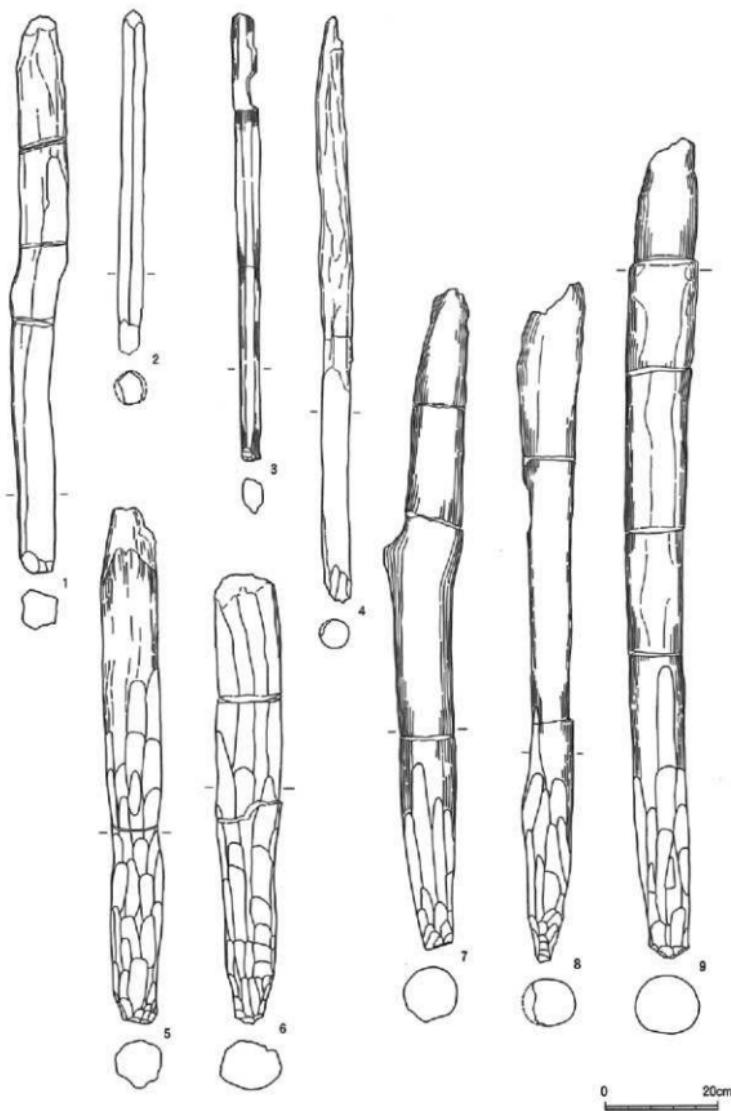
第228図 出土木柱(6) ST15(2)(1~21)



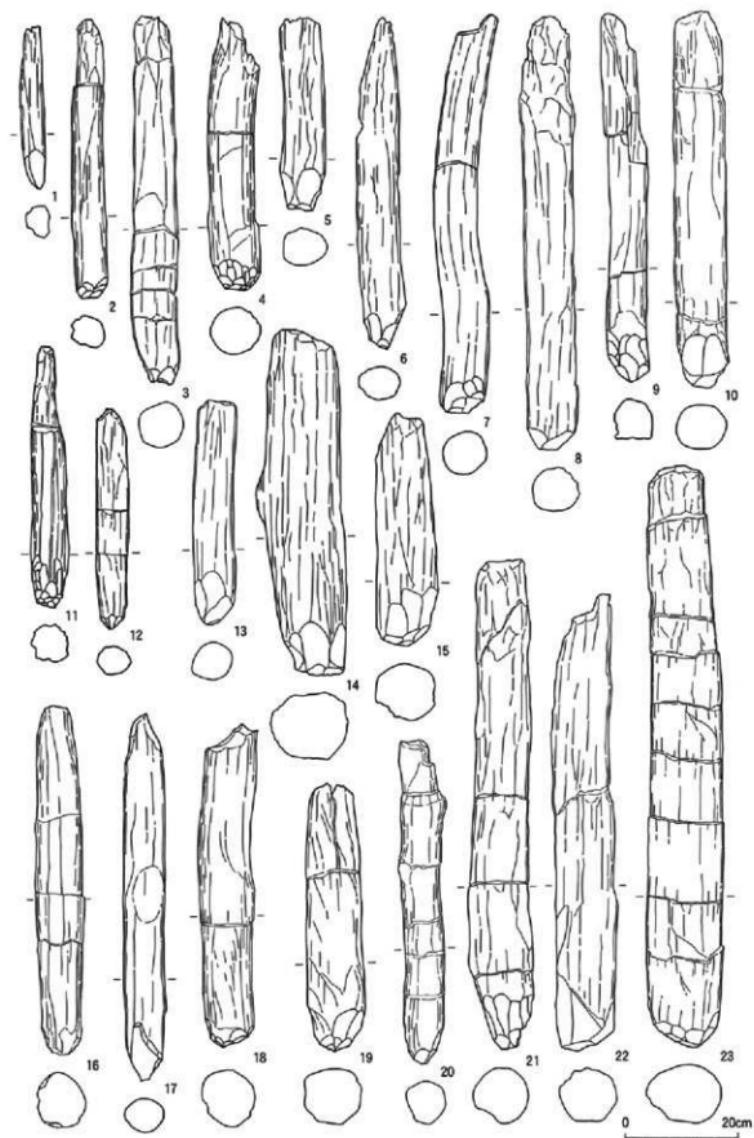
第229図 出土木柱(7) ST15(3)(1~10・12~16)・ST17(11)



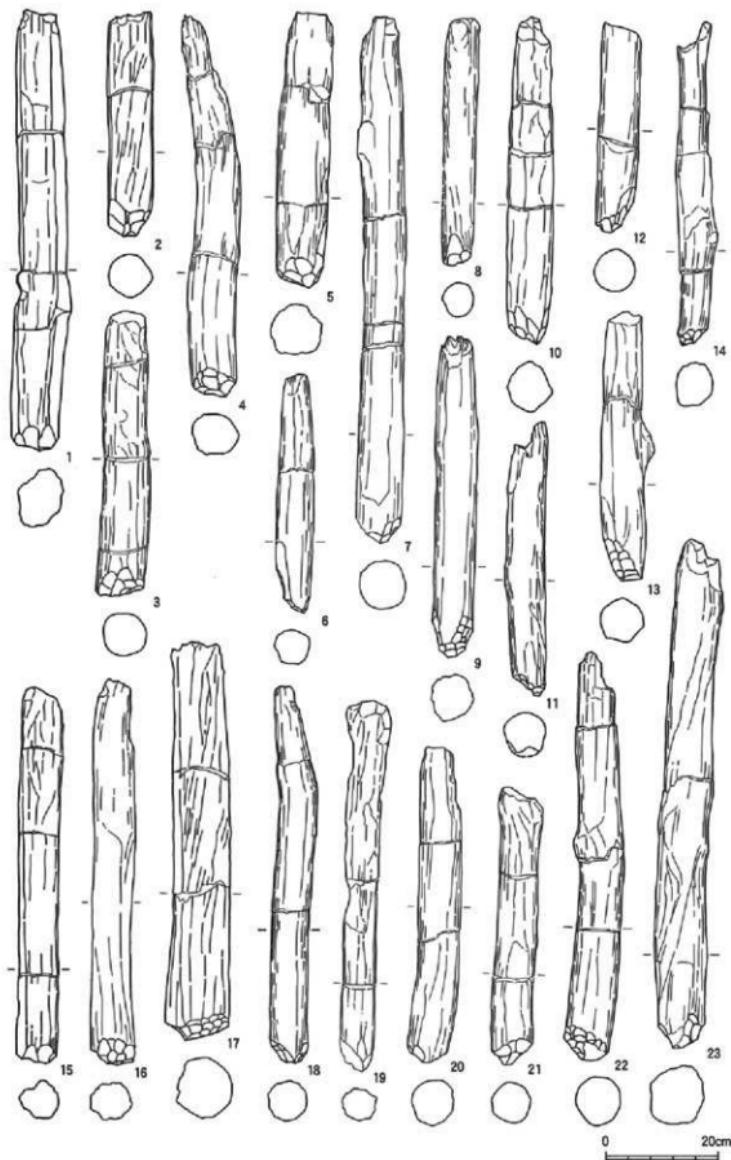
第230図 出土木柱(8) ST15(4)(1~7・9)・ST17(8)



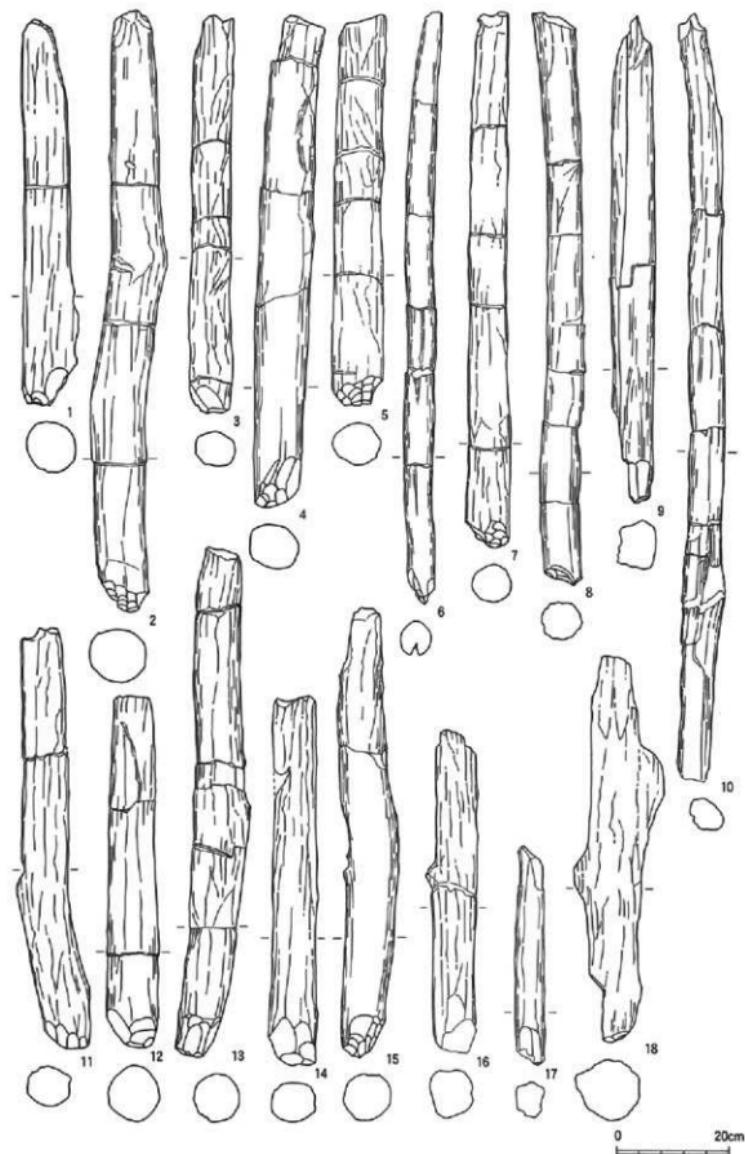
第231図 出土木柱(9) ST15(5)(1~9)



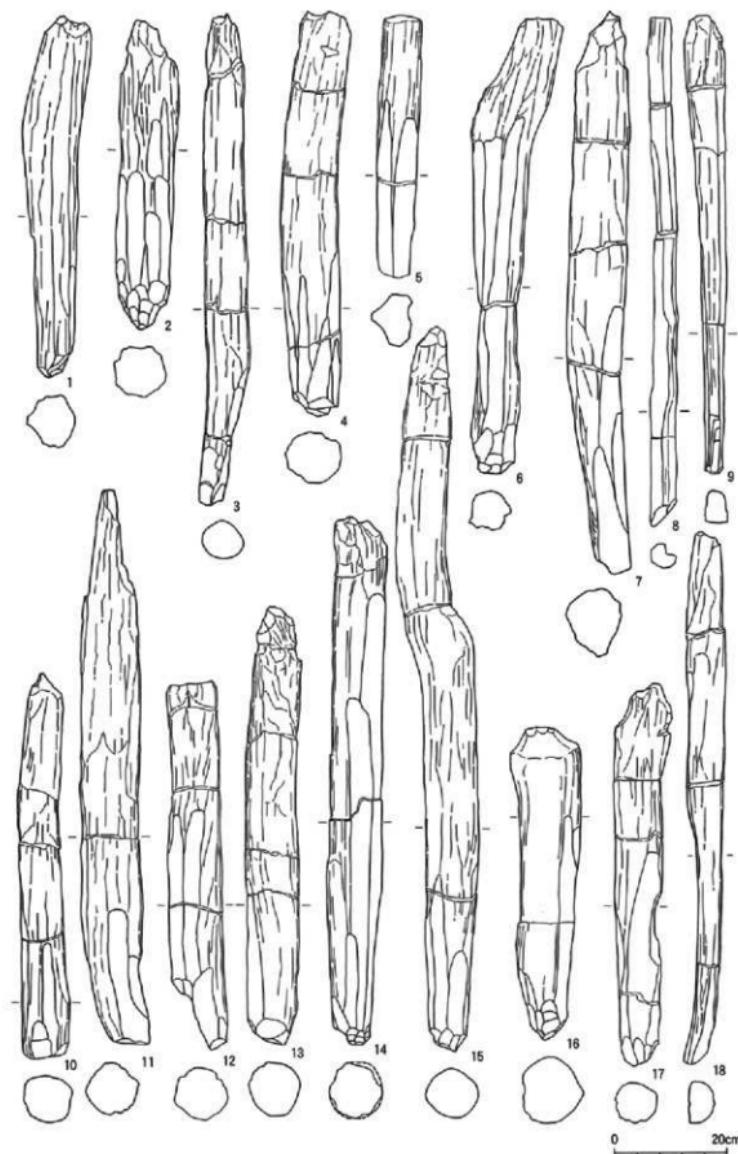
第232図 出土木柱(10) ST32(1)(1~23)



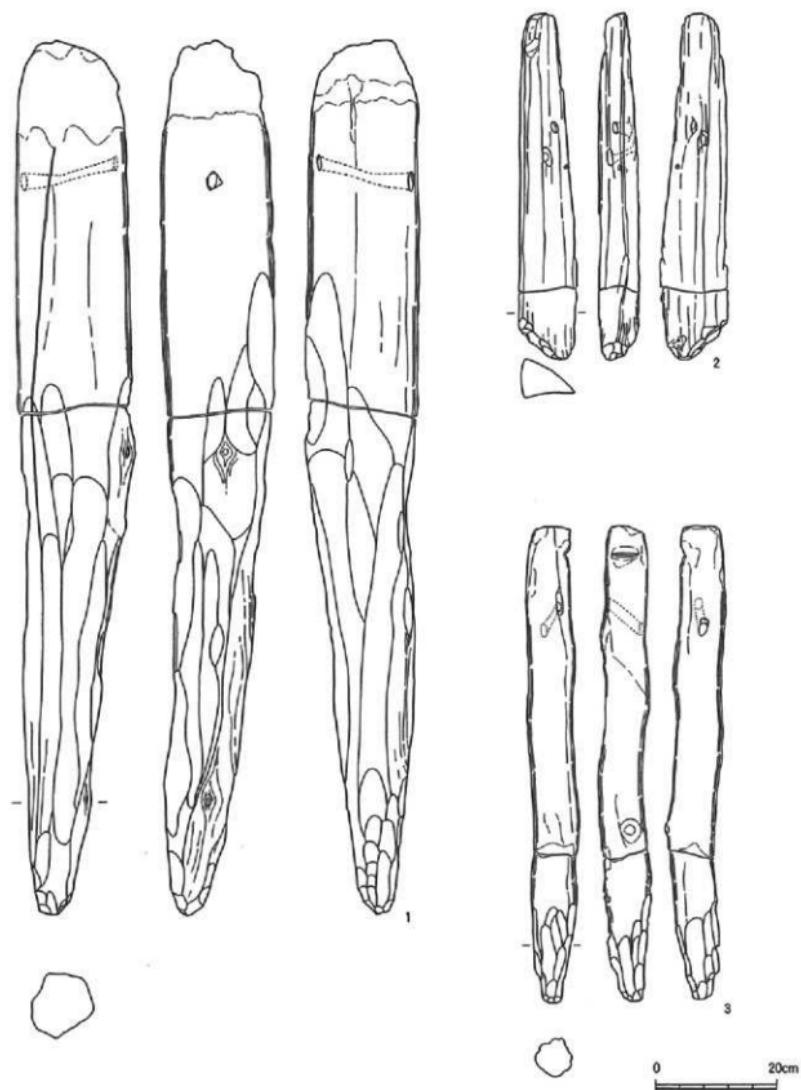
第233図 出土木柱(11) ST32(2)(1~23)



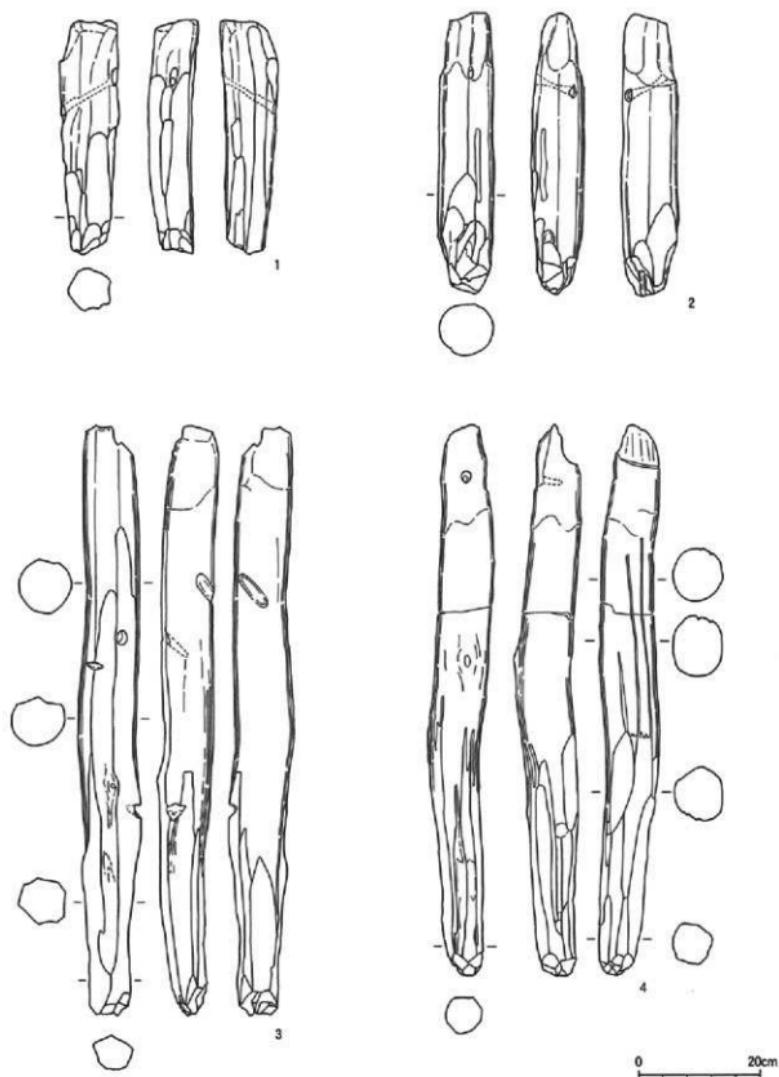
第234図 出土木柱(12) ST32(3)(1~9・11~18)・ST31(10)



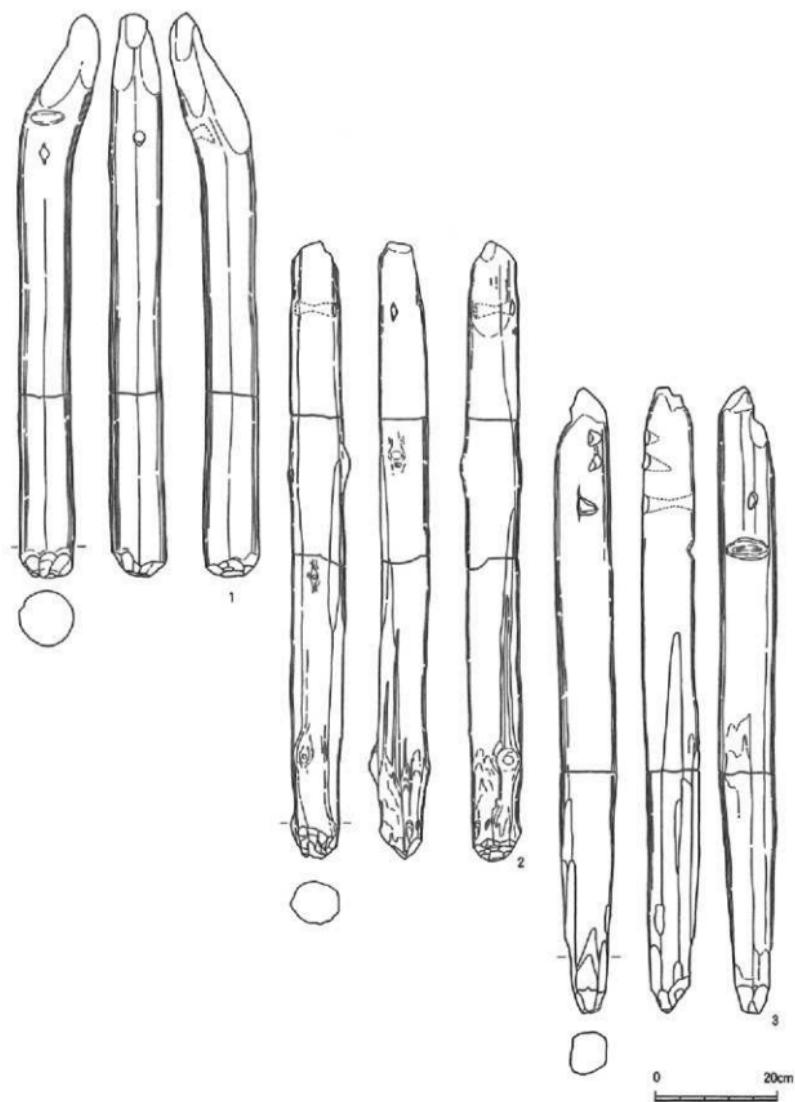
第235図 出土木柱(13) ST32(4)(1~18)



第236図 ホゾ穴のある木柱(1) ST14(1)・ST15(2・3)



第237図 ホゾ穴のある木柱(2) ST15(1・2)・ST17(3・4)



第238図 ホゾ穴のある柱(3) ST17(1~3)

(3) 木柱の細分 (第223~238図) (表編-4、木柱)

a群は、切削加工された部分が、ごく先端部に限られているものである。石斧による2方向加熱だけの単純なものから、数方向から打撃を加えたあと削りを入れたものまで種々ある。図示したのは、120点である (第223図1~9、第224図1、第227図1~31、第228図1・8~11・16~18、第229図1、第231図1・3、第232図1~23、第233図1~23、第234図1~18、第235図1・10、第236図2、第238図2)。

b群は、いくらか柱の上の方から鋭角に削りを入れるか、なかば先端部分だけ削り削ったように細くなっているものである。少し上の方から柱の周囲の全方向から削り落としたあと、さらにその先端部を尖らせたものである。図示したのは、44点である (第224図2~7、第228図2~5・14・15・19、第229図3~7・10~12、第230図3・5・7・8、第231図4・7~9、第235図2・4~6・11~17、第236図3、第237図1・2、第238図3)。

c群は、いくらか柱の上の方から鋭角に削りを入れるか、なかば先端部分だけ削り削ったように細くなっているもののうち、長さ1.5m前後の長大な木柱か、あるいは太めの木柱に特徴的にみられる形である。削りの入った面もおのずと長くなり、仕上げの削りも何面かみられる。図示したのは、19点である (第225図1~3、第226図1~4、第228図6・12・13・20・21、第229図13~16、第231図5・6、第236図1)。

d群は、いくらか柱の上の方から鋭角に削りを入れるか、なかば先端部分だけ削り削ったように細くなっているもののうち、切削の面のカーブが内側に曲がりこんで見えるような鋭いえぐられたような削り方をしたものである。横からみて、削られた部分は本体部よりかなり細くなっている場合が多い。ものによっては、ほとんど削材に近いようなものもみられる。図示したのは、6点である (第229図8、第230図9、第235図3・7・9・18)。

e群は、木を割り裂いて加工したものである。図示したのは、7点である (第229図2・9、第230図1・2・6、第231図2、第235図8)。

(4) ホゾ穴のある木柱 (第236図~第238図) (表編-4、木柱)

ほかに特徴的な柱として記載しなくてはならないのは、ホゾ穴のある木柱である。柱の上部または中ほどのところに、ホゾ穴が貫通しているもの、または貫通していないホゾ穴をもつものなどが、ごくわずか數本検出確認されている。前述のように、4,000本以上の木柱全部を取り上げたわけではないので、全体の中でこれら穴の加工された木柱が、どの程度の割合で存在しているかは、言うことができない。

貫通しているものは、貫通孔が20度前後傾斜しているものがあることからすれば、ここに別の細い木柱を差し込んでいた可能性がある。貫通していないものでも、20度前後傾斜しているものがあり、これまた、ここに別の細い木柱を差し込んでいた可能性がある。

以下(a)(b)の二つの類型に分けてみると

(a) 柱の上部または中ほどのところに、ホゾ穴が貫通しているもの。これらは、漏斗状の穴が中央で結び付いて貫通しているように見えることから、両側から穿孔を行い貫通孔を形成したも

のであると考えられる。

図示したのは、7点である（第236図1～3、第237図1・2、第238図2・3）。

(b) 貫通していないホゾ穴をもつもの

これらは、漏斗状の穴が一方から穿孔されているように見えることから、片側から穿孔を行い形成したものであると考えられる。

図示したのは、4点である（第237図3・4、第238図1・3）。

(5) 木柱の太さについて（表8）

木柱の柱径について、柱径のわかるものから整理したのが表8-①である。これによれば、ほとんどの柱は、60mm～80mmの直径を示しており、子供の腕ほどの直径であり大半のものは非常に細い。柱材としてしっかりとしていると考えられる10cm以上のものは非常に少ない。

こうした傾向は、押出遺跡では一般的であるようである。表8-②は、ST13・14・20・30・31の各住居跡について、柱径を求められるものからその本数のグラフを作製したものである。これによって、各住居跡の柱の直径についての選択性を知ることができる。これによれば、どの住居跡でも、ほとんどの柱は、60mm～80mm程度の直径を示している、子供の腕ほどの直径であり大半のものは非常に細く、表8-①で見た全体的傾向と一致している。

(6) 住居における木柱樹種の選択性について（表8）

木柱の樹種について、理化学分析から判明するものについて円グラフとして示したのが表8-③である。これによれば、トネリコ属がもっとも多く柱材に使用され、全体の半数近くになる。次に多いのはヤナギ属であり、トネリコ属とヤナギ属をあわせれば、ほぼ全体の3分の2となる。なお、樹種の同定などについては、分析編で詳しく触れている。

次に、選択された木材がどの程度の太さを持っているかを表8-④で示した。柱の太さの項目で検討したように、ほとんどの柱は、60mm～80mm程度の直径を示している。全体のほぼ3分の2を占めるトネリコ属とヤナギ属の直径は、全体の傾向性と連動する。しかし、ハンノキ属・コナラ節、オニグルミはこれよりもやや太い木柱が多い傾向性がある。

ST13～16・18・20・30の各住居跡について、住居跡毎の柱材の樹種について表したのが表8-⑤である。これによれば、トネリコ属とヤナギ属は多く、全体の傾向性と連動する。これ以外の樹種であるハンノキ属・コナラ節、オニグルミは少ない。

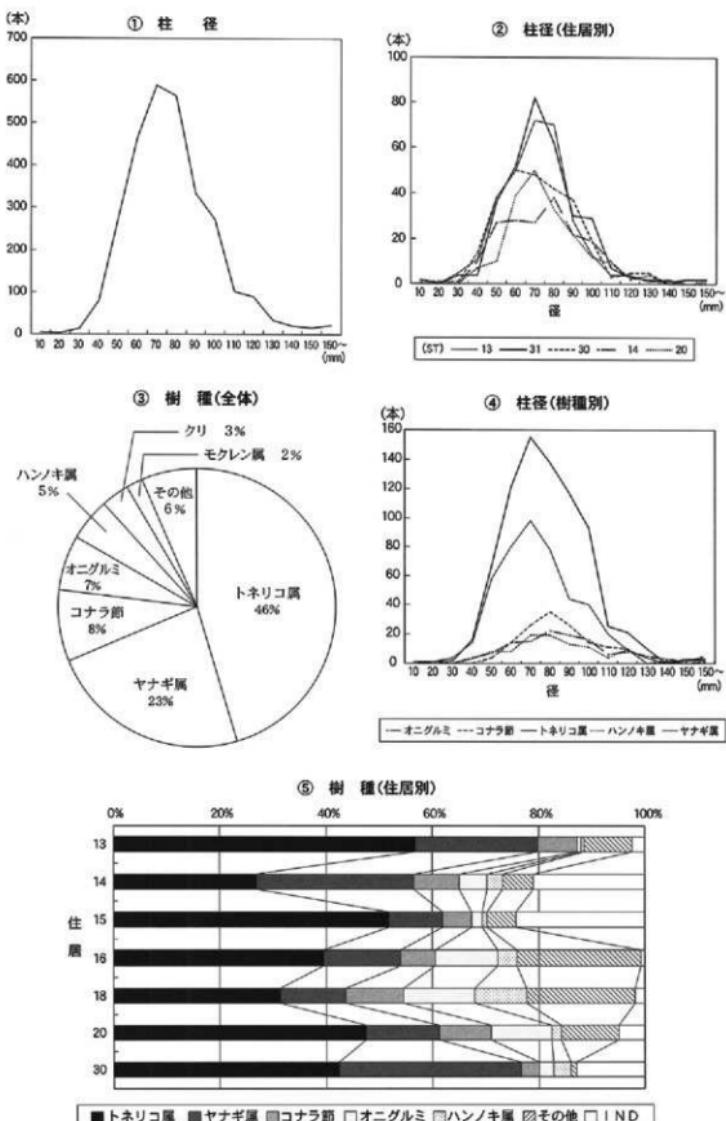


表 8 木柱 (柱經・樹種) 累計表

5 自然遺物

第1次調査では、土器片や石礫・攝器などに混じって多量の剥片が出土し、他に動植物の遺存体(獣骨片・クルミ・トチ・クリ・ヒヨウタン等)が発見されている。特徴的な自然遺物として、縦糸・横糸が1cmに10本入る編物の断片、漆塊、樹皮、クルミ、クリ、キノコなどの自然遺物がある。第2次調査では、クルミ・クリ・ヒシ・カヤなどの植物種子類が多く出土した。特徴的な自然遺物として、堅果類等を加工・調理した可能性のある、溝巻文を施した植物質炭化物(通称:押出クッキー)が多数発見された。第3次調査ではクルミ・クリ・ヒシ・カヤなどの植物種子類が出土した。中でも、庭地からは整理箱にして約80箱という大量のクルミが出土した。

(1) クッキー状炭化物(第239図1~4、図版136-1~14、巻頭図版8)

黒く炭化したクッキー状の練り物で、堅果類を加工・調理した可能性があり、表面には溝巻文を施している。完形品になると約5~7cm程の円形となるが、直径約2~3cm程のものもある。出土したものは割れているものがほとんどで完形品は少ない。第239図1~4(図版136-5・8・13・14)は第2次調査区のST13から出土しているが、その他(図版136-1~4・6・7・9~12)は出土地点が不明である。

このクッキー状炭化物については、「押出遺跡検討会」のメンバーである、帯広畜産大学助教授である中野益男氏により、日本農芸化学会誌第62巻第1号(昭和63年1月)に以下の報告が載せられている。

「B-9 残存脂肪分析法による原始古代の生活環境復原ーとくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定(第7報)

帯畜大環境 福島道広、中野寛子、中岡利泰、中野益男、根岸孝

縄文時代前期の押出遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定を試みた。残存脂肪の平均抽出率は0.8%であった。脂肪として、遊離脂肪酸、トリグリセリド、ステロールが検出された。脂肪酸はパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸、リノール酸と動物由来の高級脂肪酸が検出された。とくに、パルミチン酸は30%以上占めることから、加熱・加工された可能性がある。主なステロールとして、植物性シテロール、微生物性エルゴステロール、動物性コレステロールが検出された。金属分析から動物性たん白質由来と推測されるSとNaが高かった。以上の結果、クッキー状炭化物は獣肉とクリ、クルミ等の植物でん粉を混合し、微生物により発酵、加熱・加工した食品と推定された。」

(2) 編物断片(第239図5、図版114-2・7、巻頭図版8)

第239図5(図版114-2)は、第1次調査区のST5から出土した。現存長10mm、現存幅13.5mmである。炭化が著しく黒色で、編み目の隙所に植物の細い根が入り組んでいるのが見られる。2本の縦糸で縦糸を両面から挟みながら編んでおり、アンギンに属するものと考えられる。材質は縦糸・縦糸ともアカソである。

図版114-7は、第1次調査区のD-13グリッドから出土した。現存長43mm、現存幅28mm、

厚さ10mmで、3片が接合する。扁平な樹皮を用い、縦は約2mm幅の樹皮各1本、緯は約1.5mm幅の樹皮各2本を、アンペラ状に編んだ製品である。裏面には厚く黒漆が付着し、焼けた痕がある。藍胎漆器の可能性があるが、定かではない。

(3) 繊維製品（図版114-1・3）

図版114-1は、第1次調査区のST5から出土した。現存長7.5mm、現存幅10mmで、繊維が結び目のようにになっている。

図版114-3は、第1次調査区のST5から出土した。現存長5mm、現存幅13.5mmで、繊維が縄のように撚られている状態である。

(4) 樹皮（図版122-1～19、巻頭図版8）

図版122-1・2は、第1次調査区のST10から出土した。図版122-3～19については出土地点等は不明である。

(5) クルミ（図版137-1）

調査区中央部と南部にある標高の低い窪地から大量に出土している。

(6) クリ（図版137-2）

ST13とその周辺に集中して出土している。ST10・15・17・32からも若干出土している。

(7) シイ（図版137-3）

(8) ヒシ（図版137-4、巻頭図版8）

(9) 化石（図版137-5）

図版137-5は、第3次調査区のST30から出土した。長さ12cm、幅9.8cm、厚さ3cmのホタテ貝の化石である。

⑩ 炭化キノコ（図版137-6、巻頭図版8）

図版137-6は、第1次調査で出土した。出土地点は窪地にあたるD-24グリッドである。キノコの種類は、サルノコシカケと見られる。

⑪ 動物遺存体

押出遺跡から出土した動物遺存体サンプルの重量は770.40gで、ほぼ全資料が熱を受けて収縮・細片化し、色調は白色あるいは褐色・黒色を呈している。この資料より、主に関節面を残す破片を中心に抽出し同定作業を行ない、種・部位等を明らかにできたのは73点であった。

①魚類

サケ科の一種とコイ科の一種?が同定された。サケ科の一種としたものは、椎骨の破片および遊離歯の破片が確認された。その椎骨の破片資料から想定される椎骨の大きさから、遡河性のサケ科魚類 シロザケ *Oncorhynchus keta* (Walbaum) などの可能性が考えられる。コイ科の一種?は、腹椎の破片が出土した。

②哺乳類

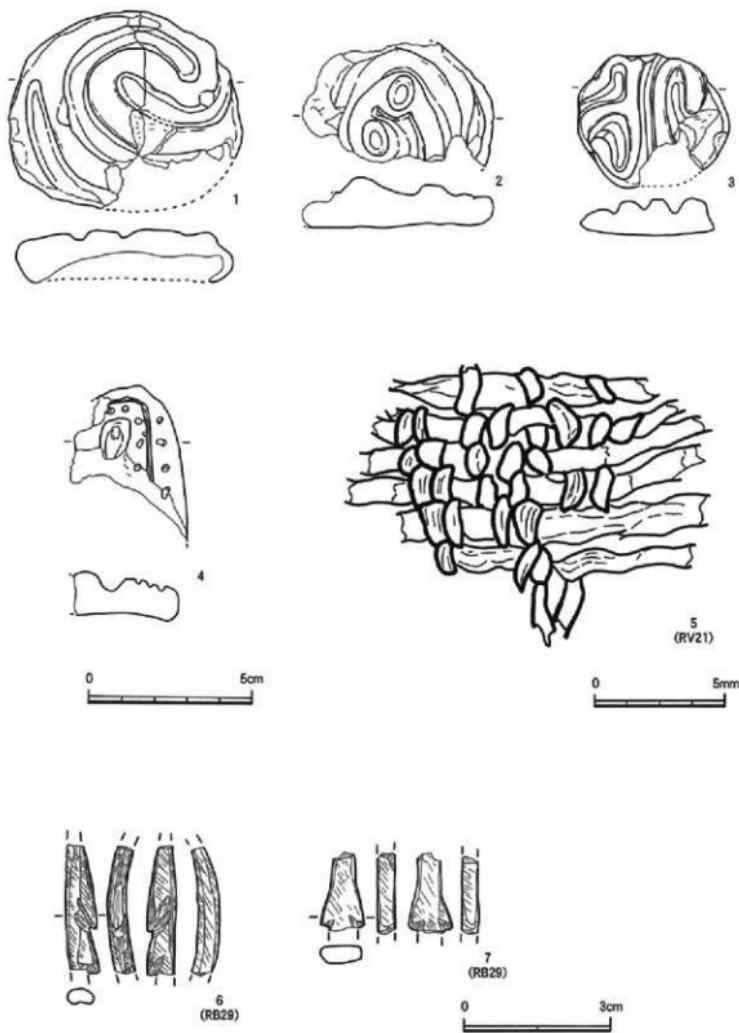
イノシシとニホンジカが同定された。イノシシ19点、ニホンジカ44点（鹿角片13点を含む）であった。鹿角片を除くとニホンジカ31点、イノシシ19点となり、イノシシよりニホンジカが多い。その他、表には記さなかったが、イノシシあるいはニホンジカに相当すると思われる四肢骨骨幹部の2cm大以上の破片が66点確認されている。

また、ST13より鳥綱と思われる破片が1点出土している。哺乳綱等の骨にくらべ骨質がうすく、鳥綱の破片と思われるが、小破片であるため種・部位とともに同定することができなかった。

今回同定した資料からは、全体量としては少ないながらも、主な狩猟対象となっていたと考えられるイノシシやニホンジカ、また周辺河川での漁撈活動の存在をうかがわせるサケ科やコイ科の遺存体が確認された。当該地域においてはこのような出土資料は非常に少なく、縄文時代の狩猟漁撈活動の様相を考えていく上で貴重な資料であるといえる。

③ 骨角器（第239図6・7）

鹿角製ヤスが2点出土している。いずれも小破片であり、SM1からの出土である。



第239図 クッキー状炭化物・礪物・骨角器

押出遺跡出土彩文土器と類似の土器

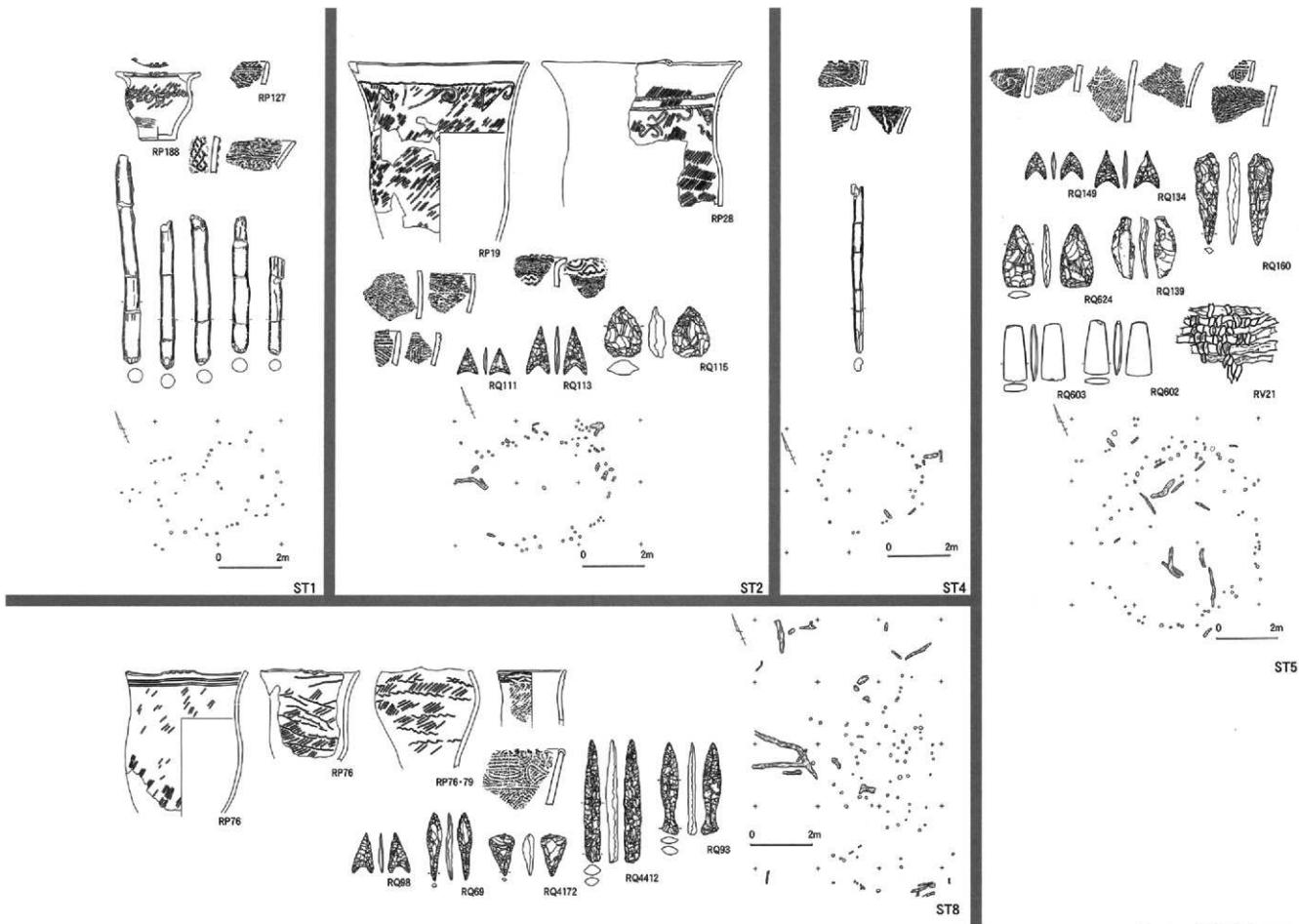
福井県「鳥浜貝塚」出土土器



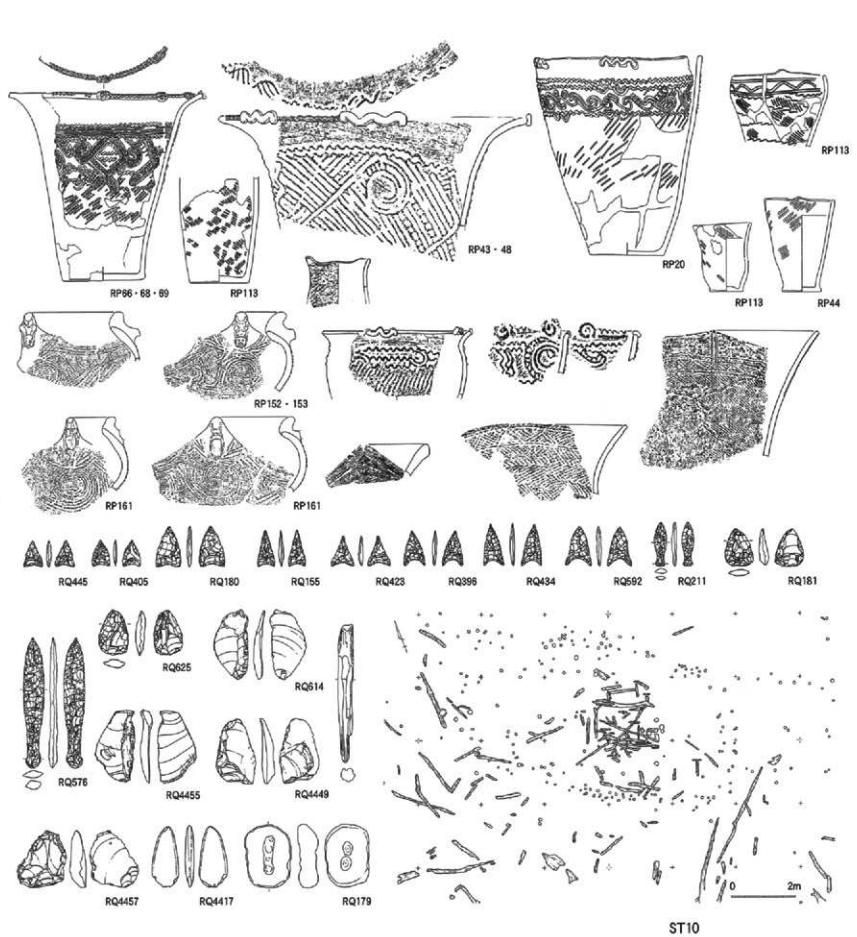
漆塗土器

福井県教育委員会1987

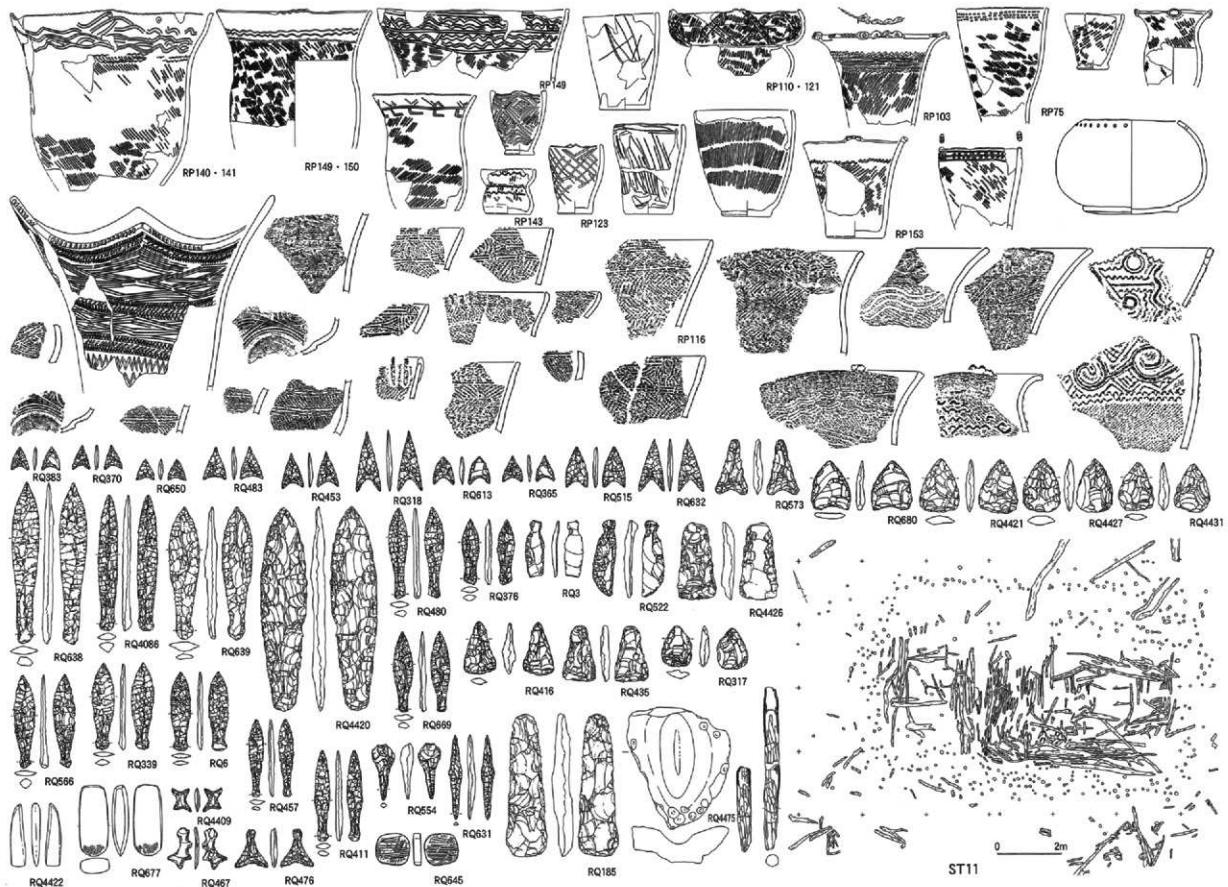
「鳥浜貝塚－1980～1985年の調査まとめ」より



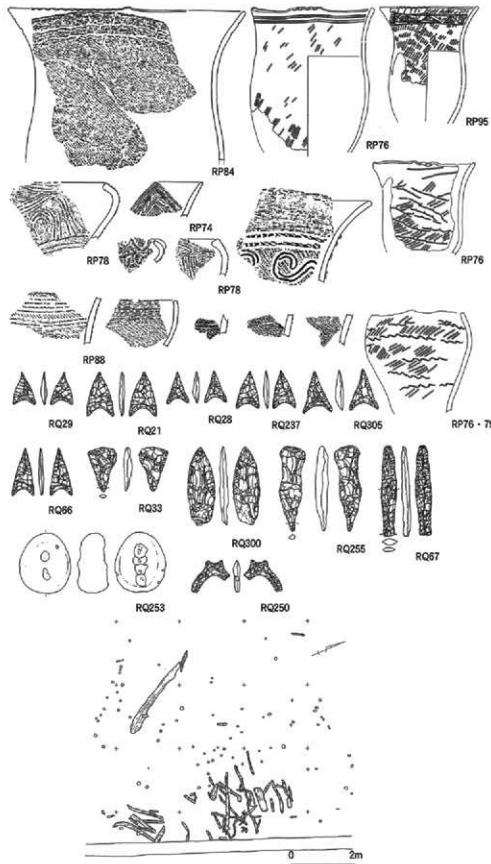
第240図 集成図(1) ST1・2・4・5・8



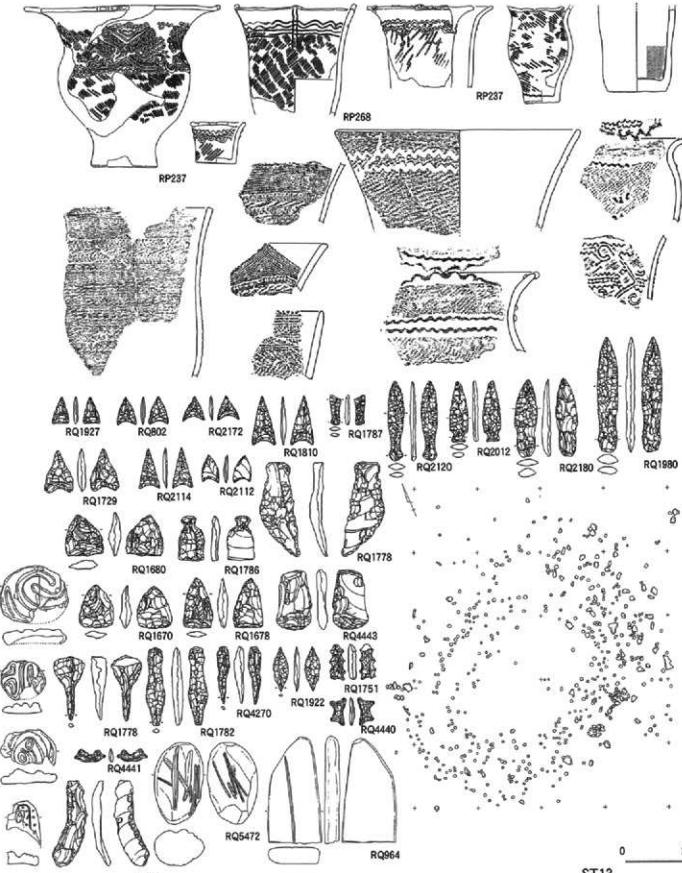
第241図 集成図(2) ST9・10



第242図 集成図(3) ST11

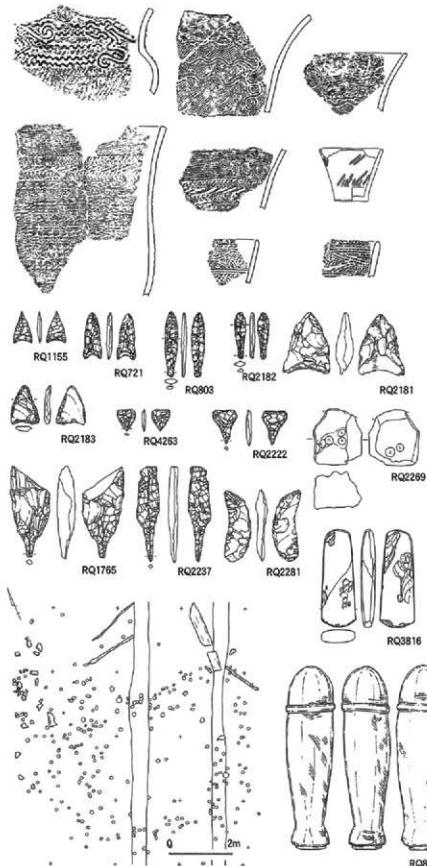


ST12

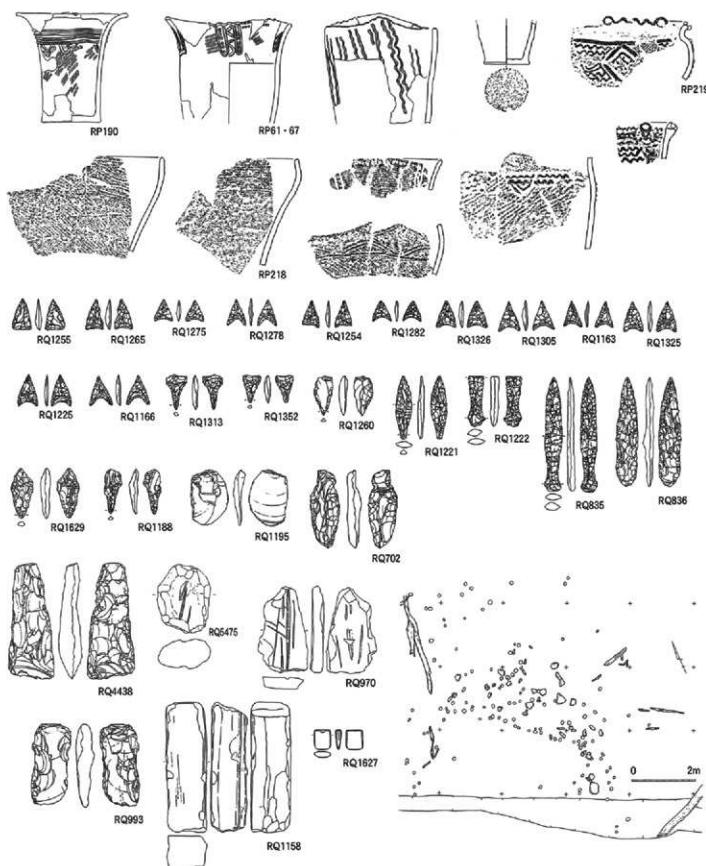


ST13

第243図 集成図(4) ST12・13

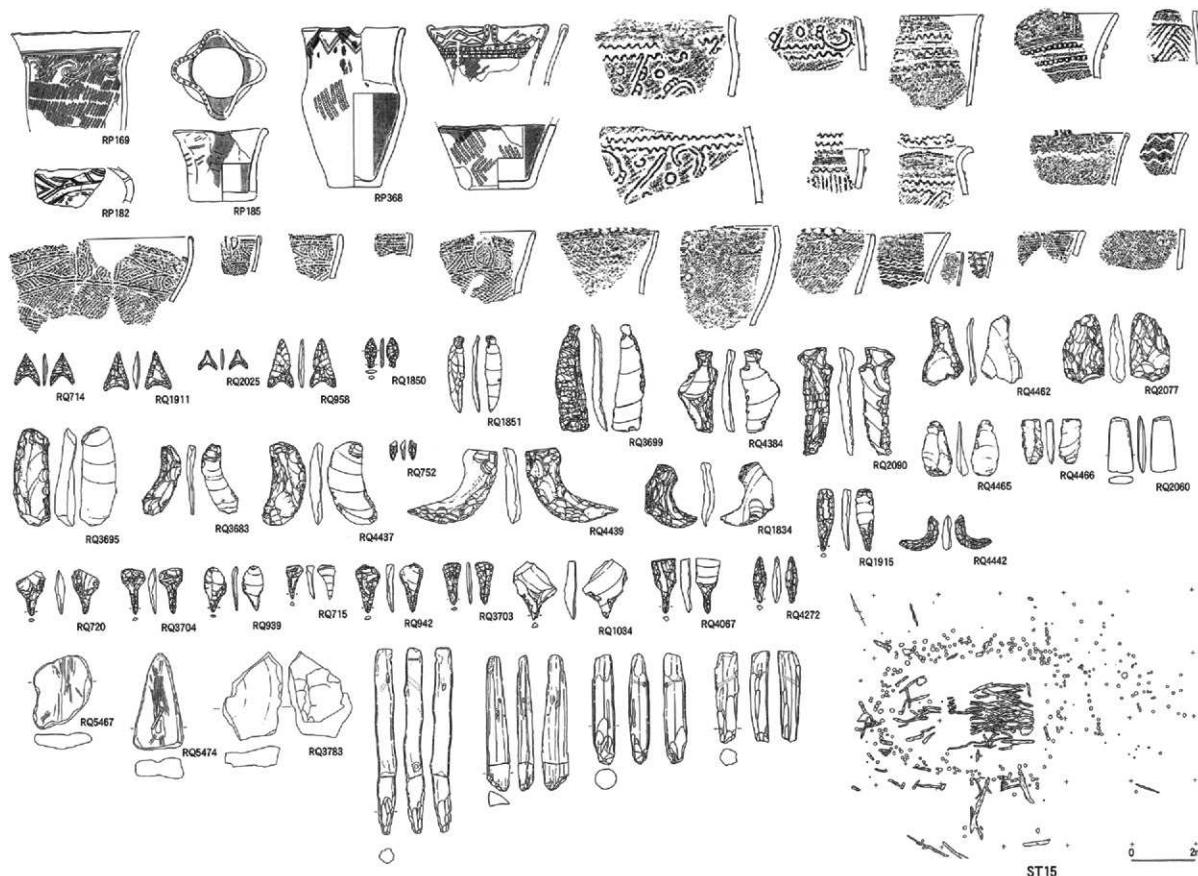


ST14

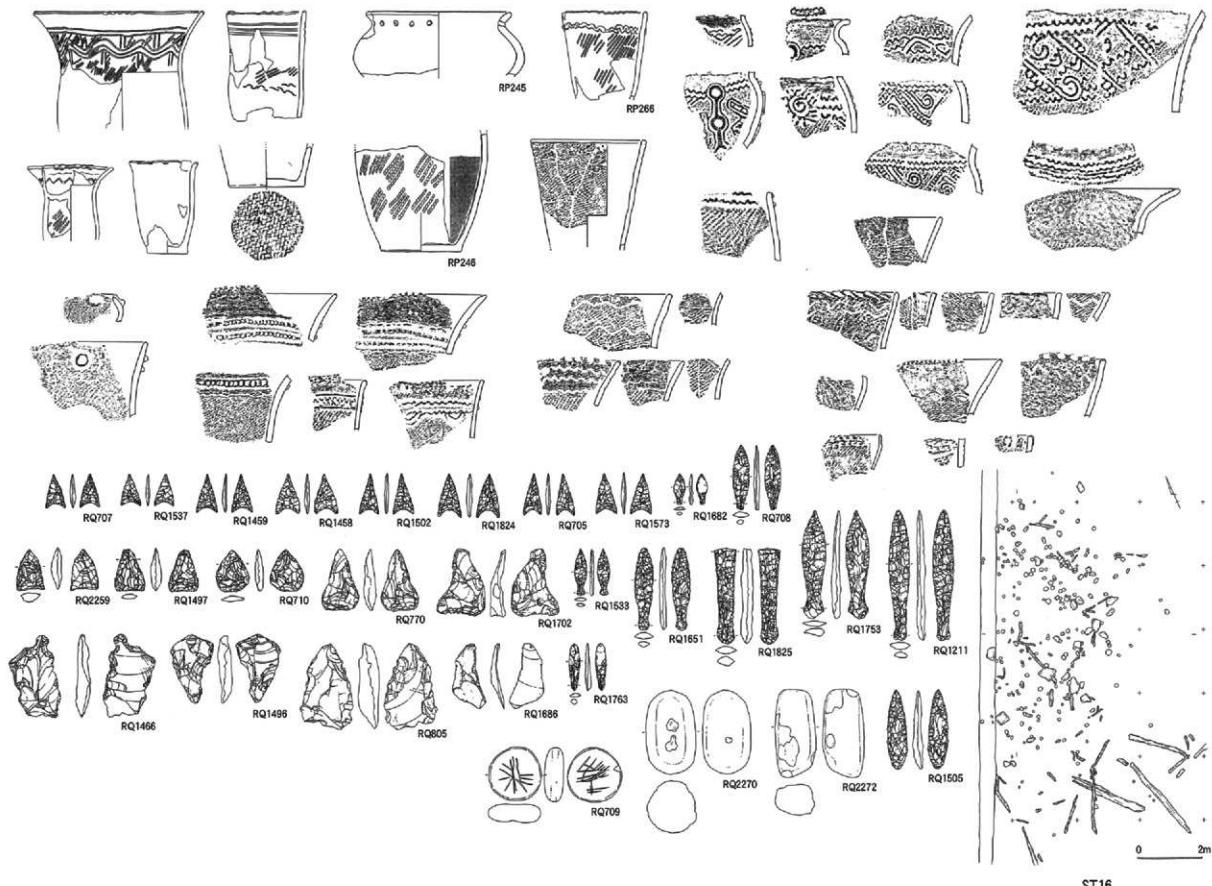


ST19

第244図 集成図(5) ST14・19



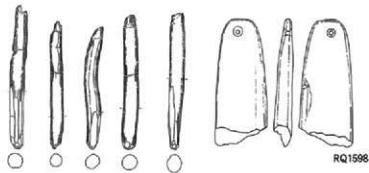
第245図 集成図(6) ST15



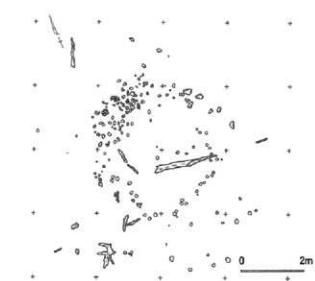
第246図 集成図(7) ST16



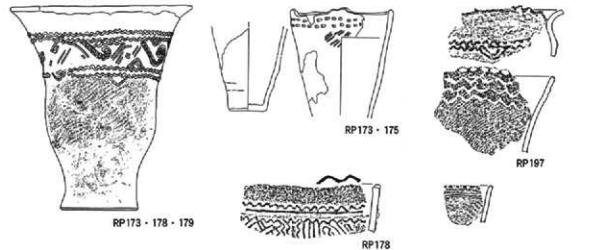
RP241



RQ1598



ST17



RP173 - 175

RP197

RP173 - 178 - 179

RP178



RQ1308

RQ1345

RQ1197

RQ1269

RQ1199

RQ1168

RQ1267

RQ1345

RQ1176

RQ1167

RQ1359

RQ1638

RQ863

RQ878

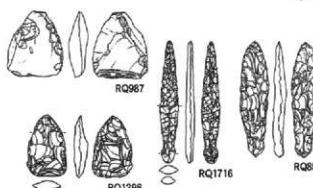


RQ4318



RQ4467

RQ858



RQ987

RQ1296

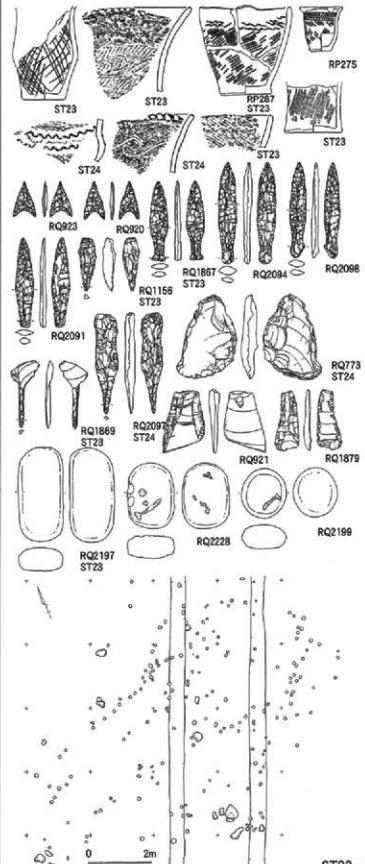
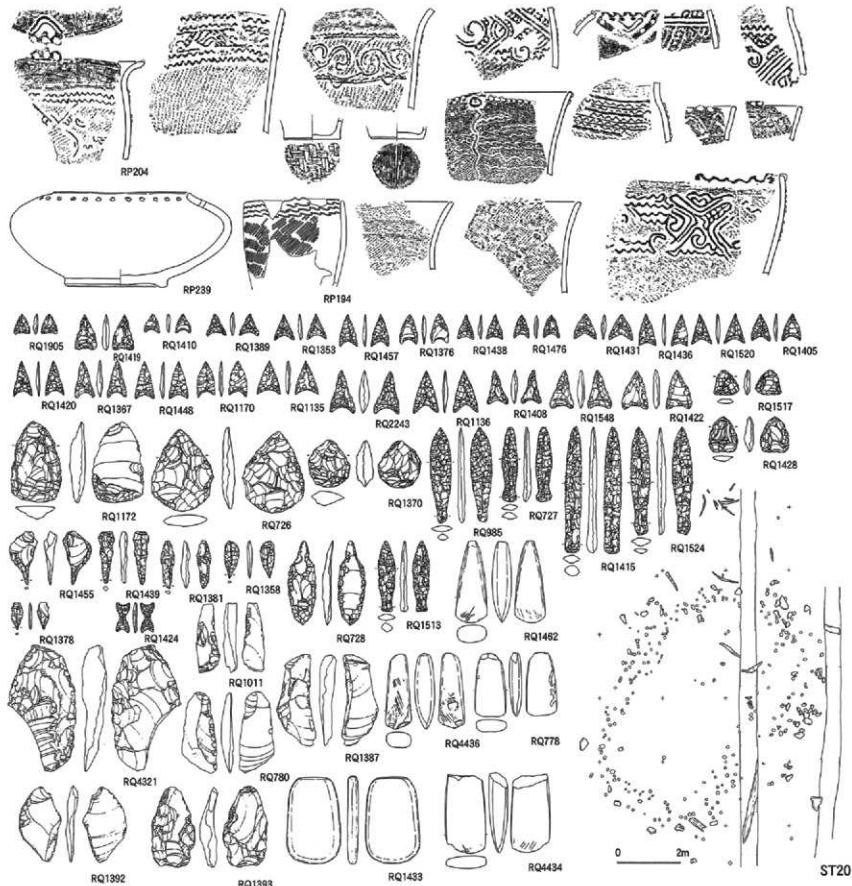
RQ1716

RQ855

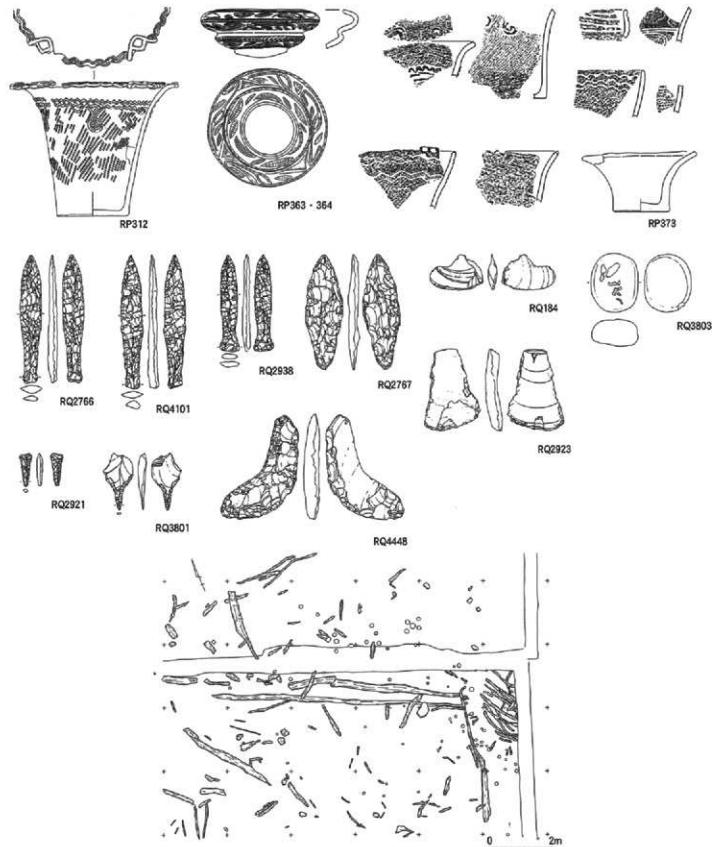
ST18

0 2m

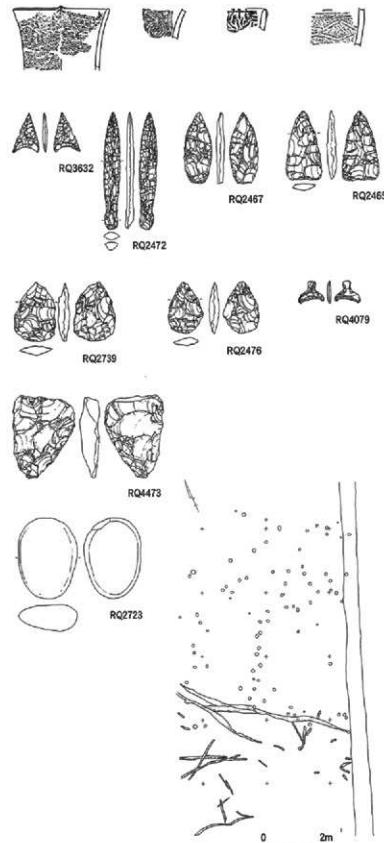
第247図 集成図(8) ST17・18



第248図 集成図(9) ST20・23・24

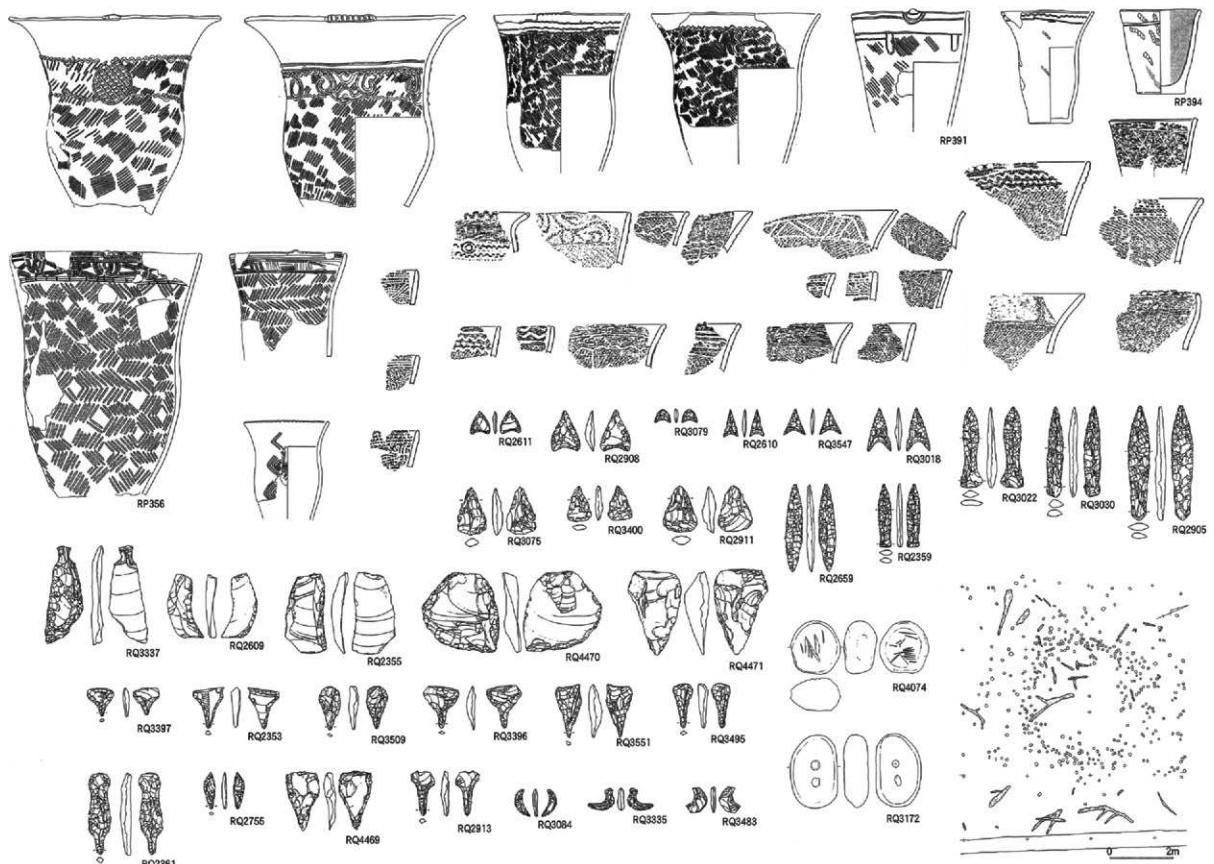


ST26



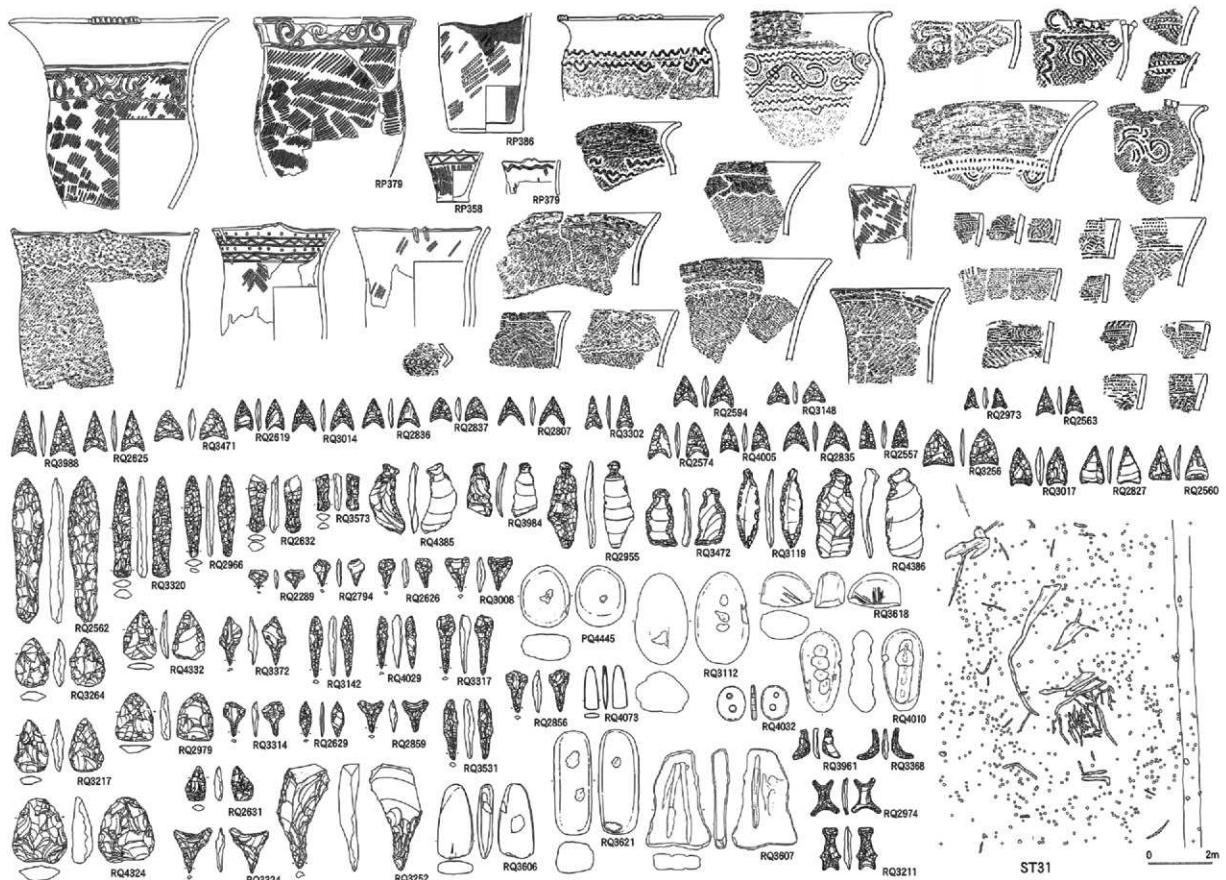
ST26

第249図 集成図(10) ST26・28

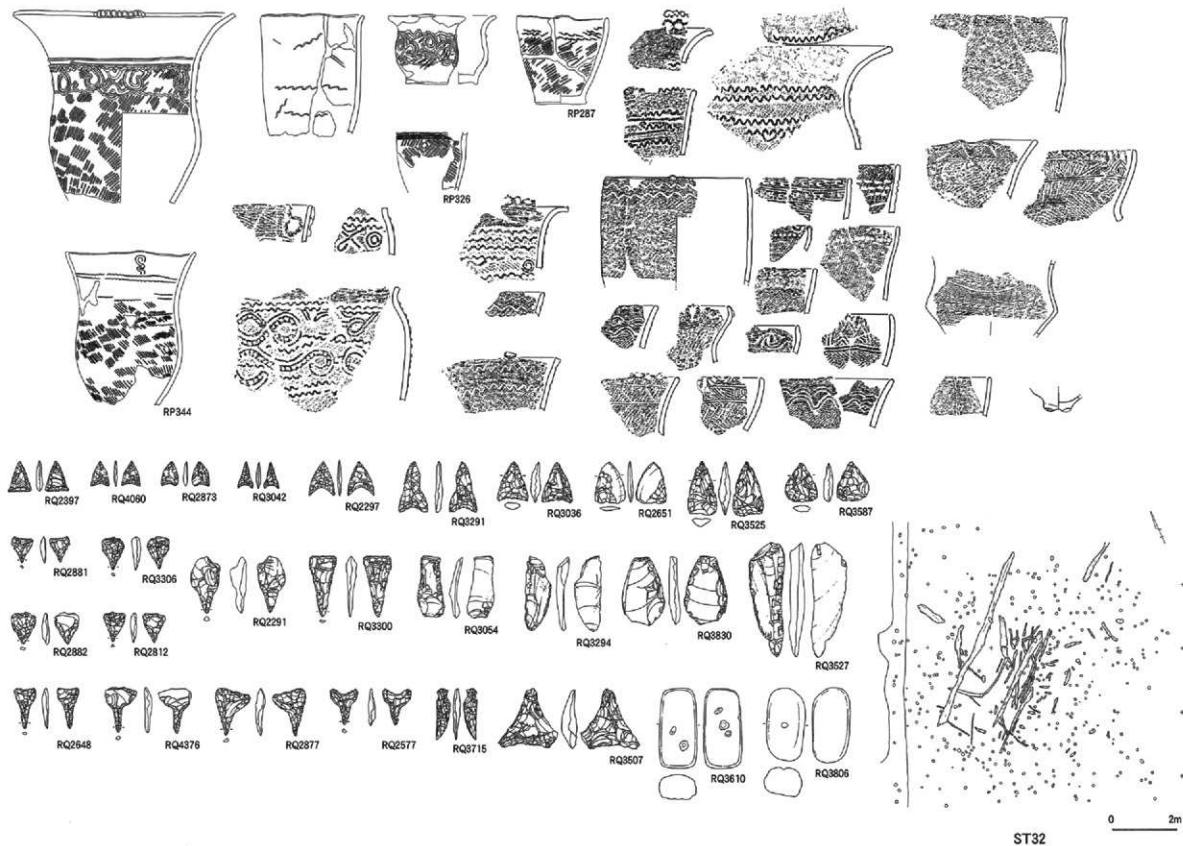


ST30

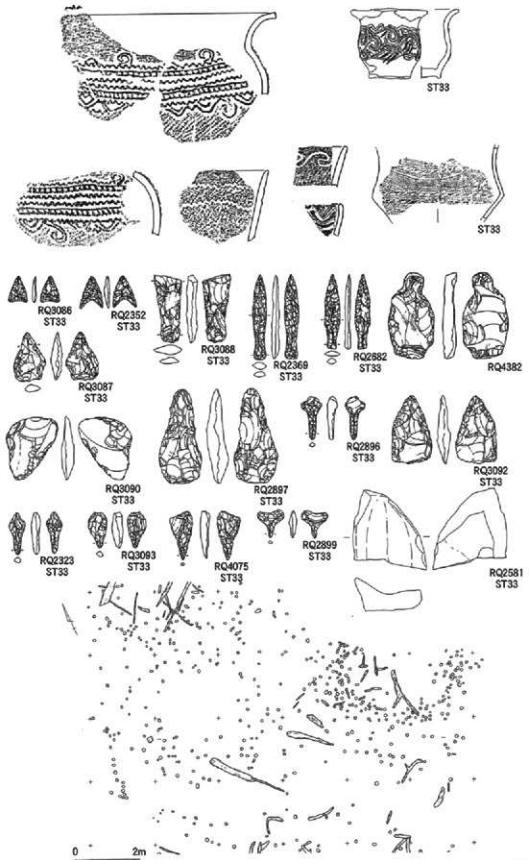
第250図 集成図(11) ST30



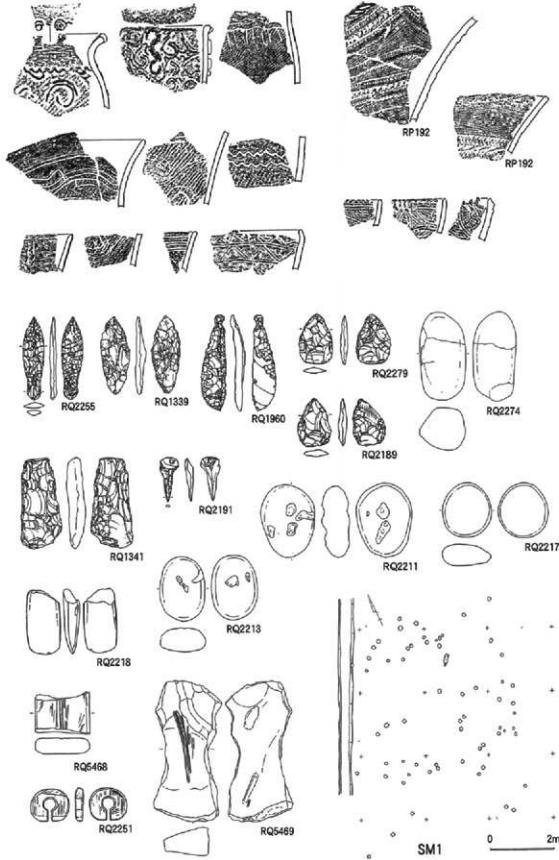
第251図 集成回路(12) ST31



第252図 集成図(13) ST32



ST33 • 38



第253図 集成図(14) ST33・38, SM1

VIII 調査のまとめ

押出遺跡は、昭和60年から62年にわたって発掘調査が実施された低湿地性遺跡である。ここでは、低湿地のため多くの有機質遺物が出土した。

1 遺跡について

遺跡は、山形県の内陸南部、米沢盆地の東北端、東置賜郡高畠町に位置している。周辺には縄文時代草創期の洞窟遺跡として国指定史跡となっている日向洞窟、一の沢・火箱岩・大立洞窟等が押出遺跡から約3km東側の奥羽山系低丘陵部に散在している。遺跡付近は、最上川水系の星代川と吉野川の合流点に近く、この両河川によって形成された自然堤防が奥羽山系からの流水をせきとめた結果、部分的に大谷地と呼ばれる湿地となったものと考えられる。

遺跡の現地表面の標高は約211m、木柱等の検出面までは地表から約2mを測る。その間の堆積土はいずれも水平堆積の無機物層である。珪藻分析では、遺物包含層が形成された縄文時代前期以外では現代を除き乾燥状態の時期は認められないというデータを得ている。

本遺跡の時期は縄文時代前期、大木4式期を中心とする。出土遺跡は、該期の土器約400箱、石器約5,000点（製品）の他、木製品、自然遺物、クッキー状の炭化物等、低湿地性遺跡特有の資料が得られている。

2 検出された遺構と出土遺物

検出された木柱について、一定のまとまりをもつ集合体を「住居跡」としてとらえることとし、その形態を検討してみる。

・住居の規模

長径で3～5m前後の小型の住居、5～7m前後の住居、8mを超す比較的大型の住居に分けられる。

・木柱の配置

検出段階で木柱が1列ないし2列で巡るもの、3列以上の複数列で巡るもの、さらに、住居域に木柱を有するもの、不規則な木柱群が集合するもの等がみられる。ST13・14・20などは重複や拡張が考えられる。

・住居内に根太状の材がみられるもの

材は規則性をもって配されている。根太をもつ住居跡としては、ST10～12・15・26・30・32があげられる。

・住居域がマウンド状に盛り上がって検出されるもの

基底の面から20～50cmの高さを測り、覆土は粘質土と砂層の互層となる場合もある。木柱はこのマウンドを掘り下げた後に検出される。

・柱根集合域に礫が配されるもの

集石遺構が1基検出された(SM1)。礫は焼成を受けており、木柱は礫を除去後検出された。

以上、住居跡の形態を中心に特徴を列記した。さらに、住居跡の分布、遺物の出土状況について概述する。住居跡の分布は第6・7図に示したとおり、調査区の北部、中央部、南部にそれぞれ集中している。集中区域の間にみられる空白域は基盤層が30~50cm程低くなっている。縄文時代は窪地となっている。したがって、住居はこの窪地を避けて遺跡内の微高地に構築されたと考えられる。

調査区が遺跡範囲の一部(調査面積約4,000m²)のため本調査の対象区域が、集落全体の様相のなかでどのような位置を占めるのかは今後の検討を待つ必要がある。

次に、住居の性格を考える意味で土器・クリ・ケルミの分布を中心に遺物の出土状況をみてみる。土器は出土量で分布をみてみると(第56図)と、窪地部分は1グリッド(2×2m)あたりの出土量が比較的少ないのに対し、住居域は対称的に多い傾向を示している。特にマウンド状の覆土が検出された住居跡からの土器の出土量が多い。また、「彩文土器」と称している漆塗りの土器の分布(第57図)は、住居跡付近、特にST3・11・13・20・25・29・30で比較的多く出土している。クリは分布に極端な傾向がみられる(第76図)。出土総数の90%以上がST13に集中している。ST13は、クッキー状炭化物の出土が顕著な住居でもある。ケルミは住居の集中区域および窪地で集中的に出土している(第77図)。ST11、ST30の南側の窪地に多く分布している。各々の住居跡内部の出土量に比し、窪地は圧倒的に多い傾向がみられる。

3 住居跡の性格

概要を記述してきたが、住居の性格についての言及は現時点では難しい点がある。出土土器の分析、住居の時期の分析が現在進行中のため、ここでは代表的な住居を取り上げ、現時点で考えられる性格の特徴、問題点を列記することとする。

(1) 規模・構造上からの特徴

木柱は、すべて打ち込みによるものであることは既述のとおりである。木柱は確認面から50~100cm程打ち込まれている。壁、屋根等の上部構造が不明のため推定の域を出ないが、基本的には壁が立つ、平地式の住居構造を考えている。堅穴住居は、本遺跡では皆無である。

木柱の並びは、平面規模が5m以内の小規模な住居は1~2列が巡り、それ以上の住居は2列以上の複数列を有する。複数列の木柱がすべて同時期の所産かは問題が残るが、かなり緊密に狭い間隔で打ち込まれていたことは明らかであり、構造上の大きな特徴と言えよう。

したがって、複数列のST10・11・13・15・20・30~33等と小規模で1~2列のST1・2・4・17・22等とは、構造上の面から性格の違いがうかがわれる。さらに、根太の有無についても性格の相違が考えられる。

(2) 出土遺物からの特徴

土器の分布状況からの住居間の性格の相違は今後の分析を待つて検討したい。前述した自然遺物（クリ、クルミ）についてみれば、窪地にクルミ（殻）が大量に廃棄されていることから、窪地サイドの微高地でなんらかのクルミにかかる作業が行われたことも考えられる。平面的にみると住居跡は、ST11・30等が関係すると思われるが、住居の廃絶時期の検討を待つ必要がある。クリの出土はST13に集中するため、明らかにクリの加工あるいは貯蔵に関係する住居と考えられる。焼成を受けている集石造構のSM1は、押出遺跡で検出された住居に炉跡とみられる遺構が未検出であること、焼土も極めて少ないとことなどから、住居数棟分の共同の調理場的性格を有する遺構と考えられる。

また、特殊遺物である彩文土器については、完成品一括の出土はないが、住居跡付近、特にST3・11・13・20・25・29・30を中心に出土している点から、集落内の数棟、あるいは一定の地点で使用（埋納）されたと推測されるが、その使途と住居の特定は検討を待つて考察したい。

住居跡の性格については、現在のところ上記のような概要が判明している段階である。また、木柱の分布をみると、不規則に分布する一群、直線的に並ぶ木柱等、住居以外の施設の存在もうかがわれる。押出遺跡の遺構（特に住居跡）のあり方は、縄文時代前期の例としては類例が極めて少ないため、住居の性格については、今後にその検討を待たなければならない。

しかし、低湿地性遺跡の調査例は増加しており、同様な住居の検出例も期待できる。構造の問題、出土遺物からみた問題等、本遺跡に残された課題は多い。

4 出土土器の様相

出土した土器は、I群土器～XII群土器に分類した。大半はこの地域に分布の主体を占める、大木4式に併行する一群であると考えられる。一方この地域に主体的な分布を持たない土器も遺跡内には存在する。

IV群土器は、浮線とキザミにより文様を描出するものであり、獸面把手がついているものがある。器形も深鉢・浅鉢・つぶれた球胴形の鉢などがあり、大木4式に併行する土器群とは様相を違えている。関東地方の諸磯b式と共に通する器形あるいは文様構成を呈する。同様にV群土器は、連続爪形を施し直線や円形あるいは斜状の文様を描出するものであり、器形はほぼバケツ形をなし底部から口縁部へ直線的に立ち上がるものの、体部が膨らみ頸部が小さく屈曲し口縁部が開くものなどがある。これらも、大木4式に併行する一群とは様相を違えている。VI群土器は、沈線および貝殻腹縁により文様を描出するものであり、関東地方の浮島式に併行する一群であろうと考えられる。

このように、押出遺跡は、いくつかの分布地域を違える土器群が共存していたのである。縄文時代の交流、東北地方と北陸あるいは関東方面との密接な交流を明確に示している。

さらに、ここでは漆の容器に使用された土器が出土している。完形のものもあるが、破損した土器を転用したものもある。漆塗りの作業が行われていたことを知ることもできる。この作業の結果が見事に結実したものが、彩文土器であると言えよう。

5 出土石器の様相

出土した石器も多数にわたる。押出遺跡出土の石器の総数は83,334点を数え、石鏃2,121点、押出型ポイント229点、石槍37点、石錐333点、石匙41点、籠状石器66点、三角スクレイバー713点、スクレイバー534点、打製石斧8点、磨製石斧77点、石皿24点、砥石38点、磨石430点、磨凹石232点、凹石46点、異形石器35点、石製品他25点、石核・剥片類78,345点の多数を示す。

狩猟具である石鏃が42.5%と高い比率を持ちながら、加工具である石匙が0.8%、石錐が6.7%、押出型ポイントが4.6%、磨石・磨凹石・凹石が14.2%とやや低い割合を持つ。伐採・土掘り具としての石斧・籠状石器が3%と極端に低いことも特殊である。

こうした、石器組成のあり方からは、本遺跡の生活様相は狩猟及び植物採取を中心としていたものとみられ、石鍤などの漁労具類がほとんど出土していない点からも山野、湿原に依存していた生活であった可能性がある。

6 自然遺物の様相

調査では動植物の遺存体（獸骨片・クルミ・トチ・クリ・ヒヨウタン等）が発見されている。特徴的な自然遺物として、縦糸・横糸が1cmに10本入る編物の断片、漆塊、樹皮、クルミ、クリ、キノコなどの自然遺物がある。また、クルミ・クリ・ヒシ・カヤなどの植物種子類も多く出土した。

特徴的な自然遺物として、堅果類等を加工・調理した可能性のある、渦巻文を施した植物質炭化物（通称「押出クッキー」）が多数発見されたことがあげられる。窯地からは整理箱にして約80箱という大量のクルミが出土した。

以上各項目毎に、概略を記してまとめとしたい。

山形県埋蔵文化財調査報告書第150集

押出遺跡
発掘調査報告書
(本文編)

平成2年3月20日 印刷
平成2年3月29日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 株式会社大風印刷
